新建築

SHINKENCHIKU:2022

1

新建築
2022年1月別冊

The Okura Tokyo LEGACY

歴史や都市と共に歩む建築のあり方

The Architecture Alongside History and the City

1962年竣工のホテルオークラ東京本館を建て替え
「The Okura Tokyo」は2019年9月に新たに開業しました。
ホテルオークラ東京本館が長年にわたって培ってきた歴史的、
都市的な立ち位置や意義を「LEGACY」としてしっかり受け継ぎ
それらを今の時代に沿うように
さらに深化させて実現した「The Okura Tokyo」。
本号では「The Okura Tokyo」で継承された「LEGACY」について
歴史的保存や都市計画、エンジニアリング等
幅広い視点から紹介します。
地域に根付き、一緒に成長し都市を形成していく
再開発プロジェクトのひとつのあり方として
広く訴求することを意図しています。

2022年1月31日発売予定

定価 3,300円
［本体価格 3,000円］

A4変型判／192頁

発行 株式会社新建築社
東京都千代田区霞が関3丁目2番5号
霞が関ビルディング17階 〒100-6017
TEL：03-6205-4380 FAX：03-6205-4386

CONTENTS 新建築2022年1月号 目次

新建築
SHINKENCHIKU:2022

1

新建築　第97巻1号
2022年1月1日発行　毎月1回1日発行
定価　2,420円　本体2,200円
振替　00150-6-30658
編集発行人　吉田信之
編集長　四方裕
副編集長　内藤麻美
メディア事業部　部長　横山圭
新建築.ONLINE編集部　編集長　辻そよか
発行所　株式会社新建築社
東京都千代田区霞が関三丁目2番5号
霞が関ビルディング17階　〒100-6017
tel: (03)6205-4380　代表／総務部・出版部
(03)6205-4381　編集部・デジタル編集部
(03)6205-4382　広告部
(03)6205-4392　写真部
fax: (03)6205-4386　総務部・出版部
(03)6205-4387　編集部・広告部・写真部
青山ハウス
東京都港区南青山二丁目19番14号　〒107-0062
tel: (03)6455-5596
fax: (03)6455-5583
e-mail: shinkenchiku@japan-architect.co.jp
URL: https://japan-architect.co.jp
印刷所　大日本印刷株式会社
取次店　トーハン／日販／楽天ブックスネットワーク／
鍬谷／西村

ISSN1342-5447

新建築データ　株式会社新建築データ
e-mail: contact@shinkenchiku-data.com

福島県「郡山合同庁舎整備基本設計・実施設計業務委託」公募型プロポーザルで aat＋ヨコミゾマコト建築設計事務所・鈴木伸幸建築事務所設計共同体が最優秀者

去る11月24日，福島県は「郡山合同庁舎整備基本設計・実施設計業務委託」公募型プロポーザルで，aat＋ヨコミゾマコト建築設計事務所・鈴木伸幸建築事務所設計共同体を最優秀提案者に決定した（審査委員長：千葉学）．次点は横総合計画事務所．
本計画は合同庁舎の新築にあたり4つの課題が提示され，それぞれの課題に対して，利便性，県民交流，防災機能，カーボンニュートラル，環境性能，社会環境に対するフレキシビリティを軸に評価された．
最優秀案は，逆L字型の建築で南北方向に軸を取ることで西からの日差しや卓越風を遮る計画となっている．隣接するビックパレットふくしま（北川原温建築都市研究所，本誌9812）との繋がりが意識された景観づくりや，積極性のある県民交流の提案，フレキシブルで多様なワークスペース，2050年カーボンニュートラルに関する取組みなど，各提案に対して総じて高い評価となった．
供用開始は2026年度を予定している．

提供：aat＋ヨコミゾマコト建築設計事務所

内観イメージ．

佐賀県「市村記念体育館利活用設計業務委託」公募型プロポーザルで Open A・石橋建築事務所設計共同企業体が最優秀者

去る11月29日，佐賀県は「市村記念体育館利活用設計業務委託」公募型プロポーザルで，Open A・石橋建築事務所設計共同企業体を最優秀者に決定した（選定委員会：中村隆敏 他）．市村記念体育館は坂倉準三氏の設計で1963年に開館（本誌6305）．ジグザグ状の壁と鞍形のHPシェルの吊り屋根を組み合わせた外観が特徴．2017年に老朽化などの理由から体育施設としての用途廃止が示された．本計画では県内外で活躍する人や技術を集め，若者を中心に多世代が知識に触れ，創造的に活動するきっかけとなる場所をつくる方針．最優秀案は，人びとの活動が混ざり合うひと繋がりの空間をコンセプトに，回遊性を創出しながらさまざまな活動への接点を各所に設け，歴史的建築の利活用としてふさわしい姿を目指す．躯体改修では鉄骨トラス屋根を採用し，耐震性能を向上させる．2025年度の完成を予定している．

提供：aOpen A

内観イメージ．

愛媛県松山市「松山駅前広場等基本設計（デザイン検討）業務委託」公募型プロポーザルで復建調査設計・乾久美子建築設計事務所のコンソーシアムが優先交渉者

去る11月19日，松山市は「松山駅前広場等基本設計（デザイン検討）業務委託」公募型プロポーザルで，復建調査設計・乾久美子建築設計事務所のコンソーシアムを優先交渉者に選定したと発表した（選定委員：一色芳朗 他，外部有識者：羽藤英二 他）．
松山駅周辺地区では，県による連続立体交差事業と市による土地区画整理事業が進み，広域交流拠点が育まれつつある．これに伴い周辺地区の活性化と，安全で快適な魅力あるまちづくりを進める必要があり，周辺街区のファサードやバス等乗換交通拠点，キャノピー・シェルターを含む駅まち空間デザインガイドラインの作成と，東西駅前広場や街路等の基本設計などを行うもの．駅の東西それぞれの特徴を汲み取りながら，地域の素材を活かした提案が求められた．
選定案は，おおらかな屋根を全体にかけることでさまざまな施設に統一感をつくりつつ，それぞれの規模に変化をつけることで東西エリアの差異をつくっている．また，カーブする屋根でゆったりとした移動と滞留の場をつくり，人の居場所を顕在化させている．
事業区域は，東口駅前広場15,500m^2，西口駅前広場3,400m^{2}を含む16.7ha他．

「2025年日本国際博覧会大阪館（仮称）基本設計業務」で東畑設計事務所が最優秀提案者

去る12月16日，2025年日本国際博覧会大阪パビリオン推進委員会（会長：吉村洋文大阪府知事）は「2025年日本国際博覧会 大阪館（仮称）基本設計業務（建築・設備）」の公募型プロポーザルで東畑設計事務所を最優秀提案者に選定した．次点はペリ クラーク ペリ アーキテクツ ジャパン．大阪館は，生まれ変わりや一歩踏み出すという意を込めて「REBORN」をテーマに出展する．敷地は自治体用パビリオン用地約10,800m^2．施設の規模は延べ約8,950m^2，2階建て（一部3階建て）となり，うち本設建物（展示棟）が約2,400m^2，仮設建物4棟が約6,550m^2．委託期間は2022年5月末まで．

土木学会デザイン賞2021

去る12月3日，土木学会（会長：谷口博昭）景観・デザイン委員会は，2021年度の土木学会デザイン賞を発表した（選考委員長：中井祐）．今年度は20件の審査作品から，最優秀賞，優秀賞，奨励賞の計11件が選定された．受賞作品は以下の通り．

【最優秀賞】▷高田松原津波復興祈念公園国営追悼・祈念施設（岩手県陸前高田市，本誌2001）▷長門湯本温泉街～長門湯本温泉観光まちづくりプロジェクト（山口県長門市）

【優秀賞】▷藤沢駅北口ペデストリアンデッキのリニューアル（神奈川県藤沢市）▷天龍峡大橋（長野県飯田市）▷九段坂公園（東京都千代田区）▷南町田グランベリーパーク（東京都町田市，同2003）▷長崎市まちなか夜間景観整備（長崎県長崎市）

【奨励賞】▷さくらみらい橋（神奈川県横浜市）▷水木しげるロードリニューアル事業（鳥取県境港市）▷線路敷ボードウォーク広場（大分県大分市）▷松原市民松原図書館（大阪府松原市，同2005）

3点撮影：新建築社写真部

左：高田松原津波復興祈念公園　国営 追悼・祈念施設　中：南町田グランベリーパーク　右：松原市民松原図書館．

日本女子大学が「建築デザイン学部（仮称）」を新設

去る11月26日，日本女子大学（学長：篠原聡子）は，2024年4月に「建築デザイン学部（仮称）」を開設することを発表した．従来の家政学部住居学科を独立させ新学部とする構想で，目白キャンパス（本誌1905，2105）内に開設する予定．母体となる家政学部住居学科は1948年に生活芸術科として設立され，1956年に建築士の資格取得が可能なカリキュラムを導入した．その後1962年に住居学科として独立．現在までに，妹島和世氏，東利恵氏，貝島桃代氏，赤松佳珠子氏など，5,390名の卒業生を輩出した．この構想が実現すると，同大学は家政・文・人間社会・理・国際文化と合わせて6学部体制となる．

YKK不動産がパッシブタウン第5期街区建築計画発表

去る12月2日，YKK不動産は富山県黒部市の社宅跡地を活用して開発しているパッシブタウンの第5期街区の建築計画概要を発表した（第1～3期街区：本誌1608，1708，1802．第4街区は田口知子建築設計事務所が総合設計を行う保育施設で，2022年3月に開所予定）．

第5期街区では，県産木を使用した木造（一部，鉄骨造・鉄筋コンクリート造）6～7階建ての集合住宅4棟，計90戸を計画．設計はオーストリアのヘルマン・カウフマン氏．竹中工務店がローカルアーキテクト，設計組織プレイスメディアがランドスケープを担当する．本街区では，春から秋にかけての太陽光発電の余剰電力で得たグリーン水素を吸蔵合金内に保管し，その後冬期に水素を取り出し，燃料電池で発電して各住戸に供給する「Power to Gas」を日本で初めて集合住宅に実装する．水素を電気に戻す過程で発生する熱は住戸の給湯に利用する．2013年6月にマスタープランを発表したパッシブタウン全体構想における最終街区となる．2025年3月に竣工予定．

提供：YKK不動産

集合住宅外観イメージ．

日比谷公園再生整備基本設計者に日建設計

東京都建設局は「日比谷公園再生整備基本設計」公募型プロポーザルの結果，日建設計を特定した．2033年に迎える開園130周年を見据え，歴史を受け継ぎながら園内を再整備するもので，園内景観を整えるほか，日比谷通り方面のビルと公園を接続するデッキを整備し，歩行者の回遊性を高める計画．地域団体と連携して，公園の新たな運営管理の仕組みを構築し，さまざまなプログラムを展開する「HIROBAs」や，日比谷公会堂の改修などが予定されている．履行期限は2023年3月20日．

森ビル，世界の都市総合力ランキング2021発表

去る11月24日，一般財団法人森記念財団都市戦略研究所は世界の都市総合ランキング2021（Global Power City Index，以下GPCI）を発表．GPCIは世界48都市を対象に「経済」「研究・開発」「文化・交流」「居住」「環境」「交通・アクセス」の6分野の指標で都市の総合力を評価する．今年は新型コロナウイルス流行で「居住」分野の「働き方の柔軟性」指標に順位の変動が見られ，東京は昨年の42位から2位へ浮上．1位を獲得した指標はないものの，6分野でバランスよくスコアを獲得し，総合ランキングでは昨年と同じ3位となった．上位は6年連続で1位ロンドン，2位ニューヨーク，3位東京，4位パリ，5位シンガポール．

葛西臨海水族園がPFI特定事業に選定

去る12月9日，東京都建設局は「葛西臨海水族園（仮称）整備等事業」を，PFI法による特定事業に選定した．2022年1月に事業者選定の一般入札を公告し，9月に落札の予定．分離分割発注方式に比べ，PFI事業として実施する場合の財政負担の縮減割合を示すVFM（Value For Money）は3.0%程度．既存施設（設計：谷口建築設計研究所，本誌8911）の老朽化に伴い，新施設を隣接地に建設し，設備や展示ガラスの老朽化を解消する．新水族園は延べ22,500m^2，総水量は約4,600tを想定している．構造・階数などは事業者の提案に委ねる．水族園の機能を新施設に移した後，既存施設は状態を確認して利活用方針を固める予定．

日本ウッドデザイン協会発足

去る11月18日，一般社団法人日本ウッドデザイン協会が発足した．会長は隈研吾氏．設立準備企業として活動してきた農林中央金庫の奥和登理事長，住友林業の市川晃会長，竹中工務店の佐々木正人社長，三菱地所の吉田淳一社長が副会長に就いた．同協会は業界横断型組織として，幅広い業種・分野・地域の会員とともに活動を展開．ユニバーサルデザイン総合研究所が実施してきた「ウッドデザイン賞」を2022年から引き継ぐ．他に，木を活かしたライフスタイルの提案やカーボンニュートラルのための「調査研究」，異業種・公民連携の促進，企業・デザイナーと連携する「ビジネスマッチング」，自治体・企業への普及と関係構築の「広報普及啓発」の3事業を行う．

TOZAI ASPHALT ROOFING CONTRACTOR'S CO-OP ASSOCIATION ARCHITECTS SEMINAR 2021

東西アス協組建築講演会

八代民俗伝統芸能伝承館 © Daici Ano

「Human/Nature」

講師 建築家

平田 晃久

Akihisa Hirata

© Luca Gabino

会場講演聴講

2022.2.9（水） 開演18：30▶20：30（開場17:45）

会場：有楽町朝日ホール 東京都千代田区有楽町2-5-1 有楽町マリオン11F

定員：350名（参加無料/事前申込み制・全席座席指定）

申込み締切：2022.1.15（土）

・応募者多数の場合、抽選の上、2022年1月26日（水）に結果をメールでご連絡いたします。

・新型コロナウイルスの感染拡大状況によっては、会場開催を中止する場合があります。

オンデマンド配信

2022.2.14（月）～2.28（水）（視聴無料/事前申込み制）

オンデマンド視聴 申込み受付：2022.2.28（木）22:00まで

・視聴方法については、申込み時に入力されたメールアドレスへご案内いたします。

申込み方法

https://tajima.jp（田島ルーフィング Webサイト）の特設バナーまたは、右記二次元コードから申込みフォームにアクセスしてください。

申込みフォーム

主催

東西アスファルト事業協同組合 https://www.tozai-as.or.jp / **田島ルーフィング株式会社** https://tajima.jp

増田友也の建築世界——アーカイブズにみる思索の軌跡

@京都大学総合博物館／京都
2021.10.27～12.12

展示手法の妙が浮かび上がらせる建築家像

本展は，建築家の増田友也（1914～81年）が残した350余りの資料群と，現在の増田建築の姿を収めた作品を集めた展覧会である．京都大学で教鞭を執った増田は哲学的視点から建築論を研究したプロフェッサー・アーキテクトだが，同時期に東京大学にいた丹下健三に比べればミステリアスな存在だろう．ところが本展の増田像は実にクリアで，驚くほど生き生きとしたものだった．何故だろうか？最大の理由は，展示された資料がまさに群として迫ってくるように設計された，空間構成にある．

一般に建築家に焦点をあてた展覧会では，代表作や業績的特徴（増田で言えば建築論）を起点に構成し，資料は補助的に用いるのが通例だ．しかし本展のコンセプトは逆で，時系列上に配置された各作品の図面とメモや手稿類，出版物などの資料群のなかに業績や作品が浮き彫りになるように工夫されていた．展示資料には竣工図ではなく設計段階のドローイングを選ぶことで，観客は増田の思索の軌跡に集中して鑑賞できたはずである．それらの組み合わせ方も面白い．それぞれのガラスケースの中はこれらの資料群でまとめられていたが，実は作品と一見無関係に見える資料も，同時期のものであれば躊躇なく選ばれていた．裏返せば，その図面が描かれた同じ時期に増田が残したものによってのみ編集された展示空間なのである．資料のキャプションもすべてガラスケース面に透過シートで示され，物質感を奪われたピュアな情報として資料群と共存していた．

左上：会場風景．本展は5章立てで，1章は戦前の学生時代，2章は1950～60年代の研究室活動（民家調査）と同時代の建築作品，3章は1960年代を中心に風景論を背景とした作品群，4章が1970年代から晩年にかけて存在論を深めながら手がけた公共建築群を紹介する．5章は鳴門市の建築群のドキュメントで，2022年2月には増田が設計した旧北灘西小学校（1977年）で展覧会が催される（「増田友也の建築世界　鳴門への旅」（仮），会場：鳴門市旧北灘西小学校，会期：2022年2月11 ～ 20日）．
右：展示された資料．キャプションは資料の鑑賞を妨げない透過性のシートに示される．グラフィックデザインは西村祐一氏による．
左中：5章，田村尚子の写真群．鳴門市に保管されていた過去のアルバムと共に展示された．／左下：手前のベンチは，鳴門市民会館（1982年）の客席座面を地元建築家有志が再生したものを持ち込んだ． 会場の外には京都大学総合体育館（1972年）．

さらに本展では，20年間にわたって増田作品が集中的に建設された鳴門市の建築群の展示も充実していた．市で進行中のアーカイブ事業による記録映像と，写真家の田村尚子が2年越しで撮り下ろした，陰影の深い増田建築の醸す色気．前述の時間軸に沿えば，最終地点にあたる現在の姿がドキュメントされ，おびただしい資料群と共に展示されたことの意義は大きい．過去と現在の視点が巧みに編み合わされた展示空間によって，言い換えれば「アーカイブズ」と呼ばれる複数形の証言者により，研究活動と設計行為の密接な関係を通じて建築とは何かと問い続けた，ひとりの建築家の姿が浮かび上がってきたからだ．

ところで，展示すべき資料を判断した田路貴浩（京都大学），齋藤歩（京都大学総合博物館）を中心とする実行委員会と，情報の提示方法を追求した本橋仁（京都国立近代美術館）の展示設計は，博物館を敷地とした設計行為そのものだったのではないか．とすれば本展は，増田の京都大学会館計画（1964～68年）の続きに位置付けられるべきとも言える．資料展示を通じて増田の建築世界と現在を結び付けたことは，本展が建築展という形式に対して拓いた可能性に他ならない．（山崎泰寛）

矢萩喜従郎　新しく世界に関与する方法

開催中

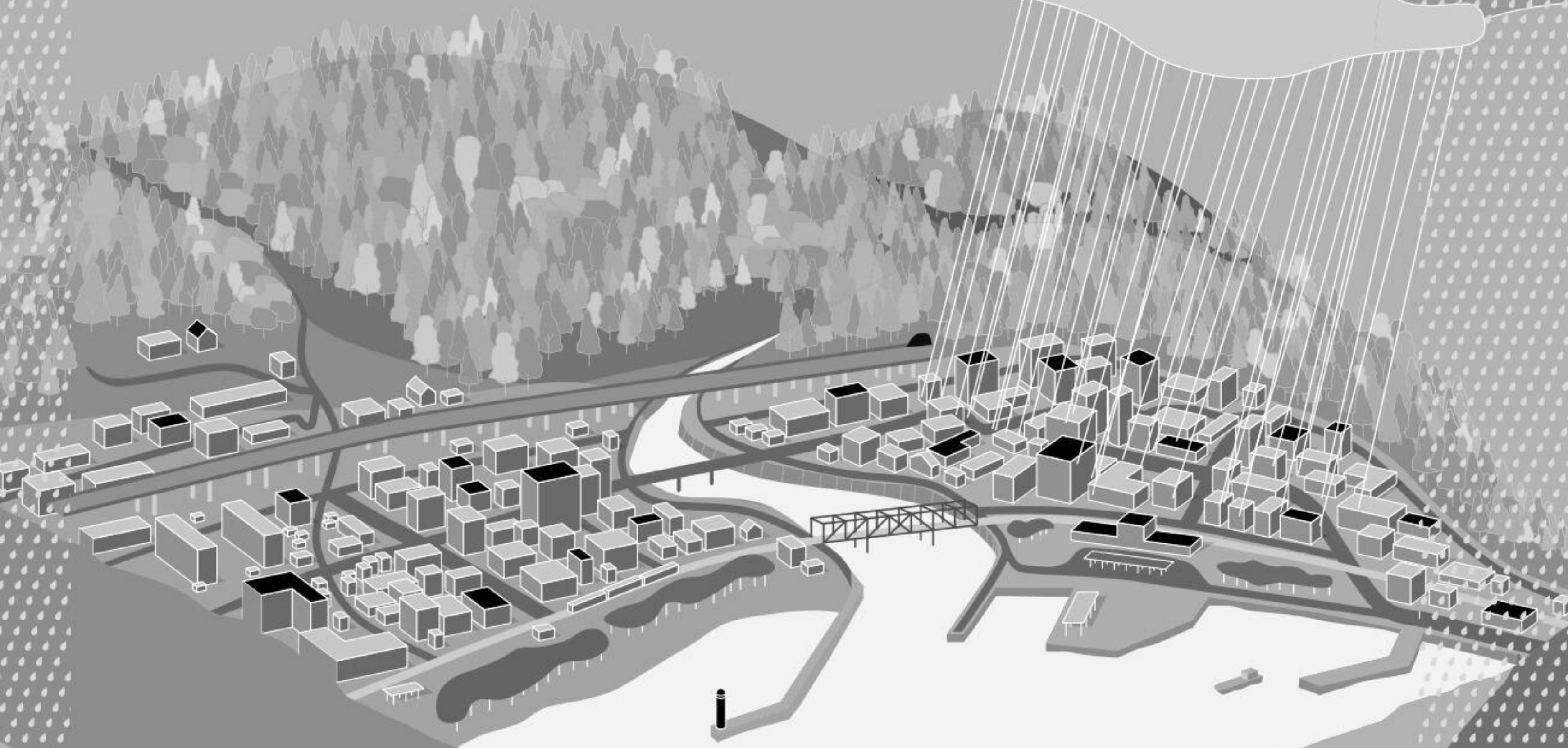
@神奈川県立近代美術館 葉山／神奈川
2021.11.27～2022.1.30

グラフィックデザイン，サインデザイン，アート，写真，建築，彫刻，出版，評論，キュレーションなど多分野において表現を展開してきた，矢萩喜従郎氏の思索と活動の軌跡を辿る作品展．会場と図録のデザインや執筆も本人が中心となって関わっている．人の目は常に微細に動いているという現象，眼振（眼球震盪）をテーマとした作家の造形概念を伝えている．

日本の風景を切り取る写真や，多重露光で人や物体を撮影した写真，言葉から啓発されたイメージを表現するポスター，視覚的な錯覚をもたらすステンレスミラーを用いた彫刻，写真や絵を素材に視点を表す白い円を配置したポスターなどの作品が扱われる．

会場では，撮影写真や手描きの絵画に始まり，写真や絵を元に加工したポスターや空間のアート的な表現，自分や他の作家の作品を素材としたデザインディレクターの仕事という，ジャンルを超えて発展していく流れで作品が並列される．矢萩氏のデザインは，既存のジャンルに分断されたものではなく，少しずつ形態を変えながらグラデーションのように繋がっていることを意識させる内容となっている．

2点撮影：矢萩喜從郎

左：彫刻シリーズ「仮想境界面／物体」の展示．ステンレスや鉄を用い，錯覚的な空間性をもたらす．
右：「コンセプチュアル・アート」の展示．写真や絵を素材に視覚を造形化した円を配するポスター．

語りの複数性

@東京都渋谷公園通りギャラリー／東京
2021.10.9～12.26

展覧会のタイトルにある「語り」とは物事を表現する方法である．他者とのコミュニケーションの方法は会話だけではなく，文字，絵，立体，身体表現などその方法は多く存在する．本展覧会では，写真，模型，絵画，映像，音などを表現媒体とする8名（百瀬文氏，大森克己氏，小島美羽氏，岡﨑莉望氏，小林紗織氏，山本高之氏，川内倫子氏，山崎阿弥氏）が，意識していなかった経験や他者の経験を受容し，作品として表現した．
大森克己氏は「心眼 柳家権太楼」で古典落語「心眼」を柳家権太楼氏が白い部屋で演じる様子を撮影し，落語を身体表現として捉えた．小島美羽氏は「終の棲家」で遺品整理や特殊清掃員の仕事で目撃した，さまざまな現場の特徴をおり混ぜたミニチュア作品により，本来生々しい現場をフィクションに置き換えることで，そこにあった生を冷静に感じる．「聞こえない木下さんに聞いたいくつかのこと」は聴者の百瀬文氏と，読唇術を使うろう者の木下知威氏の「声」に関する対談．言葉自体が不確かなため，聴覚で正確に相手が発する言葉を認識できる訳ではない．木下氏と百瀬氏が，相手を想像し，補いイメージを共有する映像では，伝えることの不確かさを提示している．他者の「語り」を感じ，自身の「語り」を意識することで他者を受け入れ，理解することの入口，となるだろう．会場構成は中山英之氏．白い壁を使用し作品の展示を緩やかに分け，展示室を繋ぐ廊下には壁を設置した構成により，日常から少しはみ出したような場となっている．訪れた鑑賞者が「ギャラリー」と呼ばれる場所であることを忘れ，作品とフラットに対峙できる空間とした．

3点提供：東京都渋谷公園通りギャラリー

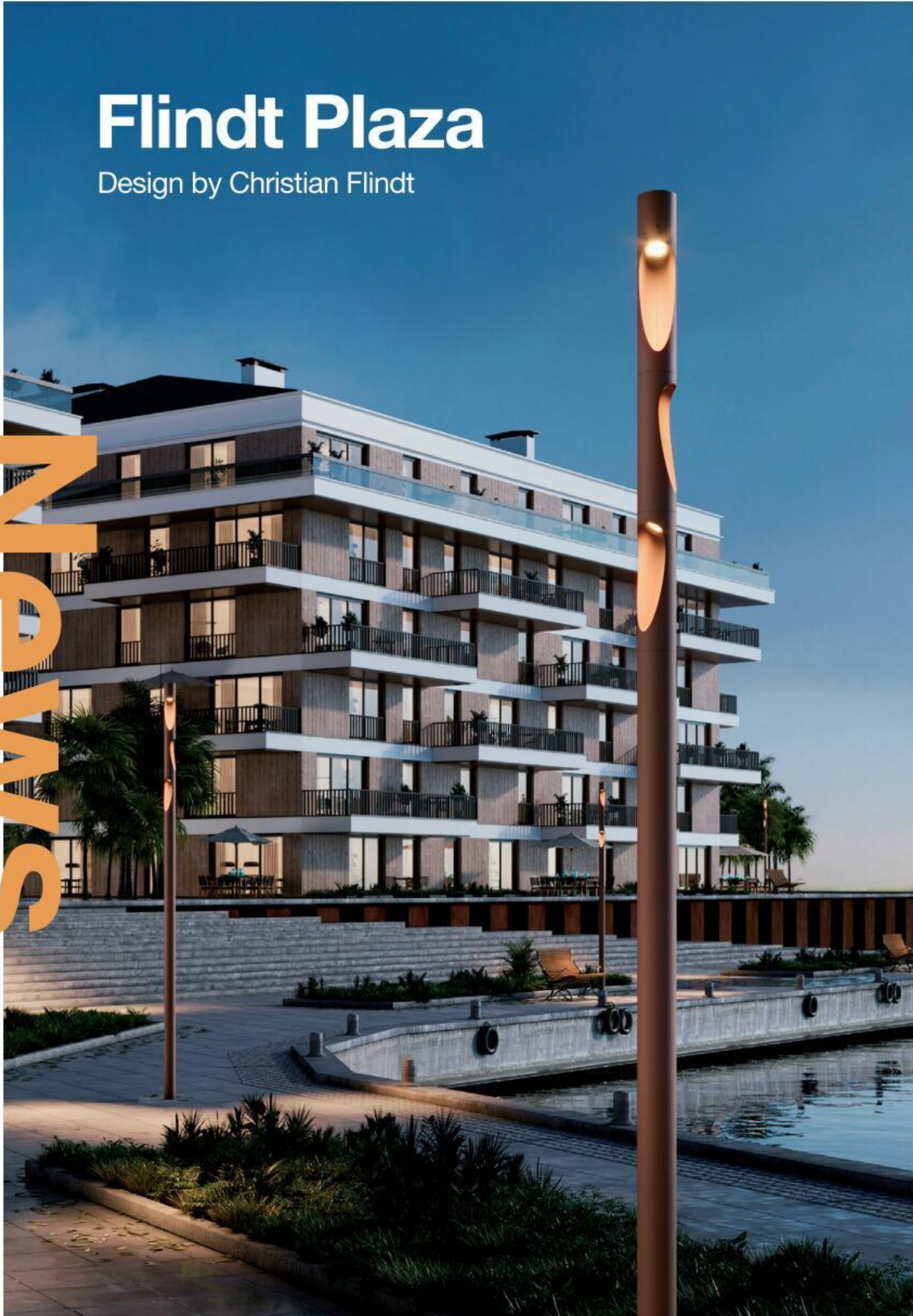
左：百瀬文《聞こえない木下さんに聞いたいくつかのこと》（2013年）．／中央：左から小島美羽『ごみ屋敷』『遺品の多い部屋』『終の棲家』，中央に岡﨑莉望『目』『其処無しの浮き』『響動』，右に小林紗織『私の中の音の眺め』．／右：大森克己『心眼　柳家権太楼』．（写真中央・右：「語りの複数性」会場風景．撮影：木奥惠三）／会場構成：中山英之建築設計事務所，企画：田中みゆき．

東京藝術大学・青木淳研究室展覧会　鳥は泳ぎつづける

@SACS Shibuya ／東京
2021.11.15～12.2（入場可能期間：11.20～29）

展覧会とは，言い換えれば「作品によって会場を一時的に元の場所とは異なる様相・空気感の場所にする行為」とも考えられるのではないか？　青木淳研究室では，展覧会の前提やあり方や意味，その展開可能性を建築的視点から問い直す，テンポラリーなリノベーションとしての展覧会シリーズを昨年から開催．本展は，再開発が進む渋谷のビルの一角で「展覧会を展示」することで，空間に対して設計を行う職能である建築家が，展覧会を通して何を提案できるかという可能性を示すものとなる．
本展の特徴のひとつは，時間にアプローチして空間を変容させる点にある．展覧会は搬入→展示→搬出で構成され，本来，来場者はその中の展示期間のみ入場して作品を鑑賞する．しかし本展では，入場可能期間は10日間でありながら，その前後各4～5日も展示期間として示した．この展示期間は来場者の入場は行わないものの，前面道路に面した大きな窓を介してその設営・撤収過程も他者に示して，搬入や搬出や設営も展覧会に組み込んだ．
また1日を3つの時間帯に分け，10～13:00，17～21:00を展示時間，13～17:00を作業時間とした．毎日空間の改変を行うが，これも街から鑑賞でき，同日の午前と午後では異なる会場が立ち現れる．
展示空間をつくる行為を示すため，室内では仮の展示壁や展示台，椅子などが用意され，壁が塗られたり，養生が取れたり，展示台が移動したりと日々少しずつ変化が進み，来場者はひとつの瞬間を目撃する．展示の前後の動きや毎日の工程や操作は，すべて設計されている．来訪者の反応に応じて，現地で変更を加えることはあるものの，完全な即興ではない．また展覧会の前後の動きも設計対象とすることで，空間の更新過程と，窓の外に見られる渋谷の街との関係付けも試みる．モノがある状態とその変わっていくさまを厳密に設計することで，会場内の複数の事物，人，そして会場外の変化し続ける街との関係性をつくり出していく．
本展は，小さなスケールからでも，モノから都市までその意味やあり方を設計することができるという，大きな示唆を含んでいる．

撮影：マコト・ヤカザキ

上から，11月15日，20日，25日の風景．研究室の修士1年が主体となり，既存の空間が持っている要素を拾いながら，展示空間をつくることを目的に毎日少しずつ変化させていく．その小さな変化はすべて設計行為の積み重ねによって設えられた．

光とプロダクトの美しさで場を変える照明

――「横須賀学院 カフェテリア」を通して

ルイスポールセン

1874年にデンマークで創業した照明メーカー「ルイスポールセン」．その多くのアイテムは建築プロジェクトでのアーキテクトやデザイナーとの協働がきっかけで生まれている．同社より2003年に発売され，その後長年変わらず愛される照明「エニグマ」について，採用された「横須賀学院 カフェテリア」にて，横須賀学院 常務理事事務局長の小見山茂樹氏と，設計を担当した鹿島建設 横浜支店 建築設計グループ長の住吉剛彰氏，同社 設計長の良永敦子氏，ライティングデザインを担当したフォーライツの稲葉裕氏，「エニグマ」のデザイナー内山章一氏に，ルイスポールセンの魅力についてお伺いした．（編）

5点写真撮影：新建築社写真部

小見山茂樹氏　住吉剛彰氏　良永敦子氏　稲葉裕氏　内山章一氏

「横須賀学院 カフェテリア」内部．緩やかな曲線を描く膜屋根が架かる．いちばん大きいもので直径が825mmのシェードが7枚連なる「エニグマ 825」が12灯設けられている．

「エニグマ 825」を上部から見る．ワイヤーで繋がれたシェードはアクリルで，宙に漂って見える．

北東側外観夕景．本館（1号館）の中庭に建つ．新設されたウッドデッキと一体的に使用できる．
（3点写真：Katsuhisa Kida ／ FOTOTECA）

生徒たちが集い，憩い，安らぐ，中心となる場所

――**「横須賀学院 カフェテリア」の概要をお聞かせください．**

小見山　横須賀学院は1950年創立の小中高併設のキリスト教に基づく教育を実践する学校です．本敷地は海軍工機学校の跡地で，今でもかつての建物が残っています．元もと食堂が入っていた2号館も旧海軍工機学校の建築で，老朽化や校舎から離れていること等から，2020年の創立70周年記念事業としてカフェテリアを新設しようと，鹿島建設にご相談しました．場所は生徒たちの移動を考え，本館（1号館）の中庭としました．生徒たちが集い，憩い，安らぐ場所となるように，また場所が狭いので，圧迫感を与えず広々とした印象の空間となるようにお願いしました．

住吉　横須賀学院には生徒の心の拠り所としてチャペルがあったので，カフェテリアは生徒の生活の中心となる施設にしたいと考えました．また，中庭は校舎に囲われていて暗くなりがちですが，生徒が集うところに神からの光が降り注ぐような，暖かく光溢れる場所にしようと思い，膜屋根を採用して昼間は太陽光を内部に取り込み，夜間は内部の灯りが周囲を照らす計画としました．

良永　既存棟に近接し配置エリアが狭く，上部には渡り廊下が通っていること，また，生徒が利用する中での建設であったため，計画はもとより施工法や安全対策等，多くの工夫が求められました．しかしながら，この立地条件により，建設過程を最初から最後まで，周囲三方を囲む既存棟からたくさんの生徒に観覧してもらうことができました．生徒たちにとって，建築やプロダクト，何であれ無から有を産み出せる自由やその方法等に関心を持つよい契機になったのであれば嬉しいと感じています．

宙に浮遊する不思議な照明器具

――**「エニグマ」の採用についてお聞かせください．**

内山　「エニグマ」は私が24年前にルイスポールセンに提案しそこから開発に4年をかけ2003年に発売したもので，非常に細いワイヤーで吊られた複数のシェードが浮遊するような軽く透明感のあるペンダントライトです．「エニグマ」という名の通り，宙に浮遊する「謎」めいた神秘的で不思議なデザインが特徴です．シェードはグレアを完全にカットし，下方には柔らかな透過光が，上方や横にはシェードに反射した拡散光がそれぞれ届くよう設計されています．

稲葉　建築設計の鹿島建設と協働しライティングデザインの検討を進めたのですが，ほぼ迷うことなく全会一致で「エニグマ・黒」の採用が決まりました．「エニグマ」の天使の輪のようなシェードを通して降りてくる柔らかい光が崇高な感じがして，この空間にぴったりだと考えました．消灯時も，シェードが黒いので空間の邪魔をしないけれども，照明器具自体のデザイン性の高さから空間のアクセントとなります．光の美しさと共に，プロダクトの美しさで，空間を生き生きとさせるルイスポールセンの変わらない美学が感じられます．

小見山　「エニグマ」のおかげもあり，内装デザインは一般的な学校の食堂ではなく，都会のカフェのようで，これから大人の階段を登り社会に出ていく中高生にとって，少し背伸びをして大人の仲間入りをしたような空間体験ができ，楽しんで利用してくれています．また，受験生やその親御さんにも評判がよく，横須賀学院を選んでいただく際の非常に大きなポイントになっていると思います．

（2021年10月22日，横須賀学院 カフェテリアにて
文責：本誌編集部）

問い合わせ
ルイスポールセンジャパン
louispoulsen.com

第57回セントラル硝子国際建築設計競技

課題:

都市と農村を繋ぐ建築

近代化・産業化による経済成長は，都市への農村人口の大量流出を加速化させ，都市と農村にさまざまな「壁」を生んでいます．農村では少子高齢化が進み，農業自体の衰退やそれに伴う地域コミュニティの崩壊，貧困層の増加が懸念されています．対して，都市は食料生産のほとんどを国内外の農村に依存しているため，さらなる人口爆発や気候危機により，食料の安定的確保が難しくなるでしょう．これはひとつの地域や国の中に限った話ではなく，先進国の人びとの豊かな生活を実現するために，途上国が労働や生産を担っていて，その繋がりに気づかない，見ようとしない世界規模の問題でもあるのです．
こうしたことへの危機感が，都市と農村を繋ぐ試みに新しい動きを生み出しています．
たとえば「都市農村交流」は，都市部の人びとをグリーン・ツーリズムや二拠点居住，定住等のさまざまな形式で受け入れることで，農村の魅力であるおだやかな暮らしや豊かな自然を体験してもらい，農村の抱える空き家や耕作放棄地の活用や，地域の活性化，観光客の増加を狙うというものです．また「都市型農場」は，新たな生産技術を導入し都市部で農作物を育成することで，生産と消費の距離を縮め，食への関心を促すというものです．
都市と農村は，分断された相容れないものではなく，食や暮らしのような身近なところから見ると実はひと繋がりで，その関係性を見直すところに「壁」をなくす新たな解決がありそうです．そこで，都市と農村の「壁」を崩し，新しい繋がりをつくる建築を考えてください．
都市と農村を区別している「壁」は何か，新たな関係性はどのような仕組みで成立するのか，具体的に示してください．
みなさまの応募をお待ちしております．

○1次審査
提出図面：平面図，断面図，配置図（縮尺は自由），透視図もしくは模型写真，その他設計意図を表現する図あるいは説明文なども加えることは自由ですが，説明文は200字以内とします．

用紙：中判ケント紙またはそれに類する厚紙（600mm×840mm）1枚に図面および説明文を収めてください．表現方法は自由ですが，パネル化しないこと．

登録方法：本コンペに参加するためには，事前に当ウェブサイトの登録フォームから登録を行ってください．必要事項を入力し送信すると，e-mailで登録番号が交付されます．この登録番号は応募にあたって必要となりますので，紛失しないよう，記録・保存してください．
・交付後の，登録番号に関するお問い合わせには応じることができません．
・複数案応募する場合は，作品ごとに登録が必要です．
・応募登録は当ウェブサイト以外からはできません．
・登録後，内容に変更があった場合は再度登録をし直してください．
・携帯のメールアドレスでは登録通知の返信メールを受け取れない場合があります．

登録番号の記載：提出用紙の表面右下に35ポイントの文字サイズで登録番号を明記してください．登録番号以外の応募者を特定できる内容は記載しないでください．裏面は白紙としてください．

提出先：株式会社新建築社「セントラル硝子国際建築設計競技」係
〒100-6017　東京都千代田区霞が関3-2-5 霞が関ビルディング17階
tel.03-6205-4382

登録・応募締切：2022年8月26日（金）　日本国内からの送付は当日消印有効．送付のみ受け付けます．持込み，バイク便は不可．日本国外からの送付は当日必着．

○1次審査結果発表
2022年9月下旬
通過者に通知すると共に，当設計競技ウェブサイト（http://www.cgco.co.jp/kyougi）上で発表します．

○2次審査
1次審査通過作品となる上位7点について，2次審査を行い，各賞を決定します．この2次審査では，応募作品の提案内容に基づき，プレゼンテーションをしていただきます．
2次審査実施方法は当設計競技ウェブサイトにて発表します．

○2次審査結果発表
審査の結果は『新建築』2023年1月号，『a+u』2023年2月号に発表します．

CENTRAL GLASS INTERNATIONAL ARCHITECTURAL DESIGN COMPETITION 2022

審査委員長　隈研吾（隈研吾建築都市設計事務所）
審査委員　亀井忠夫（日建設計）
青木淳（AS）
賀持剛一（大林組）
塚本由晴（アトリエ・ワン）
石上純也（石上純也建築設計事務所）
（敬称略・順不同）

賞金　最優秀賞（1点）　200万円（税込）及び記念品
優秀賞（2点）　各30万円（税込）及び記念品
入選（4点）　各10万円（税込）及び記念品
（以上，1次審査通過作品）
佳作（10点）　各5万円（税込）

主催　セントラル硝子株式会社
後援　株式会社新建築社

登録・応募締切　2022年8月26日（金）
日本国内からの送付は当日消印有効，持込み，バイク便は不可．日本国外からの送付は当日必着．

1次審査結果発表　2022年9月下旬
設計競技ウェブサイト　http://www.cgco.co.jp/kyougi

2次審査　2022年11月5日（土）
2次審査実施方法は当設計競技ウェブサイトにて発表します．

○その他
・応募作品は未発表のものに限ります．
・同一作品の他設計競技との二重応募はご遠慮ください．
・応募要項に関する質問は受け付けません．規定外の問題は応募者の自由決定を可とします．
・本設計競技応募作品の著作権は応募者に帰属しますが，応募作品の掲載など発表に関わる権利は主催側が保有します．
・応募作品の一部あるいは全部が，他者の著作権を侵害するものであってはなりません．また，雑誌や書籍，ウェブサイトなどの著作物から複写した画像を使用しないこと．著作権侵害のおそれがある場合は主催者の判断により入賞を取り消すことがあります．
・応募作品は返却しませんので，必要なものはあらかじめ複製しておいてください．
・提出のルールを遵守くださいますよう，お願いいたします．
・本設計競技において取得した個人情報は，主催者・後援者が共有しますが，本設計競技の運営以外には使用いたしません．また，第三者に譲渡や転売はいたしません．

設計競技ウェブサイト
http://www.cgco.co.jp/kyougi

第56回セントラル硝子国際建築設計競技入賞発表

主催／セントラル硝子株式会社
後援／株式会社新建築社

審査委員長 **内藤廣** （内藤廣建築設計事務所）
審査委員 **隈研吾** （隈研吾建築都市設計事務所）
亀井忠夫 （日建設計）
青木淳 （AS）
賀持剛一 （大林組）
塚本由晴 （アトリエ・ワン）
巻幡良忠 （セントラル硝子常務執行役員）

（敬称略・順不同）

課題：交感する空間

デジタル技術の発達により，人びとの生活は変化しました．コンピュータの登場，インターネットの構築，スマホの普及で，デジタルに触れない日はないといっても過言ではありません．さらに，VR（バーチャル・リアリティ）が開発されたことで，現実のように感じられる環境を人工的につくり出すことができるようになりました．VRにより人間の感覚器官は刺激され，没入感のある新たな体験がもたらされます．
一方，新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響で，暮らしは一変しました．「ソーシャルディスタンス」，「三密を避ける」，「ニューノーマル＝新しい生活様式」という言葉が生まれているように，われわれの行動は制約され，日常は大きく変わりつつあります．
このような，デジタルの発達とコロナ禍という時代において，われわれはどのように生活をすればよいでしょうか．コロナ禍でも，日々の暮らしは営まれ，そこには実際の建築と都市があり，そして人と人のコミュニケーションがあります．VRの精度が高められても，人と人が出会うこと，人が移動すること，生身の人間が実際の空間を感じることは大切な行為となるでしょう．VRやコロナ禍を体感したからこそ，人間が本来持っている感じる力を導くことが必要になっています．
そこで，実際に体感できる「交感する空間」を提案してください．交感とは，互いに感じ合うこと，心が通じ合うことで，自身の体感だけではなく，相手を思いやることが必要です．設定やプログラムは自由です．デジタルではできない，人間の感性に訴えかける現実の空間を考えてください．みなさまの応募をお待ちしています． （課題主旨文より）

「交感する空間」をテーマに開催された第56回セントラル硝子国際建築設計競技は，昨年に引き続き1次審査と2次審査での2段階方式で行われた．応募作品の総数は269作品（国内：201，海外：68）．1次審査の結果，7点が2次審査に進み，10点が佳作として選出された．2次審査は新型コロナウイルス感染拡大に配慮して，審査委員のみでオンラインにて審査が行われ，海外4組を含む7組によるプレゼンテーション，審査委員の議論を経て，最優秀賞1作品，優秀賞2作品，入選4作品が決定した．（編）

最優秀賞を受賞したケー・チャン氏．

最優秀賞（1作品・賞金200万円）
ケー・チャン（フリーランス，米国）

優秀賞（2作品・賞金各30万円）
クレシミール・ロギナ（R/IN，クロアチア）
ベルナーダ・イヴァンカン（R/IN，クロアチア）

ソフィー・シー（フリーランス，米国）

入選（4作品・賞金各10万円）
ユージーン・シェン・チュン・オン（フリーランス，シンガポール）

中村幸介（東京大学大学院）

熊一楽（フリーランス）

新美志織（工学院大学）
除村高弘（工学院大学大学院）
北林栞（工学院大学）

佳作（10作品・賞金各5万円）

ハンシン・チェン（天津大学，中国）
ティンシャー・カイ（天津大学，中国）

藤井雪乃（東京藝術大学大学院）

イータン・チェン（フリーランス，台湾）
ユーペン・ガオ（フリーランス，中国）

殿前莉世（iii architects）

トニー・レウン（フリーランス，香港）

吉田悠哉（早稲田大学大学院）
米山魁（早稲田大学大学院）
米澤実紗（早稲田大学大学院）

ジャウェイ・リャン（フリーランス，中国）
シーヤン・タン（フリーランス，中国）

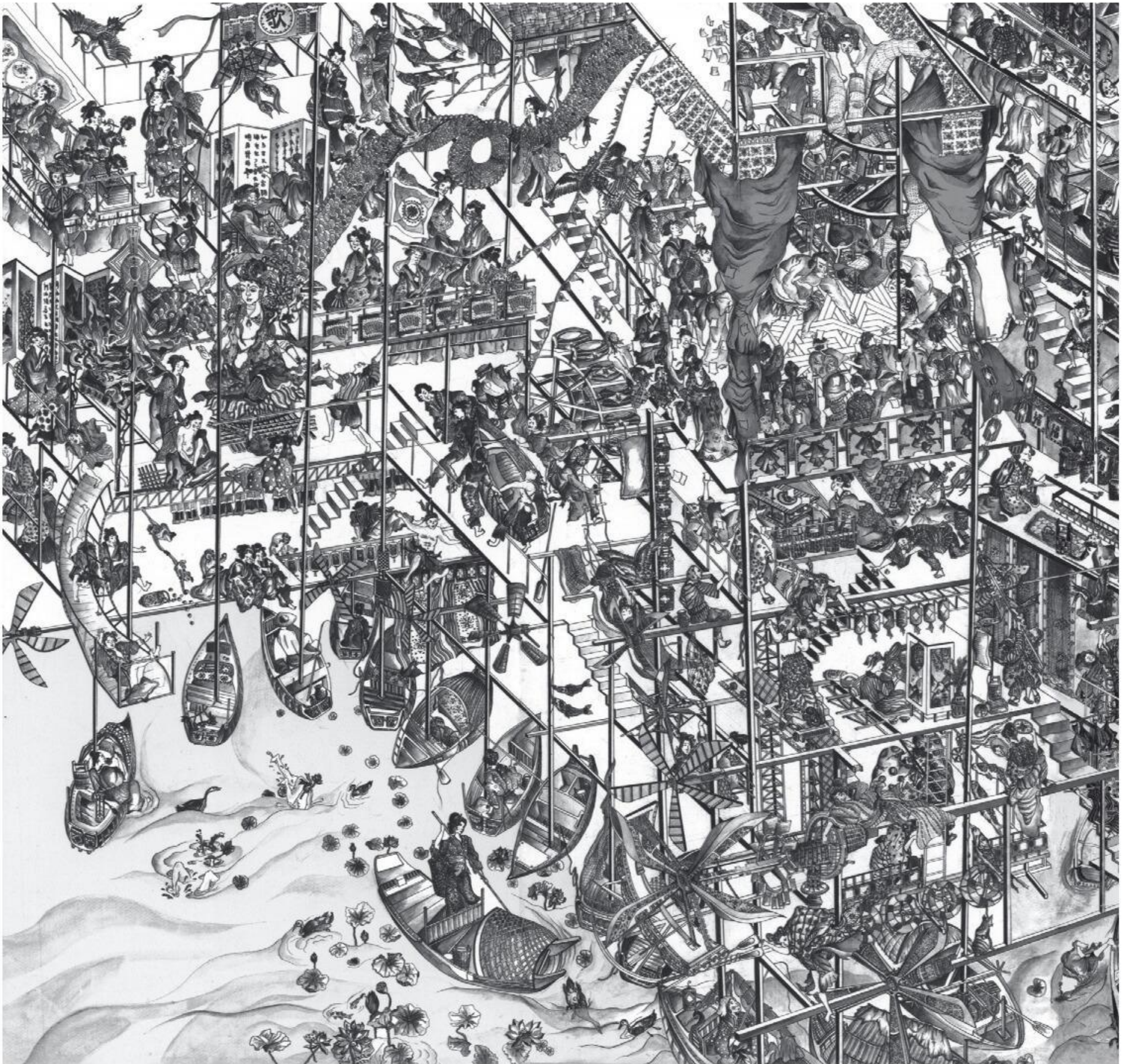
イウ・ヒ・ロク・キャサリン（フリーランス，香港）
イップ・シャン・シャン・シャナ（フリーランス，香港）
シェク・ウィン・ティン・サイラス（フリーランス，香港）
トニー・レウン（フリーランス，香港）

アーサー・ブランドリン（フリーランス，スイス）
マリコ・オクムラ（フリーランス，スイス）

波多剛広（芝浦工業大学大学院）

最優秀賞　ケー・チャン（フリーランス，米国）

BUILDING TOWARDS INTERPATHY : RE-ENVISIONING THE ART OF UKIYO-E

- ●熱量がドローイングに現れていて引き込まれた．建築の中に潜んでいる深層心理に似た何かを炙り出そうとしているように思った．（塚本）
- ●死，要求，背信，孤独，退屈の5つの不安にどう向き合うかが建築における交感を考える基本なのではないかという考えは的を射ているし，日本の「ハレとケ」には，それを楽しく乗り越える知恵があったのではないかと問われている．（内藤）
- ●構造的に船が繋がっていく様など，プラクティカルなところまで踏み込んでいて圧倒された．提案の根拠としてアルド・ロッシやレンゾ・ピアノを引き合いに出さない方が世界観が強調されてよいと思ったが，それでも力を感じた．（隈）
- ●浮世絵や一期一会など，日本を意識しすぎているようにも感じたが，人間の根元的なテーマに挑戦していて非常に面白い．（巻幡）

ZONE 1: FEAR OF DEATH

ZONE 2: FEAR OF NEED

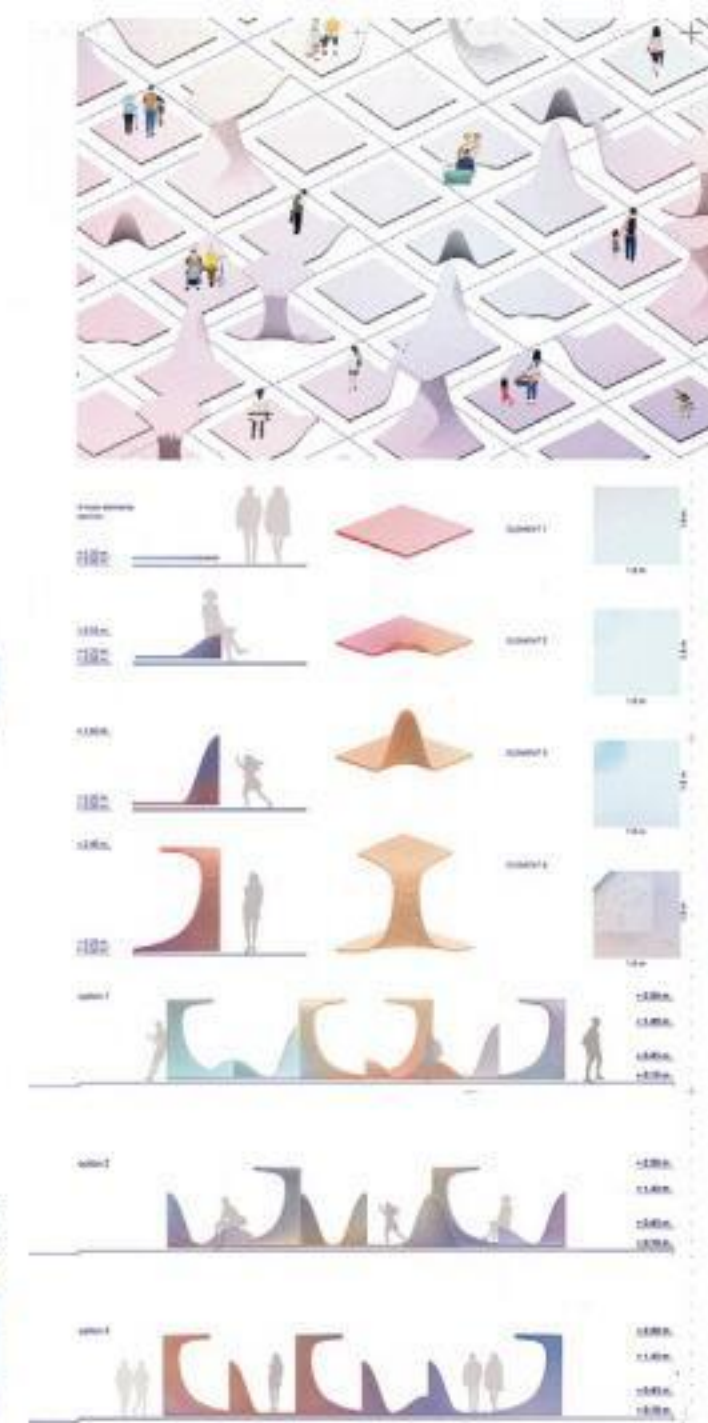
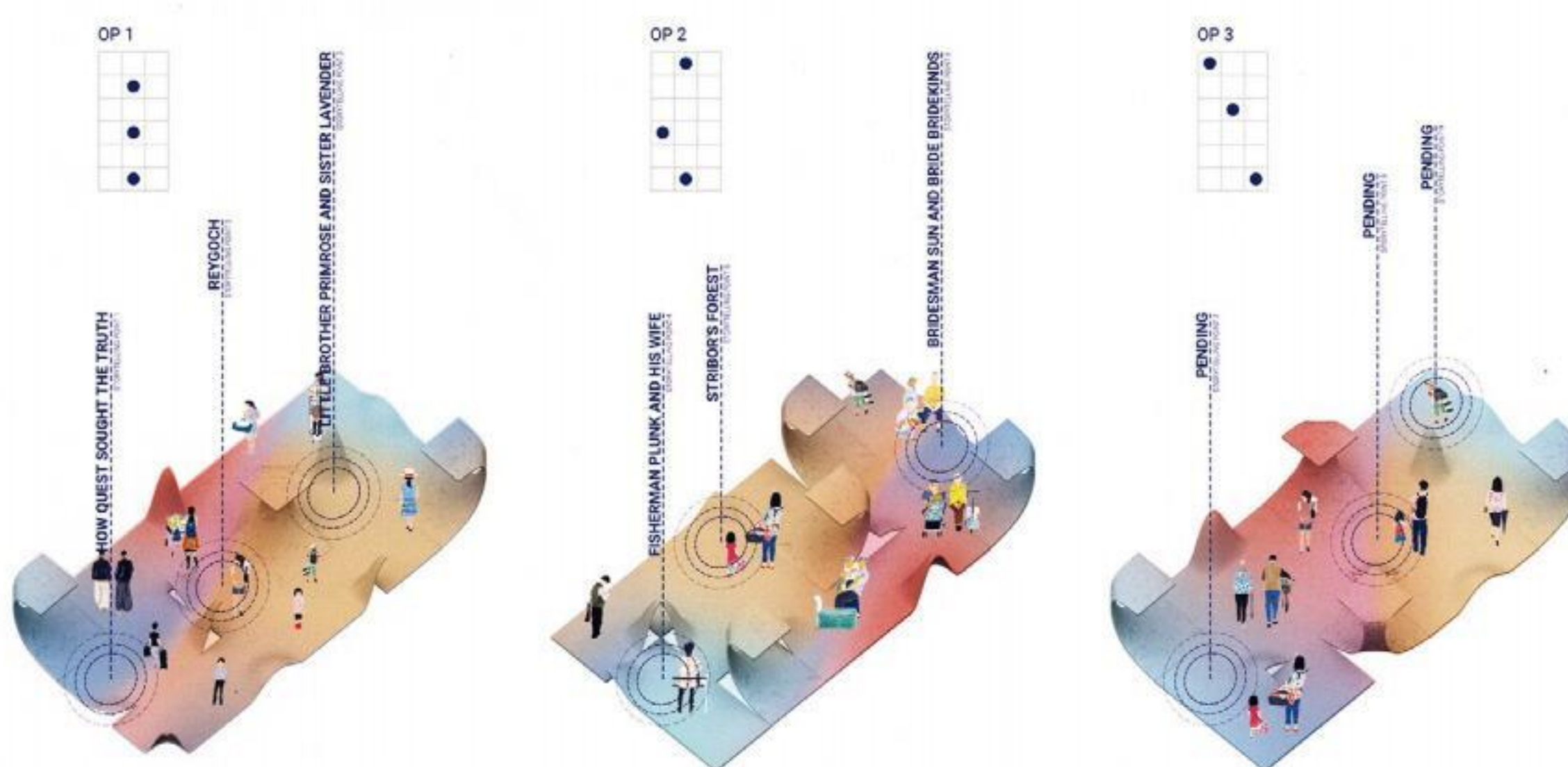
ZONE 3: FEAR OF TREACHERY

ZONE 4: FEAR OF LONELINESS

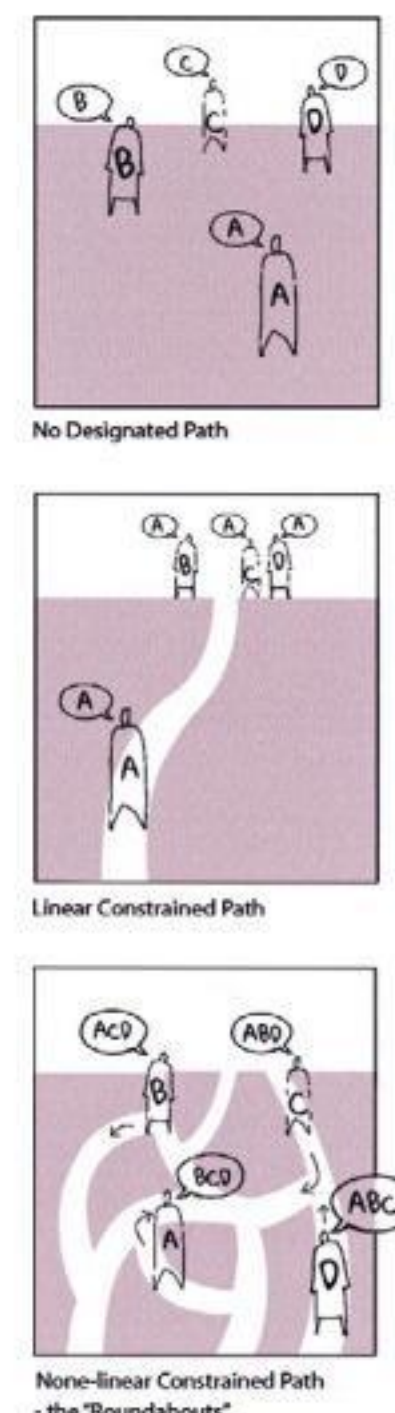
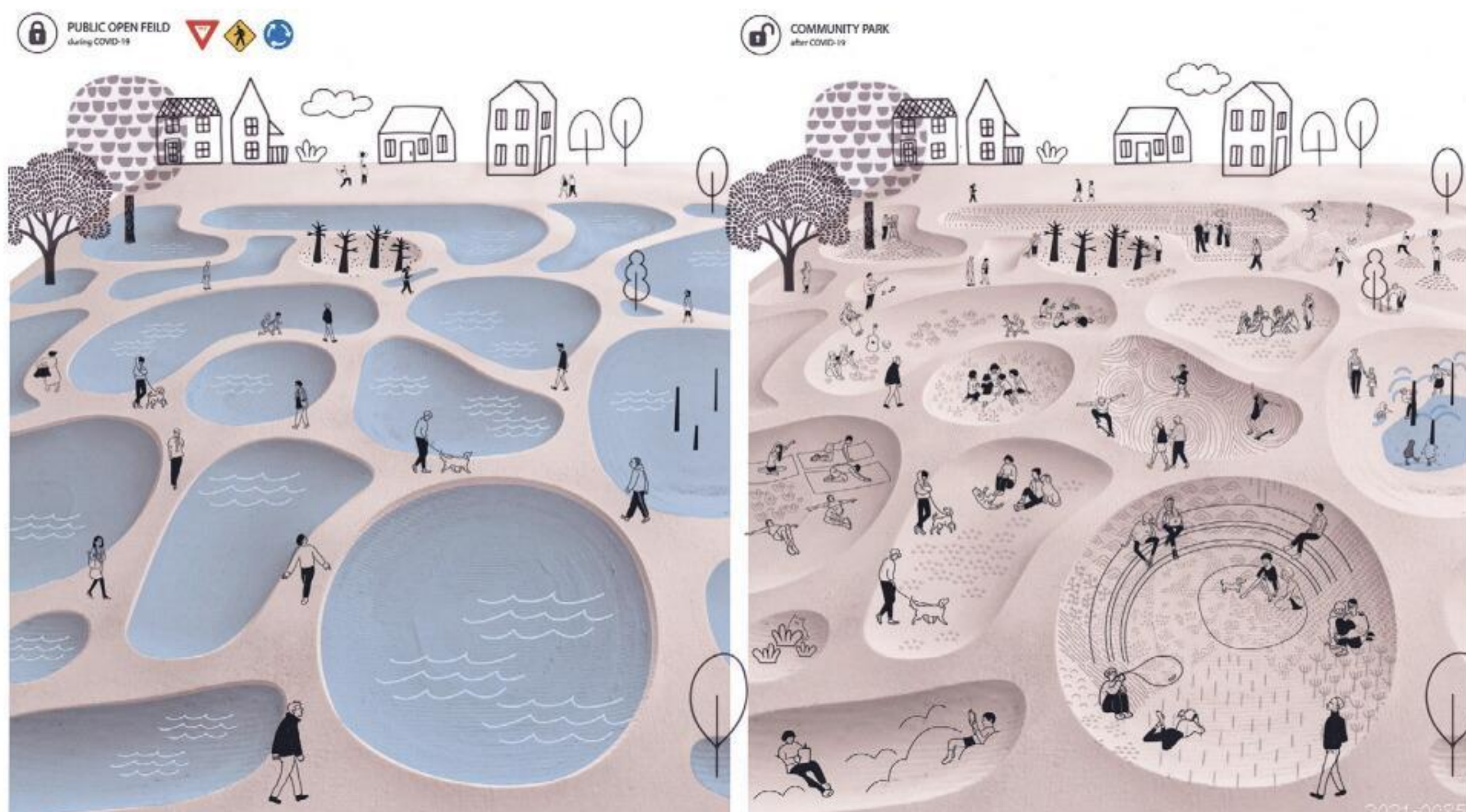
ZONE 5: FEAR OF BOREDOM

優秀賞　クレシミール・ロギナ　ベルナーダ・イヴァンカン（2名，R/IN，クロアチア）

STORIESCAPES

●クロアチアではドブロブニク城壁のように，壁のようなものが居場所をつくる提案は街にフィットすると思った．感情を恣意的に断面に結びつけているのは巧みで，一方で具体的に語られないことで神秘的にも見えた．（隈）
●公共空間と物語を絡めているところがよい．プレゼンテーションでは実物大の作品を製作しており，ドローイングとはまた異なった印象を受けた．（賀持）
●公園のようにすべての人に開かれているのではなく，物語を読みさえすれば入っていけるという半分閉じた状態が維持されるため，パブリックスペースに物語が介在する可能性を感じた．人間社会から一歩引くようなものとして構想されているのも面白い．（塚本）
●交感を育む空間をいちばん意識しているように思った．パブリックな空間のあり様が新鮮で面白い．（巻幡）

優秀賞　ソフィー・シー（フリーランス，米国）

Re-evaluate Public Open Feild

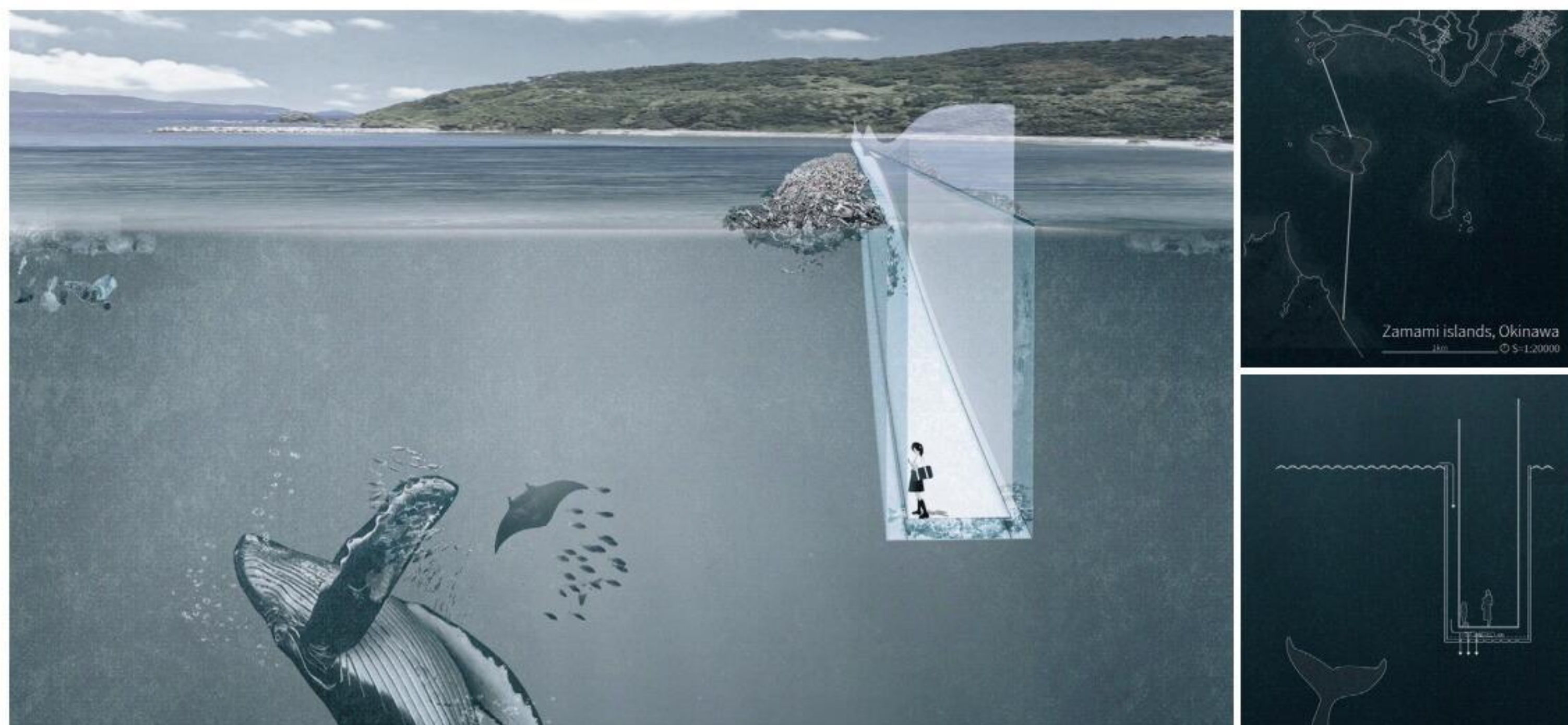
●綺麗なランドスケープをつくり，それがコロナの状況によって変化するというストーリーは納得できたが，ラウンドアバウトに絡ませたことで提案が不明確になってしまったのではないか．（隈）
●通常は一方通行で成り立つラウンドアバウトのシステムについて詳しく触れられていなかったので，その必然性が分かるとなおよかった．（賀持）
●開かれた外部空間の考え方として，グラデーションをつけるのは非常に面白いしリアリティがある．（塚本）
●人為的に水を入れたり入れなかったりするのは，今のコロナの状況に上手く適応させていて面白い．（内藤）

入選　ユージーン・シェン・チュン・オン（フリーランス，シンガポール）

LANDING PARTY!

●階段は垂直方向に居場所が分散されるため，人が1カ所に集中せずに使える空間という点で上手く開かれている．（青木）
●近代的な集合住宅が何を提供したのかという深い問いを立て，提案と対比させるとより分かりやすくてよかった．近代とは何か，近代が落としたものの中に交感の種があるのではないか．ということを深掘りすると批評性が増すと思った．（内藤）
●階段を独立した「トラベリングタワー」と呼び，“交感装置”としていろいろなところへ移動させて取り付けるアイデアが面白い．（賀持）

入選　中村幸介（東京大学大学院）

Promenade for Collecting Marine Debris

●海洋ゴミという社会課題に対して取り組み，動物と人間の交感を具体的空間として提案しているのが印象的だった．提案はシンプルで，難しい課題への提案を押し付けがましくなく，美しく表現していることに好感を持った．（亀井）
●人間と人間以外が互いの命を思いやるという交感が必要なのではないかと気付かされる，他の作品にはない提案．とはいえ，海の上に遊歩道をつくるのは，海の生物に対してストレスにならないかと感じた．（巻幡）
●交感は，交わる両者が対等の立場に置かれているという，困難な前提が満たされて初めて成立するものだが，この案にはその視点が欠けていると感じた．（青木）

入選　熊一楽（フリーランス）

SEE-SAW House

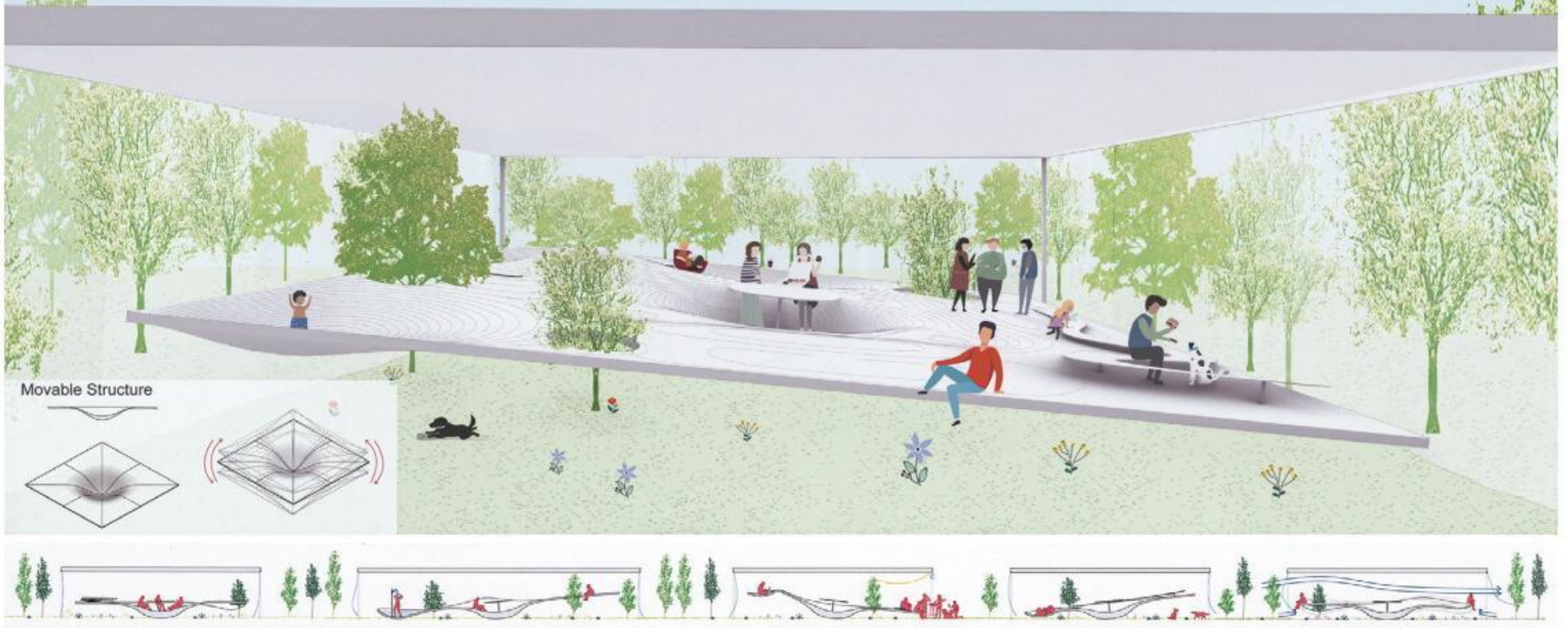
●人間の具体的な生活を前提にしないスピリチュアルな世界感の中で，このシーソーによってどういう交感が可能になるかを提案するとより魅力的だったと思うが，日常生活のレベルに落とし込みすぎて浅く見えてしまったのではないか.（隈）

●人間の行為を自らの重量に置き換えて，身体感覚で交感する空間にしているのが興味深い．日常的に身をもって微妙なバランスを体験することが，交感の学びにもなるかもしれない.（亀井）

●一緒に暮らす相手への感情や行動を感じないと上手くバランスが取れず生活するには難しいのではないかと思ったが，アンバランスをよしとする前提は新鮮だった.（巻幡）

SEE - SAW House

SEE-SAW house is a movable structure that can move like a seesaw. It is horizontally static when uninhabited, but when the people living in it move around, its balance will be broken. It seems to be a new life experiment, and people living here, for In a relatively stable environment, they must coordinate each other's activities, which in turn will affect their own daily life.

Movable Structure

入選　新美志織（工学院大学）　除村高弘（工学院大学大学院）　北林栞（工学院大学）

仮想都市を登る

●DX化に対応して大量に電力を消費する巨大データセンターがつくられようとしている．そういったトレンドに対してシニカルな提案がなされているところが興味深い．将来廃墟になる雰囲気も合わせ持ち，時間を超えた交感が起こりそうな予感もする.（亀井）

●今の社会状況によって，人間にとっての建物の外部空間の価値が内部空間の価値を超えるとすると，建物の外形に使用目的が集中し，それは山と同じであるという考えが面白い．サーバーの山が都市に開かれている情景も面白い.（青木）

●情報という怪物の急所を，都市の巨大な胃袋で消化して身体化しようというギャグかな.（内藤）

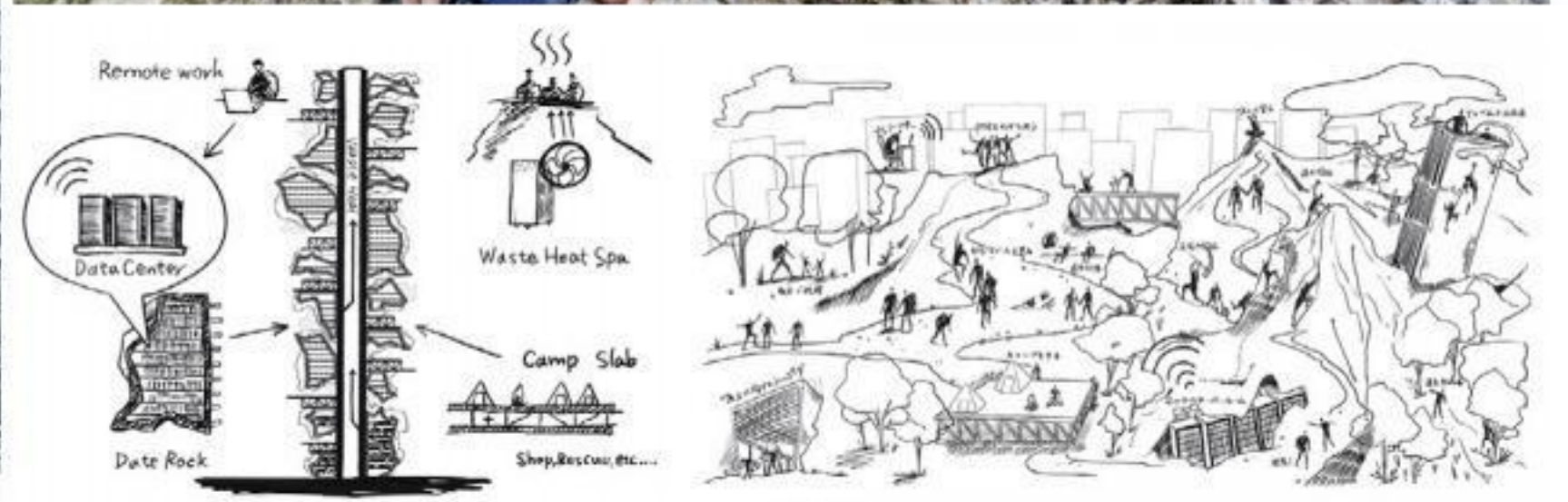
Remote work

Data Center

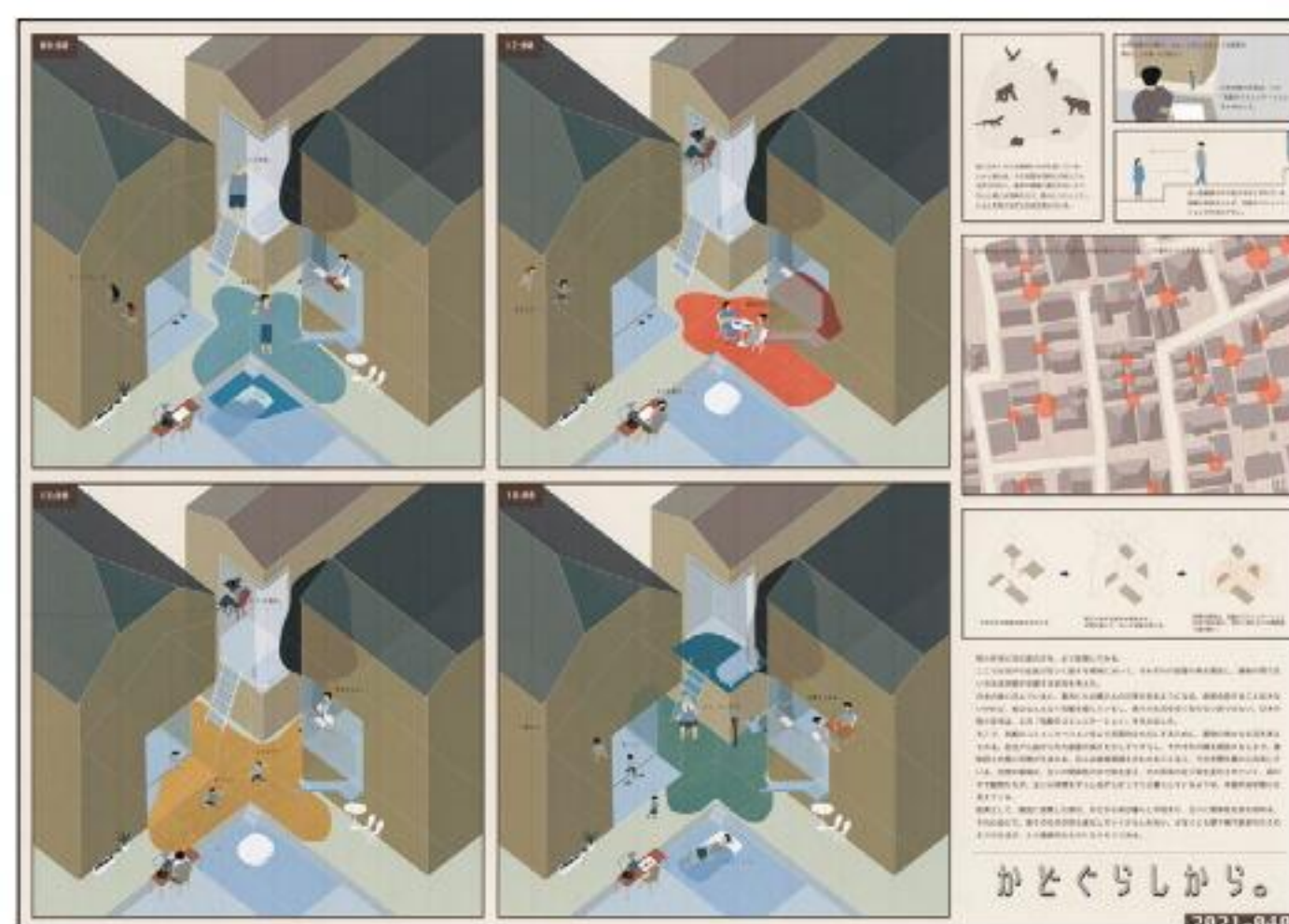
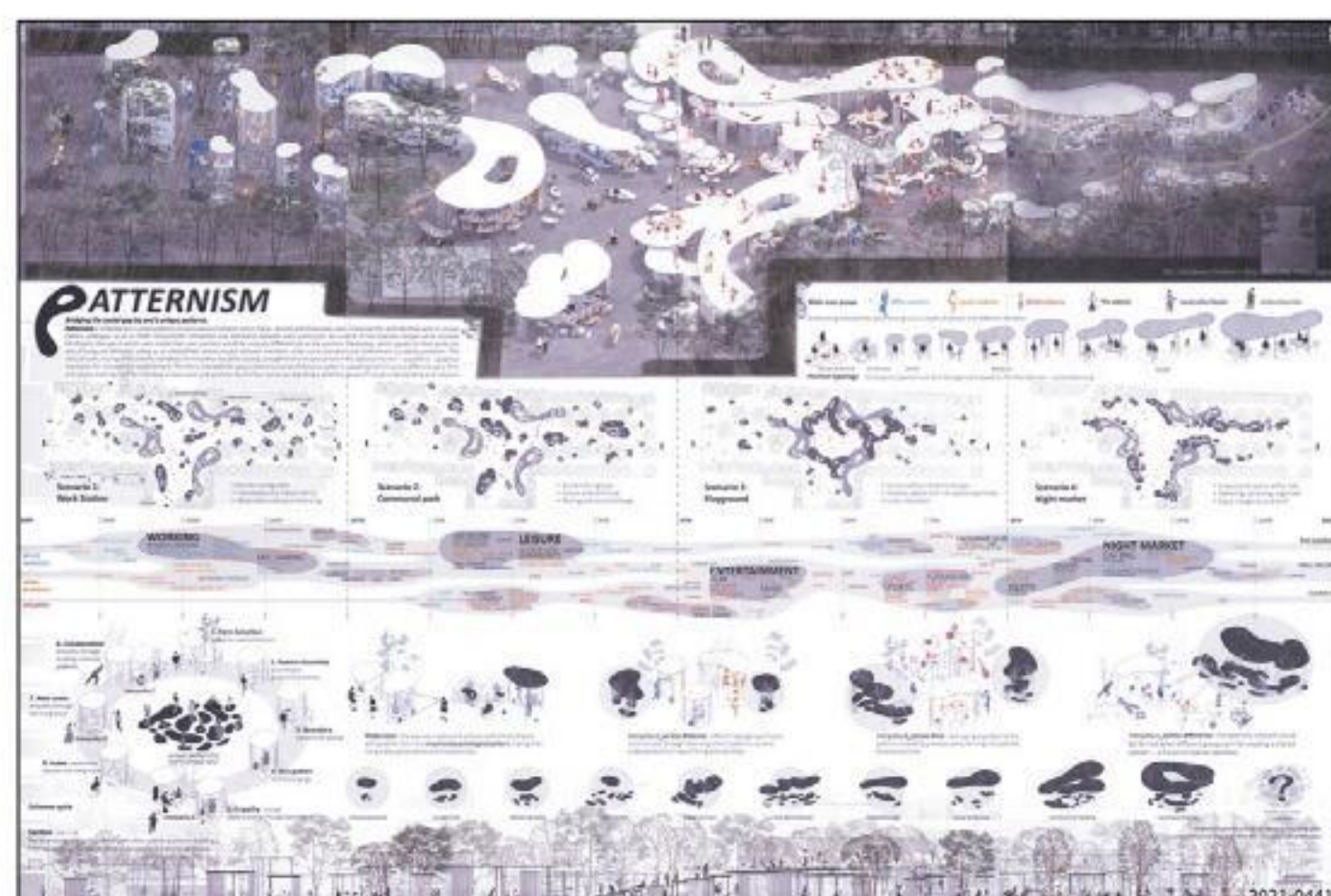
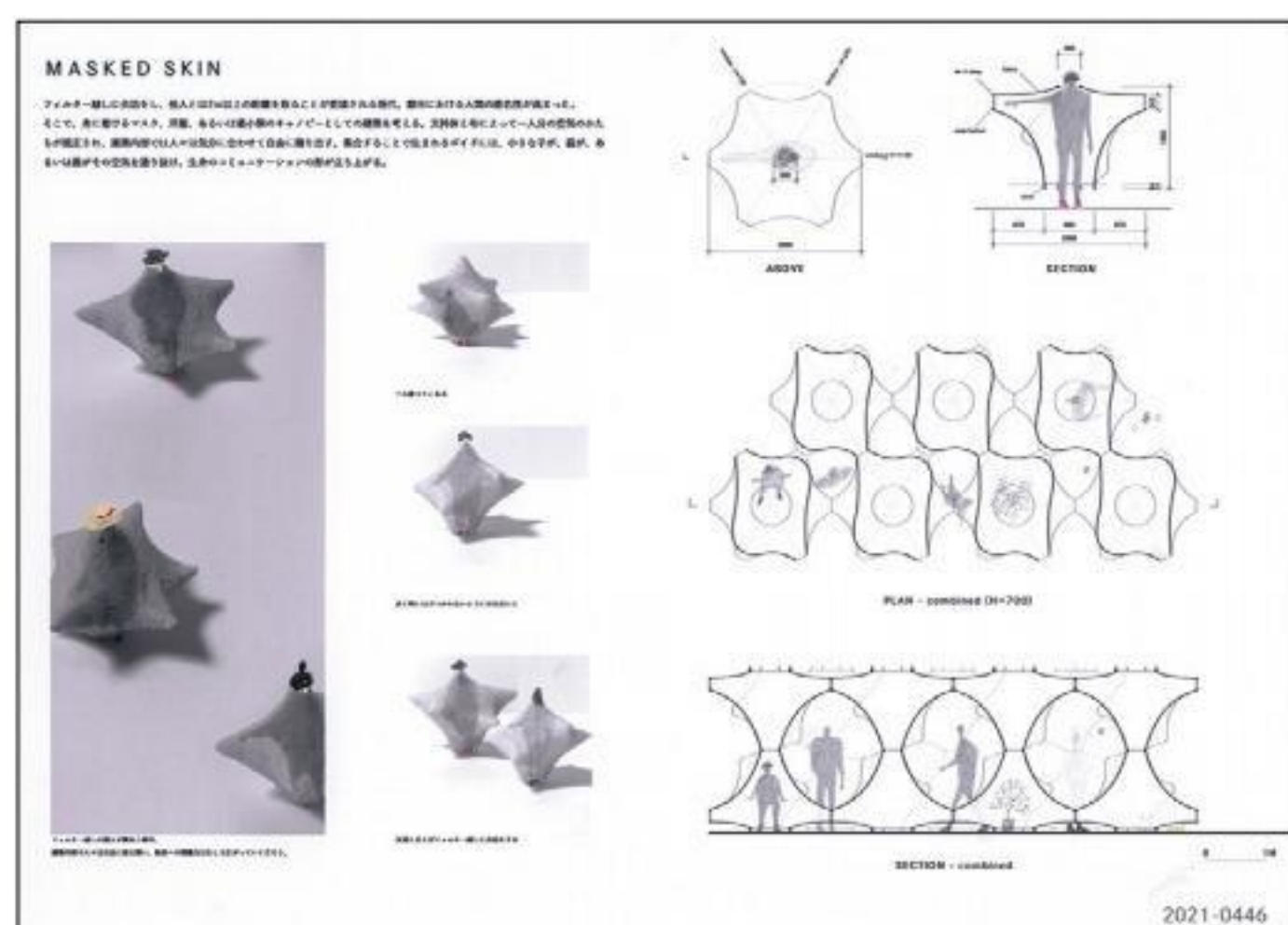
Date Rock

Waste Heat Spa

Camp Slab

Shop, Rescue, etc...

佳作10作品

ハンシン・チェン　ティンシャー・カイ（2名，天津大学，中国）／**藤井雪乃**（東京藝術大学大学院）／**イータン・チェン**（フリーランス，台湾）　**ユーペン・ガオ**（フリーランス，中国）／**殿前莉世**（iii architects）／**トニー・レウン**（フリーランス，香港）／**吉田悠哉　米山魁　米澤実紗**（3名，早稲田大学大学院）／**ジャウェイ・リャン　シーヤン・タン**（2名，フリーランス，中国）／**イウ・ヒ・ロク・キャサリン　イップ・シャン・シャン・シャナ　シェク・ウィン・ティン・サイラス　トニー・レウン**（4名，フリーランス，香港）／**アーサー・ブランドリン　マリコ・オクムラ**（2名，フリーランス，スイス）／**波多剛広**（芝浦工業大学大学院）

チェン＋カイ案

藤井案

チェン＋ガオ案

殿前案

内藤廣（審査委員長）

審査委員長を山本理顕さんから引き継いだのが2016年，6年務めたので今回で卒業させていただきます．毎回，海外からも含めた多数の若者たちの自由な発想に触れ，とてもよい刺激になりました．

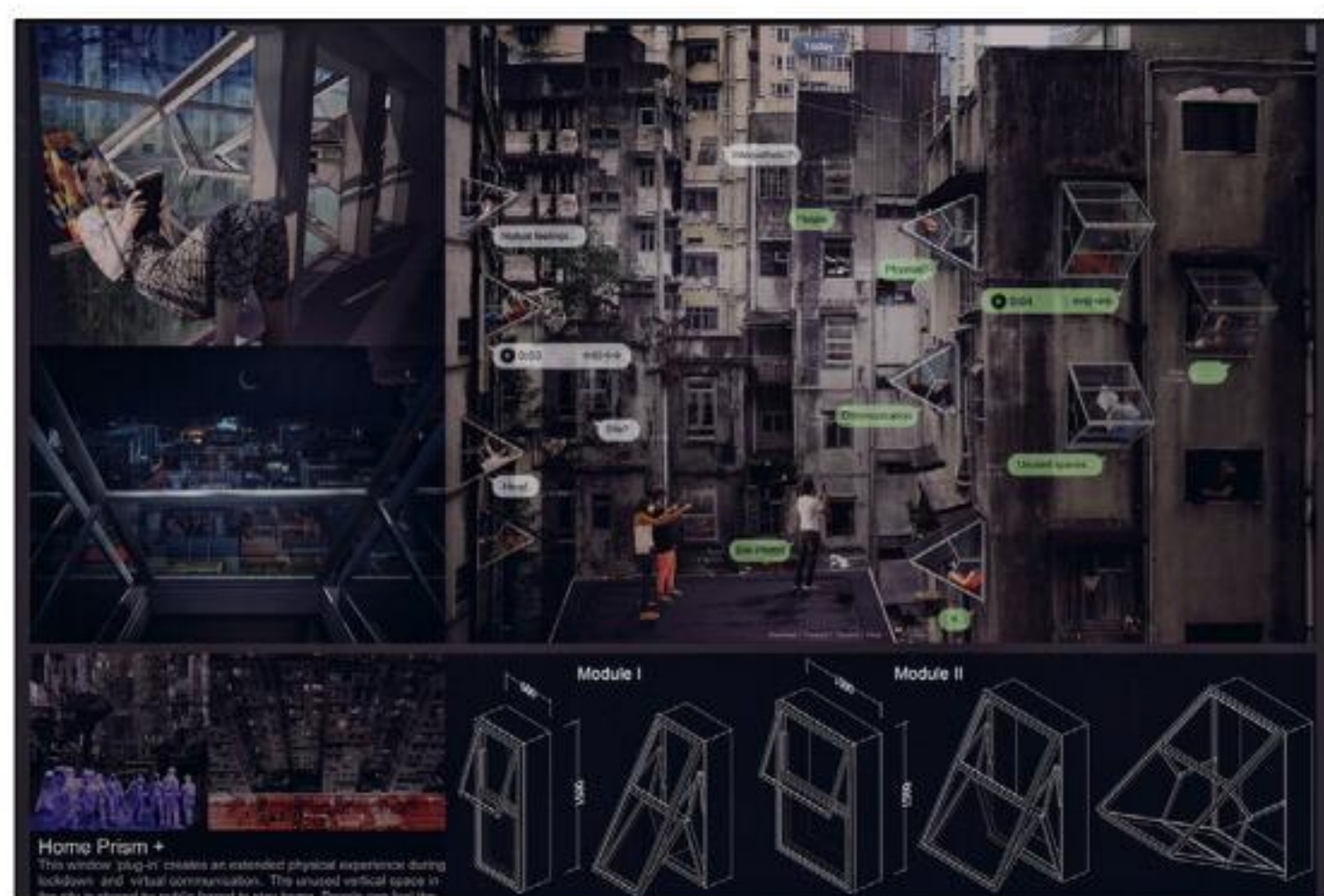
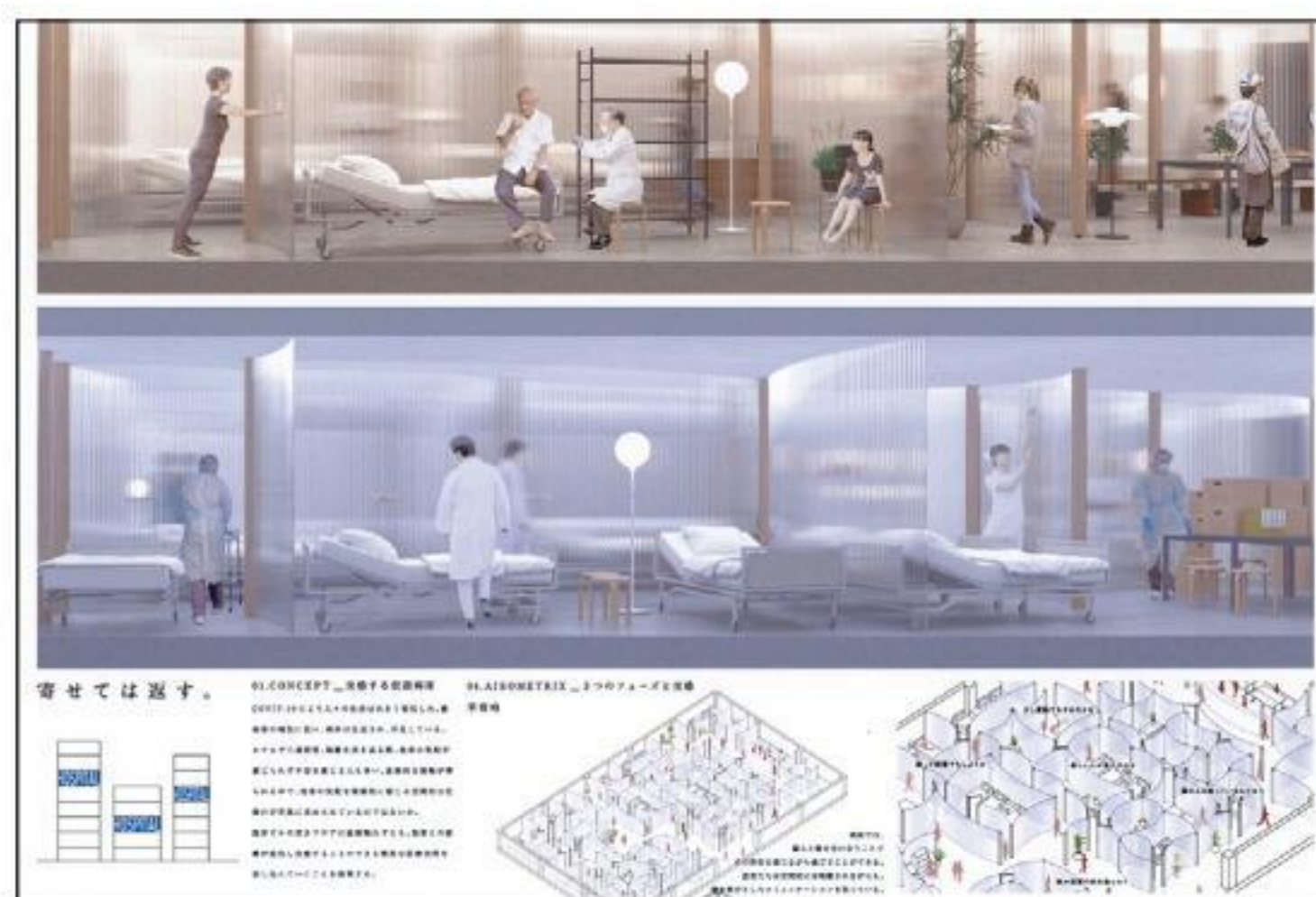
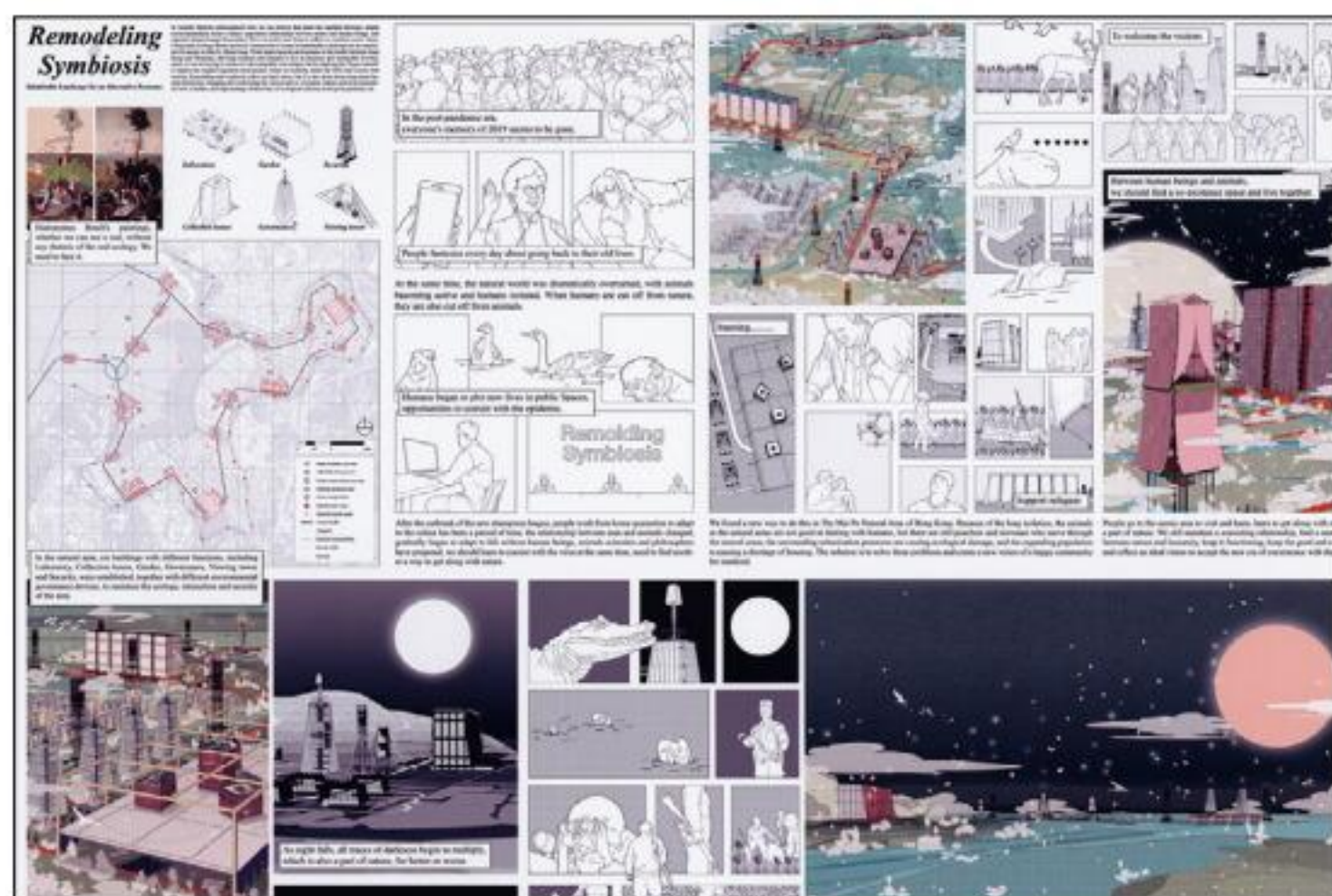
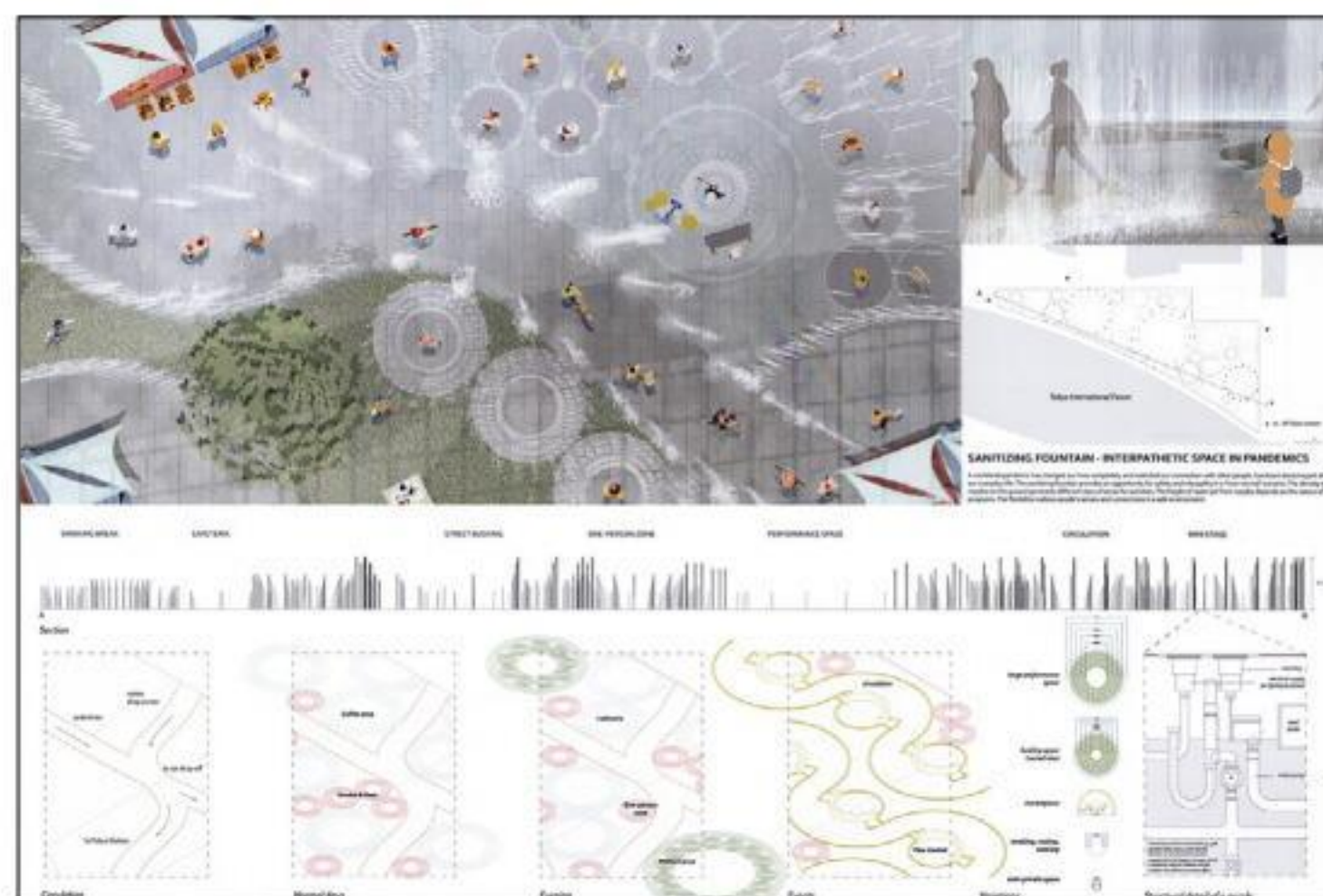
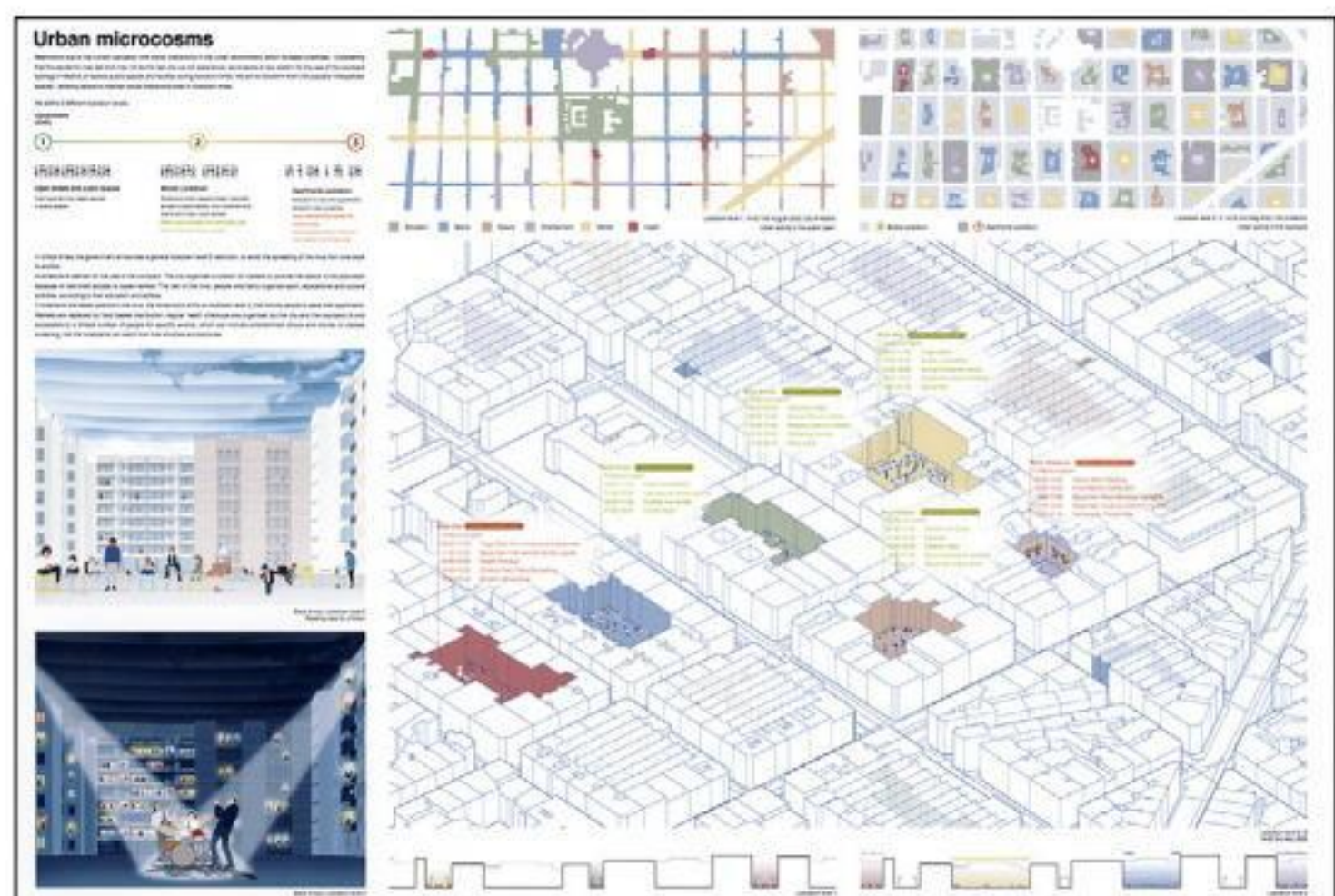
数年前，香港が騒然とし始めていた頃，何点か香港の若者からの提案があり，胸に迫る思いがしました．社会問題を提起する内容でしたが，おそらく彼らは身を賭して案を送ってきてくれたのだと思います．受賞して公表されてもよいのか，とこちらが心配になりました．表現というのは，必ずしも体制側に波風の立たない範囲で納まるものではないと思いました．若者から勇気をもらったのを覚えています．

毎回テーマは審査委員で議論して決めるのですが，今回のテーマは「交感する空間」．ひと筋縄ではいかない内容ですが，今現在，求められていることです．

最優秀になったケー・チャンさんは，米国在住の建築家です．細密に描かれたパネルの出来映えが凄かった．内容も日本文化のハレの世界で人が関わり合う様をよく捉えていました．これは正面からの提案なのかキッチュな批評なのか微妙なところがありましたが，いずれにせよ提案する当人が高いレベルで楽しんでいる様が感じられて好感を持ちました．動画によるプレゼンテーションも見事で，そのスピード感に圧倒されました．最後にこの人に出会えてよかった，この案に出会えてよかった，と思えるようなレベルの高い案でした．

優秀賞のシー案は，窪みの文様が美しかった．同じく優秀賞のロギナ＋イヴァンカン案は，身体と感覚とが微妙に入り交じった不思議な提案でした．ユージーン案は，均質なアパートとの対比が面白かった．中村案は，人と人との交感ではなくて，人とクジラの交感という視点は面白かった．熊案は，床が動くという提案は見たことがない．新美＋除村＋北林案は，サーバーのブロックを積み上げてそれを登るという斬新な提案でした．

審査委員長をしていても，自分の思ったものが最優秀になったことは数回しかありません．今回はわたしのいち押しが最優秀になり，よい終わり方ができました．

最後に，このような若い世代の登竜門となるような催しを多年にわたってサポートしていただいたセントラル硝子に，審査委員を代表して御礼を申し上げたいと思います．ありがとうございました．

レウン案

吉田＋米山＋米澤案

リャン＋タン案

キャサリン＋シャナ＋サイラス＋レウン案

ブランドリン＋オクムラ案

波多案

巻幡良忠（セントラル硝子常務執行役員）

私どもの主催するこの「セントラル硝子国際建築設計競技」も今回で第56回を迎えました．コロナ禍により1年遅れで開催された東京2020オリンピック・パラリンピックは，ほとんどの会場が無観客になる等，過去に例を見ない祭典となりました．そのような中で，たくさんの応募をいただき，また無事に審査を終えることができました．応募者の皆様はもちろん，審査委員の先生方，ご後援をいただいている新建築社様には，主催者として深く感謝申し上げます．

今回のテーマは「交感する空間」ですが，デジタル技術の発達により，VRの精度が高められた中でコロナ禍を体感したからこそ，人間が本来持っている感じる力を導くために，自分だけでなく相手を思いやることのできる，デジタルではできない，人間の感性に訴えかける空間を提案していただきました．

1次審査では，やはりコロナを意識した作品が多くありました．2次審査は，昨年同様にリモートによる審査委員のみでの審査とし，その模様をYouTubeでライブ配信しました．入賞された17作品は，それぞれが素晴らしい作品でした．

私どもは，「セントラル硝子国際建築設計競技」の伝統を守りながら，今後も世界中の若手建築家の皆様のご活躍や，明日の建築界の発展にさらなる貢献ができますよう努めてまいりますので，引き続き皆様方の御支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます．

なお，12年という長きにわたり当設計競技の審査委員を務めてくださいました審査委員長の内藤先生が今回で退任されることとなりました．ここに深く感謝の意を表し，また厚く御礼申し上げますと共に，今後の益々のご活躍とご健勝を祈念申し上げます．

a+u

ARCHITECTURE AND URBANISM
January, 2022 No. 616
建築と都市　2022年1月号

エー・アンド・ユー
2022年1月号
発売：2021年12月27日
定価：2,852円（税込）
発行：（株）エー・アンド・ユー

〒100-6017　東京都千代田区霞が関三丁目
2番5号　霞が関ビルディング17階
TEL：03-6205-4384
FAX：03-6205-4387
振替：00130-5-98119

Dwelling Studies
and Japan's Women Architects

Guest Editor: Momoyo Kaijima

Graduation thesis by Takako Kobayashi (1936). Image courtesy of Japan Women's University Naruse Memorial Hall.

第48回 日新工業建築設計競技 結果発表
NISSHIN KOGYO ARCHITECTURAL DESIGN COMPETITION 2021

テーマ：

人間の家
The Home of Man

第48回日新工業建築設計競技は，「人間の家」をテーマに，2021年10月1日に締め切られ，応募登録936件，応募作品は283点を数えた．10月20日に行われた審査会において，ここに紹介する11作品が選ばれた．表彰式は11月29日，東京都港区六本木の国際文化会館にて行われた．なお，入賞作品は，2022年2月14日（月）～17日（木），建築会館1階ギャラリー（東京都港区芝5-26-20）において展示される．

審査委員長

西沢立衛
（横浜国立大学大学院Y-GSA教授・SANAA／西沢立衛建築設計事務所代表）

審査委員

平田晃久（京都大学教授・平田晃久建築設計事務所）
吉村靖孝（早稲田大学教授・吉村靖孝建築設計事務所代表）
羽鳥達也（日建設計設計部門ダイレクター）
藤村龍至（東京藝術大学准教授・RFA主宰）
相臺志浩（日新工業代表取締役社長）

課題文

昨年からのコロナ禍に生きる私たちは，感染拡大防止策・感染予防が最優先となる社会の中で，行動にさまざまな制約がかけられています．
生活が管理される中で，その必要性は理解しつつも抑圧状態にあると言えるでしょう．特殊な状況下においては，多様性が削がれ，問われていたはずのさまざまな課題も影を潜めてしまう，忘却という名の淘汰が起きているようにも思います．
ル・コルビュジエが著した『人間の家』（1942年発表，F・ド・ピエールフウと共著．鹿島出版会，1977年）では，第二次世界大戦中の疎開先から，ナチスに破壊されたパリの街をいかに再建するかという意欲的な都市計画案が示されました．
私たちも，このコロナ禍において，その先にある本質的でポジティブな提案を考え，投げかけることが大切なのではないでしょうか．
そこで，今回のテーマを「人間の家」としました．
身の回りの設えや，街の理想的なあり方でもよいでしょうし，制度的な提案になるかもしれません．これまでの家の枠組みを大きく超えて，幅広く考えてみてください．みなさんの提案をお待ちしています．

1等（1点・賞金100万円｜税込）

遠藤 颯大・陳 宇澤・渡部 駿（横浜国立大学）

2等（1点・賞金50万円｜税込）

尾石 光・廖 小羽（千葉大学大学院）

3等（1点・賞金30万円｜税込）

田代 夢々（レミングハウス）・**百武 天**（フリーランス）

佳作（8点・賞金各10万円｜税込）

MEOR MOHD HARIS KAMARUL BAHRIN・
FARAH ALIZA BADARUDDIN（Mike Foxtrot Imaginarium）

竹中 美裕（小山工業高等専門学校）

ANDERSON WONG（Empt Studio）・YUPENG GAO・
YUTONG JIN（The University of Melbourne）

ANNE GROSS（Studio GROSS+PHD Student Tokyo Institute of Technology）・
SEBASTIAN GROSS（Studio GROSS）・
ASAMI TOGAWA（フリーランス）

山根 啓昂（広島工業大学）・岩尾 優輝（フリーランス）

小竹 隼人（芝浦工業大学大学院）

菊池 凌平（東京工業大学大学院）・杉山 翔太（信州大学大学院）・
小林 友哉（横浜国立大学大学院）

小田切 駿（フリーランス）・髙橋 まり（Studio Mark Randel）

主催 総合防水材料メーカー 日新工業株式会社　後援 株式会社新建築社

1等

遠藤 颯大・陳 宇澤・渡部 駿
（横浜国立大学）

生活はどんどん広くなった
世界も広くなった

家のカタチ

人間ってなんだろう
自ら考え、自らものを作り出す、
家ってなんだろう
人間の家は生活のカタチそのもの
色とりどりの人間がいるように
色とりどりの空間がある。
アリが自分で巣を広げていくように
ヒトも自分で家を広げていけたなら
一体どんな家のカタチが見られるのだろう。

カタドリ暮らし

N10234

人間のカタチ

彼は思った
大きな風呂が欲しいと
彼女は思った
ここに座りたいと
みんなそれぞれが思った

2等

尾石 光・廖 小羽（千葉大学大学院）

Sapiens Off-Grid city

オフグリッドな家・道・街での暮らし。

人の居方が様々に誘発されるような傾斜勾配によって生み出される生活様式。

不便さとは、人間にとって悪影響を及ぼすものではなく良い影響を及ぼすものである。機能優先ではない、地形環境優先な都市構造の提案。

The Home of Human = a × b

a:Hunter

人間とはハンティングし続ける動物である。人間は本来、地形環境に応答し、場を住みこなすことによって暮らしてきた。

b:Benefit of inconvenience

Grid : Convenience

Off - Grid : Inconvenience

切土（5-10m砂質土）の勾配
153.2% 1:0.65 56.89°

快適に座れる
33% 1:3 18.3°

ボルダリング
90°

寝転がる
20% 1:5 11°

住宅最適階段勾配
57.7-70% 1:1.73-1:1.42 30°-35°

盛り土（5-10m,砂質土）の勾配
50-55.6% 1:1.8 26°-29.1°

滑り台の降滑部の傾斜角度
99.9% 1:1 45°

外部階段の最大勾配
36.4% 1:2.7 20°

住宅の階段勾配
153.2% 1:0.65 56.89°

水平
0% 0°

一般斜路の最大勾配
12% 1:8.3 7°

芝生の水勾配
2% 1:50 1.1°

舗装面の水勾配
1-2% 1:100-1:50 0.6-1.1°

視覚的に平坦に見える最大勾配
3% 1:50 1.7°

安全に歩行できる最大勾配
8.7% 1:12 5°

グラウンドの推奨水勾配
0.5% 1:200 0.3°

N10095

3等

田代 夢々（レミングハウス）・百武 天（フリーランス）

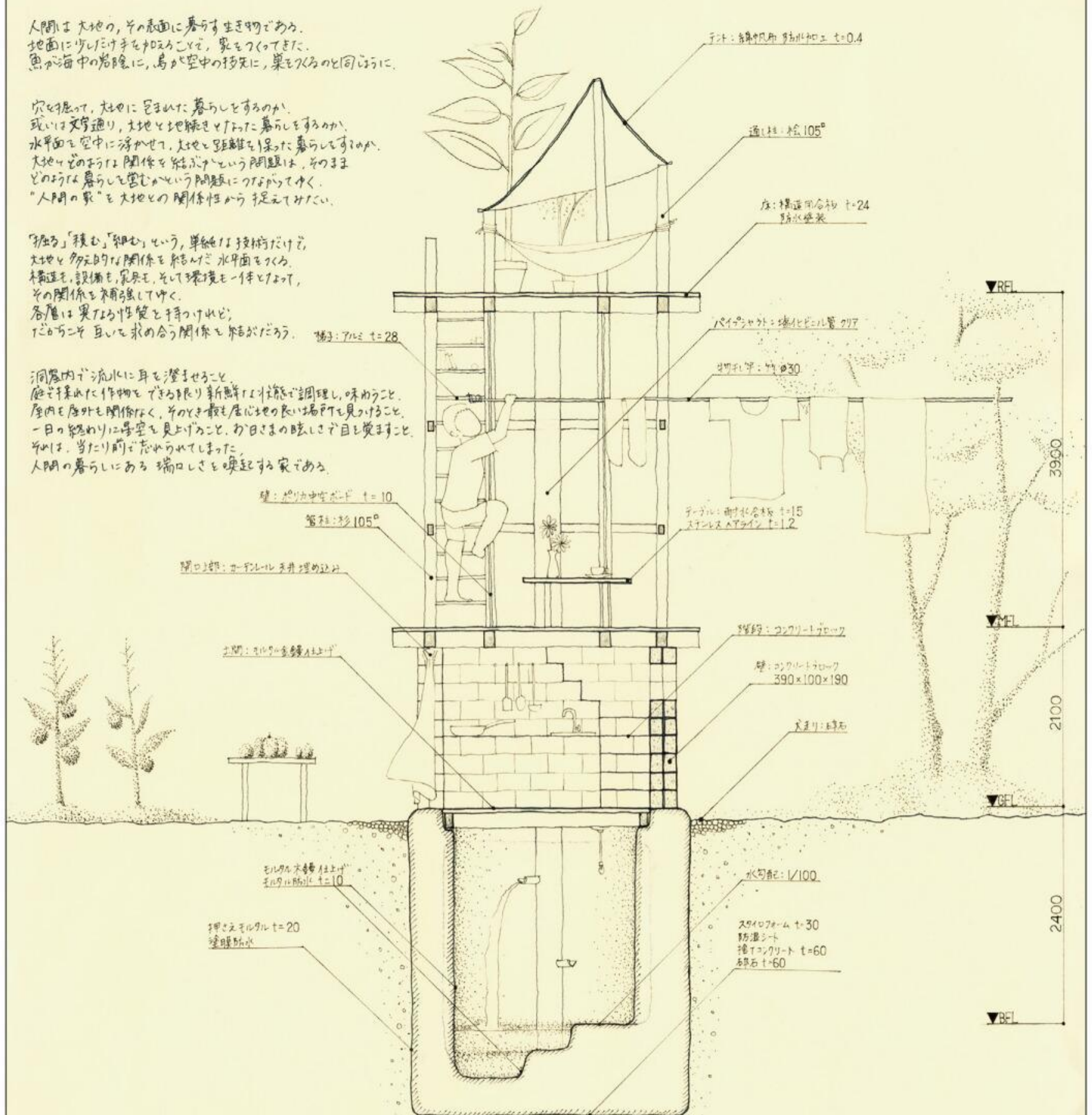
N010149

ホール，ツム，クム

人間は大地の，その表面に暮らす生き物である．
地面に少しだけ手を加えることで，家をつくってきた．
魚が海中の岩陰に，鳥が空中の枝先に，巣をつくるのと同じように．

穴を掘って，大地に包まれた暮らしをするのか．
或いは文字通り，大地と地続きとなった暮らしをするのか．
水平面を空中に浮かせて，大地と距離を保った暮らしをするのか．
大地とどのような関係を結ぶかという問題は，そのまま
どのような暮らしを営むかという問題につながってゆく．
"人間の家"を大地との関係性から捉えてみたい．

「掘る」「積む」「組む」という，単純な技術だけで，
大地と多元的な関係を結んだ水平面をつくる．
構造も，設備も，家具も，そして環境も一体となって，
その関係を補強してゆく．
各層は異なる性質を持つけれど，
だからこそ互いに求め合う関係を結ぶだろう．

洞窟内で流水に耳を澄ませること．
庭で採れた作物をできる限り新鮮な状態で調理し，味わうこと．
屋内も屋外も関係なく，そのとき最も居心地の良い場所を見つけること．
一日の終わりに星空を見上げること．お日さまの眩しさで目を覚ますこと．
それは，当たり前で忘れられてしまった．
人間の暮らしにある瑞々しさを喚起する家である．

テント：綿帆布 防水加工 t=0.4
通し柱：桧 105□
床：構造用合板 t=24
防水塗装
パイプシャフト：塩化ビニル管 クリア
梯子：アルミ t=28
物干し竿：竹 φ30
壁：ポリカ中空ボード t=10
管柱：杉 105□
テーブル：耐水合板 t=15
ステンレス ヘアライン t=1.2
開口上部：カーテンレール 天井埋め込み
土間：モルタル金鏝仕上げ
階段：コンクリートブロック
壁：コンクリートブロック
390×100×190
犬走り：砕石
モルタル木鏝仕上げ
モルタル防水 t=10
水勾配：1/100
押さえモルタル t=20
塗膜防水
スタイロフォーム t=30
防湿シート
捨てコンクリート t=60
砕石 t=60

▼RFL
▼MFL
▼GFL
▼BFL
3900
2100
2400

BF BASE FLOOR
3000

GF GROUND FLOOR
3000

MF MIDDLE FLOOR
3000

RF ROOF FLOOR
3000
3000

佳作

MEOR MOHD HARIS KAMARUL BAHRIN・
FARAH ALIZA BADARUDDIN（Mike Foxtrot Imaginarium）

DWELLING IN SCALE
Housing Domestic Memories

N20270

竹中 美裕（小山工業高等専門学校）

生きる建築

N10379

ANDERSON WONG（Empt Studio）・YUPENG GAO・
YUTONG JIN（The University of Melbourne）

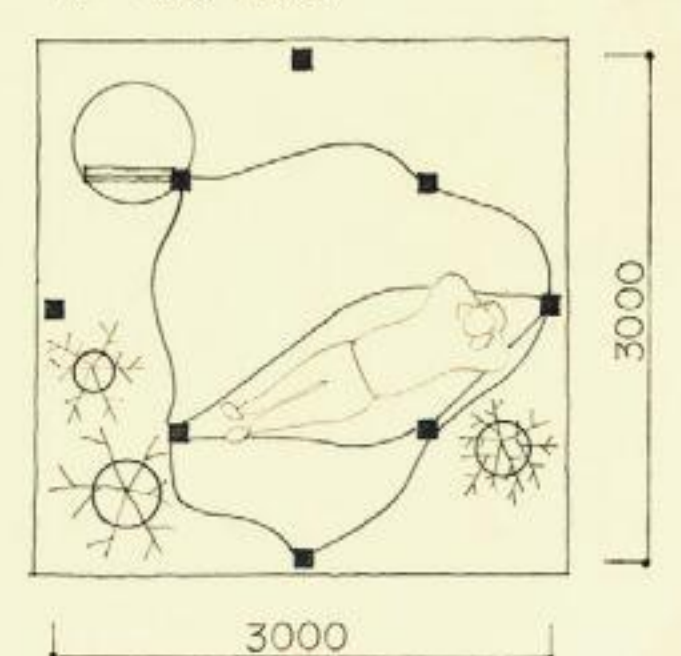
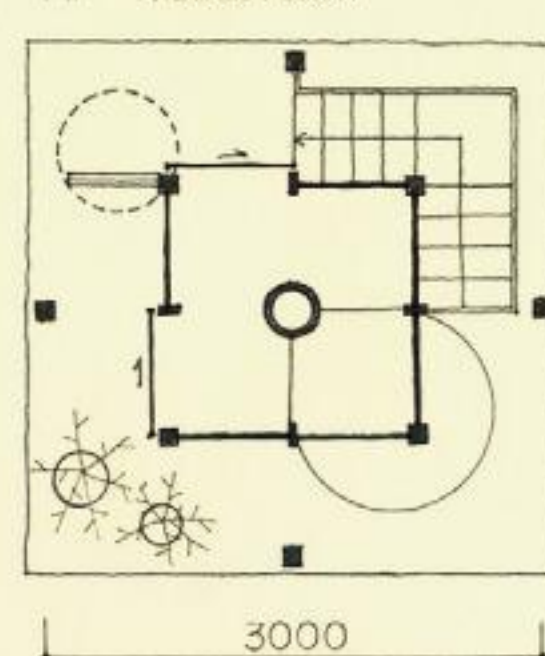
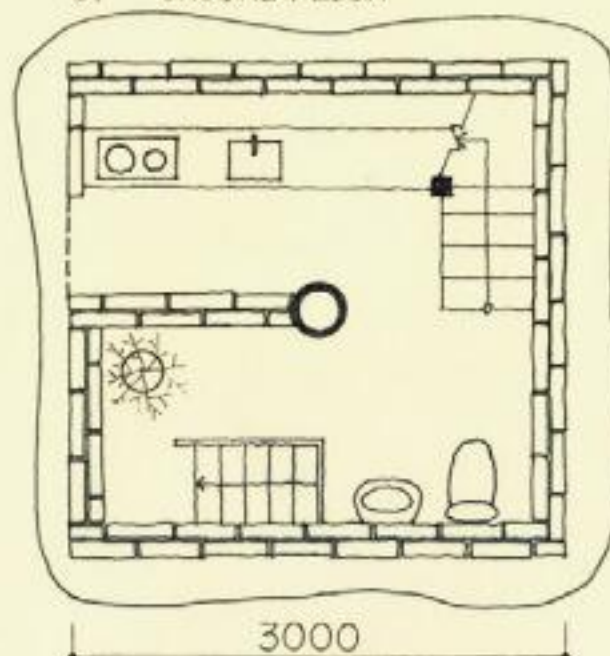
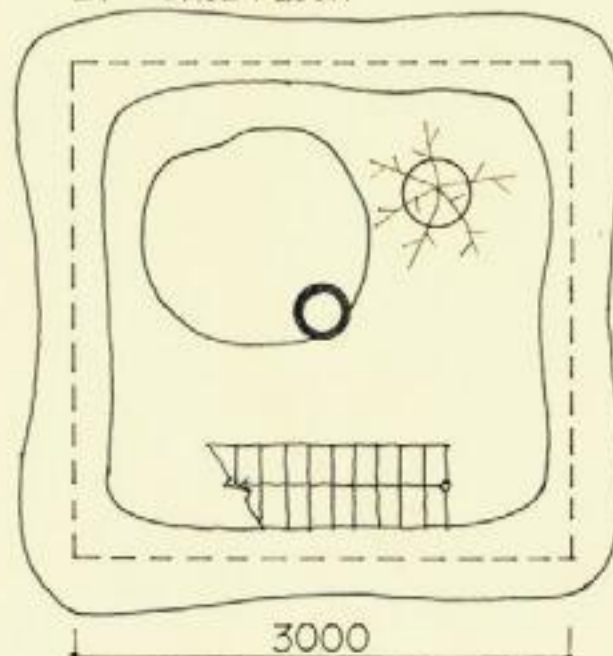
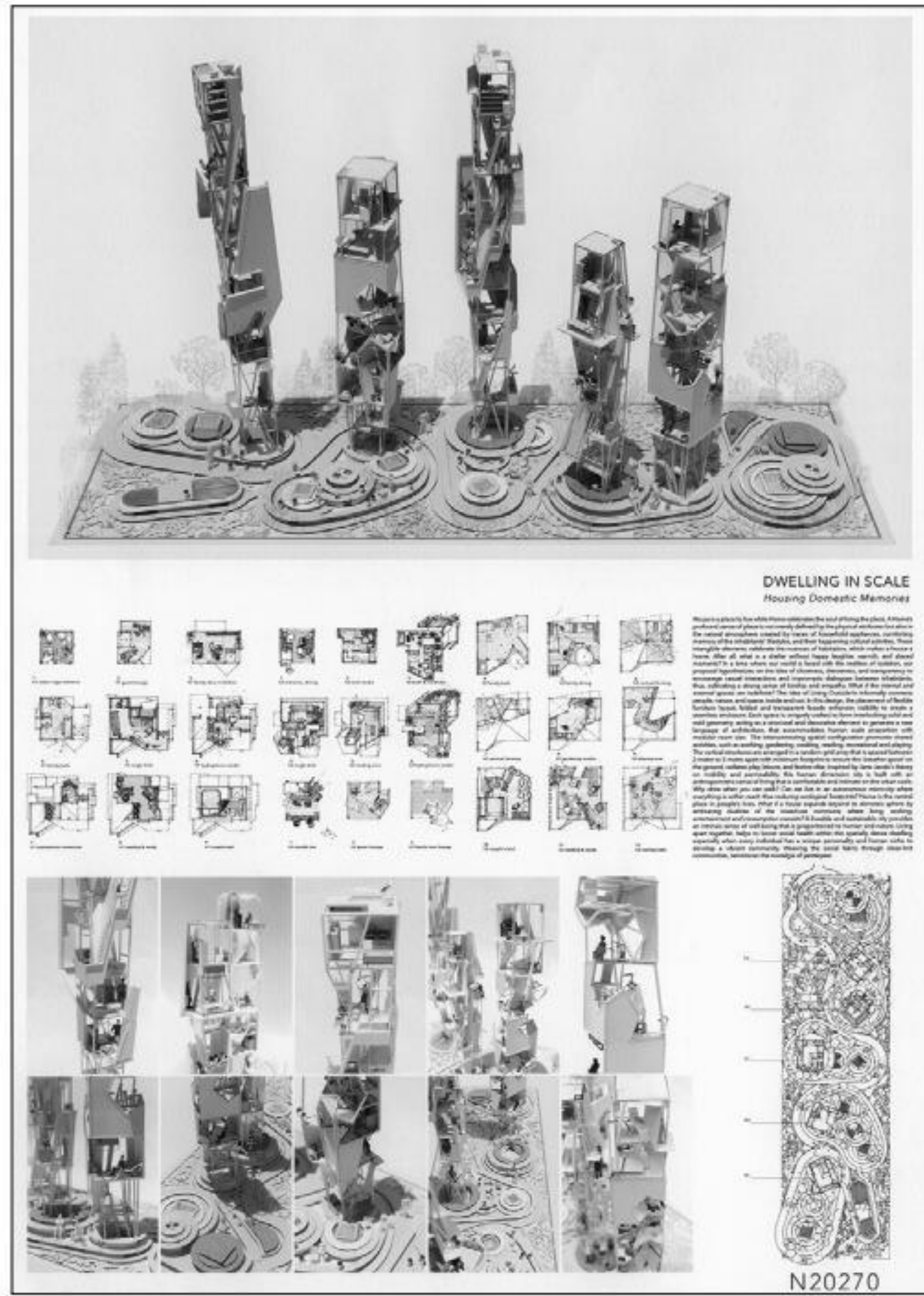
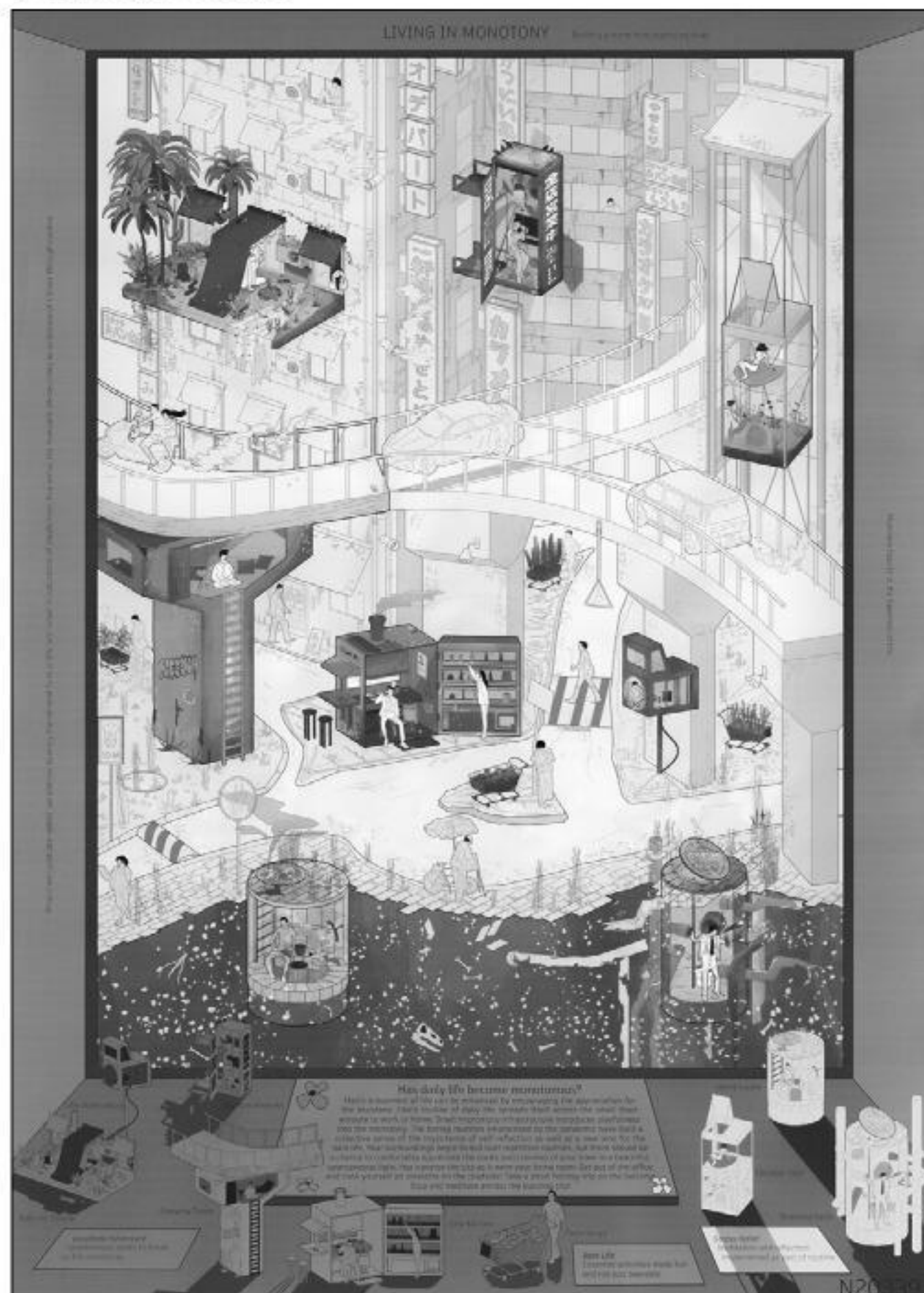
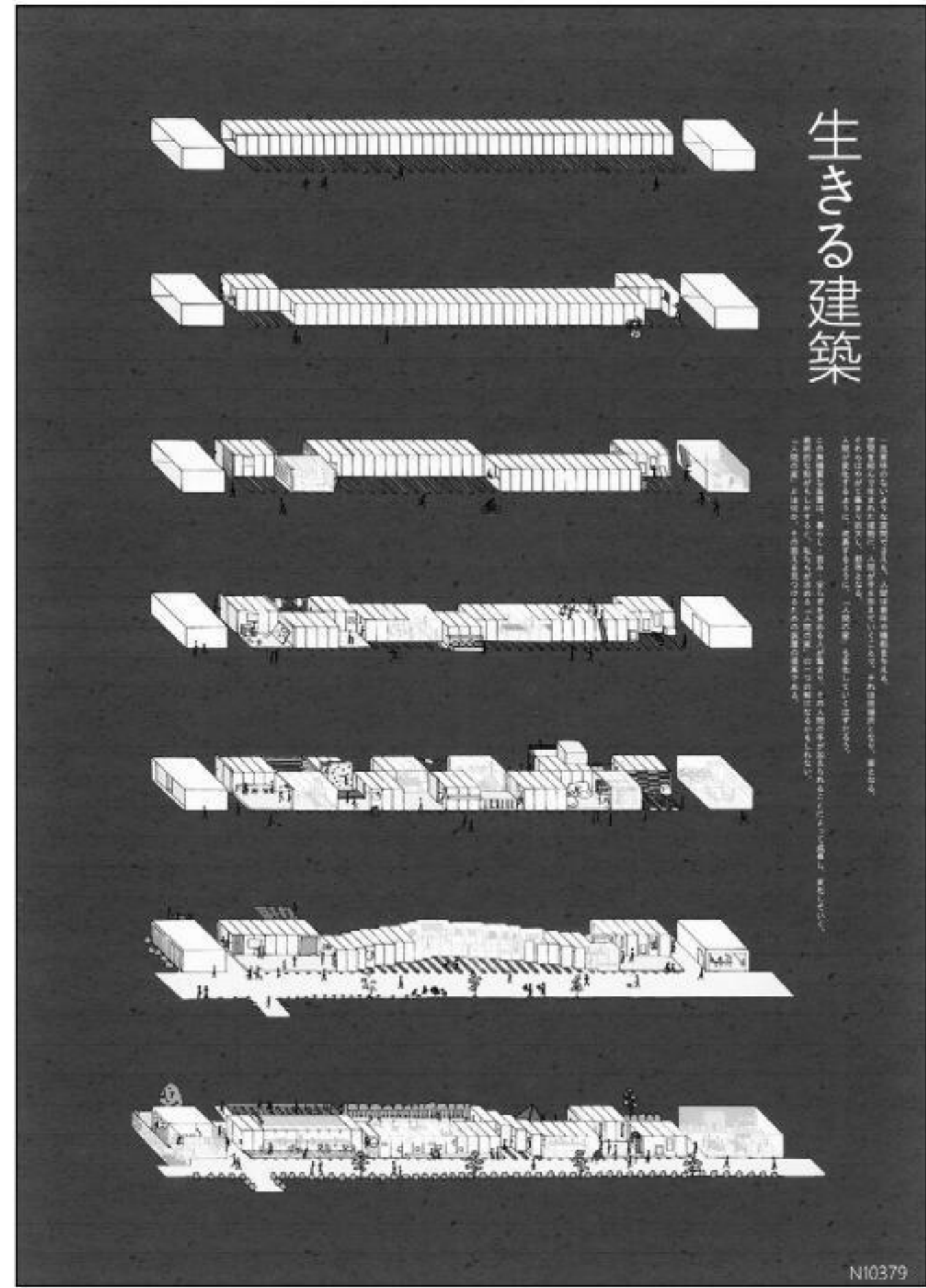
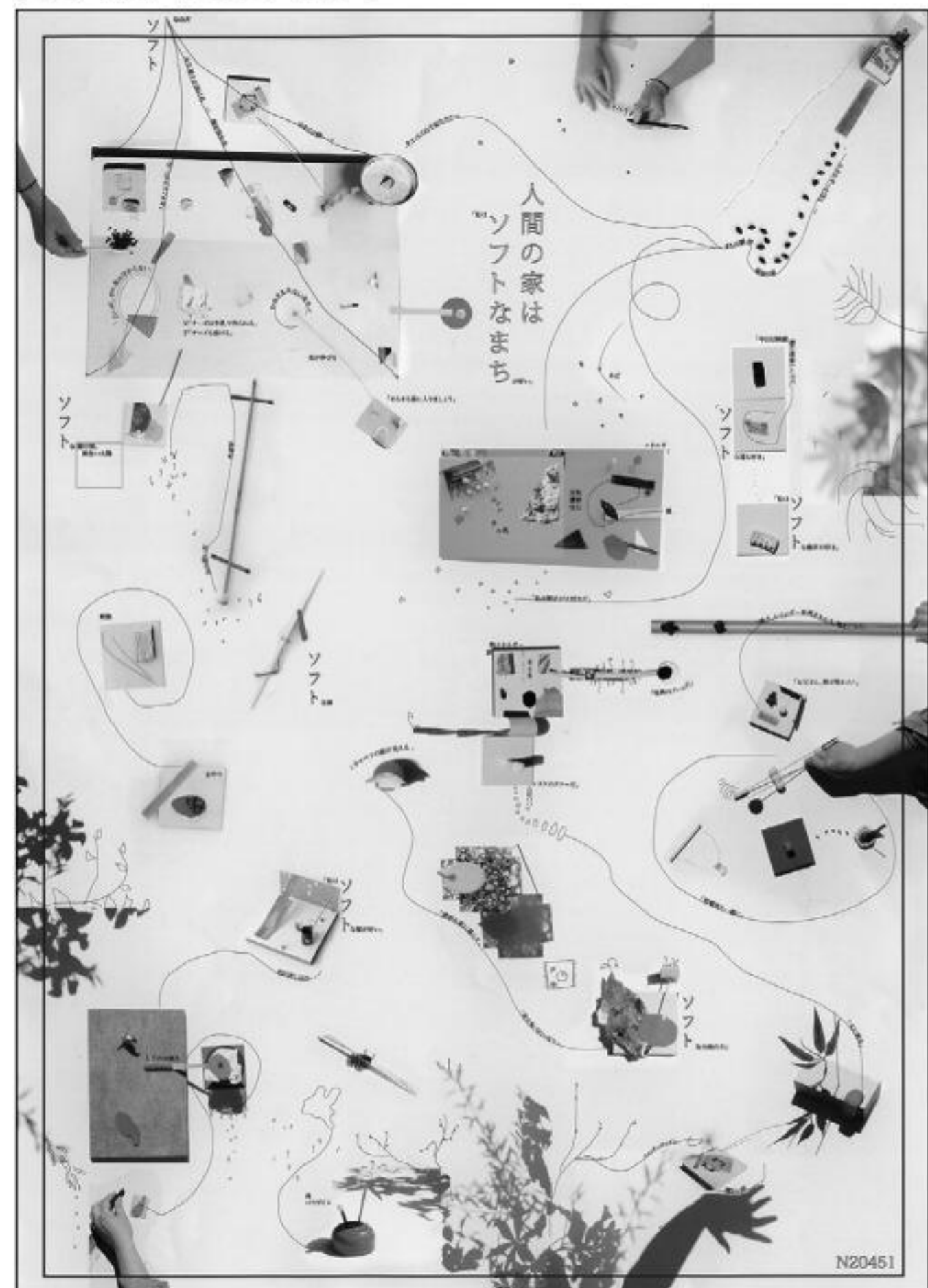
LIVING IN MONOTONY

Has daily life become monotonous?

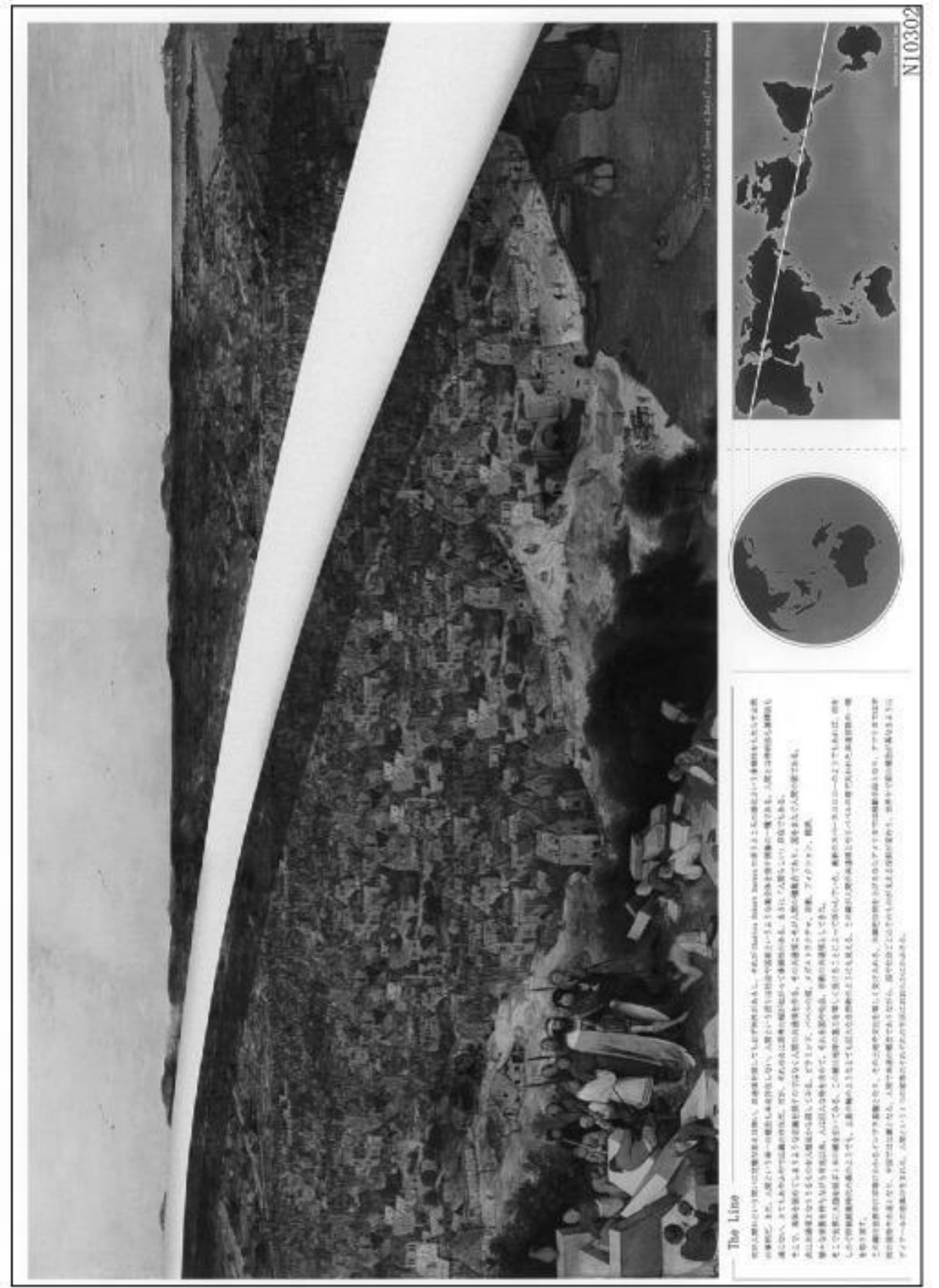
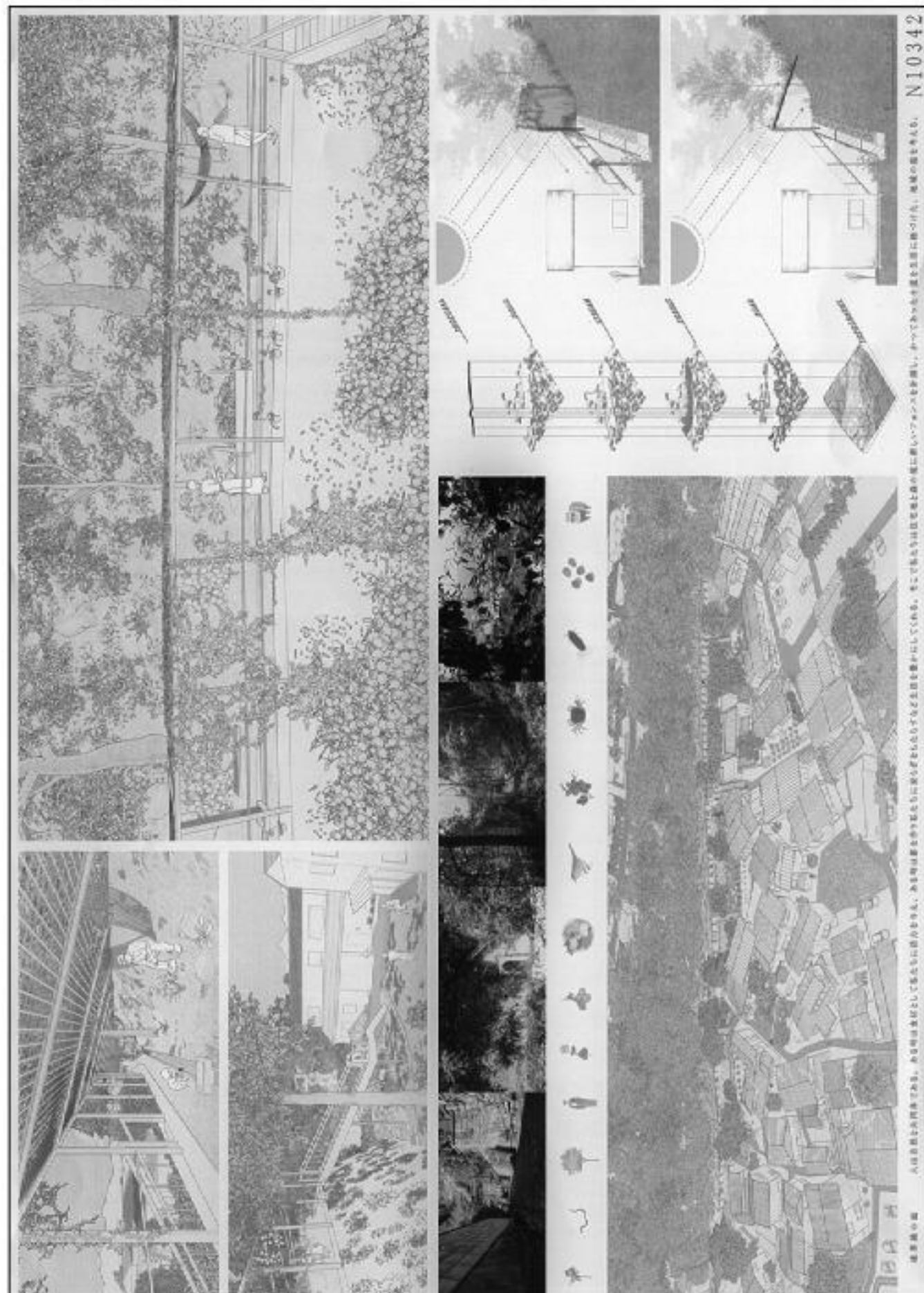
N20250

ANNE GROSS（Studio GROSS+PHD Student Tokyo Institute of Technology）・
SEBASTIAN GROSS（Studio GROSS）・
ASAMI TOGAWA（フリーランス）

人間の家はソフトなまち

N20451

佳作

山根 啓昂（広島工業大学）・**岩尾 優輝**（フリーランス）

小竹 隼人（芝浦工業大学大学院）

菊池 凌平（東京工業大学大学院）・**杉山 翔太**（信州大学大学院）・**小林 友哉**（横浜国立大学大学院）

小田切 駿（フリーランス）・**髙橋 まり**（Studio Mark Randel）

審査講評

西沢立衛

遠藤・陳・渡部案（1等）は，個々の人間の個性や活動に合わせて自由に形をかえる空間を提案した．中身の多様性が建築の自由になるというアイデアが評価されたが，「人間の家」というテーマについてもう少し人間の根源に迫るような考えがほしかったとも思う．**尾石・廖案**（2等）は，人間に厳しい自然地形を「人間の家」とみなす提案で，自然と人間の関係を明るく描いた．**田代・百武案**（3等）も同じように自然と人間の関係を問い直す提案で，大地と空，地下という地球の三要素を感じながら暮らす最小限住居を，手描きで表現した．寸法的にちょっと変な気がする．**BAHRIN・BADARUDDIN案**（佳作）は，塔状住居の提案で，上にいくに従い平面を変えていくその立体性が高く評価された．**竹中案**（佳作）は，無機質に並ぶ無味乾燥なボックスが，人間の働きかけによって多様性を帯びていく案で，物と人間の愛情がシンプルな形で示された．**WONG・GAO・JIN案**（佳作）は，自分が住む街を家の延長とみなして，都市空間のさまざまな余白で暮らしを楽しむ案で，不思議なドローイングだった．**A.GROSS・S.GROSS・TOGAWA案**（佳作）は，自然と家の繋がりを示す提案で，難解だったが，ドローイング全体に広がるのびやかな暮らしの快適性が評価された．**山根・岩尾案**（佳作）は，心の中と物的建築を合体させようとする提案で，内向的な雰囲気が多少気になった．**小竹案**（佳作）は，地球を一周する円環が地球人全員の共有財産となるというもので，その単純さと思い切りのよさが評価された．**菊池・杉山・小林案**（佳作）は，人間の村と森の境界線が住まいになるという提案で，自然と人工の両方を行き来する家の提案だった．家というよりも，フェンスのような装置が形を変えて人間の拠り所となる，という案で，ひとりの家というよりは共同体の誰もが使える家の提案かもしれない．ドローイングを含むプレゼンテーションの静けさ，繊細さが評価された．**小田切・髙橋案**（佳作）は，雪渓を参照した造形が評価された．

平田晃久

今年のテーマは例年にも増して普遍的である．いかようにも解釈できる門戸の広いテーマで，多彩な作品の審査は楽しかった．ただ，個人的には「人間」についての深い思弁を喚起することを意図した作品が少ないようにも感じられた．1等の**遠藤・陳・渡部案**は，人間の行為がそのまま家のカタチになってしまう極限的建築を提示している．これは言わば「反省」しない人間とでもいうのだろうか，自らの行為を振り返り統御する建築的秩序化を全く志向しない人間の家である．その意味では鮮烈な建築批判である．しかし，いささかも自らを省みない人間たちをもはや「人間」というのだろうか，また，だとするならば，そもそもこれは建築批判足り得ているのだろうか？「外形」という建築の根本問題を，鮮やかなグラフィックでうっちゃりつつ，この作品はそんな終わることのない物思いへと，あっけらかんと誘う．その他，個人的に興味を覚えたのは，**BAHRIN・BADARUDDIN案**（佳作）の，単純な積層ではないユニークなタワーの造形．これは言わば，行為する人間に向けた有機的な場の連鎖と，省みる人間に向けたタワーという両極端の人間を接合した案だとも言える．また**WONG・GAO・JIN案**（佳作）の都市に寄生する極小空間のファンタジー，**菊池・杉山・小林案**（佳作）が提示する半ば打ち捨てられた風景を庭として再発見する視線なども興味深かった．
「剥き出しの生」だけが重要視されるかのような時代の中で，人間というものを確かな実感に基づいて，しかし注意深く考えることが，これからの建築にはことのほか重要である．今回の議論を通じて，そう実感した．

吉村靖孝

「人間の家」は，安易な手出しを拒む難しい問いかけだったかもしれない．今この時代にあり得るべき「人間の家」は，誰もが生命を謳歌できる豪奢な家というよりは，自分にとって本当に必要なモノやコトを改めて確認するささやかな場所に違いない，というところまでは共有できたようだが，それを建築的構想力でポジティブな未来へと反転するような案は多くなかった．そんな中，私が特に評価したのは，3等の**田代・百武案**である．人間の家は人間が自分でつくる家だというシンプルなメッセージから，かつてマルティン・ハイデガーがドイツの古語を引きながら「建てるとは，本来，住むこと」であると語ったことを思い出して共感した．ほかに，自分の内側から湧き出るかたちを3カ月間記録した**山根・岩尾案**（佳作），机の上の小さなモノたちを建築や都市へと拡張させる言葉が散りばめられた**A.GROSS・S.GROSS・TOGAWA案**（佳作）は，惜しくも佳作となったが，審査委員である私が続きを考えたくなるような仕掛けで，そこには継承を許容するある種の「かた」がある．「かた」があることで，単に個人的内面の外形化であることを超えて「人間の家」へと連なる普遍性の萌芽のようなものが感じられた．
難しい課題設定だったが，われわれがこのコロナ禍の2年間，改めて考えざるを得なかった「人間」と「家」の新しい関係が，応募者たちを通して描き出される貴重な機会になった．

羽鳥達也

今回は，これからの人間とは何か，現代において家とは何かが問われていたわけだが，これは少々の社会状況の変化ではびくともしない普遍的な問いでもある．一方，新型コロナウイルスに限らず，クーデター，環境問題など，さまざまな事象が社会や環境に対する認識を揺さぶっている．そうした社会状況を反映してか，今まで以上に多種多様な提案が集まった．
佳作の**小竹案**は，この輪や影が各地でどのように扱われるのかを示せていたら，もっと評価を得たかもしれない．人が壮大なものを求める性質を，人間の共通項と設定した視点は面白い．
2等の**尾石・廖案**は，近年話題の不便益を街のスケールで表現した提案だが，都合よくつくられたテーマパークのようにも見えてしまったところが惜しい．ただ地形と暮らしという大きなビジョンを，具体的且つ抽象的に表現しようと挑んだ点は高く評価したい．1等の**遠藤・陳・渡部案**は，断面と散文詩的な文章で想像させる手法は，道半ばという印象も受けたが，人の生活の雌型である空間から推察される人間像は，豊かでたくましい人間を想像させそうで，今回のテーマに豊かで前向きなイメージを与えた作品だと思った．このコンセプトを具体的な建築にできるか，今後試みてほしい．
結果から見れば，時事の情報に捉われず，思考が自由であることが問われるかたちになったと言える．問いにすら捉われることなく，提案すべきことは何かを考える自由さや鈍さは時に重要な投げかけをすることがある．不確実な時代と言われる状況において，鈍くあることは時代を跨いで存在する建築の重要な役割であると，審査を通じて再認識させられた．

藤村龍至

総じて人間の動物性に着目したゾーエー（むきだしの生）を支える「人間の巣」の提案が多く，動物の人間性を強調することでビオス（政治的な生）を扱う「動物の家」の提案が少なかったと感じた．
1等の**遠藤・陳・渡部案**は，アリの巣のような地下空間の断面図に点景が描かれ，文字通り「人間の巣」の提案である．資源を求めて国境の外に領土を求めようとした1930年代のナチス・ドイツのレーベンス・ラウム（生存空間）や1990年代から広まったエコロジカル・フットプリントの概念を思い浮かべれば，欲望に任せて無限に拡大しようとする帝国主義や人新世における資本主義の限界など，寓話的にも読むことができる．2等の**尾石・廖案**は，人間の動物化を助長する平滑なジャンクスペースが拡大する現代都市で，多様な傾斜面を持ち込むことによって人間性を取り戻す試みであると読めるのかもしれない．3等の**田代・百武案**は，掘る・積む・組むという還元的な操作によって人間と大地が関係性を取り戻すというストーリーであった．
そのなかで佳作の**竹中案**は，人間が集合して暮らし，互いにせめぎ合う中で家の形を見出していくというストーリーを通じて，同じく佳作の**小竹案**は地球全体を家に見立てる構想力を通じて，ビオス（政治的な生）を問題にしていると感じた．2案とも人間と動物を等価に扱うことなどを通じて「動物の家」としての側面も描いていれば，さらに響く提案となったのではないか．

URまちの暮らしコンペティション

テーマ　スターハウスの未来にある暮らし

審査委員長：木下庸子［工学院大学教授／設計組織ADH代表］
審査委員：高山明［演出家／東京藝術大学大学院映像研究科教授］　馬場未織［NPO法人南房総リパブリック代表理事］
田島則行［千葉工業大学創造工学部建築学科准教授／テレデザイン］　依田園子［東京都北区副区長］
新居田滝人［UR都市機構理事］

結果発表

登録有形文化財に登録され、旧赤羽台団地に保存することになったスターハウス。
今回は、特徴的なY字プランを持った歴史あるスターハウスをリノベーションし、新しく建て替わった周囲のヌーヴェル赤羽台団地との関わりや団地再生への提言も含め、これからの暮らし方の本質を探究する新しいアイデアや提案を求めた。
2021年8月30日に締め切り、応募総数は306点。1次審査を行い、最終審査プレゼンテーションに進む上位6点が決定した。
10月29日の公開最終審査は、上位6組がプレゼンテーション、質疑応答を行い、会場の様子をオンラインにて配信。最優秀賞1点（賞金100万円）、優秀賞2点（賞金各50万円）、佳作3点（賞金各20万円）、入選8点（賞金各10万円）が決定した。

主催：UR都市機構　共催：一般社団法人日本建築学会　後援：東京都北区

最優秀賞

大きなケヤキと囲い庭

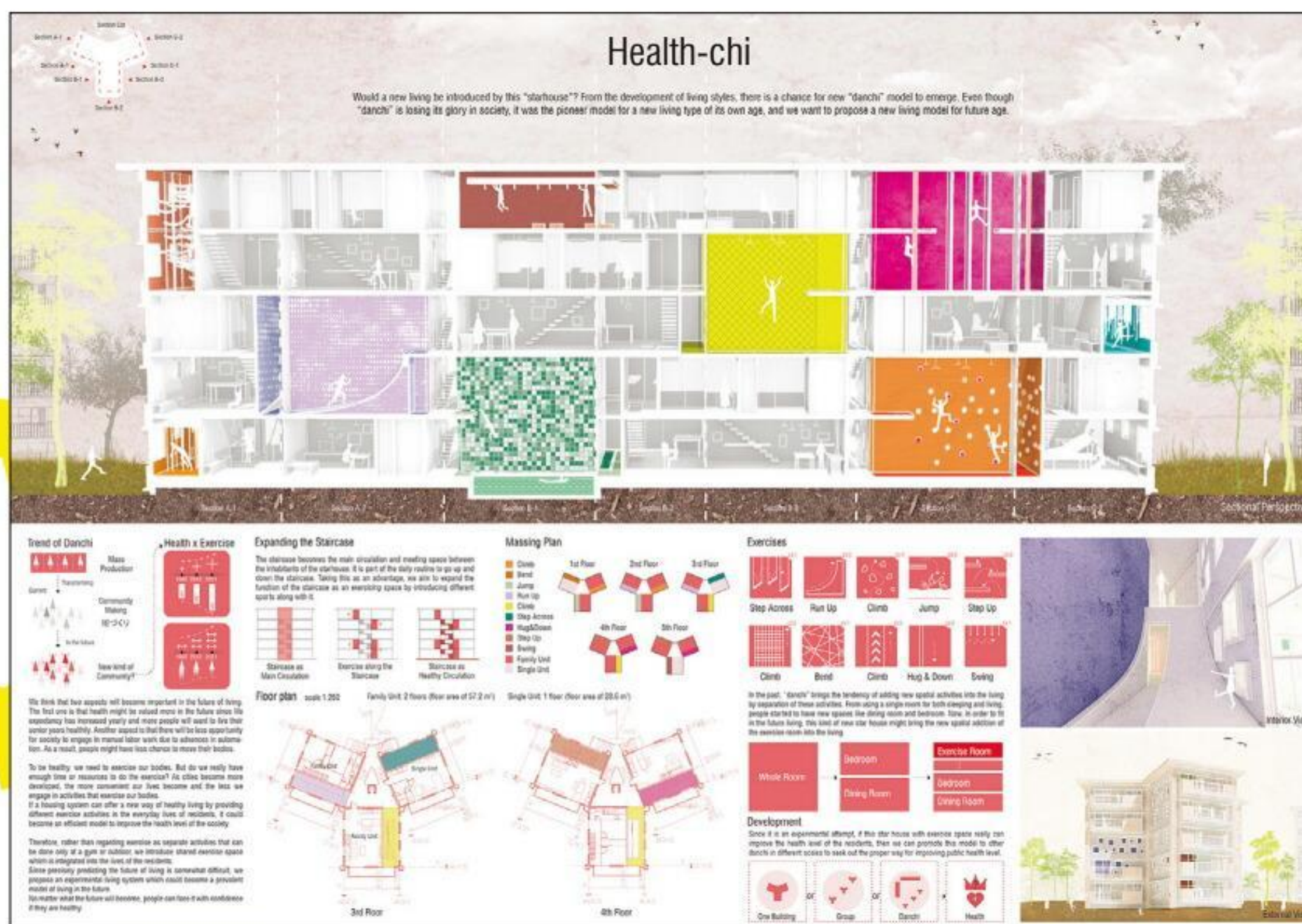
洲崎洋輔［洲崎洋輔建築設計事務所］　寺田彩瑛子［KAJIMA DESIGN］

優秀賞

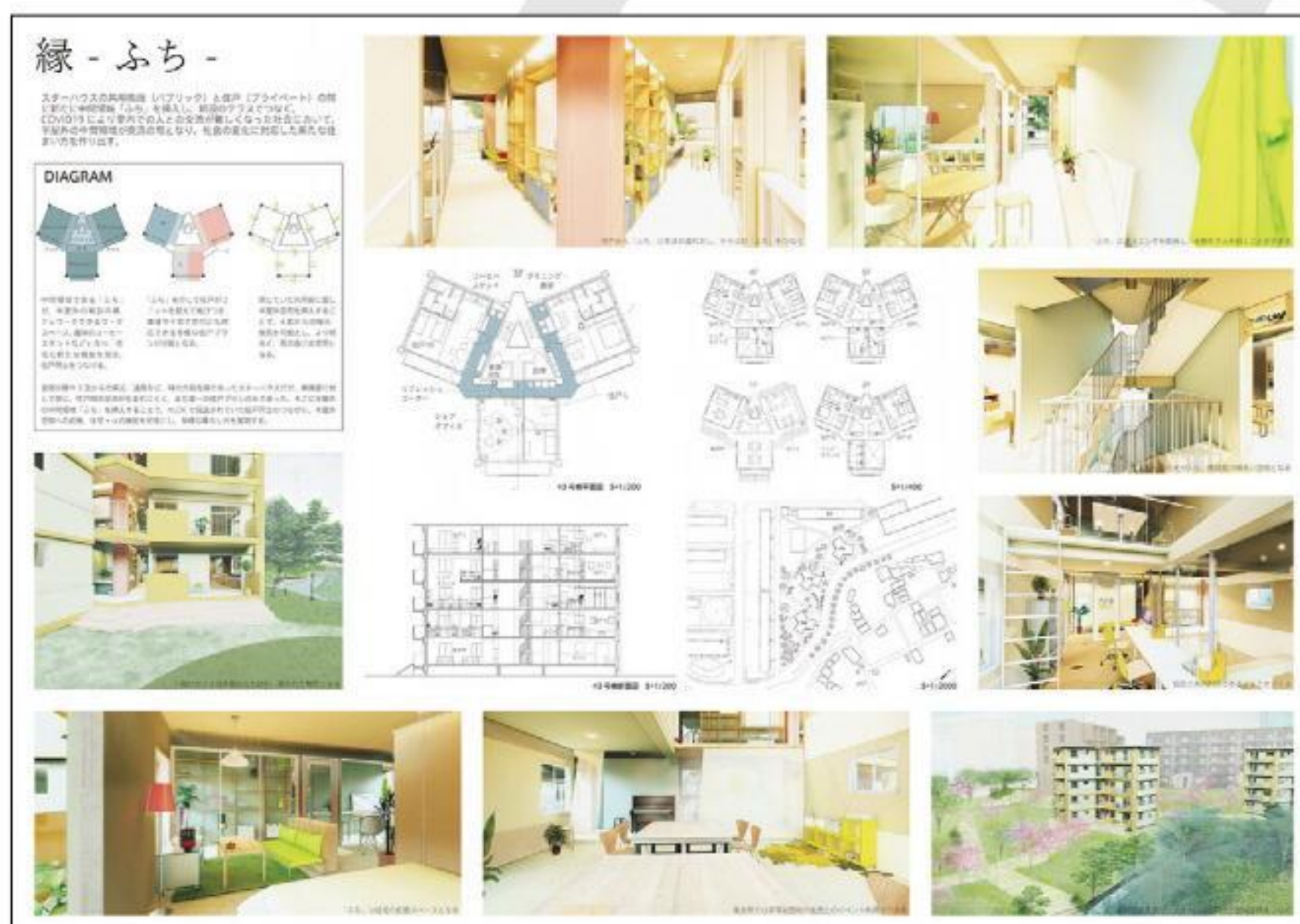
シアター 42

国枝歓［東京大学］

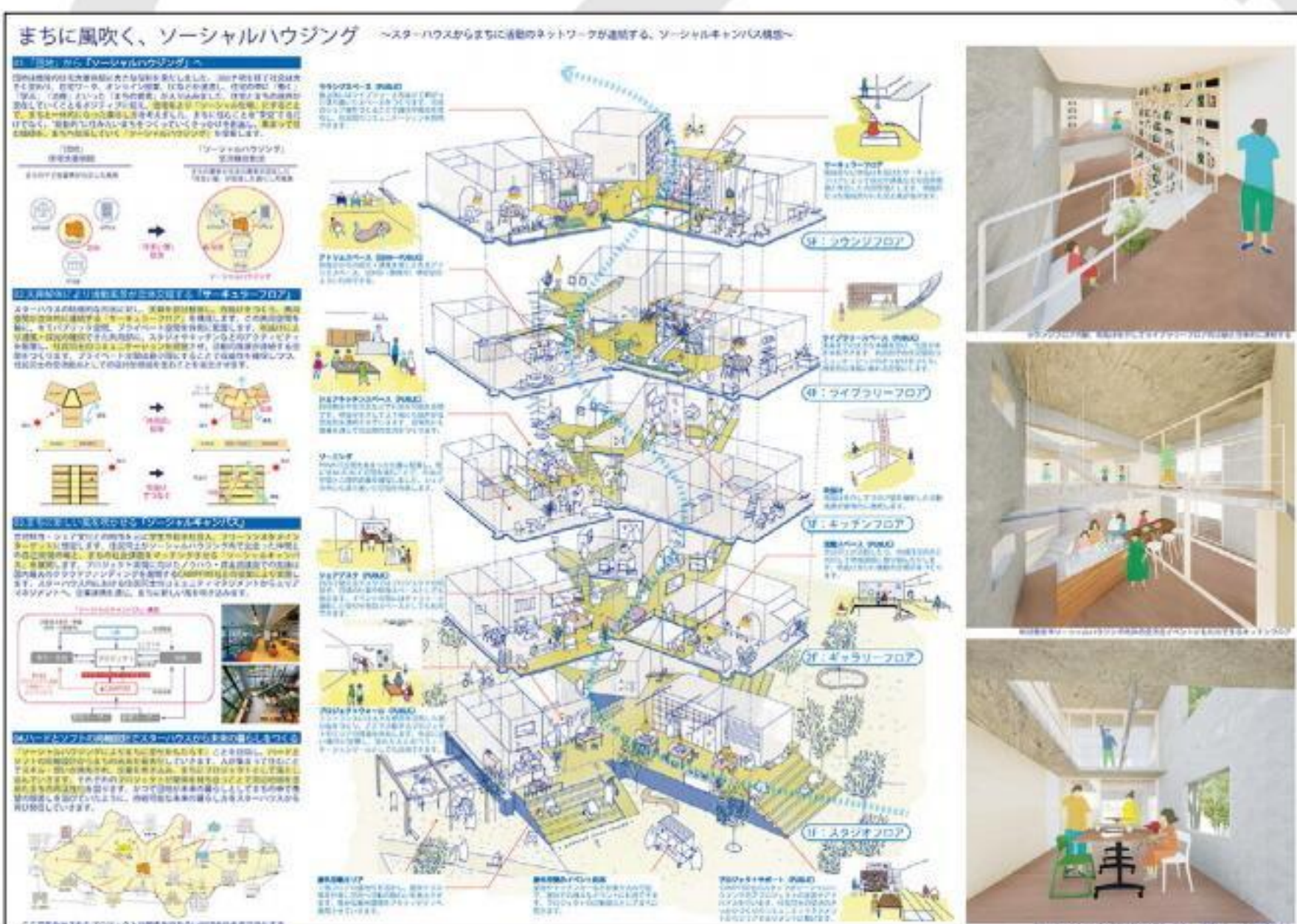
Health-chi

Pyaezone Aungsoe［フリーランス］　ZENG YUCHENG［フリーランス］
Lim Boonhau［MAMM Design］

佳作

縁 - ふち -

砂田頼佳［日建設計］
長根乃愛［鹿島建設］

まちに風吹く、ソーシャルハウジング

~スターハウスからまちに活動のネットワークが連続する、ソーシャルキャンパス構想~

中西海人［monaca］　門井慎之介［同］
守屋真一［同］　照井翔登［CAMPFIRE］
諏訪茜［同］

間貸して暮らす

小川直人［乃村工藝社］
廣川大樹

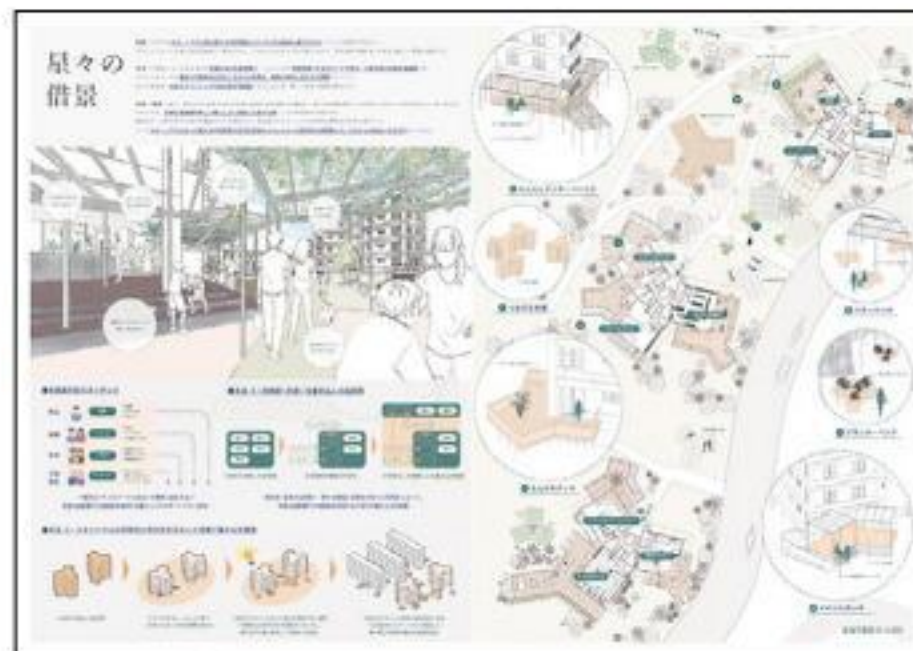
入選

44号棟202号室20mの散歩道
景色をみて、寄り道して、お茶をして、ごろ寝して、また歩く…お散歩暮らし。
伊藤秀昭［いとうもくざい］

コモンスターを中心とした求心力のある住まい
-スターハウスの未来にある暮らし-
佐藤不二男［Inter Dessin］

窓みちが渦巻くまち
-既存躯体の豊かな窓辺にみちを通し、赤羽台団地と繋げることでスターハウスをまち化する提案-
丸山航［竹中工務店］ 小林大介［同］

Insta House
-外に魅せる、中に満せる-
加藤慶一朗［フジタ］ 村田次朗［同］
宮本彩加［同］ 青木康大［同］

星々の借景
川田実可子［ツバメアーキテクツ］
小杉真一朗［フリーランス］

赤羽シェアリング プロジェクト
伊賀正隼［大阪市立大学大学院工学科］
松原育幹［千葉大学大学院園芸学研究科］
野瀬ひかり［同］

赤羽台と階段
滝川寛明［滝川寛明建築設計事務所］

Connecting the Star Houses
Tan Chee Sing［フリーランス］

最優秀賞［1点］100万円
・洲崎洋輔［洲崎洋輔建築設計事務所］ 寺田彩瑛子［KAJIMA DESIGN］

優秀賞［2点］50万円
・国枝歓［東京大学］
・Pyaezone Aungsoe［フリーランス］ ZENG YUCHENG［フリーランス］
Lim Boonhau［MAMM Design］

佳作［3点］20万円
・砂田頼佳［日建設計］ 長根乃愛［鹿島建設］
・中西海人［monaca］ 門井慎之介［同］ 守屋真一［同］
照井翔登［CAMPFIRE］ 諏訪茜［同］
・小川直人［乃村工藝社］ 廣川大樹

入選［8点］10万円
・伊藤秀昭［いとうもくざい］
・佐藤不二男［Inter Dessin］
・丸山航［竹中工務店］ 小林大介［同］
・加藤慶一朗［フジタ］ 村田次朗［同］ 宮本彩加［同］ 青木康大［同］
・川田実可子［ツバメアーキテクツ］ 小杉真一郎［フリーランス］
・伊賀正隼［大阪市立大学大学院工学科］ 松原育幹［千葉大学大学院園芸学研究科］
野瀬ひかり［同］
・滝川寛明［滝川寛明建築設計事務所］
・Tan Chee Sing［フリーランス］

写真撮影：わたなべスタジオ

結果の詳細は下記ホームページでご覧いただけます。
https://www.ur-net.go.jp/rd_portal/urbandesign/event/compe2021/saishusinsakekka.html

審査講評

審査委員長：木下庸子［工学院大学教授／設計組織ADH代表］

今回は300点を超える作品の応募があり、まさに社会が今、団地初の登録有形文化財に登録された赤羽台団地のスターハウスに多くの関心を寄せてくださっているということではないかと思います。応募作品を一望すると、スターハウスに対する提案がこんなにも多くの切り口から可能だということに、改めて気づかされました。そしてスターハウスの魅力も再認識させられました。いちばん多かった提案はやはり、住戸自体の構成に対する提案でしたが、その中でも平面、断面、二戸イチ、というように、豊富なバリエーションがあったことに驚きました。そのほかにも、コミュニティづくりの契機となる提案、団地再生の仕組みの提案、外構周りに関する提案といったように、数限りない可能性に、私自身も元気づけられました。このコンペを契機に、皆さまにはますます団地に興味を持っていただき、今後の団地再生を活気づけていただければ、と思っています。また、UR都市機構にはこのコンペがスターハウスが末長く健全に生き続けられるためのプラットフォームのような場となることをご検討いただけると、関わった一員としてうれしく思います。

審査委員：高山明［演出家／東京藝術大学大学院映像研究科教授］

赤羽台のスターハウスという象徴的な団地で、何か新しい試みを提案するということで、人がどのように「住まう」かというライフスタイルを根本から問い直すプランを期待していました。
応募案には建築の設計を超えて、誰がどのように使うかというオペレーションを含めた提案も多く、審査はとても楽しかったです。中でも、優秀賞に選ばれた2案は刺激になりました。「Health-chi」は人を健康にするための団地をつくるというプランで、建築は生活の器であり健康を改善することができる、という考えをユーモラスに表現したアイデアには設計する楽しさ（よい意味での）を感じました。「シアター 42」は、「住まうこと」の影に隠れながら、実は表裏一体の振る舞いとしてある「演技」に注目するプランで、「住まうこと」を異化している点が素晴らしいと思いました。住まい方が変わってきている現代において、団地から新たなモデルを提案するという魅力的なコンペでした。

審査委員：馬場未織［NPO法人南房総リパブリック代表理事］

非常に力作揃いで、こうありたい未来を自由に描き抜いた作品が多く、気合いを入れて審査させていただきました。
社会課題への解決案や風景の提案、哲学的示唆のある案など多様性に富み、スターハウスのポテンシャルが一層浮き彫りになったように思います。
そして、団地という環境は、ここ今に至っては多様な価値を包摂できる贅沢なキャンバスになっていることに気がついた次第です。入選以上の案の中には、これも実現できたらいいはずだと思わせる案が数点あり、そうした知的財産を共有するいい機会になったと思います。
団地が他の集合住宅と異なるのは「あまねく人びとが、暮らしの選択可能性を持っている」ことを示せる存在であることです。だからこそ、そのアイデアを実現するところまで含んだ今回のコンペには大きな意義があったと感じています。

審査委員：田島則行［千葉工業大学創造工学部建築学科准教授／テレデザイン］

今後の団地の再生を考える上で、有意義なコンペとなりました。応募総数が多いだけでなく、プロの方々からも本当に多くの応募を頂き、非常にレベルの高い戦いとなりました。審査の過程では上位作品を選ぶのがとても難しく、どの案も見れば見るほどよく考えられていて、入選しなかった作品にも十分に高いクオリティのものが数多くありました。こんなにも沢山のエネルギーをかけて沢山の人たちが応募いただき、本当にありがとうございました。どれも、独自の視点からスターハウスをよく読み解き、使い方や間取り、建築の考え方を工夫して具体的な提案に仕上げられていました。特に、かつての団地の欠点であったパブリック／プライベートの分断を解消し、住戸単位の区分けを突き抜けるようなセミパブリックな空間やフレキシビリティを導入することで、新しい団地の公共性を示唆する案は見応えがありました。結果としては、さまざまなタイプの案の中から、それぞれ力強さと明快さが際立った作品が最優秀賞、優秀賞になったと思います。近年見てきた中でもクオリティの高さが光ったコンペで、審査に参加できたことを光栄に思いました。

審査委員：依田園子［東京都北区副区長］

300を超えるという応募総数に、スターハウスの魅力の大きさを改めて感じました。どの提案もバリエーションに富んでいて見ごたえのある作品ばかりでした。未来を先取りしているか、ワクワクする提案か、の視点とともに、北区行政に携わる者として、地域コミュニティや赤羽台の活性化に繋がるか、などの視点も考慮し審査に臨みました。
その中で先見性、人びとの交流の活性化、スターハウスの特性を生かすこと、住む場所としての居心地のよさがよく考えられていた案が1次審査を通過したと思います。最優秀賞の「大きなケヤキと囲い庭」は、スターハウスでなければ実現できない点、居心地のよさや環境の視点が魅力でした。また、優秀賞の2作品は非常に斬新で、未来に向けて大きな可能性を秘めている作品と感じました。その他にもスターハウスを赤羽台のコミュニティの核と捉えた提案が多く、非常に嬉しく思いました。地域の魅力をますます高めていただいたコンペになりました。

審査委員：新居田滝人［UR都市機構理事］

応募作品は多様なアイデアが詰まった力作揃いで、すべて見るのに3日かかりました。3面開口の住戸などスターハウスの特徴を生かされた作品が多く、しっかりと目を通して審査させていただきました。応募要領で最優秀作品のデザイン・アイデアを実現すると記載していたので、最終審査の審議では案の実現性を加味するかどうかが議論になりました。ただ、デザイン・アイデアが実現できる範囲内に留まってしまった場合、そこで妥協すると本当の意味での最優秀作品ではなくなるという結論になり、そこから投票した結果で最終的な順位が決まりました。
最優秀賞の「大きなケヤキと囲い庭」は、ケヤキを囲んだ開放的なプランと、木材をふんだんに使っているという点で、とても気持ちのよい作品という印象を持ちました。
できるだけ原案に近いかたちで実現したいと思うので、楽しみにしていただければと思います。

アーバニスト　魅力ある都市の創生者たち
中島直人　一般社団法人アーバニスト 著

アーバニストとはだれか? それは都市計画者や建築家などの専門家だけでなく，都市の生活を楽しみ，都市に主体的・実践的に関わる人びとのことである. 生活者が都市づくりを行う点で共通する「まちづくり」は特定の地域で集団で活動するが，一方でアーバニストは個人の共感と連鎖により地域の境界を越えた範囲でネットワークを形成する. 経済不況，人口減少，超少子高齢化など日本社会の変化によるアーバニストの概念の変遷を辿った上で，現代の多様なアーバニストを紹介し，今後の可能性についても解く. (oa)

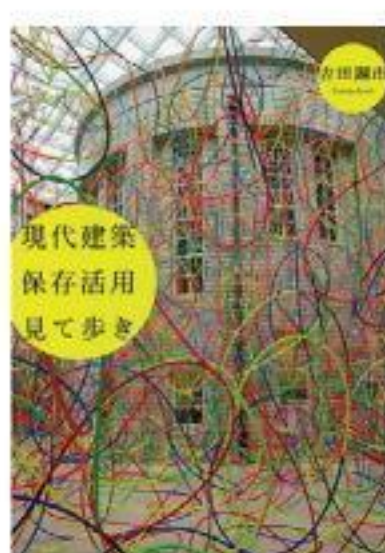
新書判／320頁
1,034円(税込)
筑摩書房

アイゼンマンの建築論　QUANTUMETRIC
山口隆 著

本書はピーター・アイゼンマンを研究してきた著者の博士論文を元に再編したもの. 9つのCHAPTERではアイゼンマンのプロジェクトで共通に見られる内部性と外部性に焦点を当て，ル・コルビュジエの継承やレム・コールハースとの対比を中心にアイゼンマンの建築理論の分析と主体と対象の構造的な関係を踏まえた著者の建築理論も展開していく. CONCLUSIONでは，アイゼンマンの建築概念にあるdiagram(新しい形を生み出す潜在的能力)の概念を紐解き，現代においての意味を探る. アイゼンマンの建築理論を丁寧にを読み解く1冊. (kk)

B5判／330頁
2,420円(税込)
総合資格学院

現代建築保存活用見て歩き
吉田鋼市 著

高度経済成長が終わり脱炭素，SDGsの動きや歴史的な街並みと建造物の観光化も加わり，歴史的な建物の保存活用が促されている. 建物を保存することには，経済性や耐震基準などの問題を解決する必要がある. 手を加える側は先の意匠にどのような敬意を払い新たなデザインを加えているか，その応答方法はさまざまである. 本著は京都市京セラ美術館，香川県庁舎東館などをはじめとした全国26の保存活用事例を，既存建物の建設経緯から保存活用に至までの流れを現在の活用方法と共にフルカラー写真で紹介する. (bt)

四六判／224頁
2,200円(税込)
王国社

変わり続ける!シブヤ系まちづくり
渋谷未来デザイン 編著

人を主役とし，まちづくりがカルチャーとなる「シブヤ系まちづくり」について，渋谷の社会課題の解決をデザインする産官学民プラットフォーム・渋谷未来デザインがまとめた1冊. 渋谷スクランブルスクエアの建設では，住民や専門家が参加する会議で設計過程を共有し，そこから生まれた議論を通してデザインが固まっていった. 渋谷の再開発に携わる建築家や行政職員の対談も掲載され，デザイン・コミュニティ・パブリックスペース・マネジメント・未来の視点から，現在進行形の再開発の内部を知ることができる. (nkt)

A5変型判／224頁
2,200円(税込)
工作舎

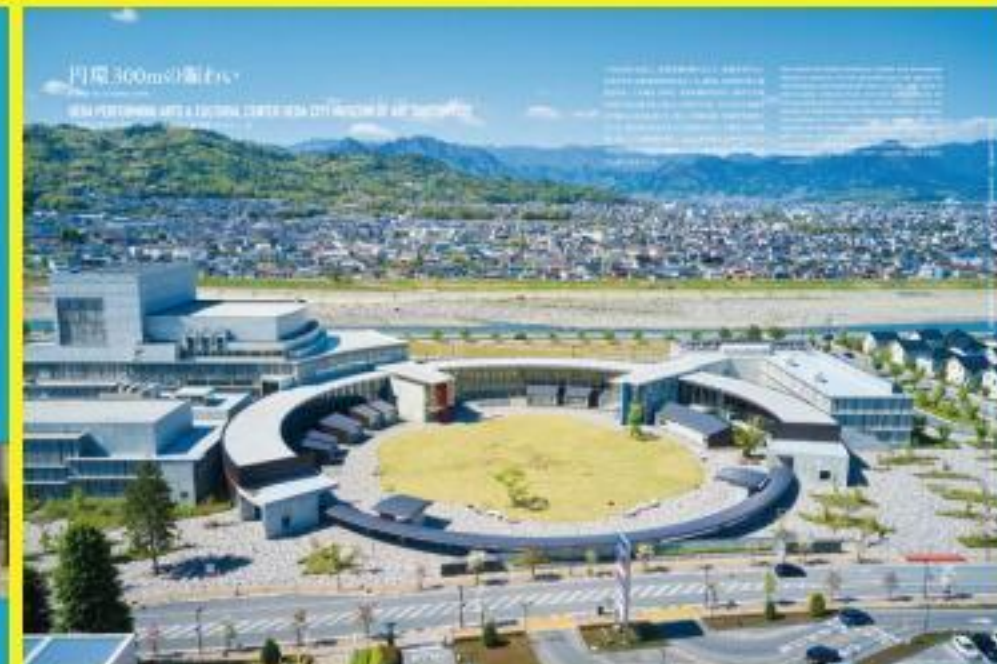
私たちはいつまで危険な場所に住み続けるのか
自然災害が突き付けるニッポンの超難問
木村駿　真鍋政彦　荒川尚美 著　日経アーキテクチュア 編

2016～20年に発生した水害による被害額は日本全国で約5.2兆円に上るなか，生命・財産をいかに守るのか. 著者は土地利用や住まい方の工夫で，災害への遭遇を回避する対策が重要と説く. 本書の前半では，2017年西日本豪雨をはじめ近年の水害や土砂災害の被害・メカニズム・影響を詳細にレポートしつつ，自然災害に関する基礎知識を解説. 後半は先進自治体の動きとして，都市計画や条例による危険地域の市街化抑制や建築規制の事例を紹介する. AI活用の調査・予測の最前線も記し，土地のリスクを踏まえた防災対策を分野横断的に示す. (fuu)

A5判／400頁
1,980円(税込)
日経BP

世界を一枚の紙の上に
歴史を変えたダイアグラムと主題地図の誕生
大田暁雄 著

19世紀初頭の探検科学者アレクサンダー・フォン・フンボルトから，第二次世界大戦中に活躍した社会運動家オットー・ノイラートに至るまでの150年間の科学的グラフィズムを集めた1冊. この150年間で生態系の概念が発生し，数値やテキストでは表すことが難しい「世界全体」を把握する必要が生まれた. ここで登場したダイアグラムや主題地図などの視覚的メディアに焦点を当て，描かれた背景や思考プロセスを解説する. ナポレオンのモスクワ遠征図，コレラ発生分布図，鉄道発展図など多種多様な図版により，絵で表すことの軌跡を辿ることができる. (ls)

B5判／272頁
4,950円(税込)
オーム社

第28回 空間デザイン・コンペティション

結果発表

課題
野生のガラス

審査委員長　乾 久美子（建築家／横浜国立大学大学院教授、乾久美子建築設計事務所 主宰）
審査委員　芝田 義治（建築家／久米設計 設計本部）
西澤 徹夫（建築家／西澤徹夫建築事務所 主宰）
岸本 暁（日本電気硝子 常務執行役員 コンシューマーガラス事業本部本部長）
コーディネーター　五十嵐 太郎（建築批評家／東北大学大学院教授）
（敬称略）

応募登録数　355件　応募作品数　258点

[最優秀賞] 1点 賞金100万円

今泉 菜麻　熊谷 友花　川本 純平
佐伯 雅子　真崎 広大　渡邉 香奈
石 捷倫　原田 脩平
株式会社JR東日本建築設計

[優秀賞] 1点 賞金30万円

鯉川 哲平　千葉大学大学院

[入　選] 8点 賞金各5万円

藤井 玄徳　富樫 由美　マーマル建築設計事務所

若杉 陸　武蔵野美術大学大学院

廣野 智史　中川 貴秀
Satavee Kijsanayotin
東京大学大学院

鈴木 悠　信州大学大学院

五条 萌　株式会社竹中工務店

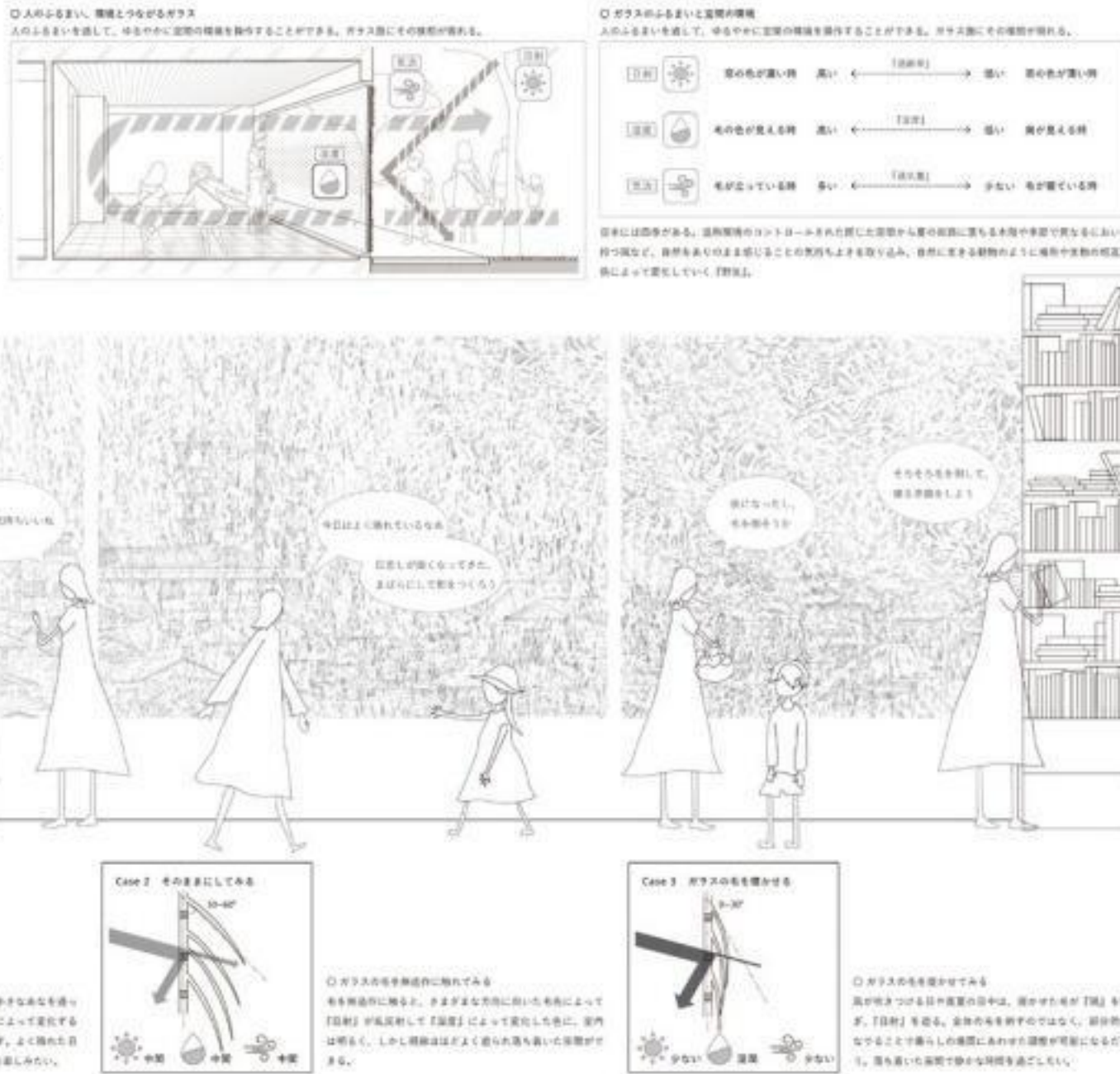
大石 隆誠　五洋建設株式会社

菊澤 拓馬　株式会社キノアーキテクツ

羅 悦慈　SUP Atelier

主催：日本電気硝子株式会社　共催：電気硝子建材株式会社　協賛：株式会社 新建築社

最優秀賞

ガラスのパレット
- 手で描く温熱環境 -

作品名
ガラスのパレット
– 手で描く温熱環境 –

今泉 菜麻
熊谷 友花
川本 純平
佐伯 雅子
真崎 広大
渡邉 香奈
石　捷倫
原田 脩平
株式会社JR東日本建築設計

優秀賞

硝子ふる島で

作品名
硝子ふる島で

鯉川 哲平
千葉大学大学院

2021年11月8日に、審査会が行われました。左から五十嵐氏、岸本氏、乾氏、西澤氏、芝田氏。

審査委員長

乾　久美子

建築家/横浜国立大学大学院教授、
乾久美子建築設計事務所 主宰

「野生のガラス」は多様な方向に解釈され、物質としての特性が野生的な振る舞いをする、鉱物へと戻っていく、動植物にとっての新しいタイプのハビタットを提供するなどのタイプが見られた。ひとつめのタイプも2種類あって、ガラスがドロドロと固化した様子を野生的だと見なすものが圧倒的に多い中、最優秀賞を獲得した「ガラスのパレット」は、グラスファイバーとフロー板硝子を組み合わせた新しいタイプのガラスを想定している。透明な毛皮のようなガラスが、人に時々触られながら、呼吸するように佇んでいる姿が描かれていた。

審査委員

芝田　義治

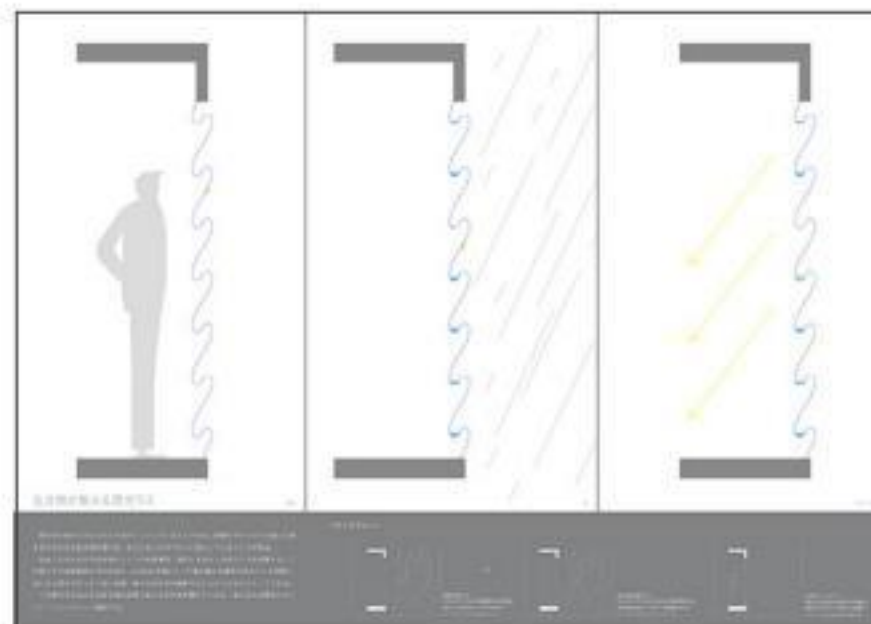
建築家/株式会社久米設計 設計本部

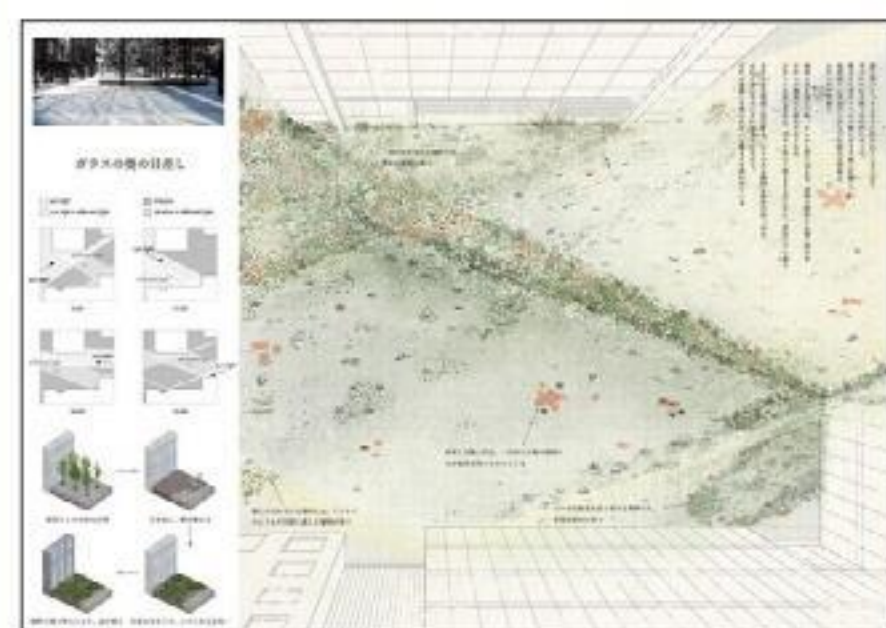
抽象的で意外性のある課題だったからか、よせられた作品の幅が広いと感じました。自分ならどう挑むかイメージしつつ、多くの力作に触れる中で、野生さはある程度手が加えられた環境に在ってこそその力(魅力)を発揮するのかもしれない、と改めて考えました。カオスとコスモスの関係と同様に。入賞作品は視点こそ違えども、そのバランスに秀でていたと思います。直面する地球規模の課題を扱った作品には、共感を覚えたものも多々ありました。

入選

8点

作品名
濡れると透明になるガラス
もしくは石のようなガラス

藤井 玄徳
富樫 由美
マーマル建築設計事務所

作品名
生き物が集まる
窓ガラス

若杉 陸
武蔵野美術大学大学院

作品名
ガラスの奥の日差し

廣野 智史
中川 貴秀
Satavee Kijsanayotin
東京大学大学院

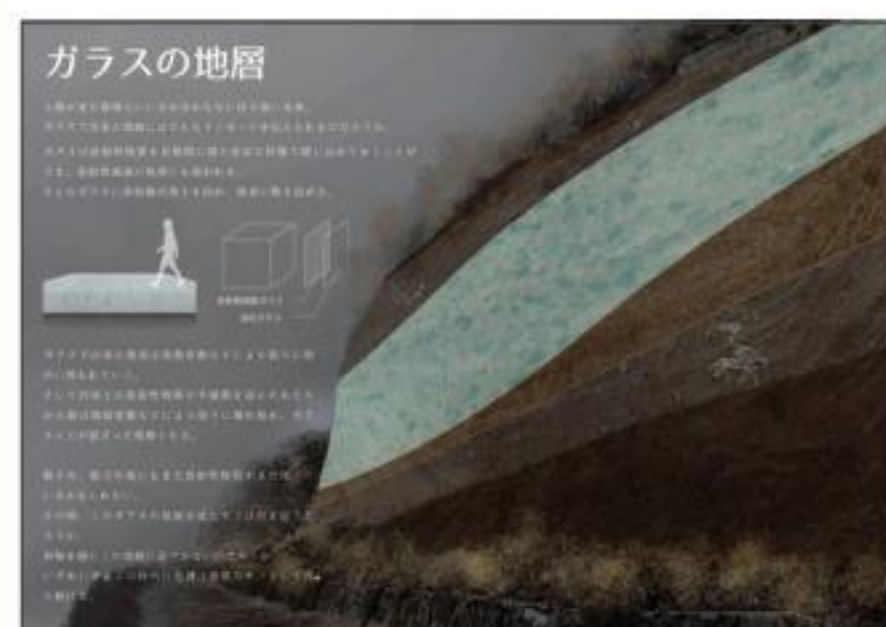
作品名
硝子継ぎ

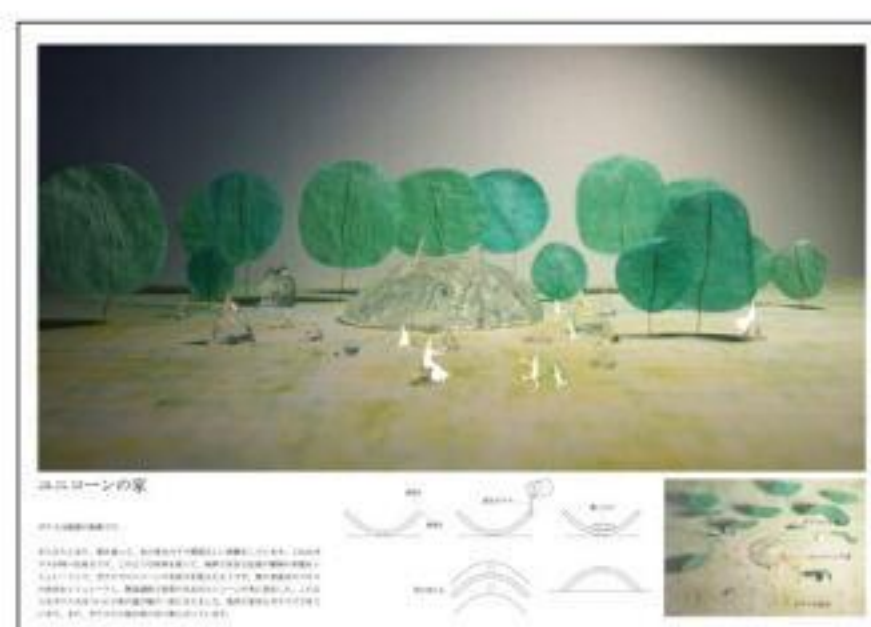
鈴木 悠
信州大学大学院

作品名
多孔質で軽い、
ガラスの浮島

五条 萌
株式会社竹中工務店

作品名
硝子の石碑

大石 隆誠
五洋建設株式会社

作品名
ガラスの地層

菊澤 拓馬
株式会社キノアーキテクツ

作品名
ユニコーンの家

羅 悦慈
SUP Atelier

審査委員

西澤　徹夫

建築家/西澤徹夫建築事務所 主宰

建築は私たちの五感を超えた、とても大きいものだからこそ、五感を総動員しつつ想像力で補完しながら経験する必要があるし、またそのようにして設計する必要があります。本コンペでは、自然や社会を観察した結果、ほんのちょっとした気づきから案を展開したものが多くあり、大変勇気づけられました。建築は常にそういったなんでもないようなものの総体であり、それこそが設計のとても重要な部分だと思うからです。

審査委員

岸本 暁

日本電気硝子株式会社
常務執行役員 コンシューマーガラス事業本部本部長

"野生のガラス"の解釈の仕方で様々なユニークな作品と出会うことができました。本来、画一的で静的なイメージの強いガラスに個性が与えられ、地域性や動き、変化が感じられる作品により心惹かれました。中には実現性の高い作品もあり、近い将来、そんな空間が現れたら楽しいと思います。弊社は、今後もガラスの可能性を引き出す新しい発見を期待するとともに、受賞者の皆様方がこの受賞を足掛かりにご活躍されることを祈念いたします。

コーディネーター

五十嵐 太郎

建築批評家/東北大学大学院教授

今回のテーマは、ガラスのもつ均質なイメージを覆すような提案を期待して設定した。その結果、かつてシュルレアリスムの美術家であるダリが、未来の建築は柔らかくて毛深いものになるだろうと予言したように、表面がザラザラする、もしくは小さいひだをもったような案が寄せられたように思う。また注目すべき切り口として、時間の経過を強く意識した案も散見されたことだ。
つまり、完成した瞬間ではなく、その後の変化も含めて、デザインの対象としている。コロナ禍という特殊な時間を過ごしているからなのかもしれない。

新建築データ

雑誌『新建築』『新建築住宅特集』に掲載された建築プロジェクトを検索・閲覧いただけます

ニュース

課金ユーザが11,000人を越えました
（2021年11月）

2020年8月1日より課金サービスを開始した「新建築データ」は，おかげさまで多くのかたにご利用いただき，13カ月が経過した時点で登録ユーザ47,000人，課金ユーザ11,000人を越えました．
今後も，教育や実務にご活用いただける建築アーカイブを構築してまいります．

新規アーカイブ

『新建築』月評 オープンベータ版
2000年1月号から2019年12月号

公開中

『新建築』　2000年1月号〜
『新建築住宅特集』　2000年1月号〜

https://data.shinkenchiku.online/

大学のメールアドレスで「新建築データ」がご利用いただけます

九州大学
関東学院大学
久留米工業大学
京都橘大学
京都美術工芸大学
共立女子大学
近畿大学
九州産業大学
三重大学
芝浦工業大学
多摩美術大学
中部大学
帝塚山大学
東京工芸大学
東京都市大学
東京理科大学
東北工業大学
東洋大学
福岡大学
北九州市立大学
名古屋工業大学
明治大学
東京電機大学*
武蔵野美術大学*
金城学院大学*
信州大学*
滋賀県立大学*
など

*団体所属ユーザとしてご利用いただけるかたは，大学メールアドレスへご案内をお送りしております．すべての学生が対象ではございませんのでご注意ください．

学生の課金ユーザが増えています

直近4カ月間の
学生の課金ユーザ数の増加

2021年8月　2021年11月末

学生の課金ユーザ数の増加

一般（約30%）　学生（約70%）

一般と学生の課金ユーザの割合

集約された建築情報が導く新しい建築設計教育

末光弘和（建築家，九州大学大学院准教授 BeCAT デザインラボ長，SUEP. 共同主宰）

2021年春から，九州大学にて，環境をテーマにした建築教育・研究センター BeCAT（Built environment Center with Art and Technology）がスタートした．これは，本学の建築家教員である重松象平・末廣香織・末光弘和の3名を中心に立ち上げた，新しいスタジオ型の設計教育の場であり，通常の設計課題のように架空のテーマではなく，社会の中の実際のプロジェクトを通してデザインを行うことで，大学の研究成果を社会実装していこうというものでもある．

BeCATでは，環境といってもかなり幅広いテーマを扱っており，「エネルギー」「災害」「素材」「食」「観光」「生態系」など多岐にわたる．そのため，ここで学ぶ学生たちは，環境や構造のシミュレーションやプログラミング技術を駆使し，都市や気候のビッグデータなど沢山の情報量を扱っている．こういった教育では，膨大な情報の海の中から素材を探し出して，デザインを組み立てていく能力が必要になってきていると強く感じているが，教員である重松は，緻密なリサーチからデザインを導く手法を持つOMA NYを主宰し，末光は環境シミュレーションを使った設計手法を持つSUEP.を主宰しているため，その両者が組み合わさることで，BeCATでは，他にはない設計教育が実現されつつある．

現在の設計教育の現場を見渡すと，学生たちも低学年から当然のように多くの情報を扱うようになってきている．彼らは，日常から膨大な情報と接しているだけでなく，建築の製図やCADを学ぶ前にデータサイエンスなどの授業を受けており，情報に対するリテラシーは非常に高い．一方で，扱う情報が薄く広く拡散している印象もあり，まとまった情報，専門性の高い情報，など情報の密度が重要になってくる．密度の高い情報に集約的に接することで，興味が集中し，教育的な効果も高いと感じている．昨年度から，コロナ禍もあり，なかなか実際に建築を見に行ったりする経験ができず，教育の現場でも忸怩たる思いをしていた中で出てきたのが，「新建築データ」である．九州大学では，この「新建築データ」に登録し，建築関係の全ての学生が授業や研究の中でこれを使うことができるようにしている．昨今，建築系専門誌離れが進行しつつあった学生たちも，かなりの頻度でこれを使うようになっており，また違う形で建築の情報に触れるようになってきたのは興味深い．長い歴史を持ち，密度の高い情報が集約されているため，大学教育のあらゆる側面で活躍している．

これからの時代の設計教育を考えると，これまでに蓄積されてきたアナログでフィジカルな教育と，これらデジタルな教育をどう融合させるかがポイントとなる．集約的な情報＋新しい情報技術＋身体感覚の教育が組み合わさることで，どのような未来の建築家が生み出されていくのか，これから楽しみである．

上：2021年8月に開催されたサマースクールで一般公開で開催された永山祐子のレクチャー．下：センター開催のセミナー．左から末光弘和，末廣香織，重松象平．

末光 弘和（すえみつ・ひろかず）
1976年愛媛県生まれ／1999年東京大学卒業／2001年東京大学大学院修了後，2001～06年伊東豊雄建築設計事務所／2007年～SUEP.共同主宰／2009～11年横浜国立大学大学院Y-GSA設計助手／2020年～九州大学大学院准教授

BeCAT: becat.kyushu-u.ac.jp

これからの建築のために
情報技術活用を牽引する
「新建築ラボ」を設立します

新建築社代表取締役社長　吉田信之

新建築社は，一昨年2020年をもって創刊95周年を迎えました．95周年を契機に弊社が発刊する「新建築」「新建築住宅特集」をオンライン上で検索・閲覧できるWEBサービス「新建築データ」を開始し，これまでの雑誌出版を主体とした建築情報の提供のみならず，デジタル時代に対応した建築メディアとして皆様の期待にこたえられるよう日々努力しています．昨年春には，弊社WEBサイト「新建築.ONLINE」の刷新を行い，特集・書評・展覧会レビューをはじめ建築家によるプロジェクト動画の配信など，さまざまな形で新建築独自のWEBメディアとして挑戦をつづけています．

「新建築データ」をはじめとするオンラインサービスは，開始当初から非常に多くのお客様にご利用いただいていますが，このように新たなWEBメディアとして好発進できましたのも，ひとえに，さまざまな形で皆様より賜ったご支援ご鞭撻のお陰であり，心より感謝の意を表します．

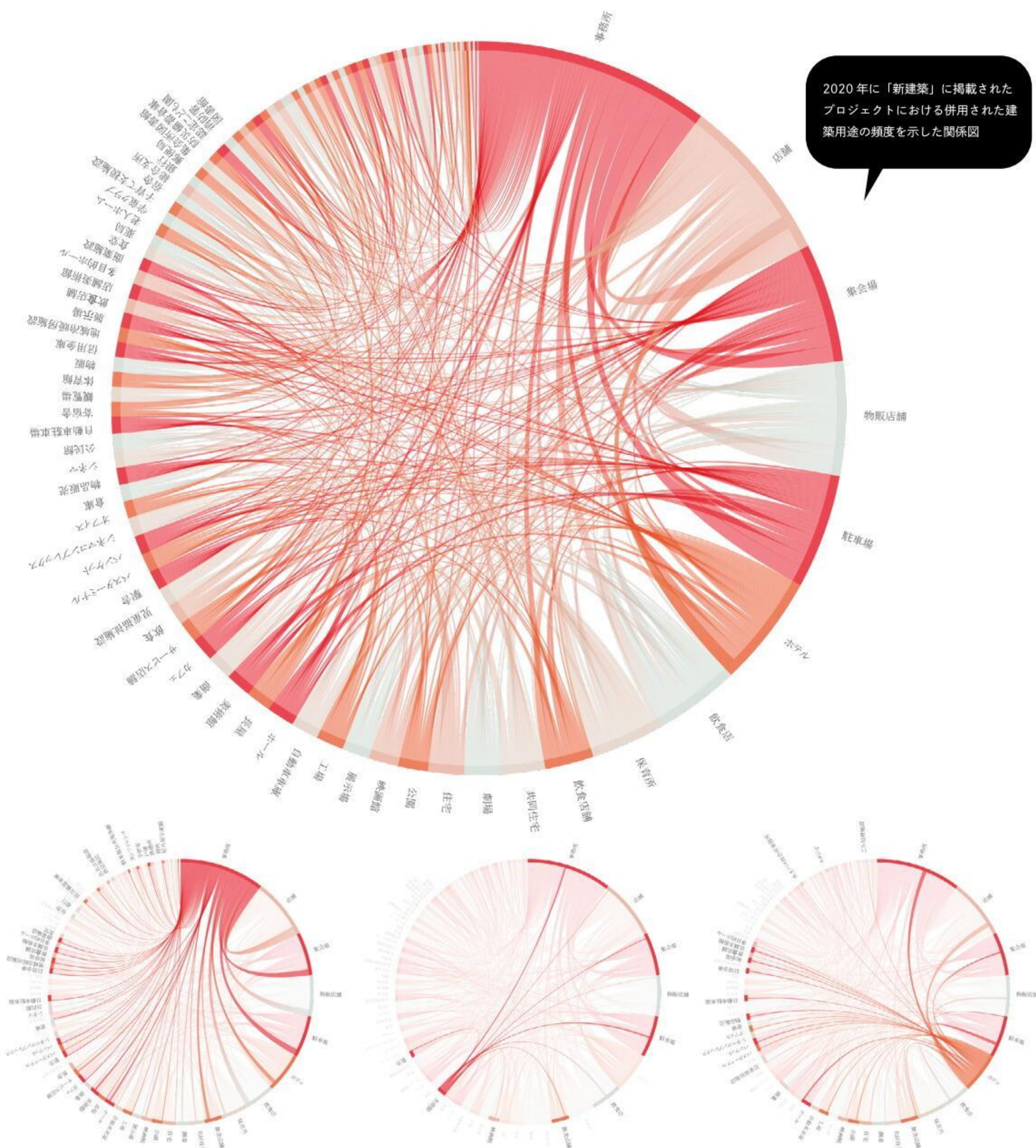
21世紀に入り押し寄せた情報化の波は，わたしたちの社会を大きく変えてきました．また新型コロナ禍によってもたらされた未曾有の状況に，社会や生活そのもの自体を捉え直すことを余儀なくされています．そのようななか，昨年4月に行った「新建築論考コンペティション2021」では，誠実で前向きな提案が多く寄せられ，建築・都市について今何を考え，どのような実践をおこなうことができるか深く考えさせられるものでした．

新建築社は95年間，建築家の方々とともに一貫した編集方針のもと建築記録を蓄積しつづけています．一方で，世界的なデジタル化の流れのなかで技術は刻一刻と変化し，オンラインでのリアルタイムな情報提供や，映像技術などは，わたしたちのメディアへの接し方を大きく変えつつあります．また，持続可能な循環型社会の実現という今の時代に生きるすべての人に課せられた命題は，出版業界においても紙の利用と物流におけるCO2排出削減などの問題においてさまざまな議論を巻き起こしています．

新建築社はこのような課題に対して，これまで培った出版・編集技能をどう活かしていけるのか，さらなる提案をできるよう，デジタル技術や先端技術を活用した取り組みを本格化させるべく社内研究室「新建築ラボ」を設立します．研究室長には，これまでWEBサービス「新建築データ」のディレクションをはじめ弊社のデジタル技術活用・WEBメディア展開において主要な役割を担ってきた砂山太一氏が就任します．砂山氏は，第17回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展日本館展示での部材データベース構築の提案も記憶に新しく，実践的かつ実験的なアプローチで今の時代における「建築」と「情報」にまつわる諸相に取り組んでいます．

「新建築ラボ」設立を皮切りに弊社一丸となり，建築業界全体のDX化に出版社として貢献できるよう取り組みます．そして，雑誌出版によって蓄積された情報資源の活用をはじめ，建築情報の編集・管理技能を活かし，多くの方により便利にご利用いただけるよう，これからの建築のための情報プラットフォームの構築を目指します．

In the midst of environmental and technological changes

2020年に「新建築」に掲載されたプロジェクトにおける併用された建築用途の頻度を示した関係図

「新建築ラボ」では，これまで雑誌に掲載されたプロジェクトの設計者・施工者・建築用途・建築規模・本文テキストなどの情報をまとめてデータベースとして管理しています．ラボの活動のひとつとして，このデータベースを活用し建築の動向や事象を可視化する実験を行っています。

このダイアグラムは建築用途の複合化について着目し，ある建築用途がほかの建築用途と併用された回数を可視化しています．円弧の長さはその建築用途が併用された回数を示し、そこから延びているリボンは他のどの建築用途と併用されているのかと、その回数を表しています。

『新建築』創刊一〇〇年企画　連載

第一回 関西モダニズム──住宅・建築・都市──

対談

連載にあたって

石田潤一郎（武庫川女子大学教授）×**倉方俊輔**（大阪市立大学教授）

──2025年に創刊100周年を迎える『新建築』は，1925年，大阪の地で創刊されました．創刊号の編集後記を読むと，京都大学教授の武田五一の支援を受けたことが記されています．また「住宅の研究雑誌」を目指すと記されていて，住宅の近代化が当初の関心事であったことが窺えます．「1925年という時代」「京阪神という場所」に目を向けると，東京が国家の政治主導により近代化を率先していたのに対して，大大阪は経済力を背景に，東京を凌ぎ日本一の人口の都市となり，成熟した文化の伝統を内包させながら独自の近代化の道を進めた側面があったように思われます．当時の京阪神の状況と背景を，建築史家のおふたりが読み解き，今回の連載で取り上げる今日的意義について語っていただきたいと思います．

石田潤一郎（以下，石田）　1925年は，関西にとって時代の大きな変曲点であったと思います．第一次世界大戦によって日本経済は発展しますが，中でも大阪は，1920年代に産業都市として飛躍的に成長します．神戸では壊滅した欧米の貿易商社と入れ替わるようなかたちで神戸財界がかたちづくられ，また酒造業が近代産業として発達しました．阪神それぞれの経済力が名実ともに整ったことを背景に，都市計画的な公共セクターがリードしてまちづくりを行う時期となりました．
デザインでは，大正半ばの1910年代くらいまでのゼツェッション，ユーゲント・シュティールなど，19世紀末の造形の流れが徐々にフェードアウトし，20世紀的なアール・デコ，構成主義が出てきます．技術的には，鉄筋コンクリート造がタイミングよく定着し，仕上げの材料として煉瓦や石ではなくテラコッタ，タイルが登場するのに伴って，高層のオフィスビルが次々と建って風景が大きく変わっていく時期です．
今われわれは1920年代も30年代も「戦前」とひと続きに見てしまいがちですが，当時の人たちはせわしなく都市や建築界が変わる時期だと感じていたに違いありません．
『新建築』に即して言うと，京都帝国大学の建築学科が1920年に開学し，1923年に初めての卒業生が出ました．そうした新しい視点で建築を見る若い層が出てくる時期で，それまでの建築ジャーナリズムにはなかった見方を『新建築』を通して提供していくことになる．そういったさまざまな意味で時代の節目をなしていく時期であると思います．

倉方俊輔（以下，倉方）　今回の連載の関西を主軸とした視点自体が，これまでありそうでなかったと思います．中心の東京に対して地方の関西という位置付けではなく，世界における日本の近代化を再考しようとした時，関西という場所がそれにふさわしいでしょう．
かつて，政治の切れ目が時代の切れ目であるように歴史を語る傾向にありました．建築史においても同様です．モダニズムを中心にして，政治史あるいは理念史的に語られ，政治の中心である東京がその対象となってきました．しかし今注目されているのは，経済的ファクターの物事への影響，あるいは社会史的な一般民衆の思想を含めて歴史を捉えていくことでしょう．そうした時に関西は，東京と違って社会や建築が経済的・社会的な方向に自然にシフトしやすいところがあって，この時代のあり様を捉えられる対象だと思います．また，関西はひとつの中心を持つ都市ではなく，その中の京都，大阪，神戸それぞれが独立している．1920年代，京都には東京に対抗する知の拠点である京都帝国大学に建築学科がつくられ，大阪もビジネスセンターとしての姿を整え，神戸も世界的な貿易の要衝として活気を呈していました．大きく見ると，3つの街が役割を分担しながらひとつの都市をつくり上げていったのです．

──今回の連載では意匠・住宅・建築家・組織設計・施主・都市といったテーマを想定していますが，先の内容とどのように連動してくるのでしょうか？

石田　意匠について，大正初期，すなわち1910年代の大阪は，アール・ヌーボーとかゼツェッションといった新しい動向に対して東京以上に敏感で積極

提供：石田潤一郎

武庫川女子大学甲子園会館東応接室（旧甲子園ホテルレセプションルーム，遠藤新設計，1930年竣工）にて行われた対談の様子．

的な都市でした．それが1920年代後半になってくると，渡邊節（1884〜1967年）やウィリアム・メレル・ヴォーリズ（1880〜1964年）の活躍によって，アメリカン・ボザールやスパニッシュといった様式的な傾向が復権してくる．一方で，ドイツとフランスで勉強してきた日本インターナショナル建築会の人たちがかなり目立った活動を始めます．歴史の流れが，徐々に新しいものに入れ替わっていくのではなく，さまざまなものを巻き込みながら一気に変わっていく．その中から村野藤吾（1891〜1984年）や安井武雄（1884〜1955年）といった，ひとつの傾向ではまとめられないかたちで作家性を形成してきた建築家が育ってくるという構図が見えてきます．いろいろな出来事が個性的な建築表現の可能性を生んだと捉えられます．

倉方　日本の文化の中心がヨーロッパからアメリカに移行していく，第一次世界大戦と第二次世界大戦の戦間期を，日本では「戦前」とまとめてしまうことが多い．しかし19世紀末からの連続とも，第二次世界大戦後とも違っていて，いわゆるインターナショナル・スタイルも生まれた重要な時期です．東京と比べて政治的な偏向が少ない関西にそれを見ることができます．たとえば渡邊節とウィリアム・メレル・ヴォーリズのスタイルは異なりますが，社会的でアメリカニズム的であるという共通点がある．ロマンティックなヨーロッパの世紀末造形は，第一次世界大戦で勢いを失い，より社会的な造形になる．アメリカの様式は，従来の様式を貨幣的・社交的にするような一面があって，モダニズムがスタイルと呼ばれるものになるわけです．こうしたアメリカの社会化された様式を1920年代の関西では取り入れていた．英雄的なモダニズムのストーリーとは一見逆行しているように見えるけれども，社会史的には連続していました．こうした受容は各国でも見られていて，日本では関西に反映されていると見ることができるのではないでしょうか．

1925年の『新建築』創刊の時期というのは，このあたりが色濃くプリントされていて，とても興味深い資料なのです．

──都市の近代化が進む時に東京と違って，大阪市などの自治体の役人たちが明確な方向付けをし，民間の企業が普遍化させていくというように，行政も大きな原動力になっていたと思われます．

石田　都市計画法が1919年にできて，運用や法律の整備がすんで，それに基づいて動き出すのが1925年あたりだと思います．1926年に御堂筋が着工し，大阪の骨格がかたちづくられていきます．大阪は川の流れに沿った水の都として東西軸に発展してきましたが，鉄道のターミナルをつくってから都市軸は南北に90度変わりました．それまで大阪の都市整備は，大阪築港と市電の敷設以外，民間の土地開発や鉄道の会社が個々で進めてきましたが，この改革は行政が大きな絵を描いてかろうじて実現できたと見ています．

また京都の場合は，近世以来の市街地，いわゆる洛中に対して，外郭線として今の東大路と北大路を通すことで，基盤の目の街路をひとまわり大きく拡張していきます．そしてその沿線に区画整備を施して住宅地をつくります．これらの施策は官にしかできなかったと思います．どちらの都市も，近世以来の都市をそれぞれのやり方で近代化していった時期でした．近代的な土地利用が進行して，それにふさわしいインフラを構築しなければならない局面にあって，官が力を発揮した時期だと見ています．

倉方　工業の力が輸送，産業を変えていき，近世都市の骨格をいかに近代都市に変えていくかという問題は，大阪，京都だけでなく19世紀から20世紀にかけての世界各国の課題でした．商業を含めた都市経営を成り立たせるためのつくり替えは，都市改造の根源です．東京では政治史的な防諜に力を入れていて，旧市街の書き換えが小規模にしかなされてませんでした．京都，大阪は国の政治的な影響が強い都市である東京とは異なる独立都市で，史的な大きな潮流が読みとれます．

──この連載はおふたりのテキストが，それぞれの視点から綴られ，呼応する構成になっています．

石田　それぞれ語り口と視点が違うので，同じものを異なる視点で見るという意味で，単なる振り返りではなく，「解釈される歴史」として捉えられると思います．歴史とは昔の出来事を物語るというだけでなく，語る人に解釈があるものだということが伝わることを願っています．というのは，建築作品も建築思想も，つくられた時代，語られた文脈だけで完結するものではなくて，別の時代の別の解釈によって新しく価値を獲得することのできる存在だと考えるからなのです．

倉方　私は今回の連載は「叙述」を念頭において書いています．昨今，メディアに掲載される文章は，データとロジックという骨と皮だけに圧縮されがちです．差し替え不可能なメッセージを含んでいる，本人の体温が現れるようなものとして復活させたいという意図を持っています．

住宅，都市，組織設計など，現在にも共通する言葉でこの時期について語れるのは，現代に続いている時代が始まったのがこの1925年頃であって，社会の前提が共通しているからこそでしょう．ただ，その社会の容態は明らかに異なっている．その両面を通じて，われわれの近代という時代の包みを新たに再考したいと思います．

石田　『新建築』が始まった時と比べると現代はさまざまなことが正反対になっていて，あらゆる札が裏返ったような状態といえます．だからこそ今ある姿がすべてではなく，そうでない時代があったこと，これから来るかもしれないことを感じてもらえるのではと思います．

（2021年11月28日，武庫川女子大学甲子園会館東応接室，文責：本誌編集部）

武田五一と『新建築』

1925年『新建築』創刊

石田潤一郎（武庫川女子大学教授）

吉岡保五郎による創刊

雑誌『新建築』は1925年8月1日付けをもって創刊された．発行所は，大阪市東区糸屋町2丁目13に所在する新建築社，編輯兼発行人は同社社長でもある吉岡保五郎（1888〜1972年）である．吉岡保五郎は1888年2月15日大阪に生まれた．1908年に当時大阪にあった東洋学校文科を卒業して満洲日日新聞に勤務し，その後1918年大連経済日報社を創設した．その経営で蓄えた資金を携えて1924年に帰国したと言われる*1．すなわち20歳そこそこで外地に出てジャーナリストとしてのキャリアを積み，帰国後時を置かず『新建築』発刊へ歩を進めた人物である．

創刊前後の事情については，実のところ必ずしも明確ではない．神代雄一郎の吉岡保五郎からの聞き取り*2と村松貞次郎の追悼文*3，森田俊雄の建築ジャーナリズム研究*4，さらに『新建築』50周年記念号に掲載されている第2代社長の吉田義男の回想*5を繋ぎ合わせるとおおよそ以下のような経緯が浮かび上がる．

『住宅研究』の編集

大阪に『住宅研究』という雑誌があった．建築家登尾源一（〜1935年）が1920年6月に大阪で結成した団体「住宅改造会」の機関誌として1921年1月に創刊したものである．『住宅研究』誌は登尾の編集で刊行されていたが，1924年10月号で奥付に記される編集者名が吉岡保五郎と西村廣三郎に代わる．ここで突然現れた吉岡は続く11月号では巻頭言，編集後記とも執筆し，名実ともに『住宅研究』誌の編集権を受け継いだことをはっきり示した．この間の事情を推測するとこうである．住宅改造会は，東京で橋口信助（1879〜1928年）が1916年に組織した「住宅改良会」を手本としていたが，『住宅研究』は，住宅改良会が発行していた『住宅』のようには上手く運営できなかった．他誌で発表済みの原稿を再録するなどして発行を維持してきたが，経営に行き詰まり，資金のある吉岡に編集発行を委ねたようである．

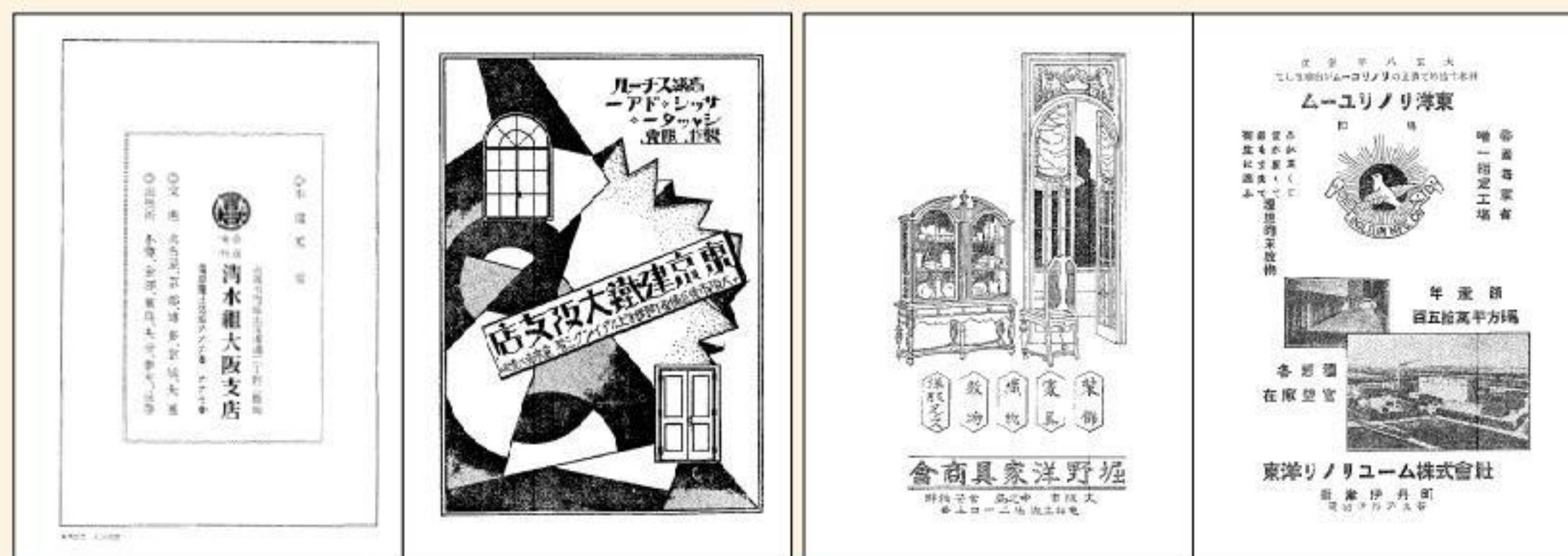
この1924年11月号から発行母体が「住宅研究会」に代わる．誌面ではこの住宅研究会は武田五一（1872〜1938年）が主催する団体と紹介されている．武田は登尾編集時代から『住宅研究』に頻々と寄稿し，また登尾の著作『文化小住宅』の校閲者となっていて，『住宅研究』誌および登尾源一に対する最も有力な支援者たる存在だった．編集者が交替したあとの新たな発行母体の主催者という立場は武田にとっておそらくは名目的なものであっただろうが，この時に吉岡と武田に既に結び付きがあったことは疑い得ない．

それでは吉岡が編集を手掛けた『住宅研究』1924年11月号を見てみよう．巻頭言の「習作より完成へ」は吉岡の主張である．現在の日本住宅が和風と洋風の折衷をしばらく続けるのは仕方がないが，上代に大陸の文物を国風化したのと同じように生活の基調を定めよ，とする．平凡な見解に思えるが，住宅改良運動が西洋化を是として止まない中，「和服の便，和室の快は吾々も知る」と言い切って，洋風一辺倒にならない姿勢はむしろ珍しい．後述するように，これが武田の主張と重なることも見逃せない．

とはいえ，後記「編輯を了して」（『住宅研究』1924年11月号）で「Y生」すなわち吉岡保五郎は，「此種の専門的雑誌の編輯に当って，担任する者が初めての我々」と述べている．つまり，吉岡が建築ジャーナリズムに関わった最初がこの『住宅研究』であった．それを考えると，上のような微温的な主張のためだけに，この雑誌の編集を引き受けたとは思えない．やはりビジネスとして有望という判断があったものと考えられる．1920年前後は住宅建築の大きな転機であったことは間違いない．都市人口の増大，住宅改良運動，郊外居住ブーム，関東大震災の復興などによって，小市民の専用住宅は大きく変わろうとしていた．そこにおいて必要な情報を提供すべく，東京ではあめりか屋から『住宅』（1917年），洪洋社から『新住宅』（1920年）が刊行されていたが，関西にはそうした雑誌はなかった．一般的な建築ジャーナリズムとしては『建築と社会』が活発な活動を続け，住宅に関しても多くの記事を掲載していた．ただ同誌はあくまでも「日本建築協会」という組織の機関誌であり，一般市民が気軽に手にとって楽しむという性格のものではなかった．こうした渇を癒し得る住宅ジャーナリズムはきっと売れるという計算が吉岡の胸裏に存在したことは想像に難くない．

後記「編輯を了して」で吉岡は「本誌の編輯は，編輯の継承とはいへ宛然創刊に異ならざるもの」と述べ，ただならぬ意気込みをもって編集にあたったことを強調する．前号までと画然と異なるのは判型である．従来の菊判から四六倍判へ大きくなる．それに伴って，活字の組み方も，2段組から3段組へと変わる．また，挿図においても，これまではペン描きの図面が主であったのに対し，撮り下ろしの写真が増えている．これは，吉岡が大型カメラでの撮影技術を体得していたことと深く関わっているだろう．ほかに注意を引くのは後記において，あるいは個々の寄稿の端々に，吉岡が各執筆者を督励して原稿を揃えた経緯が記されている点であろう．「予定の締切期日は三替四更に及んでも，未だ揃わなかった，が其れでも予定の原稿だけは何れも約を重んじて果され，どれ一つ予定より脱漏したもののなかったことは，洵に愉快なことであって同人諸君に対して一層の感謝を払ふ次第である」と吉岡は述べる．これは，登尾源一編集時代にはしょっ

提供：石田潤一郎　出典：『建築雑誌』第25輯第289号，1911年1月号

武田五一.

『新建築』創刊号1925年8月号掲載の広告頁.

ちゅう刊行が遅れ，しかも新稿ではないものをしばしば掲載していたことに比べて，いわばプロらしい態度を徹底しようとしていたことを窺わせる.

それでは内容はどうか．登尾編集期に比べるとやや専門的になったとも言えるが，それでも「文化住宅」の住み手とその予備軍が主たる読者として想定されており，彼らを顧客とする設計者や工務店を第2の購買層とするつもりだったと思える.

『住宅研究』の終刊

ただ，これまでのところ「住宅研究社」が刊行した『住宅研究』誌は，この1924年11月号しか知られていない．この後，そう遅くないうちに『住宅研究』は吉岡の手によって終刊したと森田俊雄は推測している．『住宅研究』誌が持続しなかった理由は不明である．ただ，9カ月後の1925年8月に創刊される『新建築』と見比べると，『住宅研究』誌には経営上の問題が付き纏っていたことは見て取れる．『新建築』では判型がまた菊判に戻り，著しく広告が増えているからである．事実，吉田義男（1928〜2010年）の回想*5には「雑誌を創刊するということは，今日でも同じでありますが，少なくとも年余の準備期間を必要とします．『経済的な裏付けを得るために自ら広告とりにも歩いた．仲々新しく発行する雑誌への理解が得られず，時間が経っていった……』との苦心談は折にふれて聞かされ，私はその都度出版という創作の難しさを随分と教えられたものです」とあり，「経済的裏付け」が見出せない『住宅研究』を一擲して『新建築』という新しい革袋を用意したことが見て取れるのである.

武田五一と協力者たち

『新建築』創刊にあたっては，武田五一の協力があったことは広く知られている．武田五一は，帝国大学造家学科を卒業後，その助教授を経て，1902年に京都高等工芸学校創設の際にその教授として赴任する．1918年に名古屋高等工業学校校長に転ずるが，1920年に京都帝国大学に建築学科が創設されるに伴い，その創設委員，そして教授となった.

神代雄一郎の文章では，武田から京都大学建築学科の機関誌を期待して吉岡を慫慂したというストーリーになっている．また村松貞次郎は，新建築創刊の事情については「帰国後かねて親交のあった京都帝国大学の武田五一博士のすすめを受けて，約半年の構想の下に雑誌『新建築』を創刊した」と述べる．一方，編集に協力した武田の門下生のひとり，いちばん関わりの深かった岡田孝男（1926〜98年）は，1965年にこう回想する*6.

吉岡さんという人が武田先生のところに，「建築の雑誌をやりたいがどうでしょう，そして『新建築』という名前にしたいが」と言ったところ，武田先生が賛成されましてね．私は選科として枝村（靖）君や岡本（弘）君と同じとき（大正11年）に入って同じように勉強させてもらって，一応課程を終えまして，それからもう一度試験を受けて（昭和2年に）入学したんです．学科は通っておりましたから学校で遊んでおりました．そのとき先生が「岡田君，君は遊んどるからこの世話をせい」と言われました．元良（勲）さん，新名（種夫）さん，伊東恒治さんなど，その当時大学院にいた人と一緒に編集しまして大正14（1925）年に創刊号が出たと思います．毎月吉岡さんが教室に来られまして，そこで編集しておりました．同人雑誌ではございませんで，はじめから商業雑誌でした．読者もあまりありませんから広告でやっておりましたが，ずっと赤字のようでした．吉岡さんは，満洲から相当金を持って帰られましたから，それでやっていたわけです．昭和4（1930）年まで大阪で発行しておりましたが，大阪ではどうしても育たないからというので東京へ出まして，東京では安田清君などが最初受け継いで世話をしたようです.

同窓会での発言なので説明を端折っている点があり，補足すると，岡田孝男は1922年に第3期生として入学したが，数学の単位が取れずに2年続けて落第したため，規定によって退学を余儀なくされ，文中にあるように選科に転じて一旦は修了する．そのあと本科に再入学して1929年に卒業するという経歴を辿っている.

この岡田の回想では吉岡の側から働きかけて，武田がそれに応えたという構図になっている．設置が遅かった京大建築学科はその分就職先の開拓でも苦労していて，主任教授たる武田五一が盛り立てようと躍起になっていたことは間違いない．とはいえ，後述するように，当初の記事は一般大衆向けの色彩が強く，京大の存在感を主張するのに役立つとは思えない．また編集は確かに京大関係者で担当しているにしても，執筆者は出身大学とは無関係に選ばれている．そう考えると「新建築＝京大機関誌説」はやや深読みに過ぎると言えそうである.

竹内芳太郎の回想によると，武田五一は京大建築学科創設を控えた時期，早稲田大学を視察に訪れ，佐藤功一（1878〜1941年）が充実した設計教育を進めている早稲田を目標にすると語ったという*7．武田は，京都高等工芸時代には，卒業生との協働は行っても，現役の学生を自分の下に置くことはしていない．それが京大に移ったのちは，設計の道に進みたい学生には自分の仕事を手伝わせるようになる．この変化は佐藤功一が佐藤武夫（1899〜1972年）をはじめと

提供：岡田孝之

左は吉岡保五郎，右は岡田孝男．1941年．
場所は平泉の中尊寺金色堂．

する学生に自分の設計業務に参加させていたことに武田が学んだ結果かもしれない．『新建築』の編集を慫慂したのはその延長と考える方が素直な気がする．

住宅観の近さ

注目したいのは，武田と吉岡の住宅観が近かったことである．そもそも武田は若い時から住宅建築を重視し，積極的に設計を行ってきた．彼の作品集での配列が，公共建築からではなく，住宅から始まるのは，彼の志向をよく示していると考えられる．彼が社会的評価の高からぬ『住宅』や『住宅研究』に深入りしたのも，武田の住宅への関心の高さを物語っているだろう．
1910年代の武田は世紀末造形の紹介者として「当代の花形役者」（博士号を得たことを報じる『建築世界』の記事での形容）の地位にあった．「日本的セセッション式の出来上がるのは決して遠き将来ではあるまいと思う．自分も努めて其の方面に向かうて奮闘して見たいと思って居る」*8と宣言し，事実，「芝川又右衛門邸」「求道会館」「山口県庁舎・県会議事堂」「福島行信邸」「東方文化学院京都研究所」はその言葉を裏切らない．しかし1920年前後から，斬新さは彼の設計の主題から外れていく．ゼツェッションは，歴史様式と重ね合わされることが多くなる．また米国西海岸で触れたスパニッシュ様式が日本家屋に近いものという印象を持ち，積極的に移植を図る．1920年代半ばにはイスラム風の装飾パターンを取り入れることも試みている．どの作品も一定の新しさを有していたが，既成の建築を否定するような激しさは持っていない．歴史様式の堅苦しさ，重々しさをそっと和らげていくに止まる．格式ではなく寛ぎを，規範性ではなく闊達さをもたらすことを目指すようになっていった．
この変化は住宅観にも示される．京大での講義をまとめた『住宅建築要義』（1926年）で，武田は「浴後の団扇をつかひながらうちくつろいだ心地が，その浴衣がけのごとく日本住宅の特徴」「日本住宅なるものが持つ欠点といはれる諸点は，取りもなおさずそれが他方日本建築の妙味」と述べ，「洋風住宅手法を基礎としてその間日本住宅の細部手法あるいはそのモティーフを巧みに行使」することを提言するのである*9．
このような1920年代の武田にとって，自分と同質の漸進主義的な住宅観を持ち，ジャーナリストとしても信頼できそうな吉岡は手を携えるにふさわしい人物と感じたはずである．武田の琴夫人は1960年に「吉岡さんと主人との話は，たいてい大学のほうでされていたようですが，宅へも数回見えたことがあります．その当時から，話の上手な謙譲な方でした．主人もよほど好感を持っていたらしく，頼まれると，忙しいのに相談に乗ったり，原稿を書いたりしていました」と回想する*10．ここに一筆書きで描かれるように，ふたりの間柄は肝胆相照らすといった人格的な繋がりであったと思えるのである．

『新建築』創刊号の発行

1925年8月1日をもって『新建築』創刊号は世に出た*11．吉岡はその編集後記に「春まだ寒い三月から，今までかかって漸く創刊号が出ました」と記している*12．おそらく1924年11月に『住宅研究』を出すと間を置かず武田と新雑誌の構想を開始した．誌名を『新建築』とした上で1925年3月頃には新しい編集体制を打ち立てたと見てよいだろう．
「住宅之研究雑誌」という副題からは，実務に携わっている専門家を読者として設定しているような印象を受けるかもしれない．だが「編輯後記」には「自分で設計もし，製図もするやうになれば住宅に対する興味も一層深くなるでせう」「住宅の建築は専門家のみに一任するものではなく，（中略）知識は先ず誰にも必要です」とあって一般人を対象としていることは明らかである．その上で，吉岡は「成るべく平易にそうして深みのあるものをという方針」を立てる*13．古宇田實は寄稿の冒頭に「新建築と云う雑誌が新たに生まれる，相手は主として奥さんやお嬢さんを含んでの家庭の人に読んでもらひ，見ていただく（の）が目的だそうだ」と端的に述べている*14．「趣味的副業インコ鳥」（第1巻第2号）や「ニス塗りと着色の仕方」（第1巻第4号）といった記事が現れるのはこうした読者層の設定のためである．
購読者数は着実に増えていたようである．第2巻第3号「編輯後記」では「新年号以来本誌の売れ行きは著しく増加した，と云っても売高の数はまだ二千以上を出ない少数である，然し遠からず二倍の数に達する自信はある」といい*15，第2巻第4号では「元良氏などは一万部突破は近い中だらうと云って来られた」と記す*16．内田青蔵によれば，住宅改良会の『住宅』誌はほぼ同時期に6,000部内外だったという*17から，確かに2,000部では「少数」と言わざるを得ないだろうが，手応えを感じていたことは間違いない．
気鋭の出版人，37歳．新設学科の可能性を探る建築家，53歳．そして雑誌編集という新鮮な体験に心躍らせる帝大生たち．彼らが生み出す雑誌は，しかし，その思惑をよくも悪くも裏切っていく．

芝川又右衛門邸．武田五一設計．1912年竣工．明治村移築後．

求道会館．武田五一設計．1915年竣工．2002年改修．（本誌0303）

山口県庁舎．武田五一・大熊喜邦設計．1916年竣工．

福島行信邸．武田五一設計．1907年竣工．

山口県会議事堂．武田五一・大熊喜邦設計．1916年竣工．

東方文化学院京都研究所，中庭より見る．武田五一・東畑謙三設計．1930年竣工．

東方文化学院京都研究所，内観．

東本願寺内事洋館，玄関ホールのステンドグラス．武田五一設計．1923年竣工．

＊1『昭和人名辞典　第1巻　東京篇』日本図書センター，1987年（谷元二編『大衆人事録　第十四版　東京篇』帝国秘密探偵社，1942年の復刻），1,080頁．
＊2 神代雄一郎『近代建築の黎明』美術出版社，1963年，100-101頁．
＊3 村松貞次郎「故吉岡保五郎氏の業績」，『新建築』第47巻第12号，1972年12月，126-127頁．
＊4 森田俊雄「住宅改造会と機関誌『住宅研究』について」，『大阪府立図書館紀要』第26号，82-105頁，および，同「登尾源一と住宅改造会」，『大阪府立図書館紀要』第28号，48-76頁．
＊5 吉田義男「私にとっては4半世紀」，『新建築臨時増刊　日本近代建築史再考』第49巻第11号，1974年10月，23頁．
＊6 座談会「創立期の京大建築学教室（昭和40年8月18日）」，『京都大学工学部建築学教室六十年史』同編集委員会，1980年，219頁．
＊7 竹内芳太郎『年輪の記』，相模書房，1978年，241頁．
＊8 武田五一「アールヌーボーとセセッション」，『建築ト装飾』第2巻第6号，1912年，7-9頁．
＊9 武田五一『住宅建築要義』，文献書院，1926年，11-14頁．
＊10 武田琴「忙しくても相談にのっていた主人」，『新建築』第35巻第4号，1960年4月，117頁．
＊11 吉岡保五郎「創刊の辞」，『新建築』第1巻第1号，1925年8月，1頁．
＊12 Y生（吉岡保五郎）「編輯後記」，前掲『新建築』第1巻第1号，51頁．
＊13 古宇田實「フヲーラム」前掲，『新建築』第1巻第1号，16頁．
吉岡（保五郎）「編輯後記」，『新建築』第2巻第3号，1926年3月，58頁．
＊14 Y生（吉岡保五郎）「編輯後記」，『新建築』第2巻第1号，1926年1月，頁数表記なし．
＊15 前掲吉岡（保五郎）「編輯後記」，『新建築』第2巻第3号，1926年3月．
＊16 吉岡（保五郎）「編輯後記」，『新建築』第2巻第4号，1926年4月，47頁．
＊17 内田青蔵「解題」，『復刻版　住宅』第1巻，2001年，柏書房，5頁．

なお，本稿は，『復刻版新建築』（不二出版，2006-10年）の別冊『『新建築』解題・総目次・索引』に収めた拙稿「『新建築』の創刊前後──解題にかえて」と内容が重複するところがある．

東京で生まれなかった意味

倉方俊輔（大阪市立大学教授）

漸進的な強み

『新建築』って，大阪が生んだ雑誌だなあと思うんである．以前，東京にいた頃には，そんな発想は持てなかった．無論，このことは，私の生活に由来するのではなくて，最近の時代の変容が，本誌を捉える目に変化をもたらしたに違いない．編集後記が面白いのだ．

ある時には阪急梅田駅前で宣伝用紙を配り，原稿の催促に骨が折れるとぼやいたと思えば，「毎号，必ず何らかの改善を企て，断じて停滞退歩はしないつもりである」と自らを鼓舞する姿勢で宣伝し，街頭に立った翌日には何枚かの購読申し込み葉書が届いてさらにやる気になっているのは，『新建築』の編集長で発行人の吉岡保五郎．石田氏が詳述した前史を経て，1925年8月に37歳で創刊号を出した．今なら，メディアを立ち上げる苦労を，それ自体も売りにしながら，ウェブ媒体で発信しているようなものだろうか．

編集も時代も，模索しているから意味が深い．当時どういう時代だったかというと，関東大震災から約2年が経過し，1912年に始まった大正時代が終わるまでは1年と少し．フランク・ロイド・ライトの設計による帝国ホテルは開業したてで，ル・コルビュジエがエスプリ・ヌーヴォー館を建てたパリのアール・デコ博覧会は会期の真っ最中，ワルター・グロピウスによるデッサウのバウハウス校舎が翌年の完成に向けて着工する間際である．

吉岡は編集後記の中で，何度か「漸進」という言葉を使っている．先の自分を鼓舞するような一節も「本紙の漸進主義」を説明するものである．主義や理想を掲げることのない同誌の中では珍しく，理念めいた言葉だ．「漸進」の対義語は「急進」ということになるが，両者の違いは，スピードが遅いか早いか，あるいは現状を肯定するのか否定するのか，といったことではないだろう．足場を探りながら進んでいく，前進したと思ったら，そこから見えるものに少し体重をかけてみる．冒険が過ぎたのか，時期を逸したのか，バランスを崩しそうになったら，次の足場へ移ろう．大事なのは，それが前方なのか後方なのかに躊躇しないこと．一歩下がって，別ルートから二歩進むなんて言葉もあるではないか．落ちずにいれば，道は開ける．漸進主義者が急進主義者と異なるのは，達成すべき目的を持たない点だ．次の足場へと跳躍する勘と勇気を失わず，過去に獲得した足場を単なる手段として忘却しなければ，ゴールなきドラマは永続するに違いない．したがって，雑誌という事業に吉岡の性格は合っていた，などとまとめたら，まさに急進主義の悪いところが出てしまう．それは事後的な説明に過ぎない．

現実に，建築を学んだわけでもない吉岡から，なぜ今も続く『新建築』が生まれたのか．その理解に近づくためには，変化の中をゆるゆると進んだ，実際のありようが大事だろう．それは，模索していた日本と世界の建築界を映し出している．後年から見れば一大転換点となった時代の理解も深まる．よって，漸進主義のひそみに倣って，まずは同誌の足取りを，ゆっくり辿りたい．

『新建築』という誌名

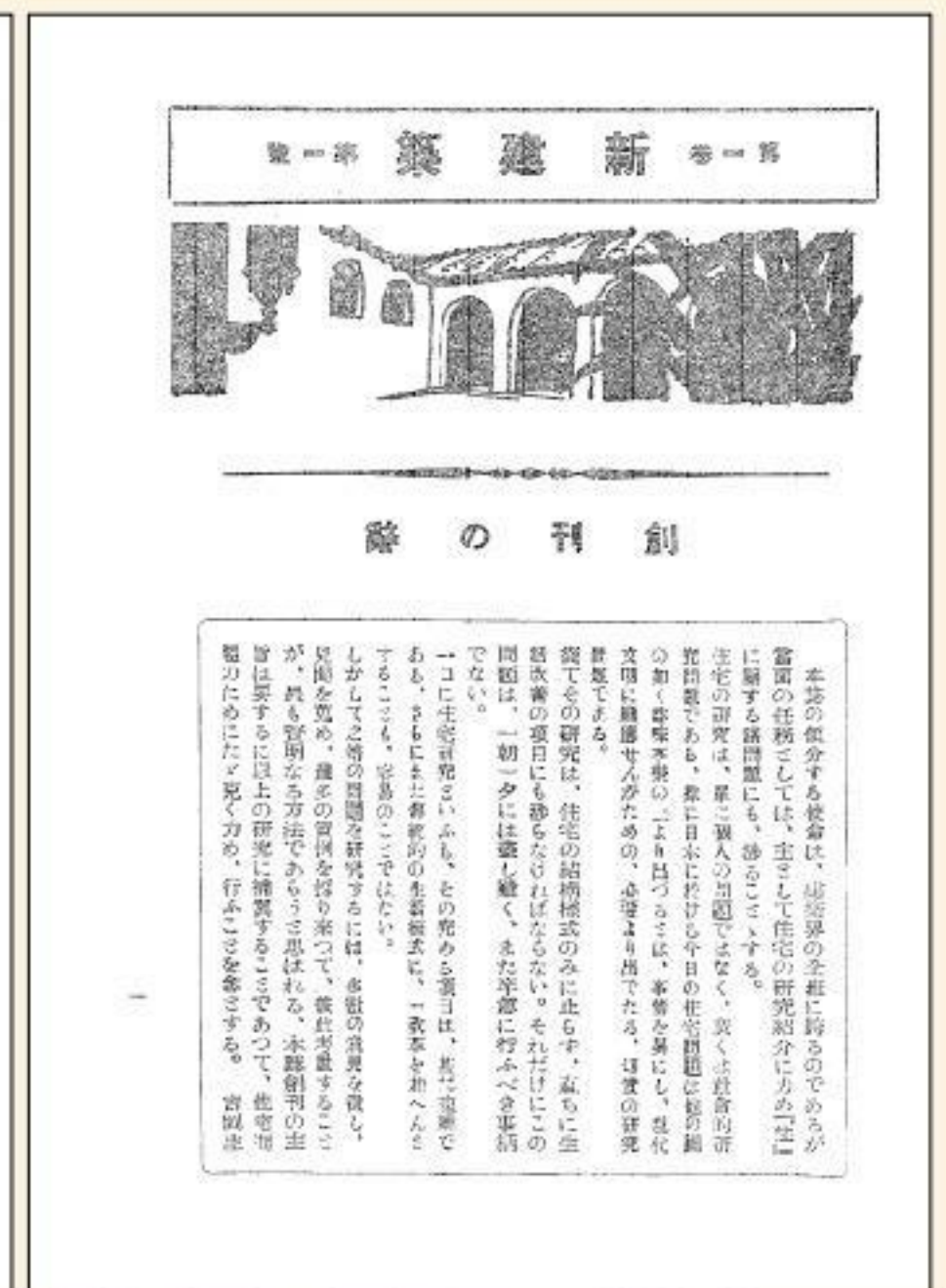
吉岡が創刊号に寄せた「創刊の辞」の中に「新建築」という言葉は登場しない．『新建築』とは，なかなかに鮮やかな誌名である．ひとつには，創刊した1925年らしいということがある．5年前の1920年，東京帝国大学（現・東京大学）を同年に卒業した6名が「分離派建築会」を結成した．展覧会を開き，冊子を刷って，過去の形から離れた建築デザインの方向性をアピールした．これが日本の「新建築運動」の始まりとされる．こうした歴史的な位置付けは『新建築』創刊の3年後にはでき上がっており，1928年4月号の記事には「分離派建築会の設立以来新建築運動の烽火（のろし）は盛に挙げられた」とある（伊藤成文「建築戦線鳥瞰」）．実際，分離派を結成した際の宣言文は「我々は起つ．過去建築圏より分離し（中略）新建築圏を創造せんがために」と始まっていて，ここにも登場する「新建築」という単語は，既存の建築との決別を意味するスローガンとして読める．

誌名は，「過去」から「新」の交代期であることを見越して，新たに参入する雑誌が，後者の同伴者であることを喧伝し，圏域拡大を図るために付けたものと，後の人の歴史的な整理からは見える．しかし，現実は違う．「創刊の辞」の中に，そうした党派的な意気込みを確認することはできない．

もうひとつ，誌名は今の『新建築』のスタイルを予告しているようにも感じられないだろうか．特定の理念にとらわれず，客観的な紹介文と写真と図面を通じて，「新しい建築」を紹介する．そんなメディアの性格が，旅立ちの時に規定されていたのだと．

だが，これも事実と異なる．創刊号には，確かに長谷部鋭吉の大屋邸（1923年）やフランク・ロイド・ライトのヒコックス邸（1900年）が写真や図面と共に掲載されている．しかし，作品紹介よりずっと多いのは，「台所の三要素」「家庭燃料について」「建築構造講話」といった実用的，啓蒙的な文章主体のページであって，広く新しい建築を紹介する雑誌にはなっていない．それでは，なぜ「新建築」という誌名なのか？ このことが書かれていないのである．誌名を提案したのは吉岡ではなく，武田五一だというが，ふたりは深い協力関係にあったのだから，思想があれば，それは表記されているはずだ．

『新建築』という誌名に，深い考えがなかったという解釈が妥当だろう．「新○○」

『新建築』創刊表紙．吉武東里によるデザイン．

『新建築』創刊号，吉岡保五郎による「創刊の辞」．

といった誌名は，『新小説』（1889年創刊），『新青年』（1920年創刊）といったように，明治期から各分野の雑誌に広く見られる．『新建築』も格段，「新」に重きを置いていない，プレーンなネーミングとして選ばれたと思われる．取り立てて方向性を規定しない，この緩さが創刊後しばらく右往左往しながら，道を開くことを許し，その後も時流に即して，同名での継続的な刊行を可能にすることとなった．

複数の「様式」

『新建築』の始まりに「新」の言及がなかったからといって，芯がないことを意味しない．「創刊の辞」を紐解こう．説明されているのは，もっぱら副題の「住宅之研究雑誌」を巡ってである．なぜ「住宅」なのか？

吉岡は言う．「住宅の研究は，単に個人の問題ではなく，広くは社会的研究問題」なのだと．そして続ける．「殊に日本に於ける今日の住宅問題は他の国のごとく趣味享楽の上より出づるとは，事情を異にし，現代文明に順応せんがための，必要より出でたる，切実の研究問題である．したがってその研究は，住宅の結構様式のみに止まず，直ちに生活改善の項目にも渉らなければならない」と．

ここには，いわばふたつの異なる「様式（スタイル）」の概念が見て取れる．ひとつは，たとえば「チューダー様式」「コロニアル様式」といったように，建物の姿形を分類する際に用いられる「様式」である．日本が開国した19世紀の欧米では，立派な，建築と呼べるものは，何かの様式を纏ったものと考えられていた．過去の建築が調査され，歴史が研究されて，建築史が体系化されていった．その知識は設計の基盤であり，適切な様式を選び，応用し，組み合わせて，機能を満たしながら特有の一体感を備えた建造物を完成させることが，建築家の役割だった．明治以降，日本は，欧米から同類だと見なされるような国づくりに邁進した．建築もその一分野であり，同時に，同類であるか否か判断に影響しやすい領域である．よって，技術面だけでなく，様式という国際ルールに基づいた見た目を設計できる人としての建築家が育成された．日本における建築家は，個人的なものである以上に，社会的な存在として出発したのである．

その初代である辰野金吾らの20年後輩にあたる武田五一が本格的な活躍を始める大正時代に入ると，いよいよ「様式」に基づいた西洋建築が，住まいの分野でも広がりを見せ始める．住宅の場合，どんな様式が適切であるかは，使い手とより密接な関係を持ってくる．個人・家族を本位とする大正時代の思想も，使い手の趣味による決定を後押しするに違いない．さらには，ゼツェッションやスパニッシュ様式も新しく輸入され，種類もより多様となった．

増える一方の情報を，増加しつつある自分の住まいをつくろうという人びとに対して整理し，毎月提供することは有益であり，商機も見込めるだろう．もちろん，住宅は実用面や資金面によりシビアな建築であるから，様式はどのような規模や構造であるのかということと切り離せない．先の引用文に「住宅の結構様式」とあるのは，このような概念に違いない．しかし，吉岡が，住宅にこのような「個人の問題」だけでなく，「社会的研究問題」を見出したのがポイントである．

もうひとつの「様式」と呼んだのは，このことだ．吉岡が「他の国のごとく趣味享楽の上より出づる」というのは，先ほど触れた様式についてだろう．生活のスタイルが定まっているヨーロッパやアメリカであれば，趣味によって様式を選択できる．けれど，日本は事情が異なって，住宅はもっと切実なテーマだと指摘する．「現代文明」という言葉で示唆されているのは，明治以降に衣食住をはじめとした西洋の文物が入って以降の日本のありようではないか．たとえば，家の中で靴を脱ぐ習慣と，椅子やベッドの使用は折り合いがつくのだろうか．過去のお屋敷がそうであったように客間を広くとるべきか，それとも個室を充実させるべきか．こうして起居様式，生活様式の問題が提示されている．ライフスタイルといった意味での「様式」だ．これは都市がどのような姿であるのか，現代における効率とは何かといったことに関わる．第一の「様式」と比べれば，もっと日本固有のテーマであり，同時に，機械時代の課題でもある．確かに，先の様式が文化に属していたのに対して，より「文明」的である．こうして日本の住宅は，個別の問題ではなく，社会的なものとして捉えられる．

住宅が社会的でもあるという考えを吉岡が抱いていたことを，ここまで述べてきた．これが他には見られない先鋭的なものかというと，そうではない．『新建築』以前に吉岡が編集を手掛けた『住宅研究』が手本とした橋口信助の「住宅改良会」など，大正時代の住宅改良，生活改善の運動が持っていた考え方であり，また武田からの教えもあっただろう．ただし，建築関係者ではない吉岡が，それを自家薬籠中の物として，雑誌から，住宅から打って出ようとしたのが要点である．雑誌から，というのは何かの機関誌ではないということだ．住宅から，というのは，誌名が総合的な『新建築』であり，「創刊の辞」も「本誌の領分する誌名は，建築界の全班に跨る」と始まることを指している．雑誌の発行を活動の核とすること，住宅から建築を考えること，何はなくとも，このふたつだけが『新建築』の出発点にはあった．硬い殻はなく，緩くて勁い芯があった．

論争と動揺

創刊翌月の1925年9月号では「読者の領分」と題した投稿欄が開設され，今後の方針に対する提案に応答していて，読者とやり取りする姿勢が窺える．10月号には，

提供：石田潤一郎

大阪ビルディング．渡邊節設計．1925年竣工．

今後の「郊外住宅の様式」に対する教示を意図しながら奈良の古建築を紹介した記事「古影春秋抄」が掲載され，住宅から建築を考えた時，意匠と生活の様式は重なるという新しさを示唆している．同じ号で開始された「設計問答」には多くの質問が寄せられたらしく，手応えを実感した喜びが編集後記に感じられる．読者の質問から派生した記事としては，1926年1月号の「四つの住宅様式」があり，武田の教えを受けて京都帝国大学（現・京都大学）を1924年に卒業した後，大阪市に勤務していた元良勲がスパニッシュ，コロニアル，バンガロー，イタリアンヴィラの特徴を，日本人の嗜好との関連性と共に解説している．
創刊から半年間は，読者層を探りながら，ともかく出し続けるといった雰囲気である．わずかに特徴らしいのは，読者の参加を呼びかけた点，「様式」を問題にした点，住宅から建築全般を考えようとした点だろうか．そして，この3点が重なったところで，問題が起こる．
1925年11月号に「大阪ビルデイングを見たまゝ」という記事が掲載された．渡邊節の設計で同年9月に大阪・中之島に竣工したオフィスビルの見聞録である．執筆者の池田谷久吉は，市立大阪工業学校（現・大阪市立都島工業高等学校）を1917年に卒業後，当時大阪府に勤めていた設計者で，「中庭を覗くと丸きり田舎の工場でも見ているようで全く無趣味」で，見えるところばかりよくする「大阪根性」が如実に表現されている，「都市美の唯一の條件は統一にある」のに「全体が近世式で，入口正面がサラセニツク，窓などの金物がルネサンスで八階がライト式」と統一を欠いているなどと，気楽な筆致であれこれ批判した．
これに対して2カ月後，「大阪ビルデイングを見たまゝを読む」と題されたペンネームによる文章が現れる．穏やかな文体ながら，そもそもの様式の判別が間違っていること，設計上の真価と関係ない部分を取り上げていること，批判だけで具体的な方向性が示されていないことなどを詰めていく．その上で，ビル自体については，正面の列柱と上部の壁面の取り合わせが「不安な緊張感」を与える「失敗の大建築」だと評する．
さらに1926年4月号には，常連執筆者である元良勲の批判が載った．「記事を読んだ時，珍らしい憤りを感じた」と彼は言う．腹を立てているのは「筆者に，そうしてその記事を巻頭の一番よい所に堂々と載せた所の『新建築』に対して」だと続ける．池田谷の「記事に書いてあることは徹頭徹尾間違っている」，「同氏に建築の問題を論じる価値のないことを，自分は断言しても好い」と手厳しい．こうして『新建築』誌上，最初の論争が勃発したのである．読者の参加を呼びかけながら，住宅以外の建築にも対象を広げた時に，様式を巡って起こった論争は，その後もそうであるように，誌面の方針に影響を与えたと思われる．

「建築家」の発見

吉岡はこの状況を，どのように抜け出たのだろうか．ヒントになったのは，論争の間の1926年2月号で始めた設計図の掲載だったろう．次の号の編集後記には「前号に挿入した，ブリユープリントの設計図は，意外の好評を博した．それで今後も毎号掲載していく予定である」とあり，実際その後も継続される．
安井武雄や南信といった設計者から受け取った住宅の設計図面を，1/100ないしは1/200のスケールで正確に引き直し，白黒反転させて見開きの片ページに掲載，もう片ページのたっぷり余白をとった中央部分だけに短い説明文を配置した誌面には，確かに，それまでにはなかったハッとさせられる格好よさがある．機械製図のようにクールで，読者に必要な情報が収められている．実用性がスタイリッシュさと結合しているのだ．この新機軸の好反応が，住宅の雑誌であることと，建築家にスポットをあてることとが両立し，売れ行きにも繋がるという勘所を思わせたとしても不思議はない．
1926年6月号で吉岡が始めた連載「建築家と其の住宅」は，いわばその文章版である．もちろん，数年後とは違うので，まだ大正時代の印象批評的な訪問記らしくはあるが，「建築家」の個性の紹介が，社会に受け入れられる刊行物としての一般性に接続するという思いが，そのタイトルからも窺える．建築家の新たな試みに着目し，素材の提供を依頼し，読者に伝わるように命名し，誌面にレイアウトする．組織に属さず，建築家ではなく，それと読者の間に位置する立場として，吉岡は編集的，操作的であることに活路を見出し始めた．様式というのは曖昧でもあって，ぼんやりとした印象批評を生みやすい．批評は誰と誰が仲間だ，敵だという見方に帰結しやすい．投稿は質を保証せず，どこまでも読者に下りていけばよいというものでもない．第一，そうした住宅誌は既にあるのだから，新たな安定した商売にはならない．
毎号，探り探り発行を続けていく中で，吉岡が見出したのが「建築家」という主題であった．建築家のことは，かえって建築家には書けない．自分で書いても，他人のことを書いても，そこには衒いがあったり，思い入れが出たり，とかくベタついてしまう．意外にスタイリッシュでないのだ．他方で一般の側に目を転じれば，元良が言うように，専門家が思っている以上に，建築は理解され得るのではないか．それには媒介者が必要だ．情報を小気味よく整理し，憧れを喚起させるような編集者が．吉岡が，意匠上の様式，生活の様式に続き，創刊後に発見したのは第三の様式（スタイル），スタイリッシュであることだった．
折しも，この時期，建築家は3つの「様式」の転換者として，世界的に鮮やかな姿を現しつつあった．

大阪ビルデイングを見たまゝ

池田谷久吉

大阪ビルデングは量に於て、ともかくも関西第一のものである。大阪商船を中心とした大會社の事務所として建てられたもので、水の都の大川端に聳え立つ姿は向ひ岸の大阪病院と相反映して格好の場所で、いゝ對照である。

こうなると、先づ田簑橋が貧弱になつて来た、早く改築の機が來てほしいとは誰しも希望するだらう。

何はさて、大阪の建築界も日一日として進歩して來た事は先づ慶賀すべきである。私達の子供の頃は大建築といへば中之島の日本銀行に圖書館位が所謂洋風のものとして目星しいものであつたが今では只こゝにこんなものがあつたかといふ位で一向目にも止めなければ問題にもしてゐない。

然し最近大江橋畔から東方の眺望はたしかに大阪に於ける代表的公館地區である、田舎物のお上りさんは赤毛布を肩にして必ず一度は立ち止つては感心してゐる。

それがだんだんと西の方へ延びて日本銀行の西側には江商ビルデングが鐵骨を組み上げた。その内に都市計畫事業の進捗と共に渡邊橋附近が全部改築される、いよいよ西進して中の島一帯は數年ならずして全く見違へる事になるだらうと想像してゐる。

大阪ビルデング邊は今から四十年も前には茫々たる草原に「此の土地差し上げます」といふ建札が立つてゐたが貰ひ手がなかつた。即ち所有權が移轉すると、すぐ未收入の土地に對して課税の責任を恐れたからであつた、星遷り年變り今日では斯の如く正に文化の中心にならんとしてゐる、今更ながら大名屋敷を彷彿させる樣な朝日新聞社が白堊の塔と變り御倉屋敷の軒並が八階のマツチ箱と變り果てた事は實に驚くの外はない。

さて、大阪ビルデング（以下大ビルと呼ぶ）はその形式は近世式にして餘程オリエンタルを加味したものである、入口正面にある龍山石に施された彫刻はサラセンニックのものとして一寸面白い、外觀はタペリスト・ブリツクを用ひ東京新橋演舞場の樣な感に似てゐる、軒廻りはテラカツタ積にて此模樣も極めて東洋的のものである。

北側中央入口上には半圓形の彫刻があつてその左右に二個の燈籠を嵌め中央上部にゴシツク尖頭式の中に人像を置いてあるが、それ自身としてはかなり見るべきであると思はれるが全體として無理にくつつけたものとしか思はれない。

非常にあせつて、何とかしなければならぬともがきながらあはてゝ作つたものゝ樣に感ぜられる。殊に人像などは實にせゝこましくて壁體と少しも接着した同體の氣分が少しも起らない、あれならむしろ取り除いた方が餘程ましである。

若し入口だから飾るといふ意味から來

大阪ビルデイング正面玄關

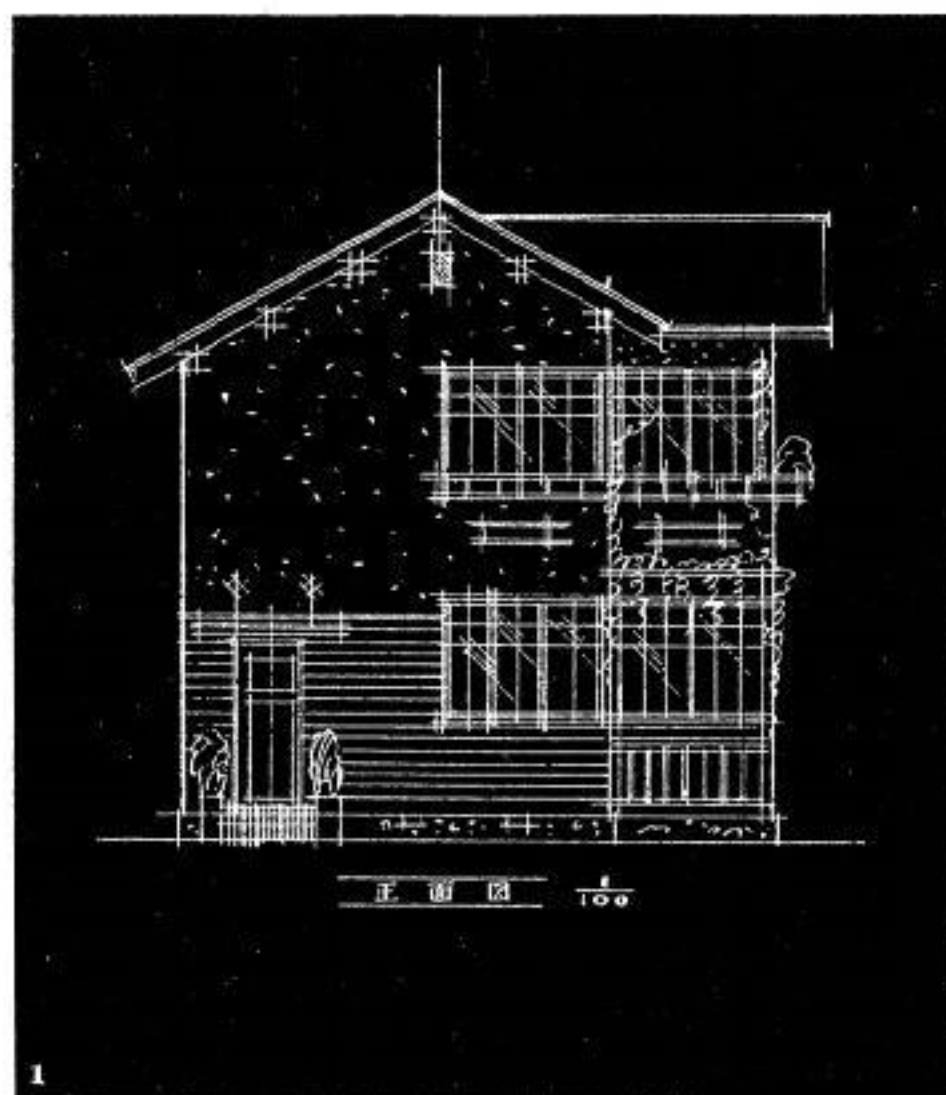
大阪ビルデイング

八

九

『新建築』1925年11月号，池田谷久吉による記事「大阪ビルデイングを見たまゝ」.

正面図　1/100

1

郊外住宅·其一·葛野壯一郎氏設計

郊外住宅の一

葛野壯一郎

建坪　十四坪七合五勺、延坪　二十五坪

出工費約三千五百圓

大阪住宅經營株式會社が、箕面千里山經營地に建設した簡易住宅の一例です。

立面、大壁二階建木造で、外廻りは下層下見板張、二層ラツス張色骨モルタル仕上、屋根セメント瓦葺、窓廻大部ペンキ塗となつて居ります。内部に居間床張の部分壁紙張、木部色付拭き、其他は普通日本漆喰。木部素地、二階八幅に沙漆喰です。天井に居間の部分だけ簡単な格天井、其他は掛縁天井です。窓は大部分硝子引違ひ障子とし、階下居間の部分だけが兩開きとなつて居ます。外觀には全体として大した特長もありませんが、簡單な外形が基調となつて、黒味のかゝつた防腐劑塗の下見張と、薄い茶、淺黄、鼠色などのモルタル壁、赤色、緑色、あづま色等の屋根瓦等が互に反映して、有りふれた種類のものでは有りますが、そこに一種の新し味を見せて居ります。

『新建築』1926年2月号掲載の設計図面．見開きの片ページに白黒反転させて図面を掲載し，余白をとった中央部分だけに短い説明文を載せている．

建築論壇

学ぶこと／つくること／使うこと

西澤徹夫（西澤徹夫建築事務所主宰）× **浅子佳英**（PRINT AND BUILD主宰）× **森純平**（PARADISE AIRディレクター）

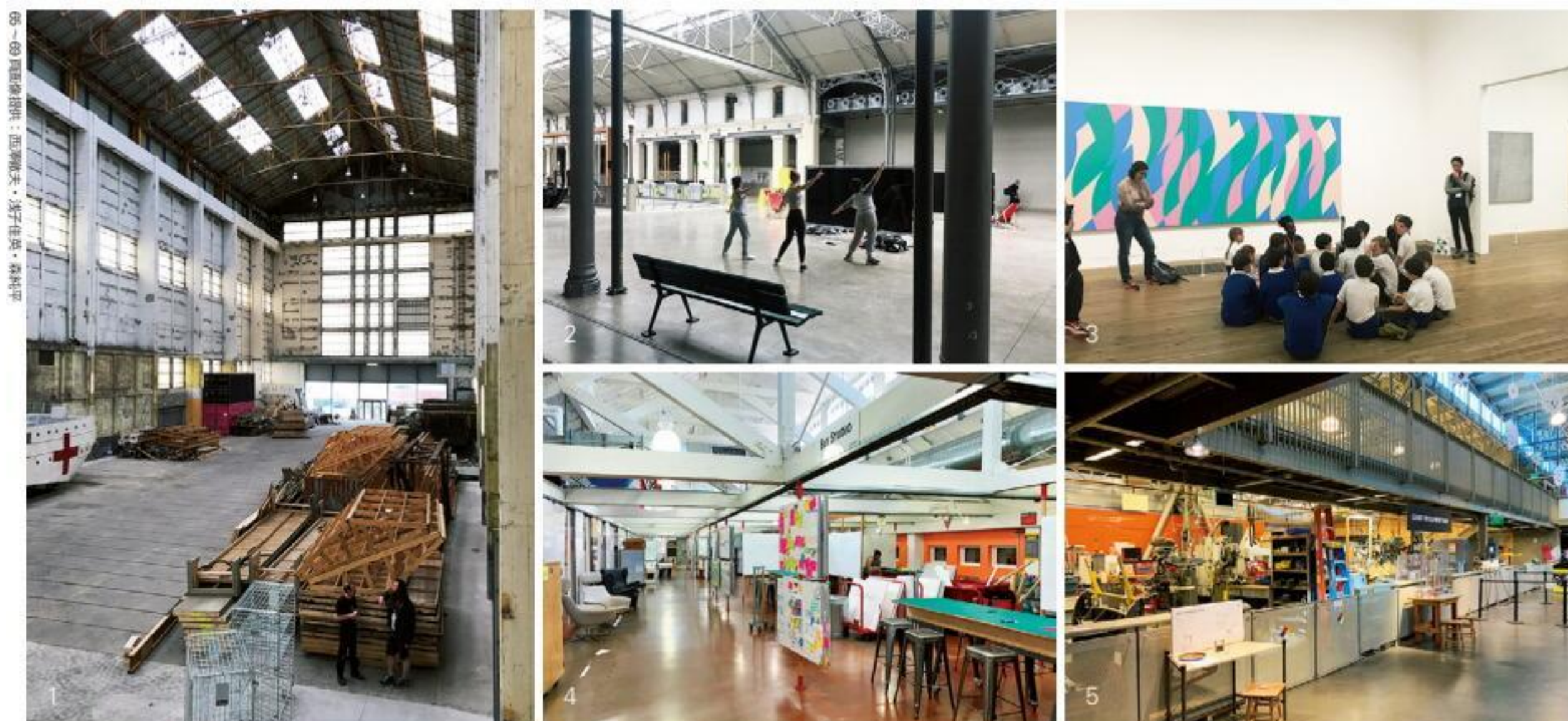
使うこと／学ぶこと

森純平

初めて「ラーニング」という言葉を聞いたのは2013年，運営をしているアーティスト・イン・レジデンス「PARADISE AIR」に招いた韓国のアーティストから，美術館に滞在してカンパニーでコンテンポラリー・ダンスの新作をつくっているウィリアム・フォーサイスの話を聞いた時だったと思う．当時は彼のような国際的なアーティストがカンパニーで美術館に滞在して制作する例が珍しかったこともあり，なぜそんなことができるのか尋ねてみると，「『ラーニング』でやっているからできるんだよ」といった曖昧な応えが返ってきた．
これがきっかけで「ラーニング」という言葉に出合い，以降，世界中からやってくるアーティストへ，それぞれの国におけるアートや文化の現状，都市とアートの関係性と共に「あなたの国の『ラーニング』はどんな感じ?」と話をふるようになった．彼らは当たり前のように，それぞれの国における「ラーニング」を，彼ら自身の視点から話してくれる．
それはその言葉の持つ「学び，学習」という本来の意味よりも，アートとまち，アートとそこにいる人びととのライブな接点として語られるのだ．
世界中で試行錯誤されている活動の様子を語り合うための，最も重要なキーワードとして「ラーニング」は使われている．その対話の蓄積の中から，レジデンスでのプログラムを考えるようになった．
2015年，何かをしなくてはならないというわけではない，やってきたアーティストとまちを繋ぐための接点として，「PARADISE AIR」で「LEARN」というプログラムを始めた．
アーティストもまちの人も，どちらが上でも下でもなく，先生でも生徒でもなく，お互いにそれぞれの専門性や経験を認め合い，対等な関係で活動をしていくという姿勢を共有するためのキーワードである「ラーニング」を改めて言葉にし，実践してみた．
美術館とは違いアーティスト・イン・レジデンスにおいては教育普及というプログラムを持つこと自体が一般的ではない．そういった現状の中で，東京の周辺で，美術のメインストリームにも属さない，オルタナティブなチームだからこそできる実践だし，前例主義の社会において，新しいスタンダードを築くための些細な前例になればいいなという希望もこめて，プログラム「LEARN」は継続している．
2013年時点で多様だった「ラーニング」という言葉は，年をおくごとに具体性を増し，2021年現在では4年前のコンペ時よりもさらに固有性を帯びてしまった．「ラーニング」という言葉を今後どのように使っていくべきかについては一度傍に置いておく．
コンペ以降も，世界の関係者へのインタビューの他，国内外100件ほどの美術館や文化施設においてプログラムの実態，国内の教育普及的文脈においてのエデュケーション（教え），ラーニング（学び）の現状ついてリサーチを続けているが，すべてが「ラーニング」へと変化しているわけではない．それでもなお特徴的なのは，2019年のICOM（国際博物館会議）での議論にあったように，それぞれの現場において少し先に未来を考えていく上で真剣に議論をし続けるために大切なキーワードであるということだ．

だってカウンターから始まるでしょ?

2017年5月，「ラーニング」をキーワードに美術館を設計するにあたって核となる開かれた空間・都市的なスケールを持った空間がどうつくられ，どのように使われているのかを学ぶため，基本設計と併行して国内外の美術館やアートセンターを巡る旅に出た．国内では文化施設を渡り歩きインタビューとリサーチを行った．これまで，僕たちそれぞれが個別に経験したもの，決定の根拠としてきたさまざまな実践だけでなく，共有した体感を積み上げてラーニングのある空間を共通言語化することが設計に必要だったからだ．
学びを得た空間を思い起こしてみる．ラーニングプログラムが活発に実

01～05 画像提供：西澤徹夫・浅子佳英・森純平

1：造船所を改修した「FRAC Nord-Pas de Calais」．以前の展示の痕跡が残る．
2：「104」．総床面積39,000m^2．ダンスの練習をする脇でPCで作業している人がいたり，ベビーカーが通り過ぎたりと，多様な活動が共存する．
3：「テート・モダン」展示室にてアソシエイトアーティストによるラーニングプログラムが実施されている．
4：「スタンフォード大学デザインスクール」．デザイン思考の概念を元に教育が行われる．家具を可能な限り可動とし，常に変化する活動的な場を生み出している．
5：「Exploratorium」サンフランシスコのベイエリアにある科学博物館．カウンター内部は工房．展示什器は自前で製作しており，その様子が観客から見えるようになっている．工房には専用工具が並び，すぐにつくることのできる体制が整えられている．

施されているが「ルイ・ヴィトン財団美術館」（設計：フランク・O・ゲーリー，フランス，2014年）は建築もWEBサイトも一般に開かれておらず，そもそも出会う機会に恵まれない．改修によっておおらかな巨大空間を獲得した「ピレーリ・ハンガー・ビコッカ」（イタリア,2004年）は，同時に気軽さを失い持て余すような感触があった．「FRAC Nord-Pas de Calais」（設計：ラカトン&ヴァッサル，フランス，2013年）も巨大空間を持つが，その特徴を手掛かりとしてスケール感の合った建具や家具，照明が設計されている．ジャイアントルームのようなホールと側廊として個室が並ぶ空間を持つ「104」（設計：Atelier Novembre，フランス，2008年）は葬儀場の跡地を利用した文化センター．コンサートの準備をする人，ダンスの練習をする人，学校の課題を議論する学生が，互いに適度な距離感を持っており，中央部のトップライトの明るい空間の下に多くの人であふれていた．ラーニングの先達である「テート・モダン」（設計：ヘルツォーク&ド・ムーロン，イギリス，2000年）の巨大なタービンホールでは，手すりやステップなど身体的なスケールの場所をよりどころに人が溜まっていたのが印象的だ．新館の「スイッチ・ハウス」（設計：ヘルツォーク&ド・ムーロン，2016年）には「EXCHANGE」と名付けられた，ラーニングの拠点となる1フロアがあり，一見そっけない何もない空間のようでいて，移動式の什器によって，各プログラムの使い方に合わせて配置を柔軟に変えられるという．訪れた際に展示室の中で行われる，ラーニングプログラムの活動にも遭遇した．
文化施設の他，デザインシンキングの空間についてもヒアリングした．デザインシンキングはスタンフォード大学のデザインスクールをきっかけに西海岸各地の大学で実践されている．可動式のソファ，ホワイトボードを用いた部屋など，プロジェクトをスタートすることのハードルをなるべく下げることの重要性，混ざるための場所の大切さ，フレキシブルな場所の使い方について知見を得ることができた．
ターナーコンテンポラリーというロンドンの北にある美術館のラーニングにいたKaren Esleaの話が忘れがたい．彼女はラーニングチームのトップであると同時に受付カウンターなどを管轄するコミュニケーション部門のチーフも担っている．なぜチケットカウンターが大事なのか?と聞くと「だって美術館ってチケットカウンターから始まるでしょ?」．展示室とその他を区別することなく，ジャイアントルームまでが内包された美術館の空間について，彼女の考えはピシリとはまる気がした．

建築の前後左右

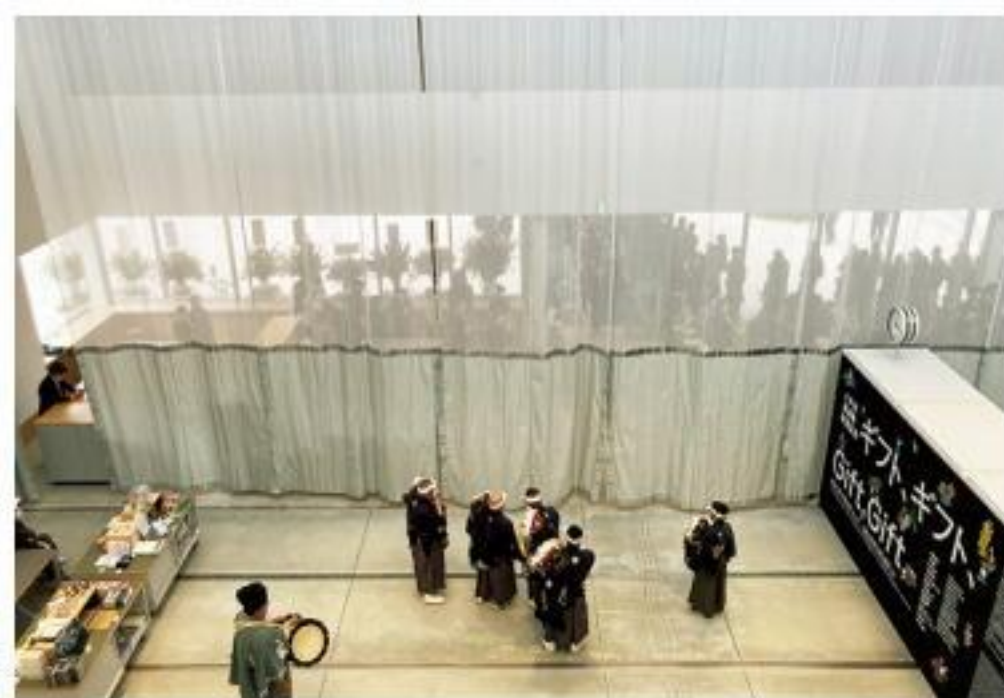
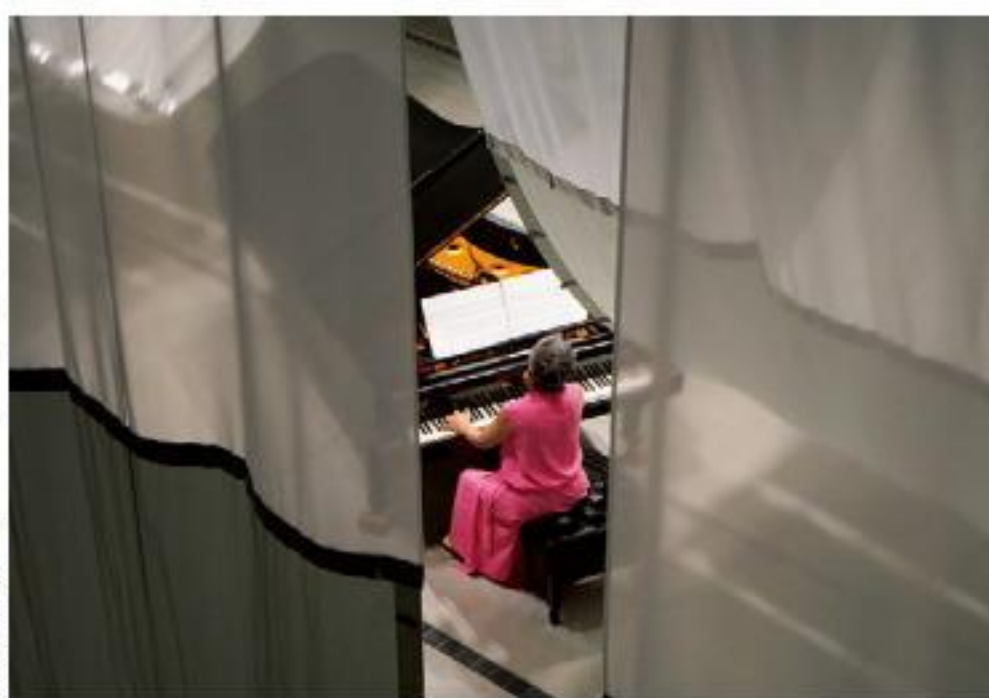
「したがって問題とすべきなのは，主権者が鎮座する部屋そのものではなく，むしろそこに通じる『前室』である．主権者のいる表舞台ではなく，それを取り囲む秘密の空間こそ，真に権力が作用する場である．ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリがカフカの小説との関連で述べているように，「壇上」よりも，「廊下，舞台裏，裏口，隣室」で起こることのほうが重要なのである．」*1

ダンサーのマース・カニングハムはある本番の制作中に，パリのオペラ座の稽古場にダンサーたちが入ってきて，自然の光のもとストレッチを始める様子を見て，「この瞬間が本番にできたらなぁ」と言ったという．
建築が答えなければいけないことは膨大である．けれどだからこそ，前提となる問い自体に含まれていない，建築の前後や左右にある，建築の少し外側から，学び続けなくてはならないと考えている．なぜなら，建物をつくる時間より使っていく時間の方が長いのだから．

学ぶこと／つくること

西澤徹夫

計画のパラドクス

バックパックで旅していた時，「自分探し」で数年かけて地球を踏破しようとしている何人もの旅人に会った．僕には，探し出すべく本来の自分

オープニングセレモニーの神楽.

ピアニスト・美術家の向井山朋子さんによるパフォーマンス.

がアプリオリに存在するという物言いがどうも信じることができなかったのだけど，あえて危険な方へ困難な方へと向かう「自分探し」を通じて経験するであろう小さな出来事の集積が，旅程を豊かに膨らませ，きっと変えがたい固有性を持っていくだろうということには羨ましさを感じていた．バックパッカーには目的地があるのではなく，どんな道草を食っていくかはそれまでの出来事が羅針盤となって決めていくのだ．
予測可能な未来は常に分岐していくし，どんな事象も見方を変えればまったく違う様相を見せ始めるということはもはや常識なのだから，世界はとても不確かなはずだ．計画した先の未来は必然であるということは計画する人間の傲慢であることが自明となり，計画の理論も当てにならない．それゆえ建築が未来を語ることの困難さも増していく．計画したことは決して計画通りにはならないという古くて現在進行形のパラドクス．だから無数のあり得るかもしれない未来を一所懸命にひとつひとつ描いてしまうことは，かえってこの手からひとつひとつ可能性が滑り落ちてしまうことになるのではないか，という恐怖がつきまとった．そうして建築も都市も，その内外で起こり得るすべての出来事は「多様でさまざまな可能性」であるという落とし所をつくって一旦括弧に入れ，偶然性を囲い込むという方法でかろうじて計画のパラドクスを飲み込んできた．

つくることは学ぶことを模倣する

僕たちは分岐していく不確かな未来を前にして，いつもちょっと先のことや，論理的に導き得るさらにまたちょっと先のことを予測しては備え，予測が外れれば軌道を修正する．だから僕たちの生活や知識の中にまだ起きていないことや知らないことが，行為や知ることに先立って感知される，潜在的な「なにか」をとりあえず手にすること，組み合わせてみること，そこから発見的に気付きを得ることができる能力を育てていくことが必要になる．「学び」とは，「なにか」あるかもしれないという動機付けを駆動力として，今この瞬間には何の役に立つのか分からない有象無象の中から，とりあえず選び出したものとの格闘を通じてほんの少しの未来への指針を得ることだ．何か自分にとって新しい経験になるかもしれないという予感と，新しい経験の定着．そして「学び」は常に事後的にそれが学びであったことが分かるという仕方で身体化していく．そうやって「自分」は探されていく．「　」内が建築だって同じことのはずだ．
日常を生きていくということはシンプルに，僕たちに先行して現に存在するこの複雑な世界へ，介入したり干渉したりする試行錯誤の絶え間ない営みだ．まだ見ぬ美術館を模型でスタディすることも，美術館運営にあたってスタッフ研修をすることも，学校帰りに友だちを誘って美術館を訪れることさえも．そしてその結果として生まれたモノやコトが，再びモノやコトよりも関係性が主題となったこの世界へ回収され，それを契機として再び誰かが介入していくという循環の中に，僕たちの生活や文化活動や社会活動がある．それはつまり僕たちが集団として，あるいは共同体として日々何かをつくり続けているということなのであり，そこには小さな計画が無数にある．つくること，計画することは，生まれるかもしれないモノやコトに先んじてそれを感知し，その先に有り得るかもしれない未来を括弧に入れつつ想像的に組み立て，その結果として生まれたコトやモノの俯瞰を羅針盤として，また次の一歩を踏み出すということの繰り返しだ．建築が扱う計画は，この先んじて感知するという想像力を基礎とした射程を，少しでも蓋然性の高い体系にまとめていくことだとも言える．これはつまり，学びの構造と同じなのだ．つくることは学ぶことを模倣する．

ミニマムからマキシマムへ

だからつくることをめぐって，僕たちは計画のパラドクスと不確かさの恐怖に抗い，一旦は起こり得ることに備えて描いてみること，それがやがて想定していなかった方へ向かってしまうだろうという先取りした徒労を乗り越えて，それでも人やモノのふるまいを事細かに想像してみることをしてみよう．設計することと，まだ見ぬ建築を想像的に使ってみることが同じ次元にあると思えるまで繰り返し検討してみよう．「なにか」を感知したのなら，ある系（システム）へ純化させていくことからできるだけ離れて，可能な限り複層的な空間を組み立ててみよう．そうしてできた無数の具体の集積が，それ自体が総体として纏うことになるであろうある種のニュアンスや空気のようなものを匂わすところまでまずは設計し

館内を通り抜けていくノルディックウォークイベント.

コレクションラボで行われた小学生のスケッチ.

てみよう．いたれりつくせりに設計された設えを受け取った使い手が，高解像度に誤用が可能になるような過剰な先取りをしてみよう．そうやって「原っぱのように遊べる遊園地」*2と言えるくらいまでつくり込んでみよう．建築は元来ハイブリッドさを扱う技術なのだから，おもちゃ箱をひっくり返したような，モノやコトを先取りした空間を用意するのは得意なはずだ．あるいはそのような空間はかえって使い手にとっても想定内と想定外が混在したようなものになるかもしれない．使い手にとっての潜在的な「なにか」をうまく引き出すような可能性の束になり得るのかもしれない．そうして，建物をつくることが学びを模倣したのと同じように，使い手にとっての新しい学びへ上手く（あるいは不器用に?）引き継がれたなら，ここから生まれる状況はつくることの特権性が使い手の日常へ敷衍されたものだと言い得るところまで行けるかもしれない．やがて人とモノとコトの過剰さがとりあえずその始原を忘れられるところまでドライブできたなら，建築は，それよりもっと大きな「プロジェクト」としての固有性を持ち始めることができるのではないか．文化とはその始原を忘れられるくらいに，容易に言語化できないくらいに，共同体の内部で了解されたもののはずだ．いま，ミニマムさよりもマキシマムさこそが，プロジェクトが固有の文化に育っていくためには必要だ．このようなプロジェクトでは，次から次へと学ばれたこととつくられたものが加算され，加算されればされるほどプロジェクトの固有性は強化され豊かになっていく．だからここには何を学ぶべきか，何をつくるべきかについての明確なコンセプトは予め存在し得ない．まずはつくってみよう．
僕たちには，先行する世界（過去）とあり得るかもしれない世界（未来）を架橋する愚直なアンチコンセプトな手つきこそが必要なのではないか．学ぶこととつくることがほとんど同じ次元で語られた時，どんなモノやコトがその場に加わっても許される空間，どれでも，誰もがその存在を等価に認め合い，共存できるような，よりよく生きるための日常をつくることになるのではないか．学ぶこととつくることをめぐって．

つくること／使うこと

浅子佳英

建築をひとことで言い表せるような単純なコンセプトに収束させない．いや，そもそも多様な人びとと多様な活動を行える場所をつくりたいのであれば，そんなことはできない．
美術館や展示の設計に経験豊富な西澤徹夫と，実際にアーティストインレジデンスを運営している森純平と，商業施設や公共空間のリサーチや設計と編集が専門の僕という重なってはいるけれど専門がバラバラの3人が，プロジェクトの最初の段階から共有していたのは，この微かな手掛かりだったと思う．ただ難しいのは，このようなメディア発表の場では常にコンセプトが求められることだ．しかし，建物が竣工し，写真を撮影し，建築家がコンセプトを書き，雑誌で発表するその瞬間だけが特権的に扱われることに以前からどうしようもなく違和感を覚えていた．まちに開いたと謳われているガラス張りの住宅が実際に訪れてみると，往々にしてカーテンが閉め切られていることには矛盾があると思ったし，小さな住宅ならともかく，巨大な建築をひとつのコンセプトに収束させた結果，たとえばプランも外構も外壁も家具もカーテンの柄までをも水玉にしてしまうことの理由は，僕にはあると思えなかった．それらは，雑誌発表こそが目的になってしまっていて，実際に使われる竣工した後の長い長い時間を何も担保していないし，なんなら犠牲にしてしまっているように感じていたからだ．
ひとつのコンセプトで設計すること．それ自体が実はモダニズムの産物だろう．そもそもそれは近代的な社会の中で生まれている．だから，ひとつのコンセプトで設計することも，社会が近代化していく中ではとても重要だったと思う．ただ，2021年である現在は，ポストモダンと呼ばれるようになった1970年代から既に約50年も経ているのだ．現在僕たちは，複数の文化や価値観が同じ場所と時間を共存する世界に生きている．ブレグジットなどが起こるのも，各地域で閉じていた文化や社会が，グローバリズムやインターネットなどによってどうしようもなく交わらざる

開館記念展と関連し，八戸発祥のデコトラ（デコレーショントラック）8台が集結して，ジャイアントルームで写真家の田附勝とデコトラドライバー5人によるトークイベントが開催された．

を得なくなったことへの反動という側面が大きいだろう．意識しなくとも，建築は否応なくその次代を刻印する．設計当初から決まったひとつのコンセプトはなかったけれど，5年間プロジェクトを進めてきた中で，仮にコンセプトと呼べるようなものがあるとするならば，「ダイバーシティとインクルージョン」と「遊ぶための場所」というふたつになるんじゃないかと思う．

ダイバーシティとインクルージョン

2016年のプロポーザルから始まったこのプロジェクトは，設計期間中がちょうどブレグジット（2016年）やトランプ就任（2017年）と重なっていた．設計中，ジェンダーレスに対応したトイレ以外では直接的にそれらが反映されることはなかったけれど，無縁でもなかったと思う．当時はポリティカル・コレクトネスがさまざまな場所で議論され，LGBTsについてもちょうど日本でも話題になり始めた頃だった．

八戸市美術館は，複数の人びとの活動が，時に一緒に，時にバラバラに行えることを目指して設計された．具体的には，この美術館はジャイアントルームと専門性の高い個室群という2種類の空間でできているのだけれど，ジャイアントルームはそのサイズによって，専門性の高い個室群は部屋の多様性によってそれを可能にしている．もうひとつ，山口情報芸術センター「YCAM」やサンフランシスコにある科学博物館「Exploratorium」をリサーチする中でスタッフと観客の垣根を取り払うということも重要な設計の手掛かりとなった．観客が参加するうちにいつしか，スタッフや作家になるような場所になることを目指して設計してきた．より正直に言えば，リサーチする中で見てきた美術館の裏側や，展示設営中の様子がとても面白く学びが多かったので，それを八戸で見せたくなったのだ．

このようにして，後付けではあるけれど，八戸市美術館は，スタッフと観客が一方向的な関係ではなく相互に学ぶことができ，「複数の文化や価値観が同じ場所と時間を共存する社会の中でどのような建築が可能なのか」という問いに真摯に答えた，きわめて現在的な建築になったのではないかと思う．

遊ぶための場所

しかし，いくら僕たちが多様な人びとの多様な活動ができるように設計したとしても，いきなり不特定多数の人が使うことは難しい．新しい建築であればなおさらだ．

ゲーム研究者の井上明人が述べているように，初期のコンピュータ・ゲームを牽引したゲームセンターは，100円で10分間程度遊ぶという制約上，ゲームの魅力とルールをわずか数分間で伝えなければならなかった．その中で膨大なノウハウが蓄積された．マップのデザインを通じて暗黙のうちに意図した行動を取ってもらう「レベルデザイン」はそのための手法のひとつだが，有名なスーパーマリオブラザーズでは，ゲームマップの中に「覚える場所」，「実際遊ぶ場所」，「応用する場所」，「極める場所」が周到に配置されており，「プレイヤーは単にマップの中を走り回っているだけで，知らず知らずのうちにゲームの遊び方を身につけていく」[*3]．しかもそれは，ゲームクリエイターの宮本茂によってきわめて自覚的にそう設計されていた．そして，八戸市美術館でも一部にはレベルデザインとほぼ同じ手法が導入されている．たとえば，ギャラリー1と2は，市民ギャラリーとして使用することを想定し，設計された．そのため，展示設営が容易に行えるように，壁面にはピクチャーレールを設け，照明もライン型のLEDを点灯するだけで壁面照度が取れるようにした．ただ，その一方で壁面には合板を仕込んであるし，ライン型のLEDの隣にはダクトレールも通してある．市民がより高度な展示を行いたいと思えばいつでも自分で壁にビスを打ち，スポットライトで配光することも可能にしてある．さらに，天井にはケーブルラックを全面に設けているので，壁面展示だけではなく，吊物を使った展示も可能だし，プロジェクターやモニターやスピーカーなどの映像音声装置を使用した，より現代的な展示を行うことも容易にしてある．要は，ここで展示を行う市民が，知らず知らずのうちに，だんだんと展示の方法を身に付けていけるような場所になることを想像し，設計されている．

「遊び」は，「学び」と切り離せない．井上が言うように，「人が遊んだり，ゲームをしたりする時に，その人は間違いなく『何か』を学んだり，習熟する機会を得ている．鬼ごっこは身体トレーニングになるし，ままごとは

ジャイアントルームで田村友一郎の作品を設営する
ミラクルファクトリー.

美術館スタッフの研修風景.

社会的な対人技能の獲得に貢献している」[*4].

学び，つくり，使うこと．遊びはこれらを串刺しにする．理念が正しくとも，それが現実とあまりにもかけ離れていたり，現実に落とし込む作業を怠れば，いつしか人びとからその理念ごと捨てられてしまうだろう．今，世界中の政治で起こっているのは基本的にこの問題ではないか．
理念を理念のまま取っておくのではなく，現実の中から理念を掴み取ること．そのために，学び，つくり，使い続けること．それはいつしか他者と共に創造的に遊ぶ場所を生み出すための壮大な理念への一歩になるかもしれない．少なくとも僕はそんな未来を夢想しながら5年間このプロジェクトを続けてきた．でもまだ今はこれが理念だと言うことはできない．たぶん，遊ぶ人がいなければゲームが存在しないのと同じように，この建築も遊ぶ人がいて初めて完成する．だからこそ，単に美術館を訪問するだけではなく，なにかしらのかたちで人びとがこの美術館で遊んでくれることを願っている．

使うこと／学ぶこと

森純平

2021/10/25　オープニング8日前．設営中盤のジャイアントルーム．受付担当のカネイリの職員が「おもてなし」講座で学ぶ横で，設営をする職人とアーティストたち．その奥の長机の端では田村友一郎チームがモニターを持ち込んで映像編集を行っている．あくせく歩き回り会場構成の管理をするPRINT AND BUILDスタッフ小泉．東京での課題講評にオンラインで参加する西澤．中心部ではブルーシートの上に，設営作品や道具が整然と並べられている．奥で作品の汚し作業をするミラクルファクトリーの面々．ホワイトキューブの大澤作品の設置に関して，他の作家がアドバイスをする瞬間，ふと2階の廊下から様子を眺めている佐藤館長．アーティストが「八戸ポータルミュージアム はっち」のレジデンスに滞在し美術館に通っている，特別だけれどこれからの当たり前になるであろう日常．

11/3　グランドオープン．カーテンセレモニーと題して，カーテンを閉め切ってジャイアントルームを内側と外側に分けることによって，建物とまちの境界を内側にずらしている．カーテンが開いた瞬間，獅子舞が一斉に舞い踊りながら飛び出してくる．わっと湧く歓声．本来であれば三社大祭で演じられる霊神楽一斉歯打ちが行われ，各展示室におはやしを鳴り響かせながらパレードが行われている．

11/23　デコトラミーティグ．マエニワにまねかれた8台のデコトラをガラスごしに眺められるよう，マエニワに向かって斜めに設置をされた88脚の椅子．ミーティーングを前に徐々に集まってくるデコトラ，ライトの点灯で喜ぶ市民の様子を見つめるドライバーたち．

12/12　建築のトークイベントで客席から，「企画ってどうしたら提案できるんですか?」との質問．早速使うための場所として認識されているようだ．

＊1：大竹弘二，『公開性の根源 秘密政治の系譜学』（太田出版，2018年，p.14）
＊2：青木淳，「原っぱと遊園地」（本誌0112）
＊3：井上明人，『ゲームフィケーション〈ゲームがビジネスを変える〉』（NHK出版，2012年，p.167）
＊4：井上明人，「ゲームはどのように社会の問題となるのか」（東浩紀 編，『ゲンロン8 ゲームの時代』，ゲンロン，2018年）

八戸市美術館

設計　西澤徹夫建築事務所　PRINT AND BUILD　森純平

施工　鴻池組・田名部組・東復建設 特定建設工事共同企業体

所在地　青森県八戸市

HACHINOHE ART MUSEUM
architects: TEZZO NISHIZAWA ARCHITECTS　PRINT AND BUILD　JUNPEI MORI

敷地北側のオクニワからジャイアントルームを見る．ジャイアントルームでのさまざまな活動が立面に現れる．旧税務署庁舎を改修した旧八戸市美術館のあった敷地に加え，隣接する市有地，さらに旧青森銀行八戸支店の敷地を一体とした協調開発によって建て替えられた．

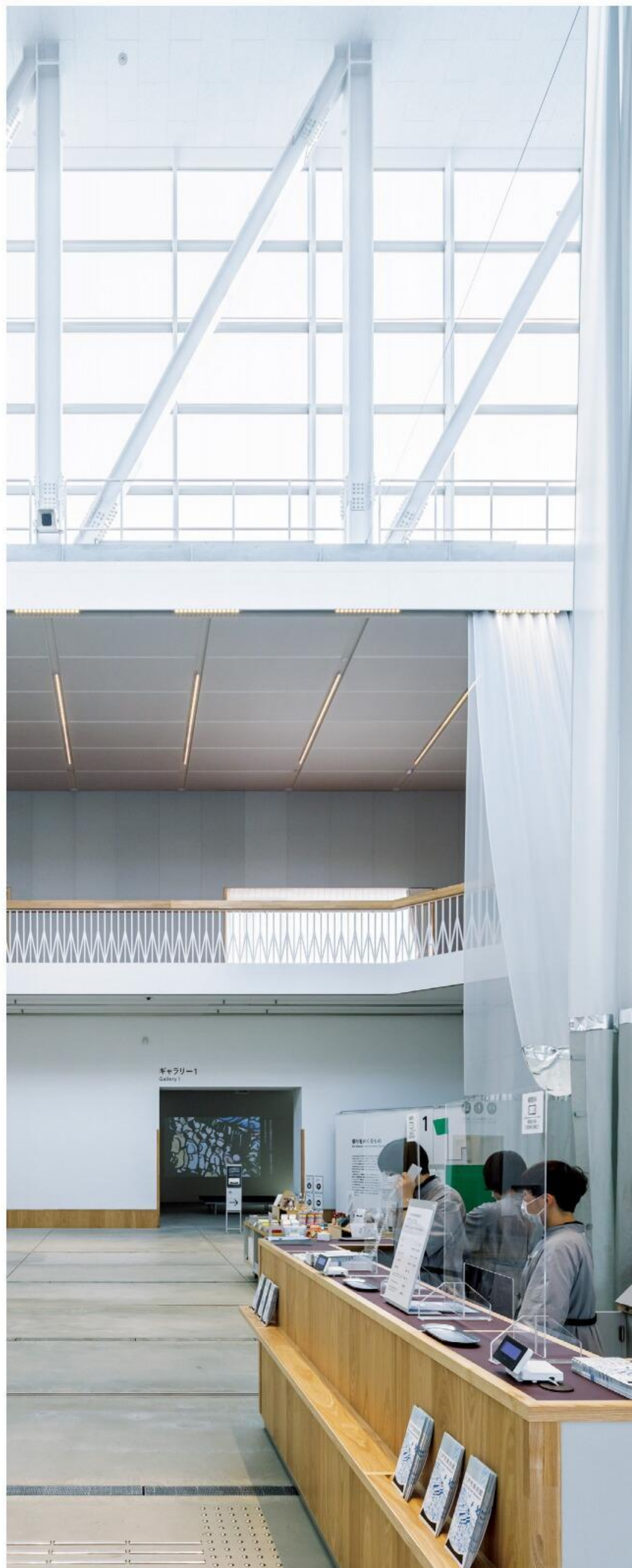
ジャイアントルーム．幅18m，長さ45m，最高天井高さ17.6m．エントランスホールや展示，イベントスペース，休憩場所など，さまざまな活動に利用される，チケットを持たずに入れる場所．壁・天井の吸音材，カーテンの吸音効果によって，複数の活動が同居できる音環境とした．

2階よりジャイアントルーム長手方向を見る．ジャイアントルームはカーテンと4台の移動棚によって大空間を分割．カーテンの設えや移動収納棚の簡単な移動で小部屋や天蓋のような場所をつくる．キールトラスのハイサイドライトから採光．

2階からのジャイアントルーム見下ろし．テーブル，ワークショップツールボックスなどの什器はすべて可動．家具や展示に使用する備品等を収納できる移動収納棚の扉はホワイトボード．床輻射冷暖房と床吹き出しの併用による居住域空調を行う．

4点：ジャイアントルームから個室群側を見る連続立面．上はジャイアントルーム東端．
ホワイトキューブの展示を拡張して利用することもある．

収納棚の間をプロジェクトルームとして使用している例．
カーテンを閉めると軽作業や打ち合わせも行える．

ジャイアントルームよりスタジオを見る．オープニング展ではこのエリアは休憩スペースとして利用．写真左の廊下は南側の街区からのアクセスが可能な南エントランスに続く．

インフォメーションカウンターよりギャラリー方向を見る．
2階バルコニーも無料ゾーン．2階バルコニーからはテラスに出ることができる．

スタジオからジャイアントルームを見る．スライディングウォールを全面開放することでジャイアントルームと一体的に使用できる．パフォーミングアーツや講演，制作などに使用できる吸音・遮音性能を備え，壁はビス打ちも可能なベニヤ張り．天井高さは9m.

ギャラリー 1よりジャイアントルームを見る．ギャラリーは主に市民の利用が想定されるため，簡易に展示できるように2室に分け，ピクチャーレールや吊りものができる折板天井を設えた．

アトリエ．木工作業やアーティストの制作などに使用される．荷捌室，搬出入口（写真左の開口奥）と隣接することで大型資材の搬入や製作物の移動もスムーズに行える．壁面には資材立て掛けや棚などの造作のための竪木見切りを設置．

ワークショップルーム．コレクションラボと行き来できる出入口を設け，版画や工作教室などのワークショップと展示の連携を可能とした．壁面には収納や作品掲示のための造作を設けた．

ホワイトキューブからジャイアントルームを見る．ダクトレール2列（器具調光＋回路調光）を抱き合わせた金物グリッド天井に薄く高い仮設壁を簡単に設置できる仕組みにより，さまざまな要求に対応できる展示室とした．

コレクションラボからジャイアントルームを見る．日本画などの収蔵作品を展示できる床・壁・天井がグレーの部屋．ガラスはグレーの紫外線カットフィルム貼り．学生が座って模写をすることも想定されており，床はカーペットとした．

展示室および搬出入部分平面詳細　縮尺1/80

展示室平面詳細　縮尺1/80

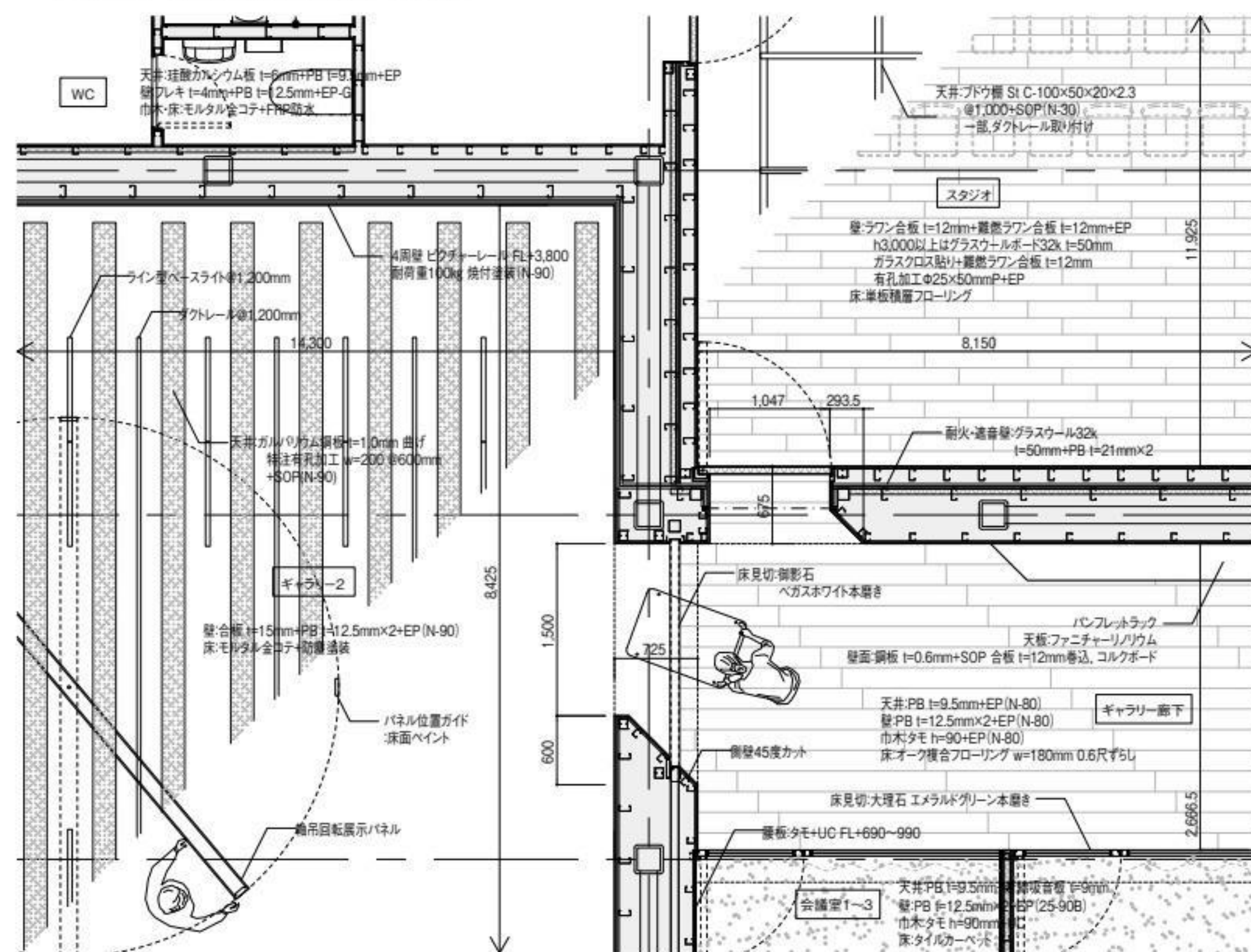
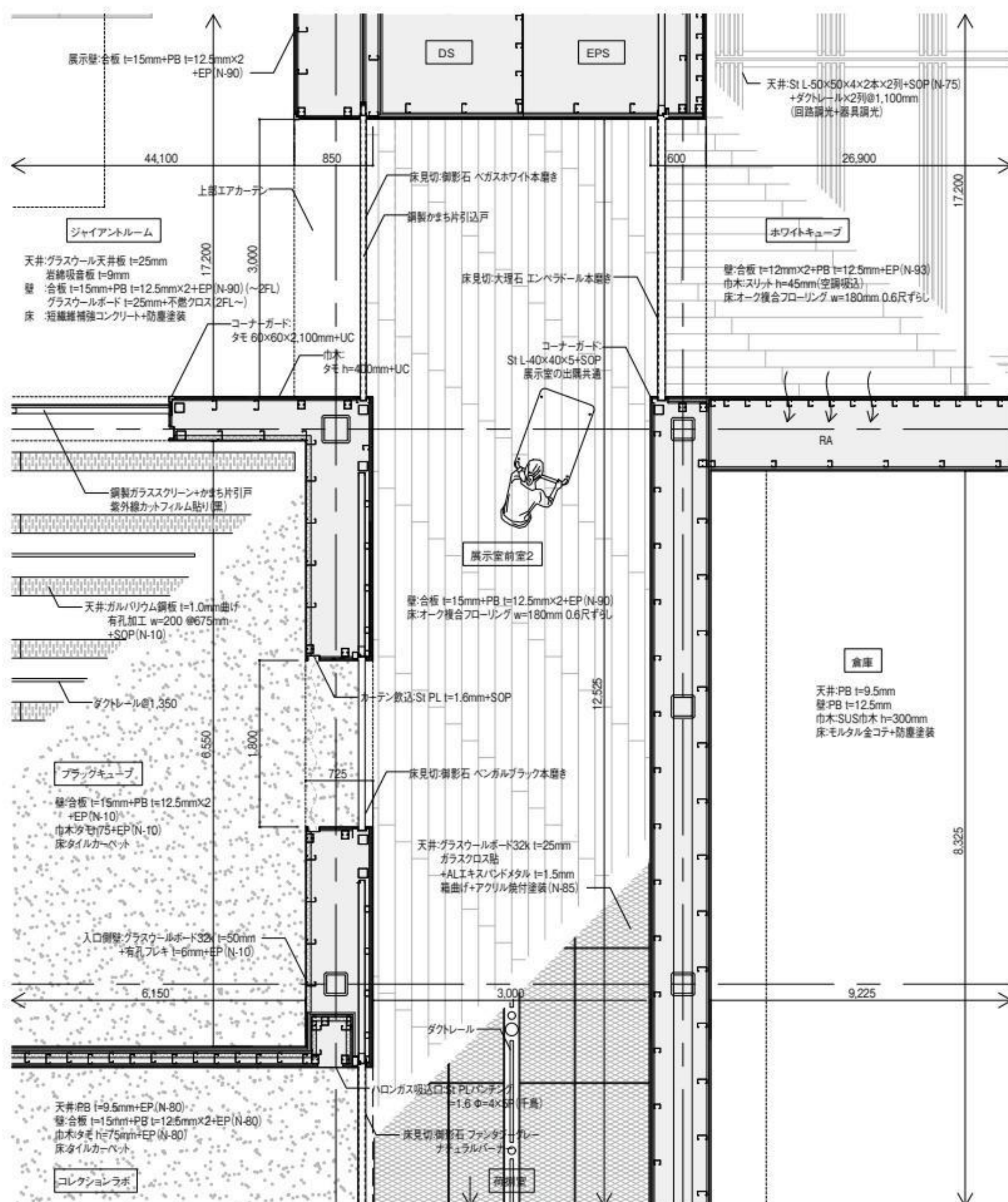
トイレは将来的なジェンダーレス化も視野に，男／女の間仕切り壁を移動，撤去できる計画とした．

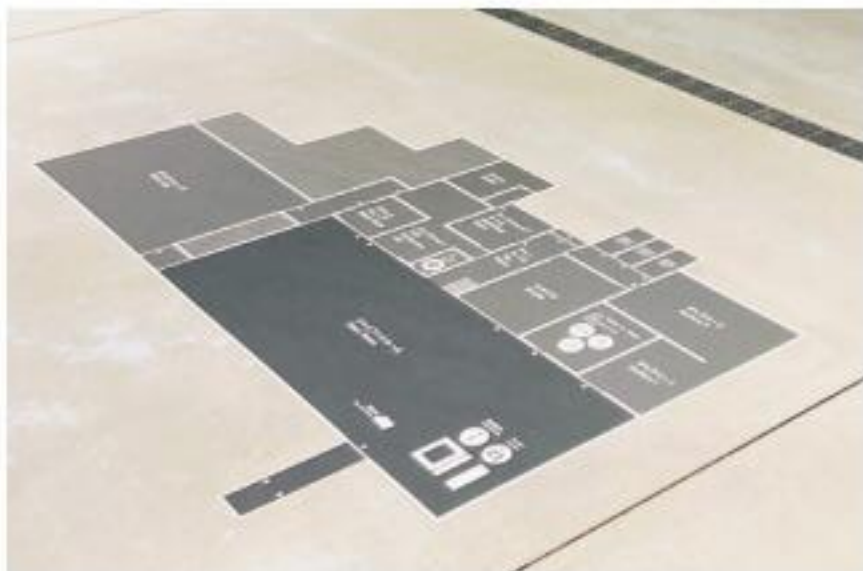
ギャラリー 1よりギャラリー 2を見る．ギャラリー 2には広場側への開口部を設けた．*

ギャラリー廊下よりギャラリー 2を見る．右にスタジオ入口．左の会議室は控室や楽屋としても機能．

南側エントランスよりティールームを見る．コミュニケーションの場としてキッチンを設えた．

2階バルコニーとテラスに繋がるY字階段．

展示室前室2．左にブラックキューブ．搬出入経路だが展示スペースとしても使用可能．各室間のバッファとなるため吸音材やエアカーテンなどの機能を設けた．*

移動収納棚には時計やホワイトボードなどの機能が付く．カーテンは上が透過，下が不透過で脱着式．

ジャイアントルーム内作業テーブル．造作家具も設計チームによる設計．

床に描かれた館内マップ．＊

北エントランスへのアプローチ．コーナーに設けたカウンター越しに来館者や受付スタッフが見える．

外構の「さんかく」，「まる」の植栽とベンチで居場所と動線をつくる．

青森銀行や市庁舎への動線をきっかけに，舗装を切り替え．

天井:
ALカットパネル t=2mm
電解着色

北エントランス

舗装:
インターロッキングブロック
SAZARE 細石 エコロアクア
研磨 山桜 F-31(日本興業)

ベンチ:
コンクリート打ち放し

軒天:
ALエキスパンドメタル t=2mm
lw152.4×sw60
電解着色

ALガラススクリーン
h=1,920mm,2,465mm

ペリメーターヒーター

耐火塗装

コンクリート誘発目地

収納付きベンチ
天板:タモ集成材 t=25mm+UC
側板:タモ突板+UC

カウンター
天板:タモ集成材 t=25mm+UC
側板:タモ突板+UC

床吹き出し空調スリット
一部,コンセントボックス設置
@2,500mm, 3,000mm

館内マップ

総合案内
天板:ファニチャーリノリウム (burgundy)
大手タモ+UC
側板:タモ突板 /メラミン化粧板

コンセント
取り出し口

作業長机 天板:メラミン化粧板 大手タモ+UC
脚部:St □-40×40×2.3+メラミン焼付塗装

ジャイアントルーム

天井:グラスウール天井板 t=25mm
岩綿吸音板 t=9mm
ハイサイドライト:ALガラススクリーン
w=43,950mm h=6,535mm
壁 :合板 t=15mm+PB t=12.5mm×2+EP(N-90) (~2FL)
グラスウールボード t=25mm+不燃クロス(2FL~)
床 :短繊維補強コンクリート+防塵塗装

移動収納棚レール
L=44,100 @3,000mm

オーダークリッパー

特注カーテン w=2,700 h=9,000mm 32枚
レースオーガンジー(1FL+2,400~)
厚手ポリエステル素材(~1FL+2,400)
アルミ箔ラミネート加工生地(脱着部)

移動展示壁 w=2,400mm h=2,400mm
側面:シナ合板 t=18mm+EP(N-90)
脚部:St □-40×40×2.3mm+メラミン焼付塗装

移動収納棚 w=6,100 h=2,400 d=1,100mm
側板:メラミン化粧板/ホワイトボード
/シナ合板 t=18mm+t=4mm+EP(N-90)

ショップ什器
天板:ファニチャーリノリウム (olive)
大手タモ+UC
側板:メラミン化粧板

ジャイアントルーム平面詳細　縮尺1/80

特注タイル笠木
180×360×t=30mm

座面:
ジャラ94×44

A-A'断面　縮尺1/80

まる

野芝

市庁舎

ショートカット動線

ウッドデッキ:
ジャラ105×30

レインシューター
+コンクリートボーダー

番町線

特注タイル笠木
180×360×t=30mm

立上り面:
コンクリート打ち放し

特注タイル笠木
180×360×t=30mm

さんかく

ベンチ座面:
ジャラ 94×44

野芝

舗装:インターロッキングブロック
ランドサーマス エコロアクア ショットブラスト
ライトブラウン Tesera(日本興業)

自転車輪止め 18台分
St-Φ34×3.2mm+塗装(27-85H)

特注タイル笠木
180×360×t=30mm

ウッドデッキ:
ジャラ105×30

野芝

舗装貼り分け

舗装:インターロッキングブロック
SAZARE 細石 エコロアクア
研磨 錆 F-31(日本興業)

交差点

B-B'断面　縮尺1/80

外構平面詳細　縮尺1/80

ラーニング・プログラムの拠点としての美術館

旧八戸市美術館は旧税務署庁舎を改装するかたちで昭和61（1986）年に開館．施設の老朽化や新たな美術館を整備する機運が高まったことを受け，平成28（2016）年に「八戸市新美術館整備基本構想」が策定され，青森銀行との協調開発や八戸学院大学との連携を盛り込み，社会資本整備総合交付金を活用して建て替えることとなった．

八戸には地域の風俗や民俗に根ざした深い文化があり，特異で美しい風景が存在する．また八戸市は，観光案内所や展示スペース，アーティスト・イン・レジデンスなどが入った「ポータルミュージアム はっち」，市自らが運営する書店「八戸ブックセンター」など，中心部の文化施設の整備にこれまでも力を入れており，さらに「八戸工場大学」や「南郷アートプロジェクト」など，美術館の外でのアートプロジェクトも行っていた．新美術館は，これらの文化資源を種として拾い上げ，調査研究することで実らせ，新しく価値付けすることで育て，そして誰でもアクセスできる形に収穫＝展示・収蔵することが目指された．ここは，誰もが何かについての専門家であるという認識のもと，市民や美術館スタッフ，アーティストが立場を入れ替えながらさまざまな活動が生まれ，誰もが互いに学び合い，それがまた何かをつくり出すことのきっかけになったり，作品になったりするようなラーニング・プログラムの拠点としての美術館である．

ラーニングという概念は，近年美術館を取り巻く社会的環境の変化に対応して，展覧会だけではなく，広く市民と対話しながら文化創造していく世界的な潮流のひとつである．美術館に限らず，図書館や劇場，市庁舎等でも多くの事例が増えてきているが，美術館において何かを「使う」「学ぶ」，そして「つくる」ということの重要性は特に顕著であり，私たちはどのような建築的な設えや空間のタイプが必要かをさまざまなリサーチやインタビューなども踏まえながら検討してきた．

ジャイアントルームと個室群

この新しい美術館には2種類の空間がある．教える人と学ぶ人が同じ場を共有し，互いの活動が可視化される巨大な一室空間「ジャイアントルーム」と，専門的に深く学び，違う専門性に偶然出会うことができる「個室群」である．ジャイアントルームは可動間仕切りや家具により，活動に合わせてレイアウトを変えることができ，常に様相が変化する空間である．「個室群」は展示や制作，ワークショップといったさまざまな機能に特化してより専門的な活動を支援し促し実現できるように設えた小さな部屋の集合体である．個室群にはジャイアントルームから直接入る動線とは別に，個室群同士を連結させた動線も設けてあり，展示や活動に合わせて，さまざまなルートが設定できるように計画している．ふたつの空間は相互に補完しあい，はみ出しあいながら，活動全体が「プロジェクト」としか呼びようのないものになっていく．

（西澤徹夫＋浅子佳英＋森純平）

西側外観．外構に面して設けた大扉はジャイアントルームへの大物の搬入やイベント時の一体利用を想定．

北側俯瞰．八戸市美術館建設中に，敷地西側にあった青森銀行八戸支店を北側（左下）に移転し，
西側を広場として開放した．これまで中心市街地に少なかった座ったり休憩できる場所となる．

設計　設計コンセプト　西澤徹夫　浅子佳英　森純平
　　　建築　西澤徹夫建築事務所・タカバンスタジオ（現・PRINT AND BUILD）設計共同体
　　　構造　オーノJAPAN
　　　設備　森村設計
施工　建築　鴻池組・田名部組・東復建設 特定建設工事共同企業体
　　　電気設備　ユアテック・溝口電気 特定建設工事共同企業体
　　　機械設備　ダイダン・サカモト・葵 特定建設工事共同体
　　　外構　穂積建設工業
敷地面積　6,732.14m²
建築面積　3,080.21m²
延床面積　4,844.95m²
階数　地上3階／構造　鉄骨造
工期　2019年4月〜2020年12月（本棟）
　　　2021年4月〜9月（外構）
撮影　新建築社写真部
*撮影　西澤徹夫建築事務所・タカバンスタジオ（現・PRINT AND BUILD）設計共同体
（データシート210頁）

これからの美術館に向けて

社会的な状況や，そこで展示される美術作品の傾向によって，美術館もまた変化してきた．現代では，物質だけでなく，人が関係することによってつくり出される美術作品という傾向が見られている．そのため，従来の「もの」の展示が中心だった美術館に加えて，「ひと」が活動する空間を大きく確保する，「もの」や「こと」を生み出す美術館が必要となるだろう．

八戸市は「アートのまちづくり」を推進しており，「八戸ポータルミュージアム はっち」などの公共文化拠点の整備と共に，まちなかに活動を広げるアートプロジェクトを行ってきた．建て替えに際して，これらの活動を統合するように，2016年に新美術館整備基本構想を策定，美術館・アートセンター・エデュケーションセンターという3つの機能を持った，八戸ならではの新しいかたちの美術館を目指すこととなった．

2017年に行われた設計者選定プロポーザルで選定された提案は，ジャイアントルームと名付けた人びとの活動のための巨大な空間が中心に位置付けられていることと共に，ホワイトキューブやブラックキューブといった特徴的な活動に向けた諸室が機能的に配置されていることが高く評価された．完成した美術館は，その平面構成をほぼそのまま実現しただけでなく，名称もいくつかの諸室にそのまま採用している．

現在，八戸市美術館では，展覧会とプロジェクトというふたつを活動の主軸に置いている．展覧会は，気軽にさまざまなアートに触れられる機会を提供するもので，従来の「もの」としての作品の展示が中心となる．一方のプロジェクトは，アートを通して人と人が出会い，学び，一緒に活動し，作品だけでなく新たな価値を生み出すことであり，ワークショップやレクチャーなどの教育普及と呼ばれる活動だけでなく，「こと」としての作品へと繋がっていく．その意味でジャイアントルームは，エントランスホールや教育普及のための場であるだけに留まらず，「こと」としての作品を展示するための場でもある．また，約3,000点をはじめとするコレクションを収集，保管して調査研究を行うことも，重要な活動として継続していく．さらに，ここで生まれていく「もの」や「こと」についても，その収集，保管へと繋げていきたい．

こうしてこの美術館には，さまざまな大きさ，仕上げ，性能を持った，多様な場がつくられた．それをどのように使っていくのかを，建築計画を専門とする館長という立場から考えると，駅舎や学校が改修により美術館として使われているように，また，住宅や店舗がアートプロジェクトの展示や活動に使われているように，美術のための場においては，当初の計画通りに建築を使うことだけが必ずしも正解とは限らない．時には計画された使い方に従いつつ，時にはそれを裏切りつつ，建築を常に観察しながら，そこに美術のための場をつくっていく．そのことは，この美術館において，市民，アーティスト，スタッフと共に，これからも建築という行為が継続していくことを意味するだろう．　（佐藤慎也／八戸市美術館館長，日本大学理工学部建築学科教授）

南側外観夕景.

東西断面　縮尺1/150

市庁舎
県道
青森銀行駐車場
青森銀行
オクニワ
(山車)
マエニワ
(山車)
まる
さんかく
北エントランス
総合案内
移動収納棚
ジャイアントルーム
カーテン
企画準備室
移動収納棚
展示壁
ホワイトキューブ
ギャラリー1
トイレ
スタジオ
EV
コレクションラボ
ブラックキューブ
展示室前室2
倉庫
機械室
ティールーム
ワークショップルーム
コレクションラボ
荷捌室
搬出入口
ギャラリー廊下
ギャラリー2
軸吊回転展示パネル
会議室1〜3
南エントランス
アトリエ
EV
八戸ポータルミュージアム はっち
八戸ブックセンター
番町線

7,500 | 7,500 | 9,000 | 4,500 | 3,000 | 4,500 | 9,000 | 3,750 | 4,500 | 5,250 | 4,500 | 3,000 | 5,250 | 5,250

76,500

9,600 / 5,400 / 7,200 / 5,400 / 6,000 / 3,000 / 3,000 / 3,000 / 3,000 / 3,000

48,600

収蔵庫1
多目的室
多目的室
事務室
収蔵庫前室
収蔵庫2
テラス
一時保管庫

2階平面　縮尺1/1,500

1階平面　縮尺1/600

平場:
押えコンクリート t=80mm
超速硬化ウレタン塗膜防水
押出法ポリスチレンフォーム t=50mm
立上り:
超速硬化ウレタン塗膜防水

コンクリート笠木:
打放し+撥水材塗布

カラーガルバリウム鋼板 t=0.4mm
既存下地特殊平葺@500mm
珪酸カルシウム板 t=12mm
透湿防水シート
珪酸カルシウム板 t=35mm
吹付硬質ウレタンフォームA種1 t=60mm

天井:
ブドウ棚 St C-100×50×20×2.3mm
@1,000mm+SOP(N-30)
一部ダクトレール敷付け

平場:
ゴムチップ t=10mm
押えコンクリート t=80mm
超速硬化ウレタン塗膜防水
押出法ポリスチレンフォーム t=50mm
立上り:
超速硬化ウレタン塗膜防水

フェンス:
St □-25×25×2.3mm

テラス手摺:
St □-25×25×2.3mm

コンクリート笠木:
打放し+撥水材塗布

耐火・遮音壁:
グラスウール t=50mm+PB t=21mm×2

PB t=9.5mm+EP(N-80)
PBt=9.5mm+岩綿吸音板 t=9mm
PB t=12.5mm×2
+EP(N-80)
PB t=12.5mm×2+EP(25-90B)
ギャラリー廊下
腰板:
タモ+UC h=300
会議室1〜3
オーク複合
フローリング
床石見切
タイルカーペット
巾木:
タモ h=90mm+UC
基礎立上り:
コンクリート打放し
+撥水材塗布

3,000 | 3,000 | 3,000 | 3,000 | 3,000

21,000

本八戸駅
三八城公園
八戸市公会堂
八戸市庁舎
青森銀行
八戸市美術館
長根公園
八戸ポータルミュージアム はっち
八戸まちなか広場 マチニワ
八戸ブックセンター

配置　縮尺1/12,000

オクニワのリング状ベンチは小学生1クラス程度の生徒が車座になって座れるサイズ．高さを低くし，遊びを誘発することが意図された．*

ボッコーニ大学新キャンパス

設計　妹島和世＋西沢立衛／SANAA
施工　Grassi & Crespi＋Percassi
所在地　イタリア・ミラノ
BOCCONI NEW CAMPUS
architects: KAZUYO SEJIMA＋RYUE NISHIZAWA／SANAA

ミラノの旧市街地南端に建つボッコーニ大学の新キャンパス．敷地35,700m²のうち，40％を公園として市民に開放する．寄宿舎棟，レクリエーションセンター，マスター棟など6棟を新築し，各棟に囲まれた公園には回廊を計画．外壁には，プライバシー確保と日射制御のための波型アルミエキスパンドメタルを取り付けた．

エグゼクティブ棟．建物をセットバックさせ，通りに接した部分にはカフェや書店などを配置することで街に接続させる．**

エグゼクティブ棟に繋がる大講義室。

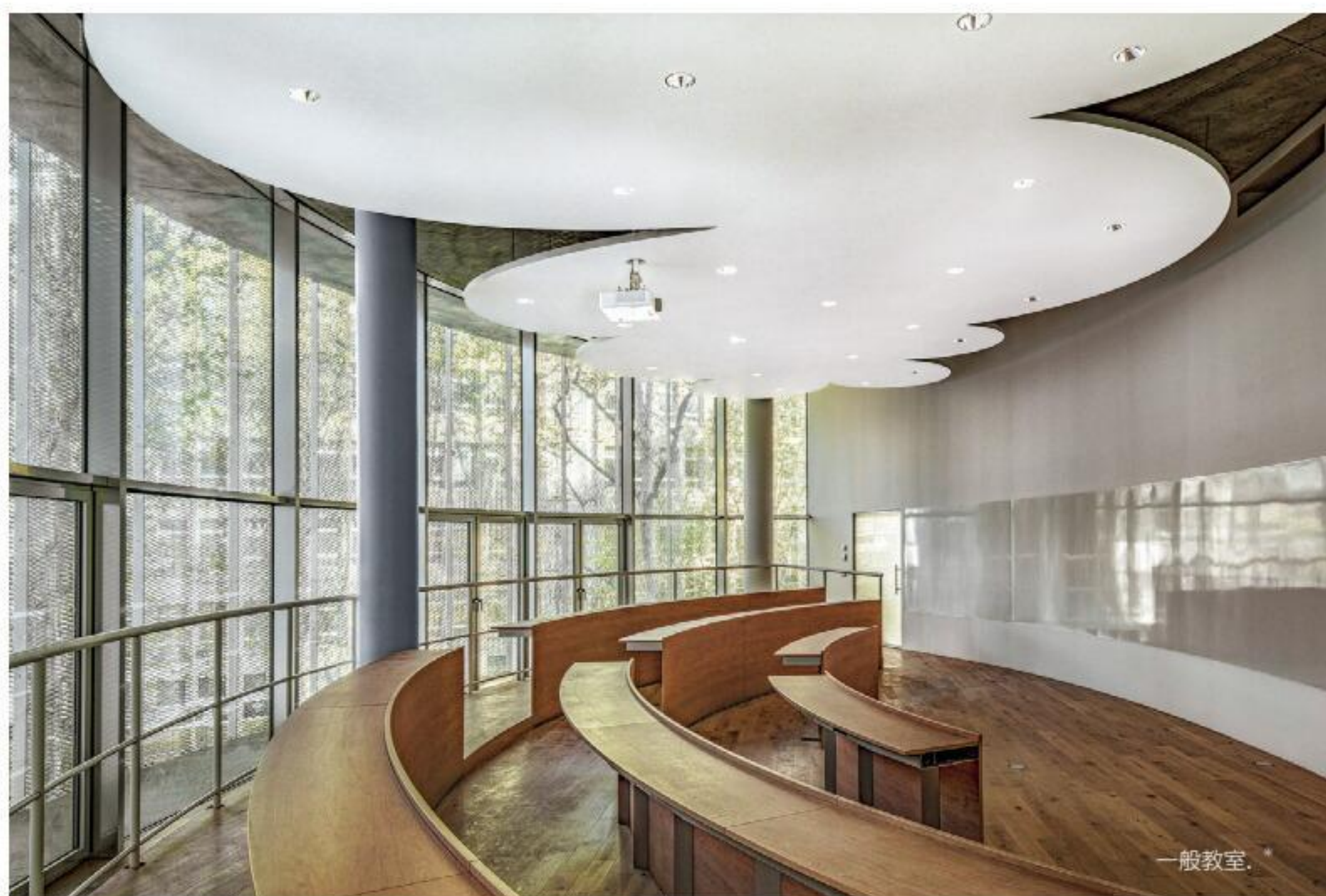
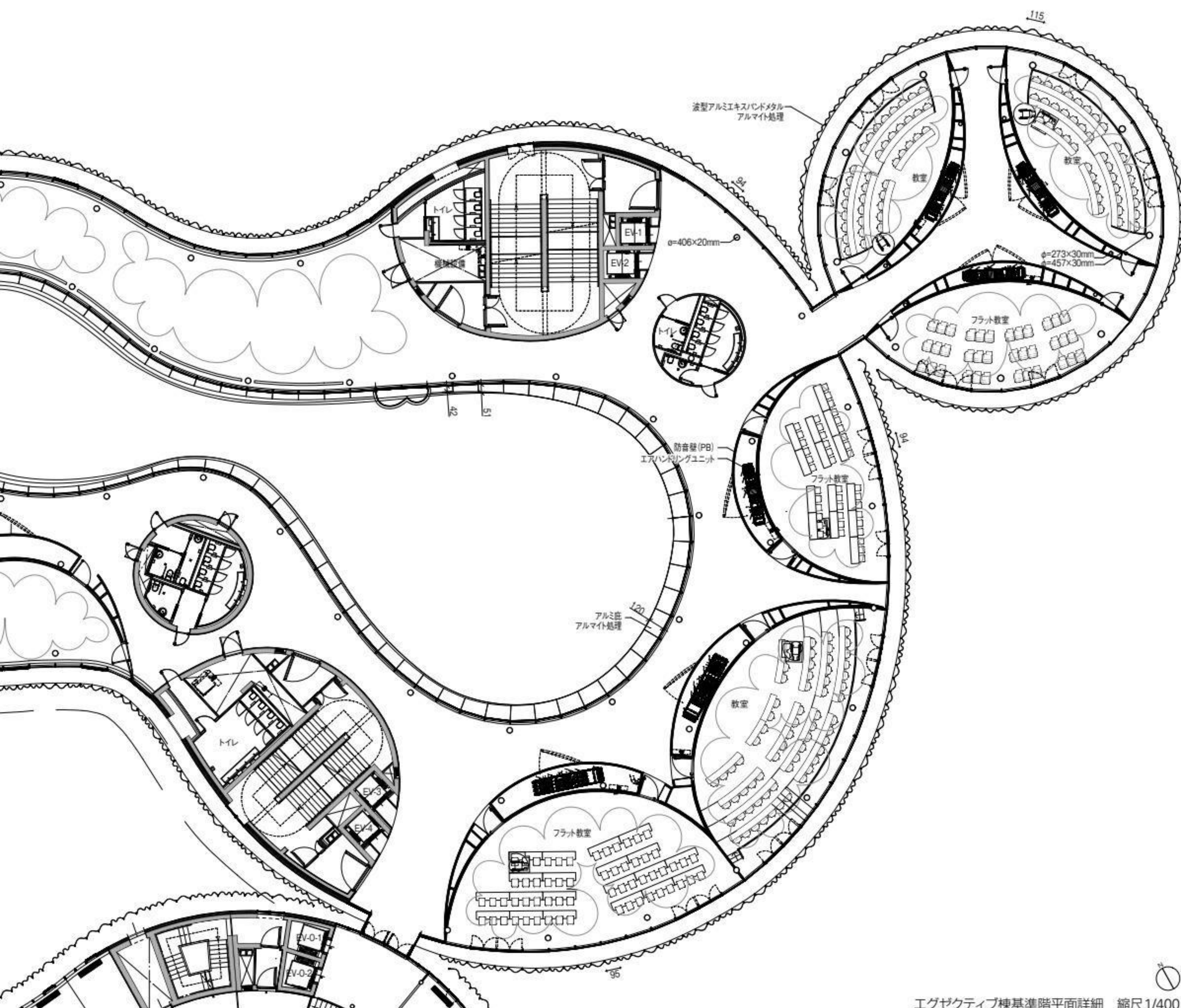
オフィス棟1階のカフェ．天井はコンクリート
打ち放し仕上げ．雲形の吸音板を設置．

廊下．中庭形式で大きく湾曲した平面は，奥行を浅くすることで棟の中心部まで日光が届く．

エグゼクティブ棟の中庭から公園部分を見る．

一般教室.*

マスター棟の2階からカステルバルコ通りを見る.

レクリエーションセンターのプールは地下に設け，1階に観客席を計画した.**

エグゼクティブ棟基準階平面詳細　縮尺1/400

街と繋がる公園としてのキャンパス

ボッコーニ大学新キャンパスは，ミラノの市内中心部と周辺部の間にある，かつての製乳工場の跡地にある．教育・管理棟とレクリエーションセンターと寄宿舎棟の3つで構成されており，大学関係者と一般の人びとの両方に開放される新しい公園となる敷地にある．市内中心部に向かって伸びていくボッコーニ大学のキャンパスの延長として位置付けられている．

教育・管理棟は，ボッコーニビジネススクールを構成する棟の複合体である．継続教育の学生向けのエグゼクティブ棟，若い学生のためのマスター棟，大学の管理オフィスと教授のオフィスが入るオフィス棟で構成され，各ヴォリュームは互いに軽く接触し，ある棟から次の棟への学生と教授の流れを可能にする．各ヴォリュームには，ミラノの典型的な建築のように中庭があり，それぞれがより大きなシステムの一部でありながら，独自の特徴を持つようにと考えられている．

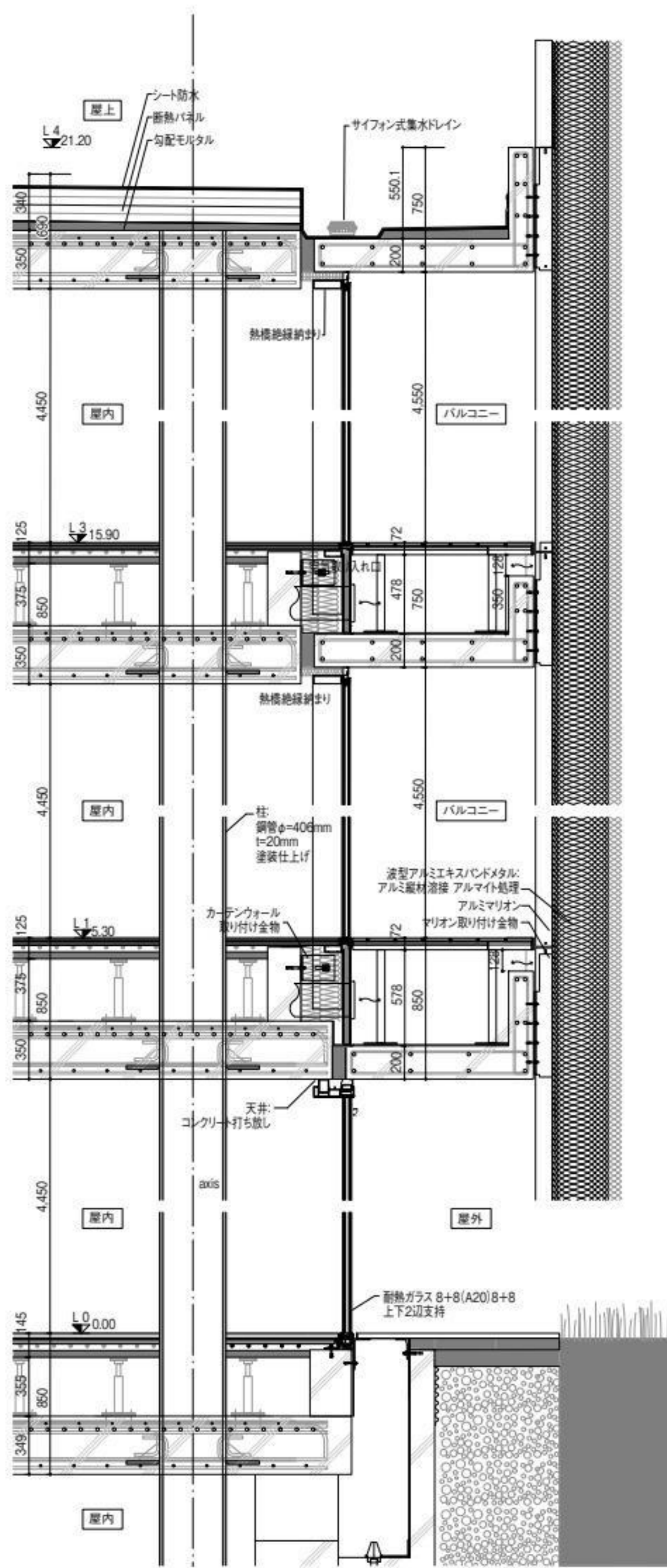
有機的な平面形の選択は，教育を中心に据える考えの自然な結果であった．教授は学生に囲まれ，同様に，教室は教授を中心に構築されている．エントランスロビーからは，地下にある大講義室が見える．ここは教育と学習の活動が，常に都市や公園で起こっていることに関連しているという考えをもっともよく示している．大講義室の席からは，外から大講義室を見る聴衆を建物の外と共に見ることができ，同時に，外部から建物に入る人は，大学で行われている教育活動をすぐに想像することができる．

すべてのフロアには，その周囲に沿ってバルコニーがあり，波状のアルミエキスパンドで覆われ，街との多孔質な関係を生み出している．建物周辺の通りからは，建物を透してから公園までが一望できる．インテリアスペース，中庭，インテリアスペース，そして公園へと抜けるシークエンスは，ここに沿って歩くすべての人に豊かな体験をもたらす．

トスカーナ通り沿いの敷地の南にある建物は，レクリエーションセンターである．地下にオリンピックサイズのプールとトレーニングプール，2階にジム，3階に多機能の競技場（バスケットボール，バレーボール等）がある．

寄宿舎棟は，プロジェクトでもっとも高い地上10階建ての建物である．学生と教授の両方のためのアパートで，ここでもミラノの住宅建築である中庭形式を参照している．

公園は日光や雨から庭の小道を保護する一連のポルティコによって形成されている．ポルティコは湾曲しながらすべての建物に触れそれらを接続する．歩行者は建物に辿り着けると共に，既存のキャンパスがある北東側から南西側，トスカーナ通りに向かって公園を横断することができる．

建物は持続可能性の厳格なパラメータに従った．ミラノの地下河川を暖房熱源として使用し，すべての屋根はソーラーパネルで覆われている．また，雨水は排水や灌漑用にリサイクルされる．LEEDプラチナ認証を取得しており，ゼロエネルギービルを達成している．（フランチェスカ・シンガー／SANAA）

断面詳細　縮尺1/50

設計　建築　SANAA
　　　アーキテクトレコード　Costa Zanibelli Associati
　　　ローカルアーキテクト　Progetto CMR Engineering Integrated Services
　　　構造　Studio di Ingegneria Pereira
　　　構造コンセプト　SAPS / Mutsuro Sasaki and Partners
　　　設備　Advanced Engineering
施工　Grassi & Cresp＋Percassi
敷地面積　35,700m^2
建築面積　教育棟：8,500m^2　レクリエーションセンター：3,500m^2
延床面積　65,000m^2
階数　地下1階　地上4階　一部，5階
構造　鉄骨柱＋鉄筋コンクリート造
工期　2017年4月～2019年11月（マスター棟・エグゼクティブ棟・オフィス棟）
　　　2017年4月～2020年10月（すべて）
撮影　SANAA　*鈴木久雄　**Filippo Fortis
（データシート211頁）

エグゼクティブ棟を見る．*

ロベルトサルファッティ通りから見る北側外観.

建築が街の立面をつくる

妹島和世

環境と建築のあり方

私はここ数年，環境の一要素となる建築のあり方について考えようと試みている．考えるというより，どちらかと言えば，それぞれのプロジェクトで，環境の一要素となる建築とはどういうものか，どうしたらそういう建築がつくれるか試行錯誤していると言った方が正確かもしれない．そんなことを考え始めたのは，2010年に始まり2015年に完成したグレイス・ファームズ（本誌1709）あたりからだと思うが，気が付いてみればちょうどそれに並行して，今回発表するボッコーニ大学新キャンパスとラ・サマリテーヌの計画を進めていたことになる．グレイス・ファームズでは，広大な美しい風景の中にどのように建築を立ち上げたらよいか考えた．全体を小さな建物に分割して点在させた方が，建築を樹々の中に潜り込ませて自然の中に溶け込ませられそうであったが，そうすると道もないところだから工事のために相当な面積の土を掘り起こすことになり，溶け込んでいるとは言い難いと思った．迷いながら，ある程度建物を集中させながら，同時に，そこにある地形に沿ったり樹木を避けて，うねるように流れる建物をつくった．大きな敷地なので，建築全体を色々なところから離れて見ることができるが，見る場所によってさまざまな体験となり，それは何か形の分からないものを見るような建築になったと思う．ある意味で，自然の中の風景の一要素のように建築が現れたと思う．

それに対して，ボッコーニ大学新キャンパスとラ・サマリテーヌは両者の敷地とも，美しい街の中にある．ミラノとパリの街の中の複数の街区にまたがる大きな建築を計画することになった時，既存の街並みと一緒に街をつくり上げる建築を考えたいと思った．それはつまり街の立面をつくる建築を考えることであったと思う．建築を考えることが同時に街の立面をつくることになる，そういう建築について考えたかった．街から建築が生まれ，建築が街をつくる．

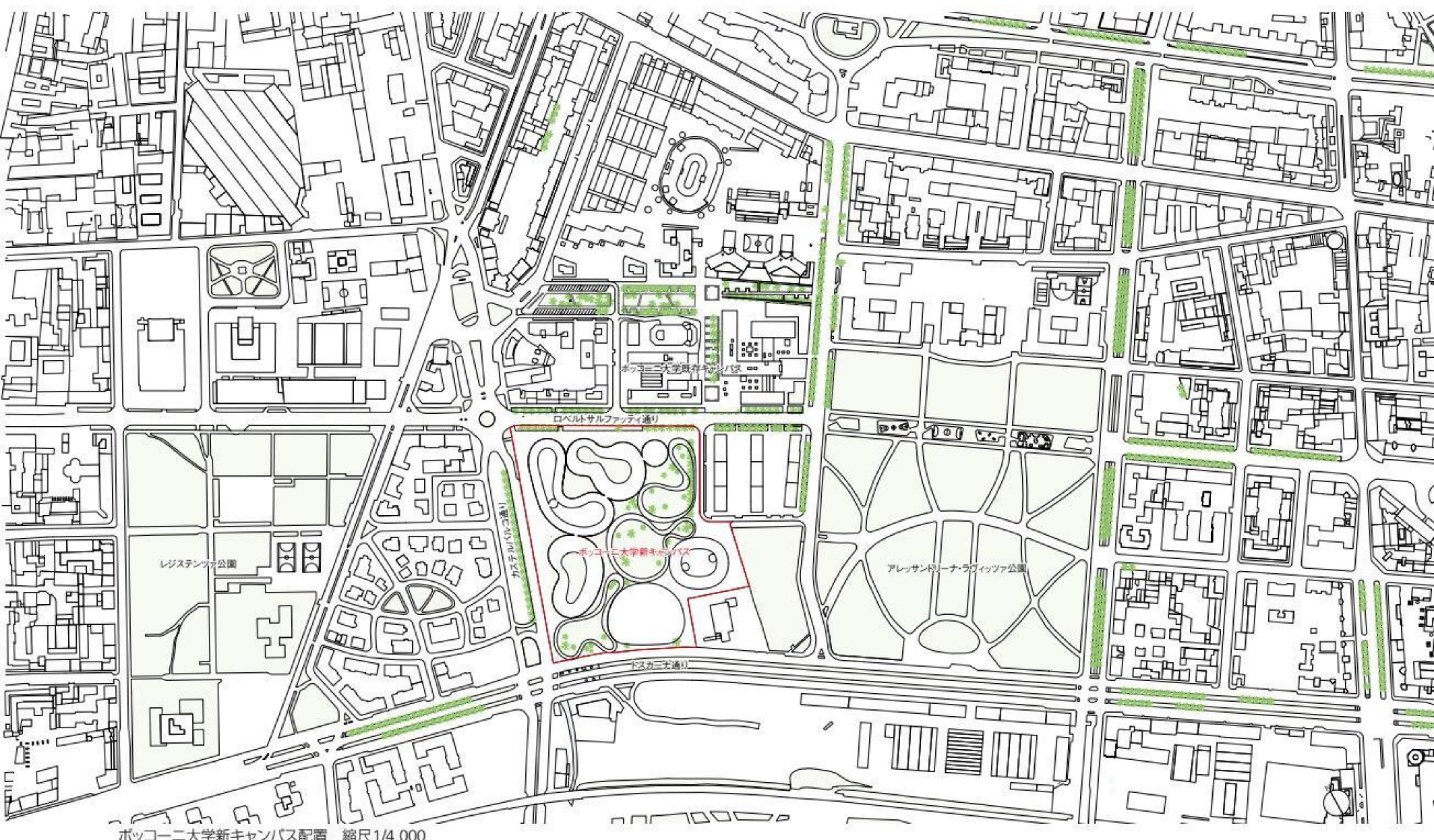
混ざり合う公園と建築：ボッコーニ大学新キャンパス

ミラノの旧市街は，基本的に，建築が立ち上がってそれがそのまま街をつくっている．1街区が1建築として，中心に中庭を持ちながら立つ構造の連続で街が出来上がっている．道路と中庭の間にポルティコ空間が走り，街と建築と中庭を繋いでいたりする．ボッコーニ大学新キャンパスの敷地はそういう旧市街の最後に位置し，幹線道路に面したその先には旧市街とはまったく違った独立的な建物が立ち並んでいる．敷地の隣には公園が位置し，当初からミラノ市に敷地の40％は公共の公園にするよう求められていた．敷地は約35,000m^{2}という大きさであった．そういう状況の中で私たちは，35,000m^{2}の大きさの，つまり敷地いっぱいの建築を立ち上げて，敷地いっぱいの35,000m^{2}の公園をつくろうとした．旧市街に立つのだから，庭の中に建築がポツンと建つという建ち方は考えられなかった．ただ，この周辺を見渡すと，35,000m^{2}を1ブロックとするのは大きすぎると感じて，プログラムから5つのブロックを想定した．そして35,000m^{2}の建築を立ち上げると，求められている40％の公園が取れなくなるから，建築であり，公園であるというスペースをつくるために敷地全体を光で満たそうと考えた．それで，できるだけ薄い奥行の室内と室外が反復する構成を考えた．そうすることで，公園と建築が混ざり合う．街路樹の後ろに奥行の薄い室内と人びとがその後ろにある明るい中庭により浮かび上がり，中庭の向こうにまたその先にある室内と人びとが浮かび上がり，さらにその奥に明るい公園が見える．それらが重なり合って，街の立面をつくる．もちろん室内にいる人は，逆に，室内と中庭のレイヤーの先の，ミラノの街の風景，道ゆく人びとと重なりながら大学の生活を送る．こうやって，35,000m^{2}の公園という建築が出来上がり，公園という建築が街の立面の一部をつくった．

街並みを担う新旧の立面：ラ・サマリテーヌ

ラ・サマリテーヌは，リヴォリ通りからセーヌ川まで，もともと4ブロックからできている建物であった．4つのうち3つは既に1ブロック1建築でできた保存対象の建物であり，リヴォリ通りに面するブロックだけ，小さな数十個の建物が通りに面してぐるっと建っていた．このブロックと他のブロックとの間には通りさえ存在する．この最後の1ブロックを，歴史建築家と相談しながら，保存すべきところと新しくするところを検討し，17世紀の建物は残し，それ以外は新築してひとつの建物にすることにした．リヴォリ通りに面したファサードをどうすべきか，どうやってもともとある街並みに連続できるか考えた．その結果リヴォリ通りはずっと連続する壁面をつくっていながら，窓のリズムが持ち込まれてスケールがつくられていることに気付き，異なるピッチの曲面ガラスの反復でそのリズムをつくり，そこに向かいにある建物の立面を映し込もうと考えた．これは新築の建物であるが，同時に，ある意味でリノベーションのようでもあると感じた．それに対して，リヴォリ通りに直行する面は，保存対象の建物なので，絵が描かれている装飾板をすべて外し，元の色を美術品のように調査し，それを塗り変え修復した．その上で，既存のファサードは，エネルギー的にも防災的にも現在の基準をクリアできないので，その内側にもう1枚新しいファサードをつくって対処した．表にあるファサードを妨害しないような，同時にインテリアにおいて二重のファサードが邪魔にならないように，なるべく繊細になるものを考えた．アトリウムも同様で，装飾板をすべて外して色を元に戻し，サッシ割も長い間に変わってしまっていたものをオリジナルの割に戻し，ということを繰り返した．その結果，このラ・サマリテーヌは，新しいファサード部分では古い時代の立面が重なって新しさだけが現れることから免れ，逆に保存部分のファサード部分は鮮烈すぎるくらいの色で新しい建物のように輝き始めたと思う．新築でありながら昔の時間がオーバーラップされた立面と，あたかも新しいもののように輝いて現れる20世紀初頭のファサードがつくる全体は，何世紀にもわたってつくり続けられているパリの街並みの中に迷い込んで，街並みの一片を担う建築になったのではないかと思う．

時代の集積を街に表す

環境の一要素となる建築をつくりたいと考えた時，グレイス・ファームズでは自然の中にどう建築を置くかが考えるべき問題であったのに対し，ボッコーニ大学新キャンパスとラ・サマリテーヌは，すべてが人工であるようなところに建つ建物であった．通りという都市空間は一時代でつくられない．各時代の建築が並び，それが通りになる．グレイス・ファームズの時のような，自然に溶け込むとか形がないという方向よりは，むしろ新旧の建築群が並ぶランドスケープへと視点が移っていった．人間の営みや歴史，時間の蓄積の中でつくられる建築を考える方向に進んだ．ボッコーニ大学新キャンパスとラ・サマリテーヌはそれぞれ異なる性格を持ったプロジェクトであるが，それでも私にとっては両者とも，今後何十年か後に，誰かによってまた手を加えられ，さらにまた何十年か後に手が加えられてと，既存の都市の中に連続しながら，未来を待つ，未来に向けて少しだけ現在の手を加えたプロジェクトになったかなという思いである．各時代の建築の表現が通りになり，各時代の蓄積が街の立面をつくっていく．時間と共にある建築の可能性を考えている．

ボッコーニ大学新キャンパス配置　縮尺1/4,000

ラ・サマリテーヌ配置　縮尺1/4,000

ラ・サマリテーヌ

設計　妹島和世＋西沢立衛／SANAA
施工　Vinci Construction France
所在地　フランス・パリ
LA SAMARITAINE
architects: KAZUYO SEJIMA＋RYUE NISHIZAWA／SANAA

SAMARI

パリ中心部に建つ1870年創業の百貨店，ラ・サマリテーヌの改修プロジェクト．百貨店だけでなく，ホテル，公営住宅，保育園などが入る．2005年に安全確保のため閉店した後，改修を経て2021年にオープンした．歴史的建造物であるポンヌフ棟と，新築のリヴォリ棟からなる．SANAAはポンヌフ棟改修の監修と，リヴォリ棟の設計を担当した．リヴォリ棟のファサードは，解体した旧館の窓のリズムを取り入れた波型のガラスで，リヴォリ通りの対面の街並みを映す．

モネ通りに面したポンヌフ棟の東立面．既存サッシの内側に断熱サッシを設け，現代的な環境性能を確保した．サッシを含む鉄製部分の塗装は，修復作業中に発見された当時の色（ブルーグレー）とした．外壁上部のモザイクタイルによるサインや，溶岩板に七宝を施した取り扱い商品を掲げる黄色い装飾は，オリジナルのパネルをアルチザンが手作業で修復した．

ポンヌフ棟のアトリウム「ヴェリエール」の内観．フレスコ画や漆喰彫刻，階段手すりの金細工等をアルチザンが手作業で修復した．外観と同様に，鉄部分は長年の使用で塗り替えられていたが，オリジナルの色（ブルーグレー）に戻した．

ポンヌフ棟のアトリウム「ヴェリエール」を見る。約37×20mの屋根は調光ガラスを使用して掛け替えた。2階の中央にはリヴォリ通りからセーヌ川まで貫くようにパッサージュを通し，建物内に人の流れを生み出した。

新旧の統一を生み出す百貨店

ラ・サマリテーヌは，パリ1区，ルーブル美術館の東側で展開している百貨店である．1870年に創業した老舗百貨店だが，2005年より建物の老朽化と消防安全上の理由から閉店し，営業再開が待望されていた．再開にあたっては，百貨店だけでなく，オフィス，公団住宅，保育園，ホテルという，複合的なプログラムを併せ持った都市的なプロジェクトが計画された．私たちは2009年よりそれらプログラムの配置などのコンセプトの段階から参画した．詳細な設計にあたっては現地の建築設計事務所と協働し，歴史や住宅やインテリアなど多くの建築家や専門家が参加している．

セーヌ川側のポンヌフ棟と呼ばれる街区は国の歴史的建造物である「ソヴァージュ」，「ジュルダン・プラトー」，「ジュルダン・ヴェリエール」を含んでおり，保存改修することが決められていた．一方，リヴォリ通りに面する街区は，さまざまな年代の小さな建物が継ぎ足されて成り立っていたが，使用が非常に困難なことから，西側の通りに面した17世紀の建物部分の保存改修をして公団住宅の一部とした上で，新しい建物とすることとなった．このリヴォリ通りに面する建築は，歴史的建造物部分の保存改修と合わせて，それら新旧全体が一体となったラ・サマリテーヌとして，新しい統一性を都市の中につくり出すことが求められた．

歴史的建造物のファサードの保存設計は，歴史建築家や市と協働しながら進められた．できる限り原型に蘇生するという基本方針であったが，そのままでは現代の消防や環境の性能に見合わないので，注意深く設計した．特に開口部は透明な単板ガラスと繊細な鋼製建具の内側に断熱ガラスサッシを設けて，必要な性能が担保されるようにした．

この美術品のようなファサードに対して，リヴォリ通りでは，隣接するオスマン様式のフランス縦窓のスケールとリズムとに合わせた波長を持つ大きなガラススキンのファサードとした．その構成は，いくつかの曲率で湾曲した合わせガラスに細かい鏡面ドット（下部から上部へ徐々に濃度が濃くなる）を施し，白いドット印刷を施したガラスパネル（同様に下部から上部へ徐々に濃くなる）の前面に持ち出すというものだ．建物内のプログラムが要求する条件に合せながら，反射と透過に変化をつけ，周囲の環境が奥行と表情を持って映り込むことで，歴史的な街並みとの新しい調和を生み出す，現代的な柔らかさを持ったひと続きの大きな都市ファサードとなることを目指した．

歴史的建築であるジュルダン・プラトーには「ヴェリエール」と呼ばれる，鉄細工やフレスコ画で装飾されたアール・ヌーヴォー様式のアトリウムがあるが，これも歴史建築家と市と協議し，現代の安全基準に合致させながらオリジナルに修復し商業空間の核とした．改修前の建物ブロックの内部は，さらに以前の建物の残存があったり，床レベルがいろいろ違ったりと，長年の改築に次ぐ改築で迷路のような様相をしていた．私たちはリヴォリ通りからセーヌ川へと至る「パッサージュ」を新旧建物の中央に設けることを提案し，これまでになかった都市的な人の流れを建物内に生み出そうとした．このパッサージュには3つの中庭空間（既存の「ヴェリエール」，新たに計画したポンヌフ棟の「ドーム」とリヴォリ棟の「アンブレラ」）を設け，それぞれに異なる個性を持たせた．自然光が満ちるパリのパッサージュのように，空が見え，広大な商業空間に人の流れと空間的な律動をつけようと考えた．

ちょうどこの周辺街区では，Bourse de Commerce（本誌2107）やla posteやLes Hallesなどのパリの中心としては大規模なものが次々と完成したり，多くの車通りが自動車を制限し自転車専用になったりと街が様変わりした感がある．創業から150周年の新たなラ・サマリテーヌが，歴史があり，かつ変化し続けるパリという大都市に対してどのように貢献していくのか見守っていきたい．

（棚瀬純孝／SANAA）

ポンヌフ棟ふたつ目のアトリウム「ドーム」．下弦材をステンレスケーブルとした張弦梁による格子梁で屋根を構成した．売り場面積は約20,000m²で，約600店舗が出店．

リヴォリ通りに面するリヴォリ棟の南側外観．2.7×3.2mの合わせガラス343枚を，ステンレス製の持ち出し金物で支えている．

リヴォリ棟中央のアトリウム「アンブレラ」．下弦材をPC鋼とした張弦梁による鉄骨格子梁を，4本の細い柱で支持する屋根．リヴォリ通りから入った人を一旦地下階に促し，次の「ドーム」へと誘う動線をつくっている．

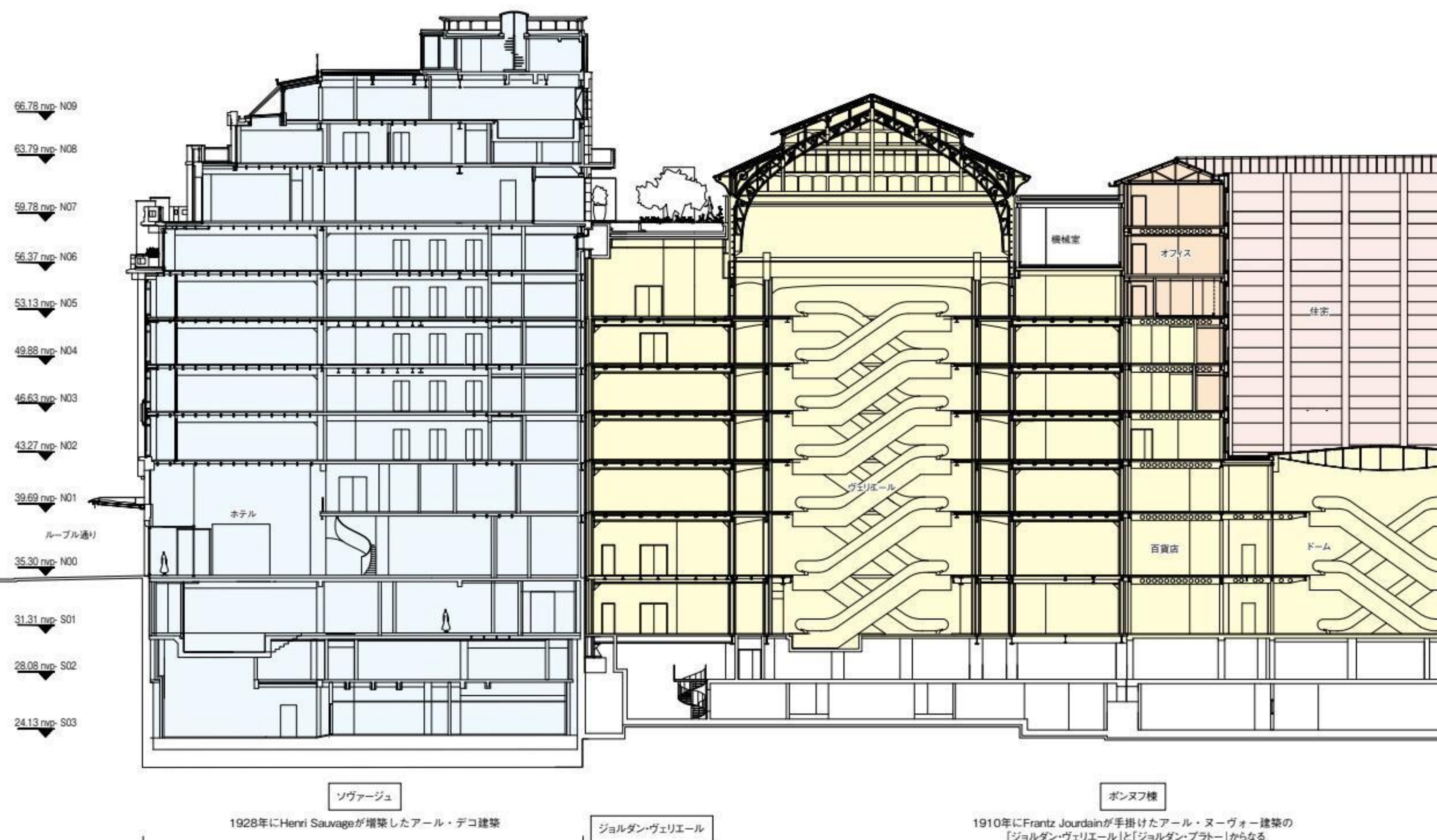
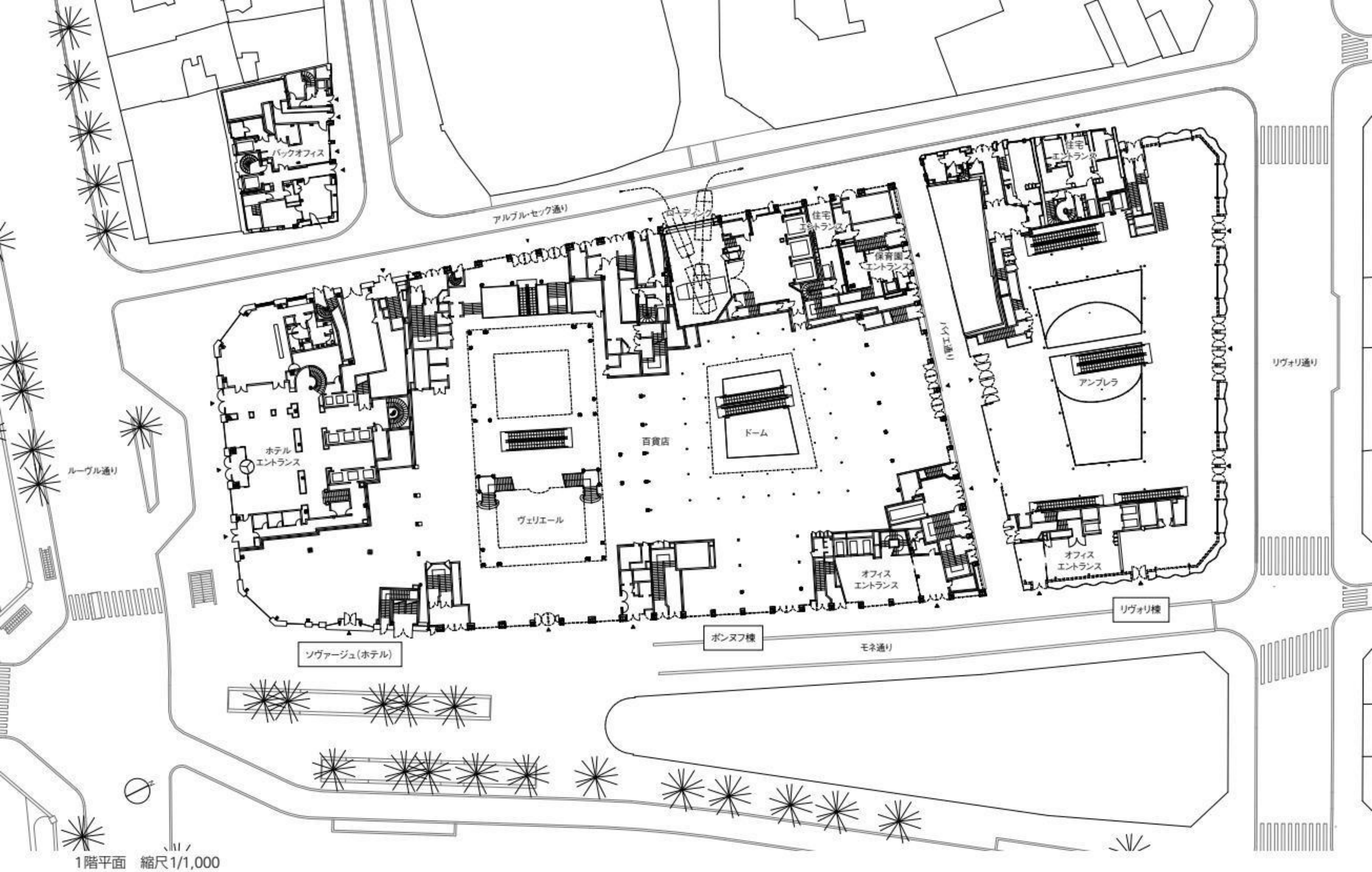
1階平面　縮尺1/1,000

ソヴァージュ

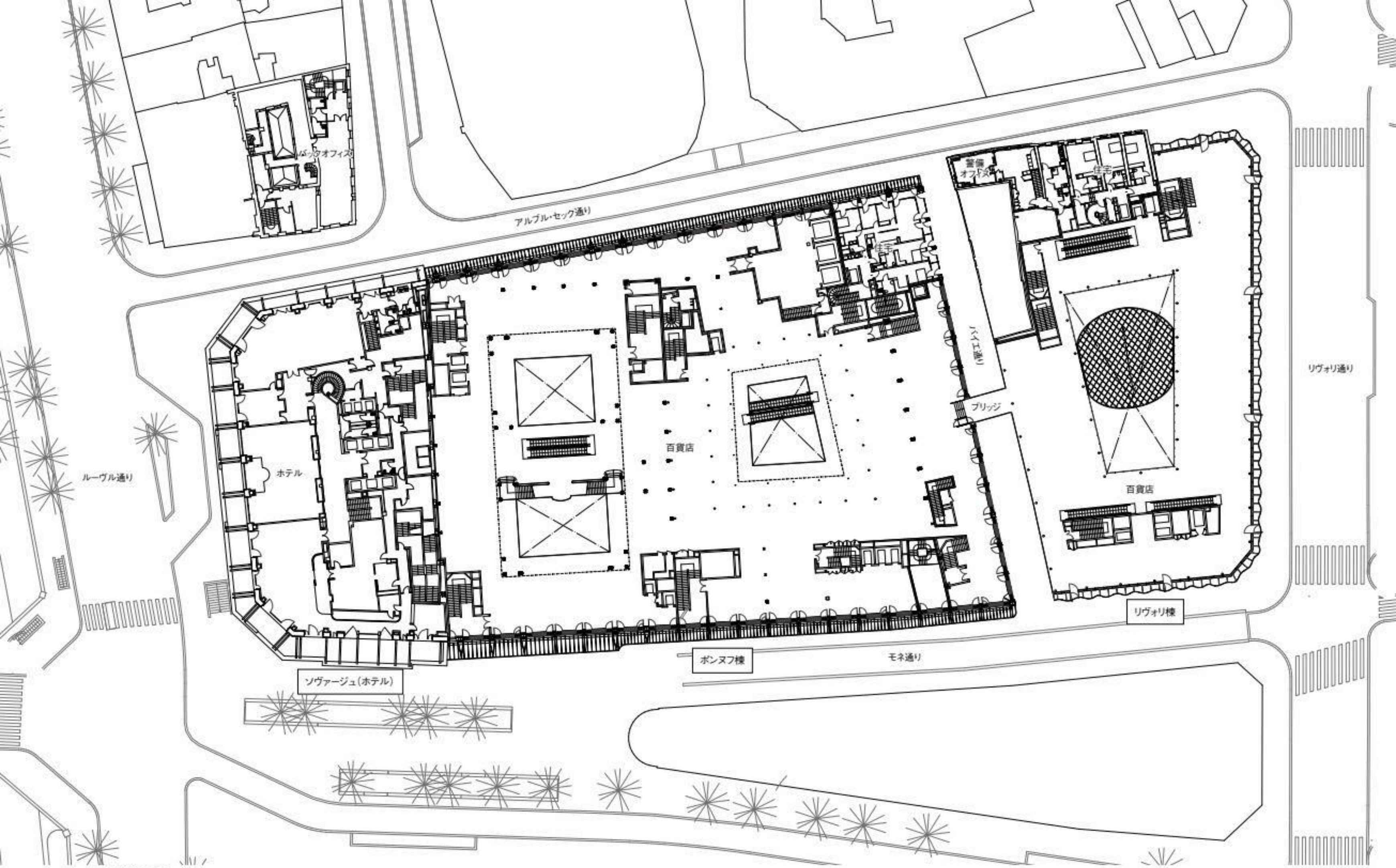
1928年にHenri Sauvageが増築したアール・デコ建築

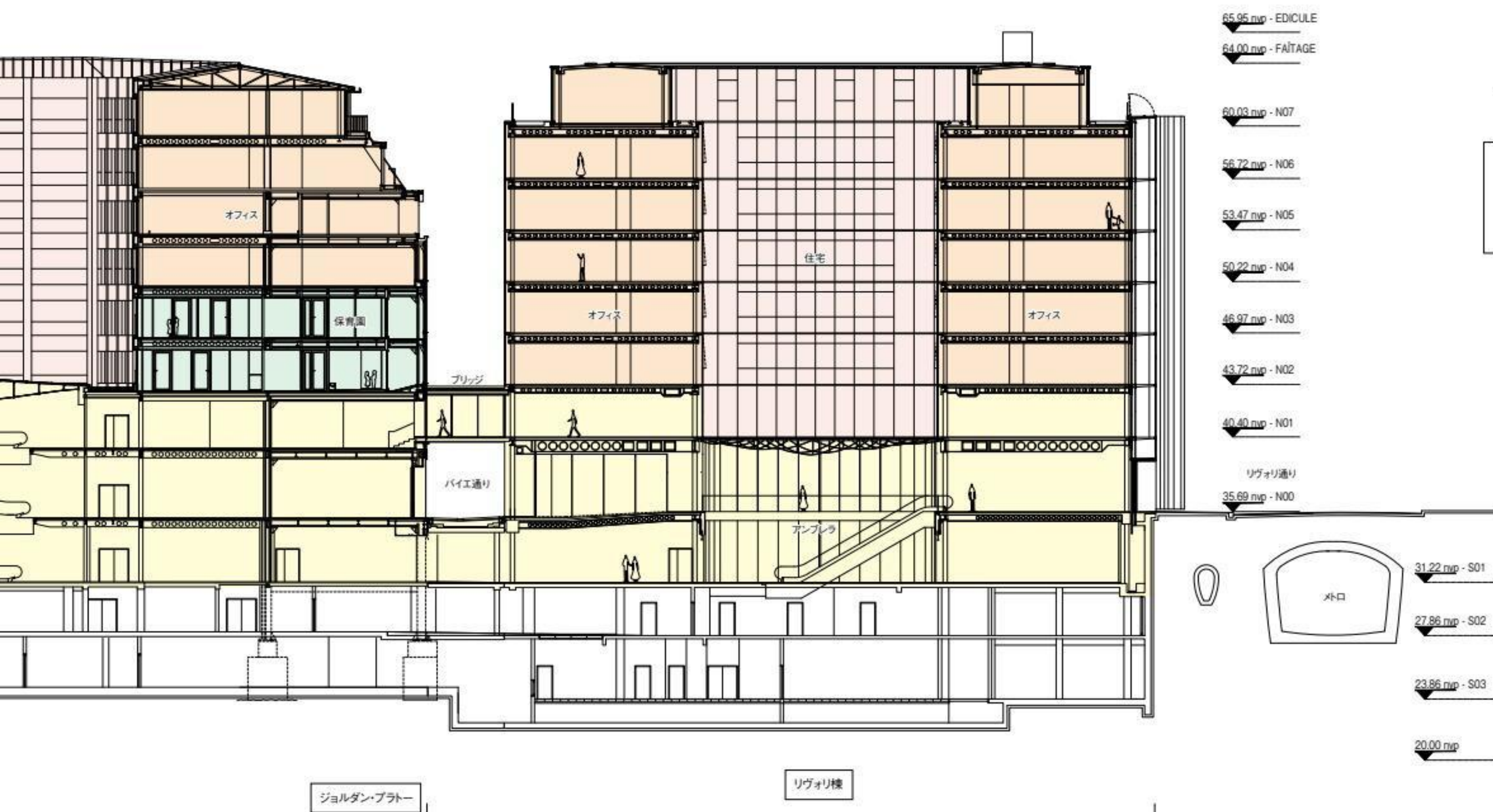
ジョルダン・ヴェリエール

ポンヌフ棟

1910年にFrantz Jourdainが手掛けたアール・ヌーヴォー建築の「ジョルダン・ヴェリエール」と「ジョルダン・プラトー」からなる

断面　縮尺1/450

ラ・サマリテーヌはmagasin1からmagasin4までの4つのブロックで展開している.

今回SANAAが携わったのはmagasin2：ポンヌフ棟とmagasin4：リヴォリ棟．ホテル部分の設計は別契約で建築家のÉdouard Françoisによる.

2階平面

設計 建築 SANAA
ローカルアーキテクト SRA Architectes
歴史建築家 Lagneau Architectes
住宅・保育園 Francois Brugel Architectes Associés
構造 RFR GO+
AEDIS Ingénierie
EGIS Batiments
設備 Barbanel
施工 Vinci Construction France
敷地面積 9,850m²
建築面積 9,800m²
延床面積 70,000m²
階数 地下3階 地上8階 塔屋1階
構造 鉄骨造 一部，鉄筋コンクリート造
工期 2015年6月～2021年6月
撮影 Jared Chulski *WE ARE CONTENTS
（データシート211頁）

大阪中之島美術館

設計　遠藤克彦建築研究所　大阪市都市整備局

施工　錢高・大鉄・藤木特定建設工事共同企業体

所在地　大阪府大阪市北区

NAKANOSHIMA MUSEUM OF ART, OSAKA
architects: KATSUHIKO ENDO ARCHITECT AND ASSOCIATES,
URBAN REDEVELOPMENT AND HOUSING BUREAU, CITY OF OSAKA

堂島川越しに見る北東側遠景．文化施設やオフィスビルが立ち並ぶ中之島の一角に立ち，国立国際美術館の北側に位置する．2016～2017年に実施された公募型設計競技において「さまざまな人と活動が交錯する都市のような美術館」として提案し，選定された．5階建ての鉄骨造で，63m角平面，高さ26.4mの直方体ボリュームの4面すべてを黒色の外壁が覆う．建物の高さは36.9m．

東側外観．低層部は周辺と連続する広場空間で，1階はショップ等が入る基壇となり，2階は近隣施設と歩行者デッキを通じて繋がる．浸水リスクを考慮して，展示室は4・5階に位置する．外壁の黒色は，骨材に岩手産玄昌石砕石・京都宇治産砕砂，そして黒色顔料を混ぜたPC版をウォータージェット加工および含浸シリカコーティングしたもの.幅2〜4m，高さ2.2mのパネルに対し，幅1mピッチで化粧目地を入れている．L字型の開口は内部のパッサージュの形状から導き出されている．

配置　縮尺1/15,000

都市に開かれた美術館として

堂島川と土佐堀川というふたつの河川に挟まれた中洲である大阪中之島は，中世より流通・商業に利する場所として栄えた．この敷地も広島藩の蔵屋敷跡地であり，敷地の地面下には堂島川より積荷を載せたまま蔵屋敷内に船を係留できる「船入」という港があったことが知られている．この建物は，2016～17年にかけて行われた公募型設計競技により最優秀案として選定され，基本設計と実施設計，監理を経て，2021年6月末に竣工となった．

計画にあたって周辺を観察すると，敷地は中之島の東西を結ぶ重要な結節点であり，このことから人の流れを繋ぎ，各方向へと導くことが重要と分かった．そのため建物には「正面」をつくらず，全方向からの人の流れを，特定の動線ではなく複数のエントランスで面的に受け入れる計画としている．また中之島地域は河川氾濫等の浸水リスクもあることから，浸水被害を物理的に逃れられる3階以上に美術関係諸室を配置することが重要と考えた．一方，1・2階は都市に開いて，美術館を訪れる人以外も普段から利用できるような公共性を提供するという基本構成を想起した．

建物は鉄骨造5階建て，基礎免震構造による美術館本棟と，耐震構造による駐車場棟の2棟によって構成しており，エキスパンションジョイントを介して一体的に計画している．1・2階外部は敷地周辺と連続する広場空間として，都市の回遊性を意識したものとなっている．この接続をスムーズに行うにあたっては敷地周辺の高低差を解消する必要があった．結果，「地形」としてデザインした1・2階の上に，大きくマッスなボリュームの正方形平面を持つ明快な幾何学の「建築」をデザインすることで，都市に浮遊する美術館が形態として表現されることとなった．地形の一部となる2階レベルは周辺の公共施設と歩行者デッキで接続される．また，建物西側にも接続通路の延伸が予定されており，今後の中之島地域の賑わいに寄与することとなろう．

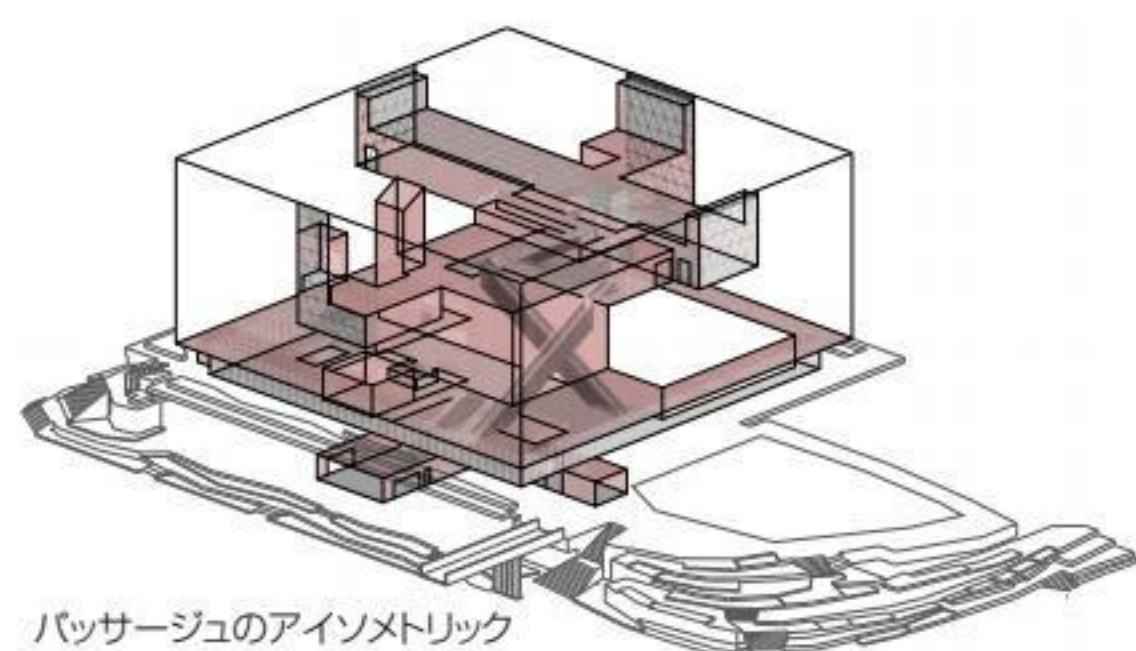
立体的なパッサージュ

来訪者はこの1・2階の外部空間から，内部の「パッサージュ」へと導かれる．このパッサージュという言葉と機能は，設計競技時の要項に計画条件として「建物内にはパッサージュと呼ばれるエントランスホールを兼ねた空間を設ける」と提示され，その解釈は提案者に委ねられていた．計画では敷地周辺なども鑑み，1・2階はいわば駅のコンコースのような公共的なロビー空間としてパッサージュを計画している．来訪者は2階から4階に架けられたエスカレータによって，1・2階の水平方向に広がる視界から上階への垂直移動による体験を得ながら，展示室へと入っていくこととなる．パッサージュは4階では東西方向，5階では南北方向へと各階ごとに方向を変え，大きなボリュームから空間をくり抜くようにデザインされ，各階に積層した立体的なロビー空間を創出している．パッサージュの断面は，そのまま外壁四面に穿たれた開口部の形態でもある．これら上階のパッサージュは，展示室前ロビーとして機能するだけではなく，パッサージュが建物内の全方向に交差して配されることで，四面それぞれから中之島地域への眺望を得ている．展示室の途中に挟み込まれたパッサージュによって，観賞中に都市を仰ぎ見る機会をつくり出すことにより，美術を鑑賞することだけに留まらない，新しい都市体験が可能となる美術館を意図した．また，パッサージュ内で交差する大きな2本のエスカレータは，上りと下りで90度向きを変えて配置することで2階と4階それぞれで着床位置を離している．これにより各階を巡る順路は一筆書きの動線となり，館内の動線交錯を防ぐ．

営みを受け止めるデザイン

黒い外観は609枚のプレキャスト・コンクリート板によって構成されており，表面をアーキテクチュラル・コンクリートとして，岩手産玄昌石砕石と京都宇治産砕砂，そして黒色顔料を混ぜたコンクリートを流しこんだ後，背面にJIS規格軽量コンクリートを一体として打設している．その硬化した表面を超高圧ウォータージェットによって荒らし，そこに無機高濃度シリカ系の複合コーティング剤によってコートして，耐候性の付加と骨材の落下防止を同時に成立させている．表面を削ることによって微細な陰をつくり，素材色に頼ることのなく，深い黒色を外観にまとわせている．一方で内部のパッサージュ空間は，壁，天井共にプラチナ・シルバーのルーバー材によって仕上げた．ルーバーそのものは非常に単純な仕上げだが，背面下地に塗装されたやや赤を含んだグレー色の効果と，吹き抜けトップライトからの自然光，そして室内照明の色温度の違いによって，パッサージュの各面は複雑な色相をまとう．この材の見付寸法は，壁面も天井も全く同じで，各間隔は基準寸法（17.5mm）を中心に30種のストリンガー（嵌合材）にて割り付けられ，全ての壁面および天井面にて，整然と破綻なく目地を通すことを可能にしている．このようなパッサージュのデザインは，将来の展示の可能性を拡げていくものとして，展示室内だけでなく美術館全体を使った展示計画への備えでもある．

黒い外壁を穿つ開口から漏れる光は，この大阪中之島において美術，芸術との関わりを通して表現される人の活動の形でもあり，その活動の場を指し示す記号でもある．そしてこれらの，きわめて単純な形態に内包される複雑な様相を設計するということを通して，現代で建築を設計するにあたって大切なことは何かを追求していきたいと考えている．

（遠藤克彦）

パッサージュのアイソメトリック

南側夕景．歩行者デッキを計画した2階レベルは四周をガラス面で構成しており，パッサージュとして外部空間と連続させて浮遊感を生み出すことを意図している．上部11m四方の開口越しに展示室横のパッサージュが見える．

4階からの見下ろし．吹き抜けのパッサージュに面して各階に場が配置される．来訪者は2階から4階へと繋ぐエスカレータで上がり，4・5階の展示室を巡った後，再びエスカレータで2階へ降りるという一筆書きの動線．

エスカレータから南側を見る．1階床から5階天井まで，高さ30.9mを貫く吹き抜けに，天井から柔らかく光が降り注ぐ．パッサージュは，展覧会入場者だけでなく幅広い世代の人が誰でも気軽に自由に訪れることのできる，賑わいのあるオープン且つ立体的な空間として位置付けられている．

4階．パッサージュの壁・天井面は特注のプラチナ・シルバーの化粧ルーバーで，光を柔らかく反射する．化粧ルーバーは目地17.5mm，ピッチ62.5mmで，±5%の範囲で目地を揃えている．

2階．エントランスは1階と2階に複数設けている．2階は4方向すべてを外部に開く構成としている．

4階西側パッサージュ．ヤノベケンジ氏によるジャイアント・トらやんが配置される（写真は設営中）．

大階段から見る．1階と2階のレベル差は5,600mm．2階レベルは歩行者デッキの高さや地中の埋蔵文化財等を鑑みながら設定された．

パッサージュ
展示室1
展示室2
展示室ロビー

4階平面　縮尺1/1,500

パッサージュ
展示室3
展示室4
展示室5
展示室ロビー

5階平面

北東側から見る．ランドスケープはスタジオテラが手掛けた．

接続予定

1 階西側プロムナード
未来医療国際拠点（工事中），大阪大学中之島センターと共にプロムナードを整備中．
区画を南北に横断する動線となり，都市の回遊性と賑わい創出に貢献する．

アーカイブズ情報室

北側デッキ
ケータリング等の販売も可能な道状の広場空間．中之島の中央を2階レベルで東西に貫く動線となる．

芝生広場
美術館の利用者や周辺の人々が憩う場所として美術館の顔となるオープンスペース．

親子休憩室
歩行者デッキ(南)接続予定
UP
パッサージュ
チケット売場
芝生広場
多目的スペース
DN

歩行者デッキ（東）

南東階段
中間にベンチと植栽帯を設ける．通過動線としてだけではなく，たまり空間を内包した滞在スペースとする．

2階オープンスペース
建物周りを回遊でき，緑を感じながら散策・休憩できるスペース．

1階オープンスペース
道路と建物を柔らかく繋ぐ．エントランスや南東階段の前ではアクティビティが滲み出すように開き，店舗内から車や歩行者が視線に入りにくい様に植栽で緩衝帯を設ける．

つづら折りのアプローチ
約4mの高低差を繋ぐ．休憩スポットや階段，スロープが入り混じることで変化に富んだアプローチとなる．

2階平面　縮尺1/800

設備スペース
ごみ置場
通用口
通用口
駐車場
ホール
会議室
パッサージュ
車寄せ
ワークショップルーム
ショップエリア
ショップエリア
駐輪場

1階平面　縮尺1/1,500

ランドスケープ

周辺から大きくセットバックした3～5階の黒色直方体ヴォリュームに対して，1・2階は建物とランドスケープが一体となりながら，周辺と接続する役割を担っている．歩道空間や緑地帯の形状は，平面的にも断面的にもそのほとんどを折れ線形状とし，上部の立方体ヴォリュームと対比する地形的な柔らかさを持ちつつも，連続感のあるものとした．

外部は，市民に24時間開放された広場空間になっており，休憩・滞在・屋外イベント・展示等が可能な設えとすることで，大阪の新しい美術館を象徴するオープンスペースとなることを目指した．

（外﨑晃洋＋持永篤史／遠藤克彦建築研究所）

南東コーナー見下ろし．2階は高さ4,400mmのガラスが外周部を囲む．南側に隣接する国立国際美術館とは将来的に歩行者デッキで繋がる予定．

外壁:
PC版
アーキテクチュラル・コンクリート t=80mm
(岩手産玄昌石砕石,京都宇治産砕砂,黒色顔料)
+軽量1種コンクリート t=100mm
ウォータージェット加工含浸シリカコーティング

外壁耐火壁(片面):
珪酸カルシウム板 t=21+21+21mm
外部側:
暗色塗装
内部側:
断熱材(吹き付け)

給気及び排気ダクト

吸込ボックス(内貼黒色)

壁:
化粧ルーバー
プラチナ・シルバー
目地17.5mm@62.5mm

吸込ボックス(内貼黒色)

壁:
化粧ルーバー
プラチナ・シルバー
目地17.5mm@62.5mm

水切り金物:
AL FB 6×100mm FB-E
AL L-35×35×3mm FB-E

天井:
化粧ルーバー
プラチナ・シルバー
目地17.5mm@62.5mm

天井:
化粧ルーバー
プラチナ・シルバー
目地17.5mm@62.5mm

下がり役物:
PL t=0.5mm
特注色

高密度グラスウール
ガラスクロス巻き t=25mm

天井:
化粧ルーバー
プラチナ・シルバー
目地17.5mm@62.5mm

3,094

リブガラス:
フロートガラス t=19mm
飛散防止フィルム貼り(両面)

鉄骨丸柱 φ=300mm:
耐火シート t=3mm
EP-G塗装

壁:
化粧ルーバー
プラチナ・シルバー
目地17.5mm@62.5mm
両面:
PB t=9.5mm EP塗装

ガラス支持金物:
SUS押さえ金物 ロ-45×90mm
ロストワックス成形品
ビーズブラスト仕上げ

ガラスカーテンウォール:
Low-E 複層ガラス t=12mm+A12+t=12mm
飛散防止フィルム貼り(両面)

防火区画壁(片面):
強化PB t=21+21mm

屋外テラス

パッサージュ
(屋外際)

パッサージュ
(吹抜際)

CH=4,400

パッサージュ
(屋内際)

ガラス手摺り:
合わせガラス t=8+8mm

SUS FB 3×19mm HL
FL+1,100mmまで

手摺り:
St φ=42.7mm
AB-E

床:
天然石 t=40mm
花崗岩 中国産G332
ジェットバーナー仕上げ

床吹出口:
St FB 3×9mm @9mm A-BE

床:
天然石 t=22mm
花崗岩 中国産G332
ジェットバーナー仕上げ

1,400

St FB
12×90mm
AB-E

プラスチック製束 @600mm程度
大引,根太:
ハット型鋼 60×40×15×15mm t=1.6mm
@900mm,@500mm

RC立上り部:
塗膜防水

鋼製床組 合板 t=15mm×2

RC直押エの上,防塵シート

化粧ルーバー
プラチナ・シルバー
@17.5mm

床吹出口:
St FB 3×9mm @9mm
A-BE

屋根保護防水密着断熱工法(AI-1)

▽2FL

2,200(3FLまで)

階高(2FL~3FL):6,600

4,400

階高(1FL~2FL):5,600

150 200

耐火被覆

吹抜け

断熱材:
硬質ウレタンフォーム吹き付け

2階断面詳細（外壁～パッサージュ） 縮尺1/50

展示計画

展示室に加え，パッサージュと1階ホールを含めた館内全体が展示空間となるよう計画を行った．展示室については，主に4階をコレクション用の展示室，5階を企画展主体の展示室としている．

天井高さはそれぞれ4m・6mとし，展覧会開催時の造作コストを削減する目的で幅3～4m程度の可動式の展示パネルを採用した．5階の展示室は大規模巡回展にも対応可能な，関西最大級の規模となる．パッサージュと1階ホールは，立体作品を中心としてさまざまな展示に対応できるように，建築（バトンやピクチャーレールの設置，床荷重設定）および設備計画（ライティングレールの設置）を行った．

（外﨑晃洋＋持永篤史＋水川裕介／遠藤克彦建築研究所）

5階展示室．可動間仕切りによって，5階は約1,700m²，4階は約1,400m²の空間を展示に合わせて自由に組み換えることができる．

美術館空調の新しい試みについて

世界中から貴重な美術品が集められる美術館では，美術品保護の観点より，24時間365日途絶することのない厳格な温湿度管理が求められ，空調設備は非常に重要である．本プロジェクトでは信頼性の高い地冷プラントに隣接する好条件を活かし，昼間はそのまま活用，夜間は水蓄熱と24時間フル活用している．さらに自家熱源2種類（電気・ガス）でバックアップし，非常用発電機が停電に備えている．従来は冷水・温水の4管式が最上級であったが，今回は冷水をさらに温度と湿度の処理系統に分け6管式とした．また，従来はCO_2濃度が上がってから換気量を増量するのが一般的だが，人感センサーによる室内入場人員カウントでオンタイムの換気量制御とした．これらは厳しい大阪の夏でも，厳格な温湿度管理に耐え得る仕様である．

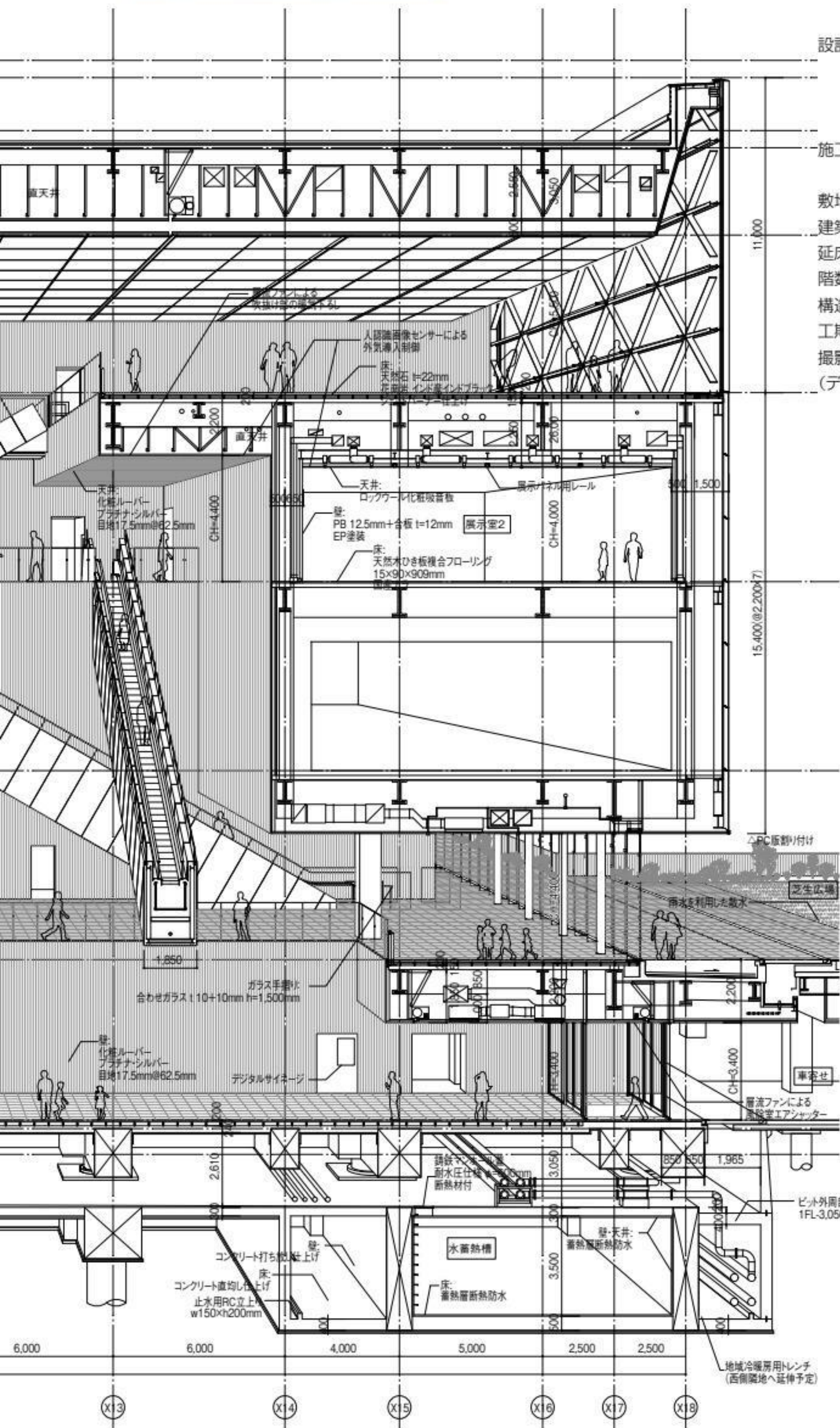
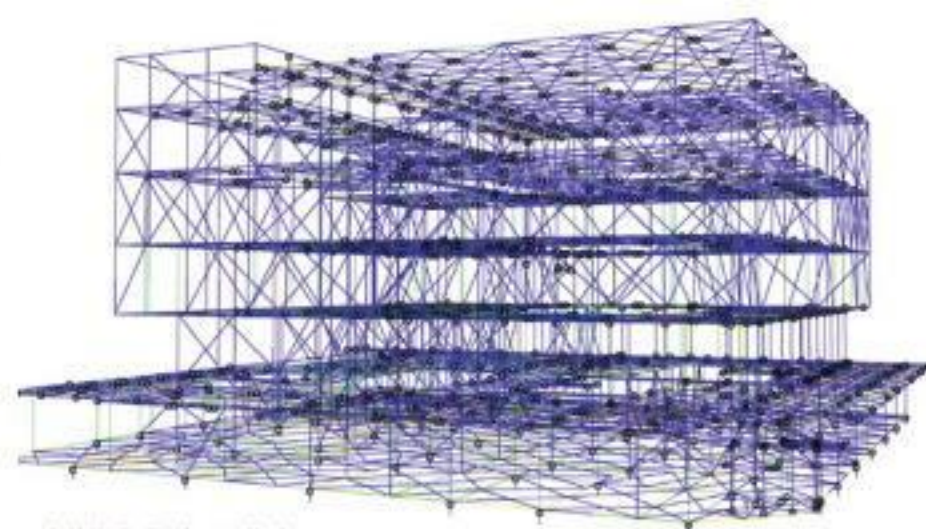
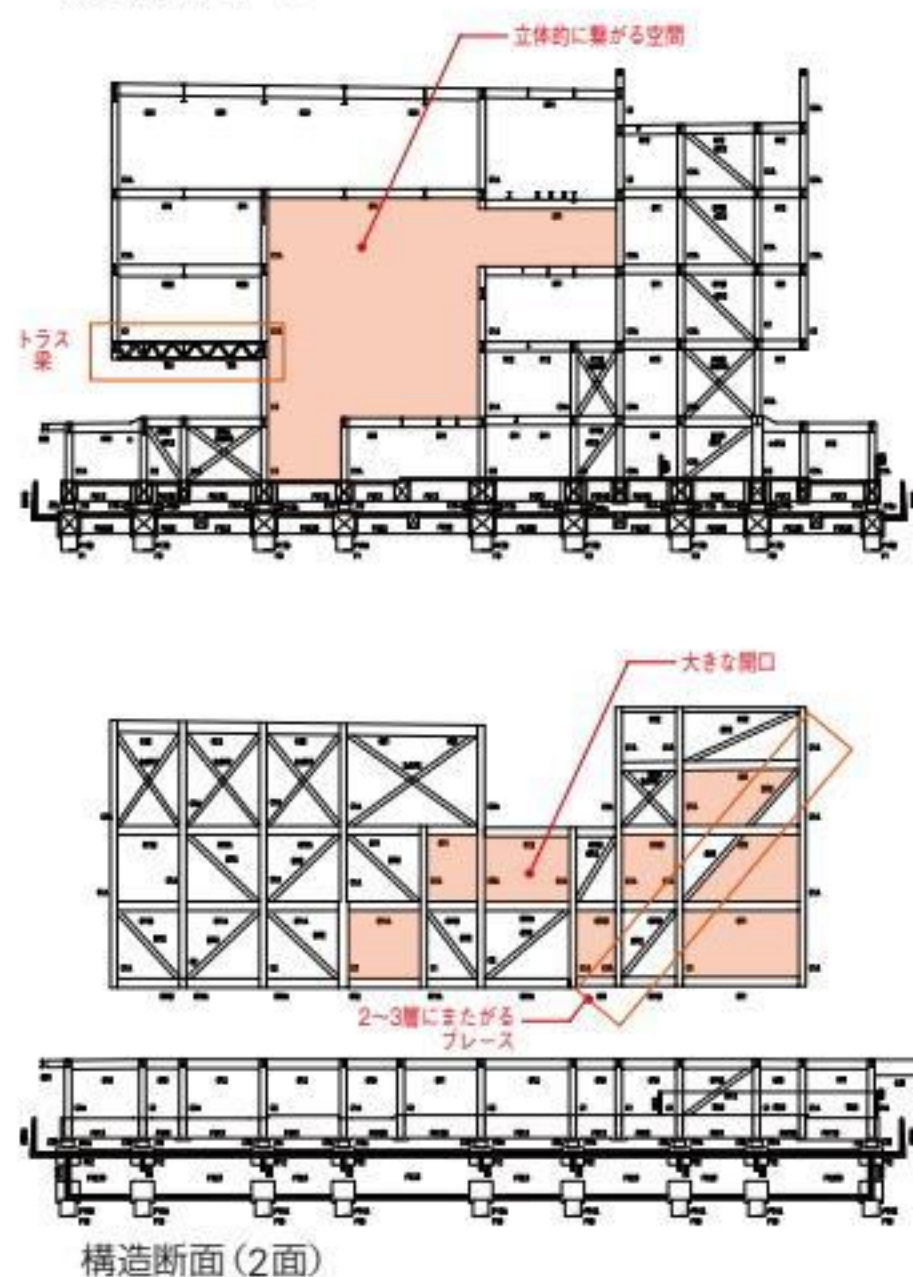
（永田久子／東畑建築事務所）

フワッと浮かぶブラックボックス

中之島は，南海トラフによる長周期地震動，上町断層帯，液状化する軟弱地盤という三拍子が揃う日本屈指の難所．そこに漆黒に包まれた軽量な鉄骨の箱を浮かばせている．吹き抜けがクランクしながら繋がってイレギュラーにえぐられたラーメン構造は，面剛性のある壁と床で形成する．2層にまたがるブレースを仕込むと，背の高いトラスなので軽量化でき，開口を開けられる部分が市松状に現れる．それらを薄型のハーフPCスラブによって，さらに軽量化している．ピロティ状の2階エントランスはその奥に剛強な耐震コアを仕込んであるので，「ピン柱」で浮遊感を生み出している．

何もここに建物を建てることはないのではというほどの難所．パラメータを減らさないと把握しきれない．免震は油圧ダンパーを使わない簡素なシステムとしている．固有周期は長周期を避けて免震では少し硬めの3.5秒．上町断層帯の巨大地震に対しては100mm鋼板製のショックアブソーバーに衝突させて，エネルギーを吸収する．

ほとんどは隠蔽されてしまうものの，ここには浮遊感を演出する「隠れてなお生きる」構造デザインが仕込まれている．

（佐藤淳）

設計　建築　遠藤克彦建築研究所
　　　　　　大阪市都市整備局
　　　構造　佐藤淳構造設計事務所
　　　設備　東畑建築事務所
施工　錢高・大鉄・藤木特定建設
　　　工事共同企業体
敷地面積　12,870.54m²
建築面積　6,680.56m²
延床面積　20,012.43m²
階数　地上5階
構造　鉄骨造　基礎免震
工期　2019年2月～2021年6月
撮影　新建築社写真部
（データシート212頁）

構造解析モデル

構造断面（2面）

施工風景．パッサージュ吹き抜けや大きな開口に対して，応力をどう伝達するかが課題となった．

常州工学院国際学術交流センター

設計　アトリエ・アンド・アイ 坂本一成研究室＋華南理工大学建築設計研究院

施工　江蘇陽城建集団有限公司

所在地　中国江蘇省常州市

INTERNATIONAL ACADEMIC EXCHANGE CENTER, CHANGZHOU INSTITUTE OF TECHNOLOGY
architects: ATELIER AND I, KAZUNARI SAKAMOTO ARCHITECTURAL LABORATORY
ARCHITECTURAL DESIGN & RESEARCH INSTITUTE OF SCUT

東側外観．キャンパス移転に伴い計画された多目的ホールやレストランなどの交流機能および宿泊機能を合わせた大学施設．低層部に2層分の吹き抜けのあるエントランスロビー，上階は3，4階にフラットタイプ，5,6階にメゾネットタイプの客室がある．

周辺と連携し環境をつくる建築

常州工学院は上海と南京のほぼ中間，高速鉄道で1時間ほどの距離の常州市にある約12,000人の学生が集う理工系の大学で，この建物は中心市街地から移転する約67haの新キャンパスの一部に位置します．ちなみに，このキャンパスのマスタープランおよび他の建物は華南理工大学建築設計研究院により設計されています．この建物の敷地はキャンパスの東側の大通りに面した門からほど近いところにあり，背後のキャンパス二期工事エリアと隣接していることから，近い将来，大学キャンパスと近接する市街に囲まれることとなります．

この建物では，国内外から集まる専門家，研究者が滞在し学術会議を行うといった交流と宿泊を主な機能として，キャンパスの学生たちのくつろぎの場所，そして周辺地域の人びとも利用することができる開かれた場所，といった多面的なあり方を求められました．

大小の中庭を組み込んだ1階，屋上庭園が広がる2階の低層部に，学術会議や会食に使用される多目的ホールやレストランといったパブリックな機能を配し，3階以上は宿泊施設となっています．同時に，キャンパスに面した建物ボリュームの1階には地下まで広がるブックカフェなど学内の人びとや地域住民も利用しやすい施設としています．また，明るい片廊下のリニアな宿泊部のボリュームには，一般的な客室のほか，研究者の長期滞在にも対応する，打ち合わせや執務スペースを持つメゾネット型といった，いくつかのタイプの客室が納められています．

このような各施設は，足元の透過性の高いファサードと抜け，建物内外に設けられた緩やかな階段によって，街側の車寄せに面したリニアなエントランスホール，多目的ホールのホワイエ，屋上庭園といったスペースが接続され，キャンパスの歩行者通路に連続して大学構内，および周辺地域に広がります．

この計画は，地下駐車場を含めて18,000m^{2}の大規模の建築です．規模の大きな建築では，施設の用途に対する機能性，経済性といったプラグマティズムによる施設性を特に強く求められます．また，大きなボリュームゆえの存在性が前面に現れ，周

南側全景．1，2階を繋ぐ中庭を挟みながら平面的に広がる低層部と片廊下型の客室が並ぶリニアな形状の高層部で計画．幅は南棟，北棟（写真右，左）:8,600mm，中央棟（同中）：9,300mm．今後のキャンパス計画で周囲に建物が建ち並ぶ予定．

辺環境へのプレゼンスが大きくなり過ぎます．この設計では，施設的でありすぎることを避けると共に，また形態操作による行き過ぎた彫塑（オブジェクト）性を避ける建築を意図しました．それゆえ，全体の形態や構成に関しての分節と統合の操作によることで環境に対応する建築性が可能ではないかと考え，たとえば屋上庭園の広がる多目的ホールなどの施設部を含んだフットプリントの大きな低層部と，宿泊部である奥行の小さい雁行したクランク状のボリュームに大きくふたつに分節することによって，巨大なボリュームとなることを避けています．このような分節された基壇部と上部ボリュームという構成は，その他の分節と統合によって形成された新たなスケールとプロポーションに重なり，多方向に対してファサードをつくる等，開かれた空間構成を形成すると考えています．

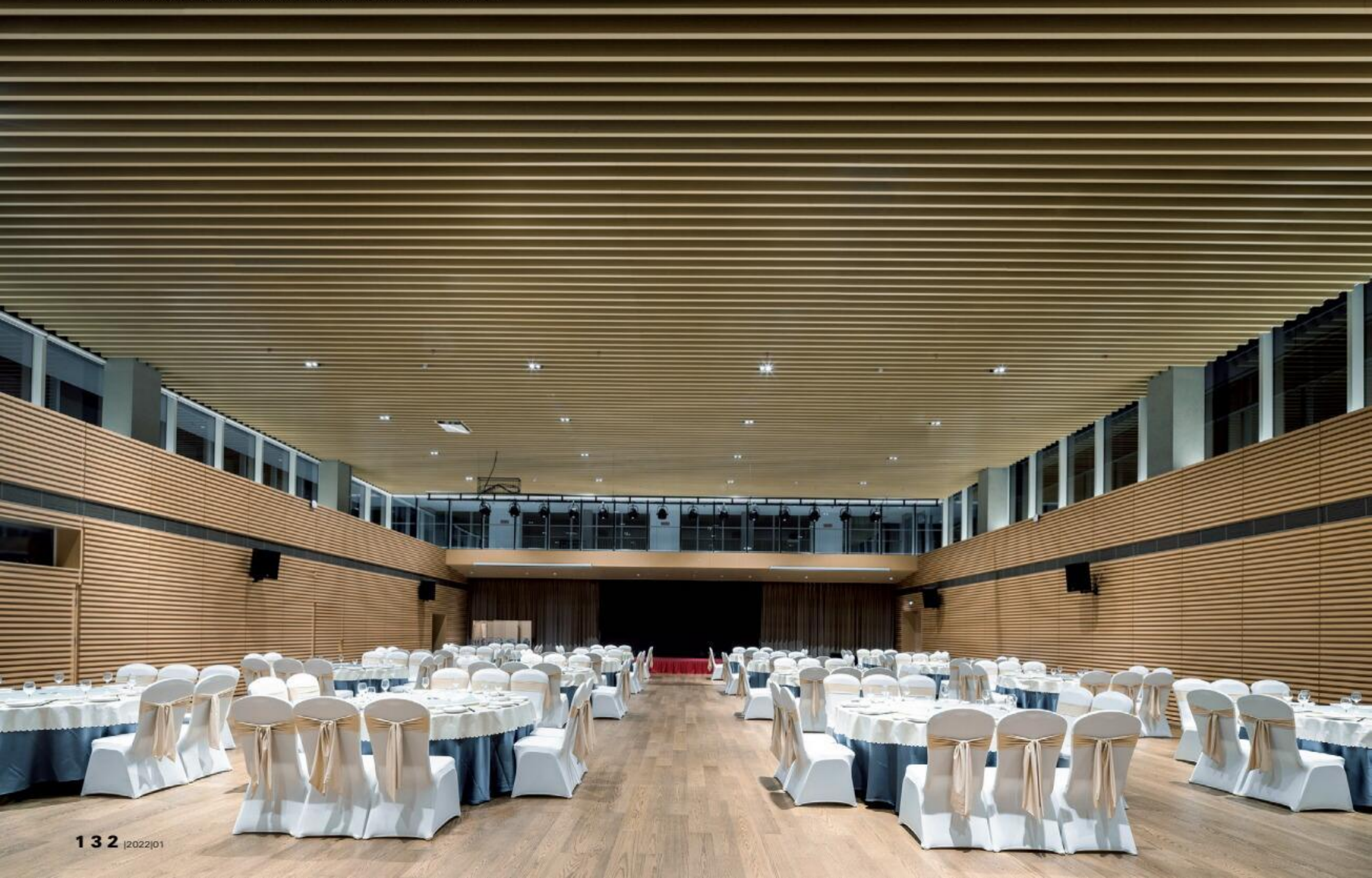
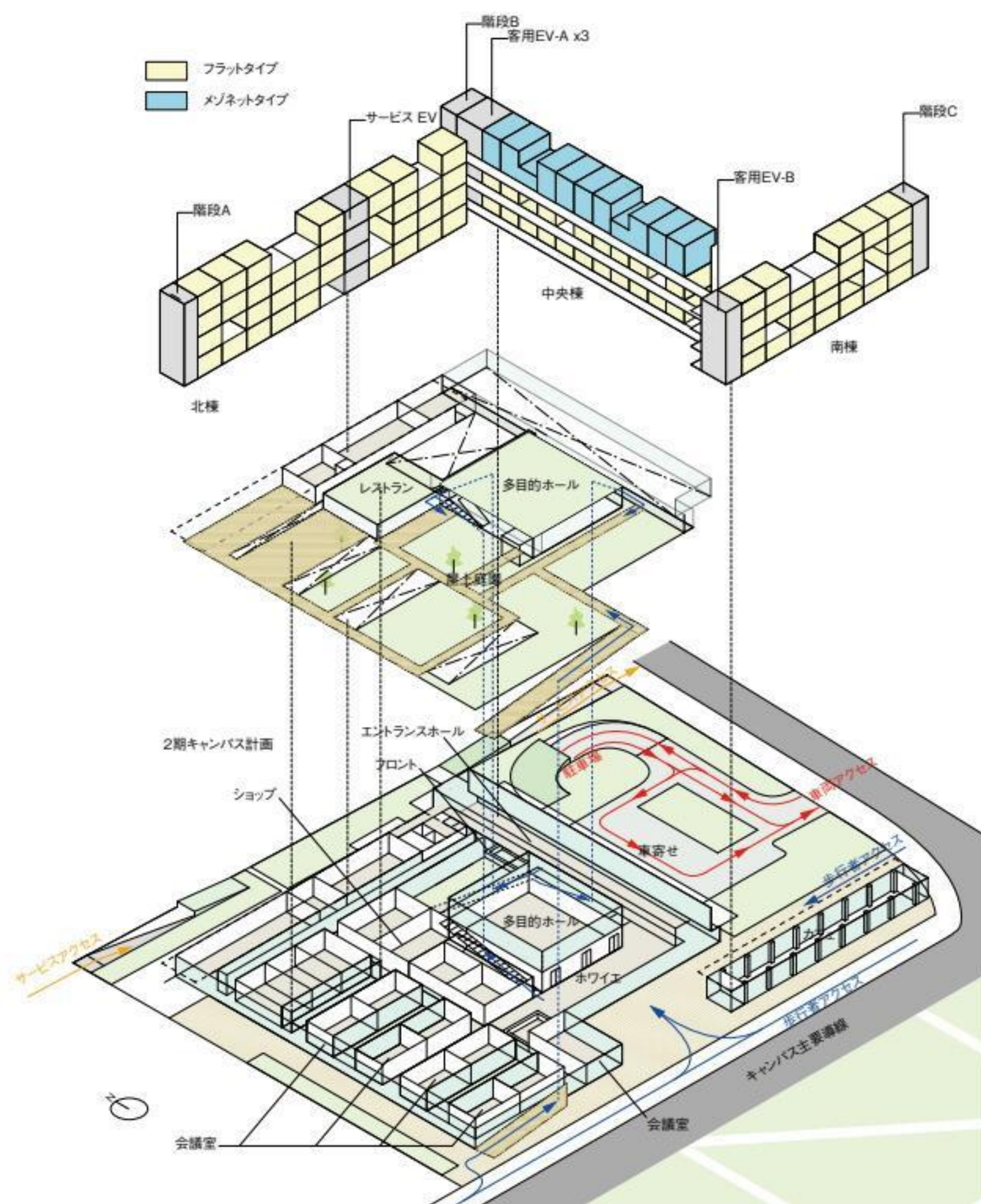
常州工学院新キャンパスには中国における他の大学と同様に，全国から集まる学生のために多くの学生寮が設けられており，キャンパス全体が学生の暮らしを包含した地域コミュニティであり，さながらひとつの街とも言えるスケールとなっています．キャンパス内の人びとと外からやって来る人びとの接点ともなるこの場所が，周辺の空間を連携する新たな環境になればと願っています．

（坂本一成＋久野靖広）

設計　建築　アトリエ・アンド・アイ 坂本一成研究室
　　　　　　華南理工大学建築設計研究院
　　　構造　金箱構造設計事務所
　　　　　　華南理工大学建築設計研究院
　　　設備　イーエスアソシエイツ
　　　　　　華南理工大学建築設計研究院
施工　江蘇溧陽城建集団有限公司
敷地面積　11,040m²
建築面積　5,543m²
延床面積　18,665m²
階数　地下1階　地上6階
構造　鉄筋コンクリート造　一部，鉄骨造
工期　2017年4月〜2019年12月
撮影　IX-miles Architecture
（データシート213頁）

エントランスホールより南を見る．天井高は6,700mm．
右手の中庭を介して隣に多目的ホールを配置．

エントランスホール（正面）や多目的ホール（階段を介して右隣），事務室（左）に囲まれた中庭．

多目的ホールは天井高6,700mmで，四周にハイサイドライトを持つ．

キャンパス内の通りから見た南東側外観．正面の1階にはブックカフェが入る．

アイソメトリック

上2点：多目的ホール周囲の2階に向かう動線．上は多目的ホール西側，中は北側．下：カフェとホワイエの歩行者動線．

ブックカフェ地下1階．ハイサイドや西側に設けた中庭より採光．

客室廊下．部分的に幅を広げ居場所をつくる．

打ち合わせや執務スペースを持つメゾネットタイプの客室．

キャンパス二期計画エリア

71,500

5,500 5,500 5,500 5,500 5,500 5,500 5,500 5,500 5,500 5,500 5,500 4,800 6,200

74,800

2,400 5,700 4,400 5,000 5,000 6,500 6,500 6,500 6,500 3,000 6,000 6,000 6,000 5,300

トレーニングジム

事務室

事務室

中会議室

ショップ

パントリー

会議室

会議室

倉庫

多目的ホール

エントランスホール

会議室

会議室

会議室

会議室

ホワイエ

会議室

会議室

中会議室

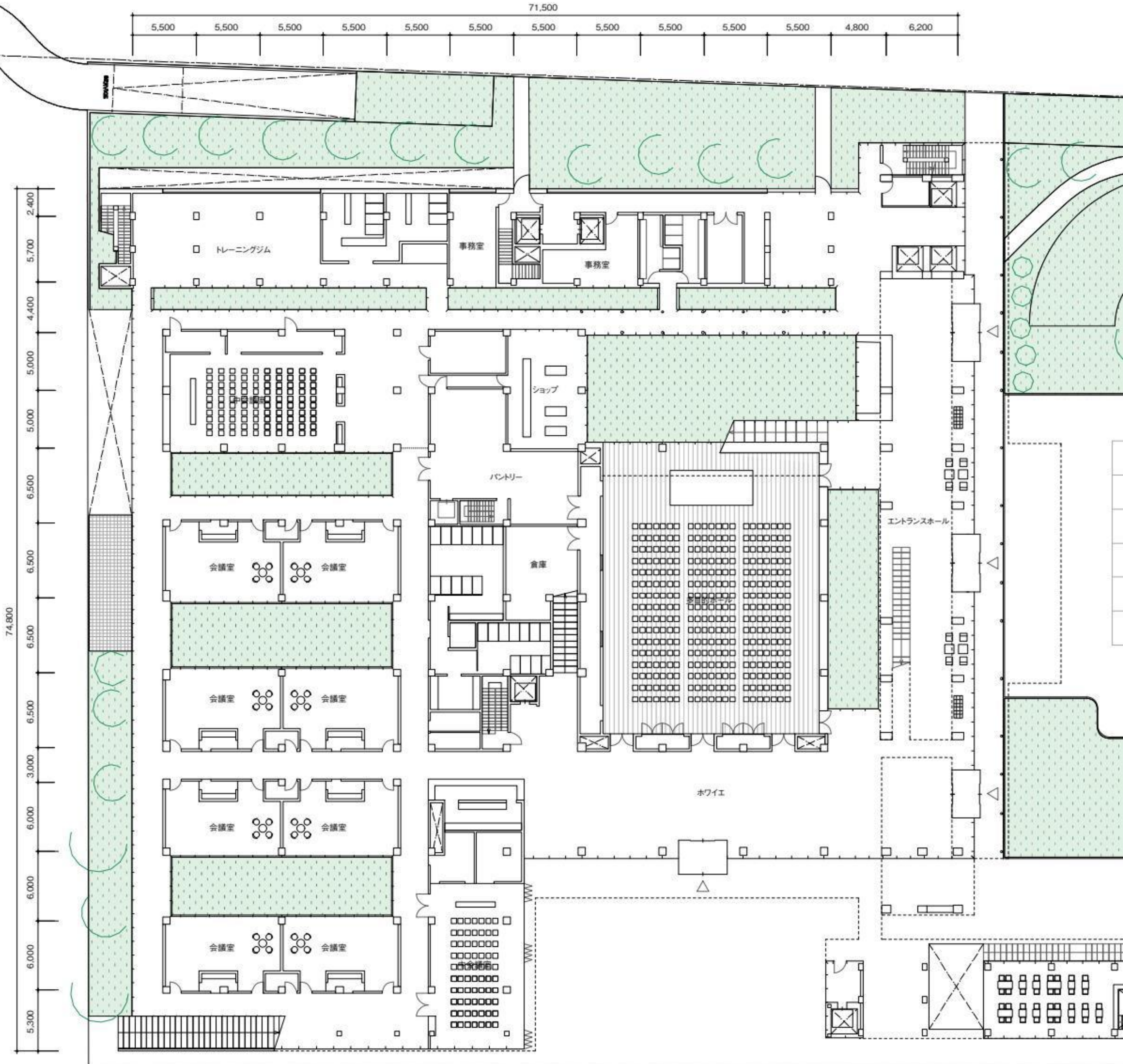
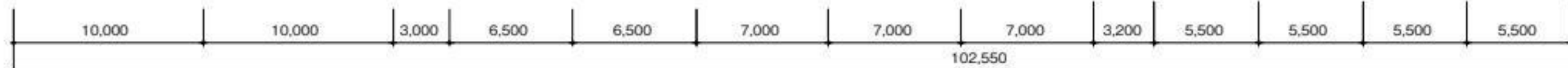
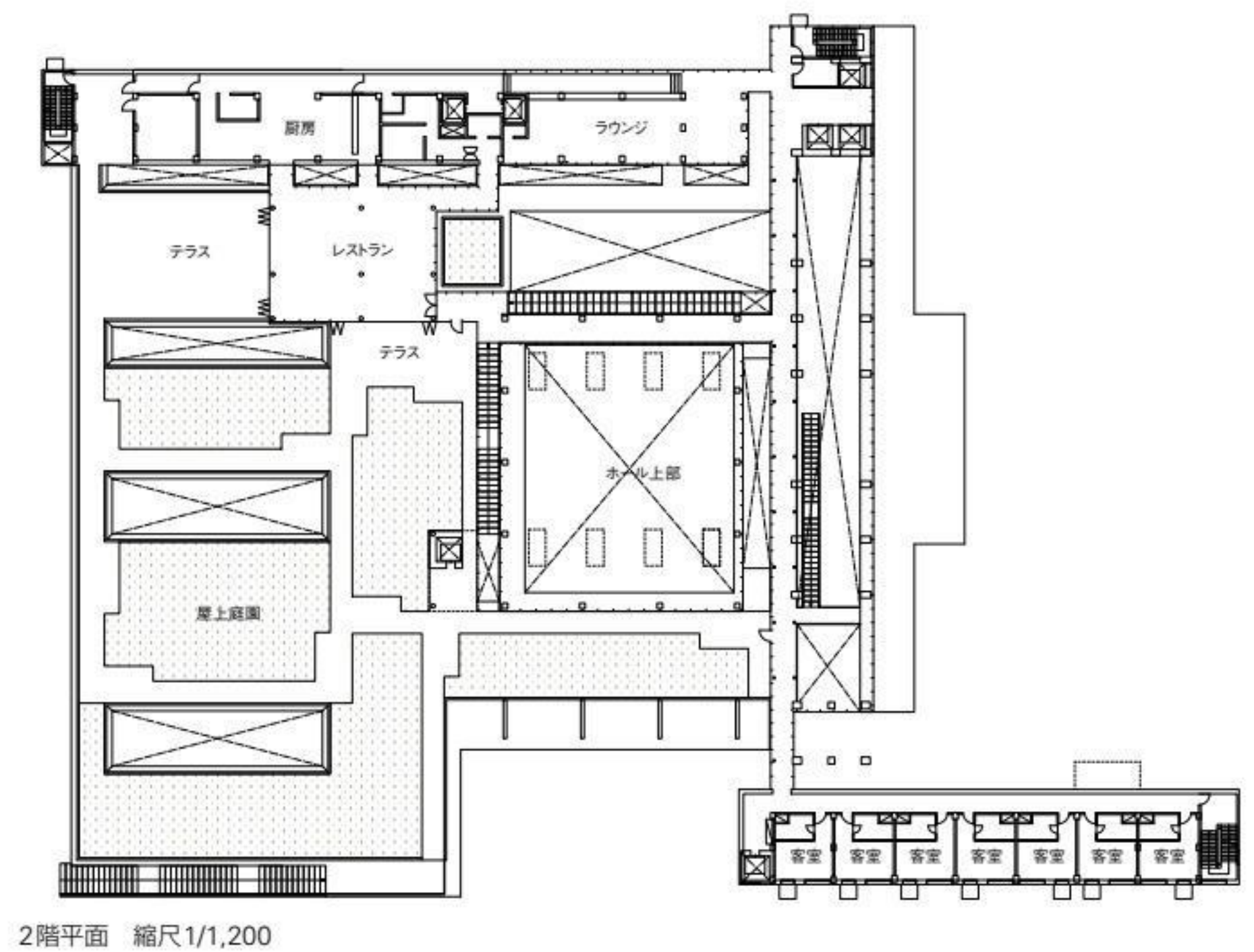
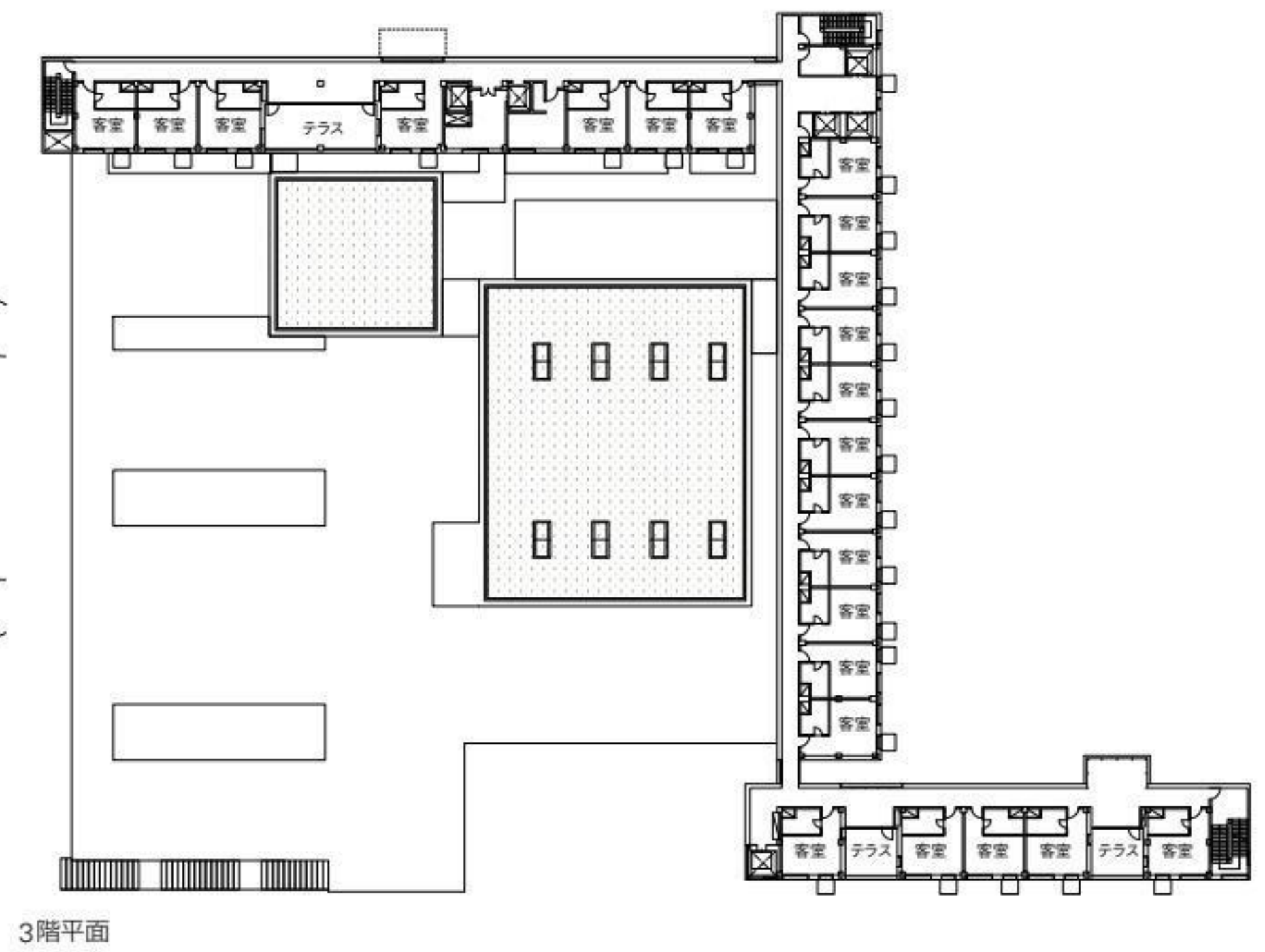
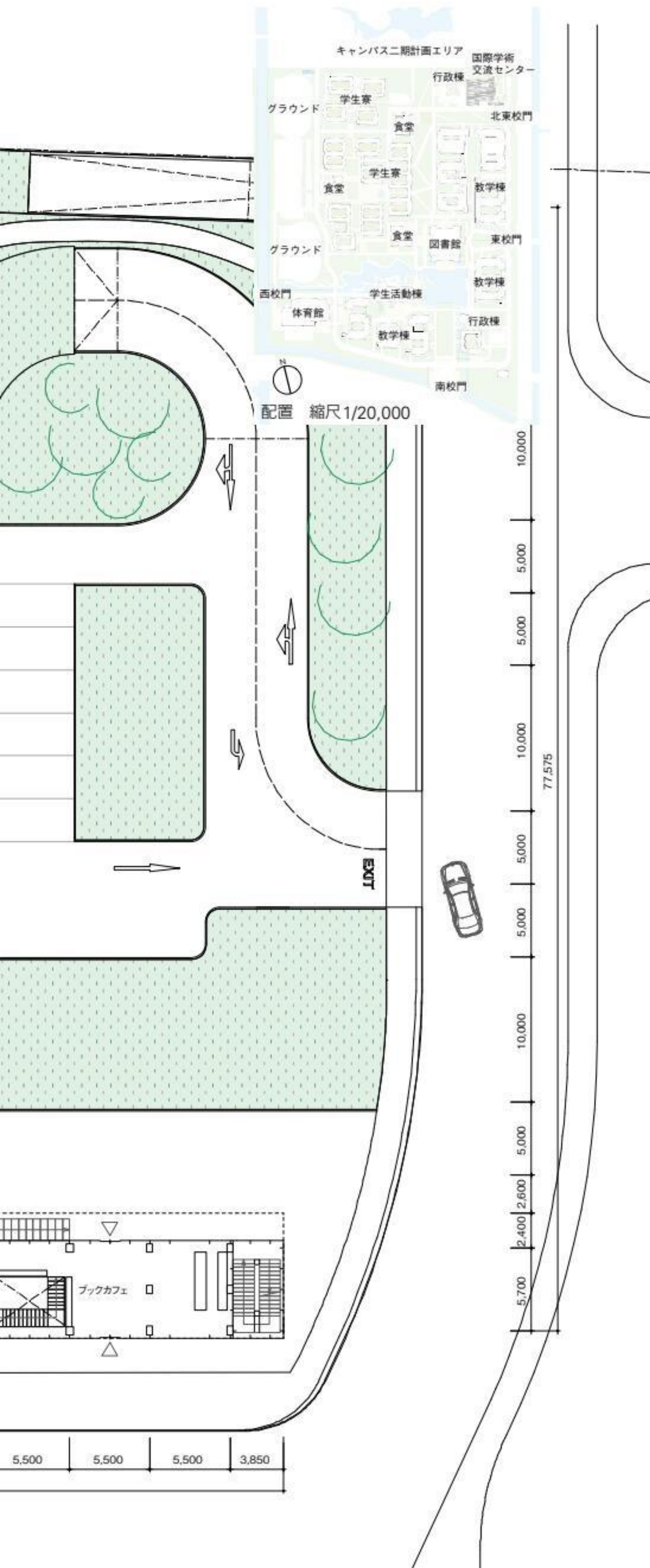
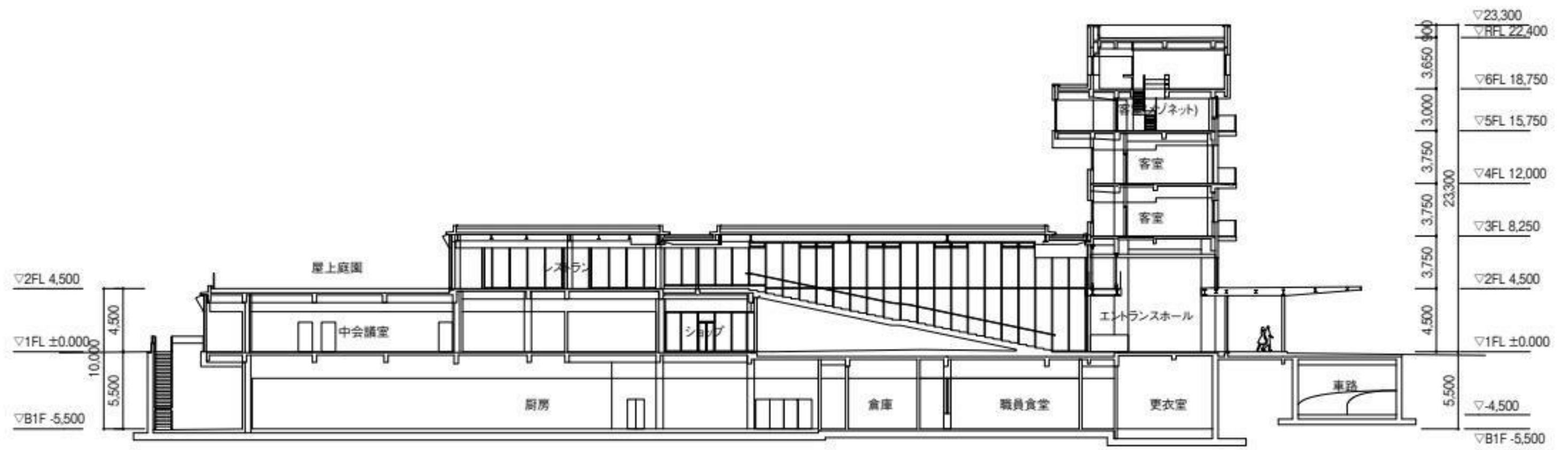
1階平面　縮尺1/600

10,000 10,000 3,000 6,500 6,500 7,000 7,000 7,000 3,200 5,500 5,500 5,500 5,500

102,550

東西断面　縮尺1/600

配置　縮尺1/20,000

3階平面

2階平面　縮尺1/1,200

同志社香里中学校・高等学校 メディアセンター

繋真館

設計　八木佐千子／ NASCA＋partners

施工　竹中工務店

所在地　大阪府寝屋川市

DOSHISHA KORI JUNIOR・SENIOR HIGH SCHOOL MEDIA CENTER KEISHINKAN
architects: SACHIKO YAGI ／ NASCA＋PARTNERS

大阪府寝屋川市に建つ中学校・高等学校の中庭に，メディアセンター（図書館）を新築するプロジェクト．屋上は周辺の普通教室棟や礼拝堂などと接続しており，閲覧室と屋上は生徒や教職員の動線となる．既存樹木を残した平面形状とした．

既存樹木を囲むようにカウンターを設置した閲覧室．天井高さは4.2m．登下校時に通り抜けられる動線に接するように書架を配置し，ワンルームの空間を，本棚によって緩やかに「動的エリア」と「静的エリア」に分けた．蔵書数は開架と閉架で約7万冊．

メディアセンター中央の既存エノキ。無方向球体ボイドスラブを用いた屋根構造の厚さは375mm。天井いっぱいの合わせガラスは，紫外線カットと飛散防止の中間膜を挟んでいる。上枠の金物で，鉄筋コンクリートスラブたわみの逃げを確保した。

友愛館（中学校普通教室棟）から紫塩館（特別教室棟）を見る．メディアセンター屋上の人工地盤で既存校舎同士が繋がった．バックヤード部分のみ2階建てで，スラブが隆起している．

北側エントランス．既存樹木を残すように計画．

グループ学習可能なラーニングコモンズ．放射線状に配置した照明はカテナリー状の吊りワイヤーに特注金物留め．

中学生昇降口に面したガラスコーナーのメディアラウンジ．外壁沿いの柱とアンボンドブレースで構成された面が耐震を担う．

1階と1,350mmのレベル差を設けた集中スペース．床下は空調機械室として利用．

集中スペースから自習スペースを見る．壁沿いの書架にはアカマツを使用．

香里の森を繋ぐメディアセンター

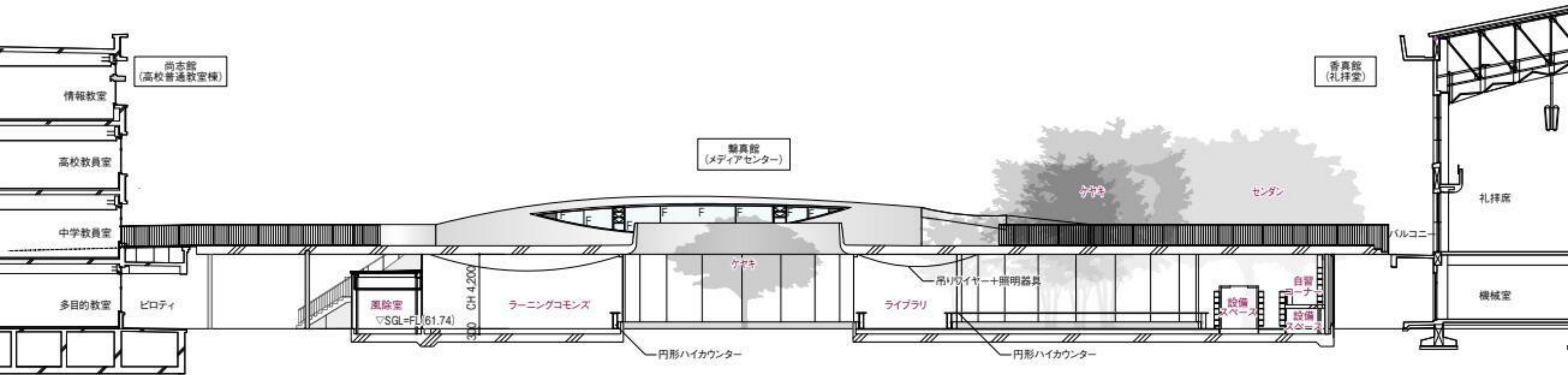
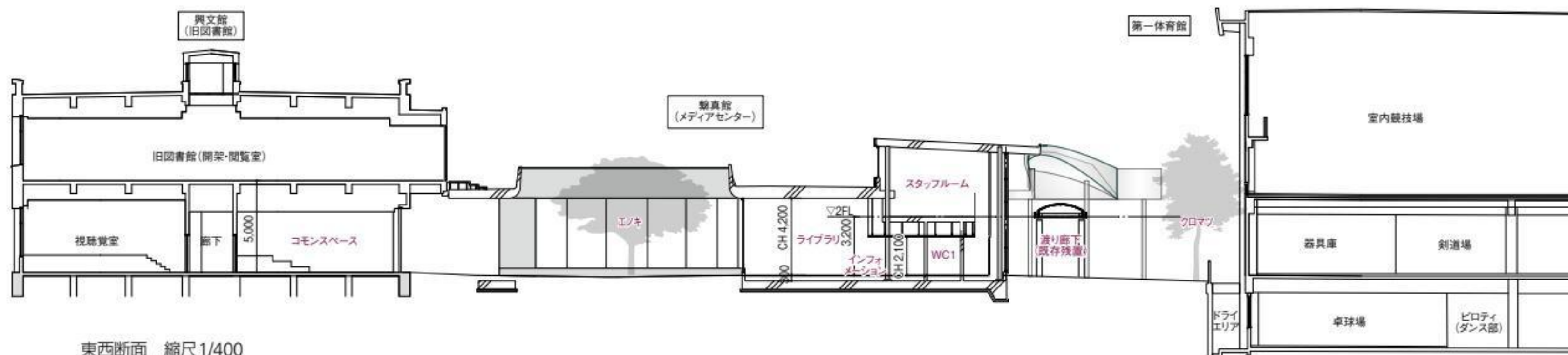
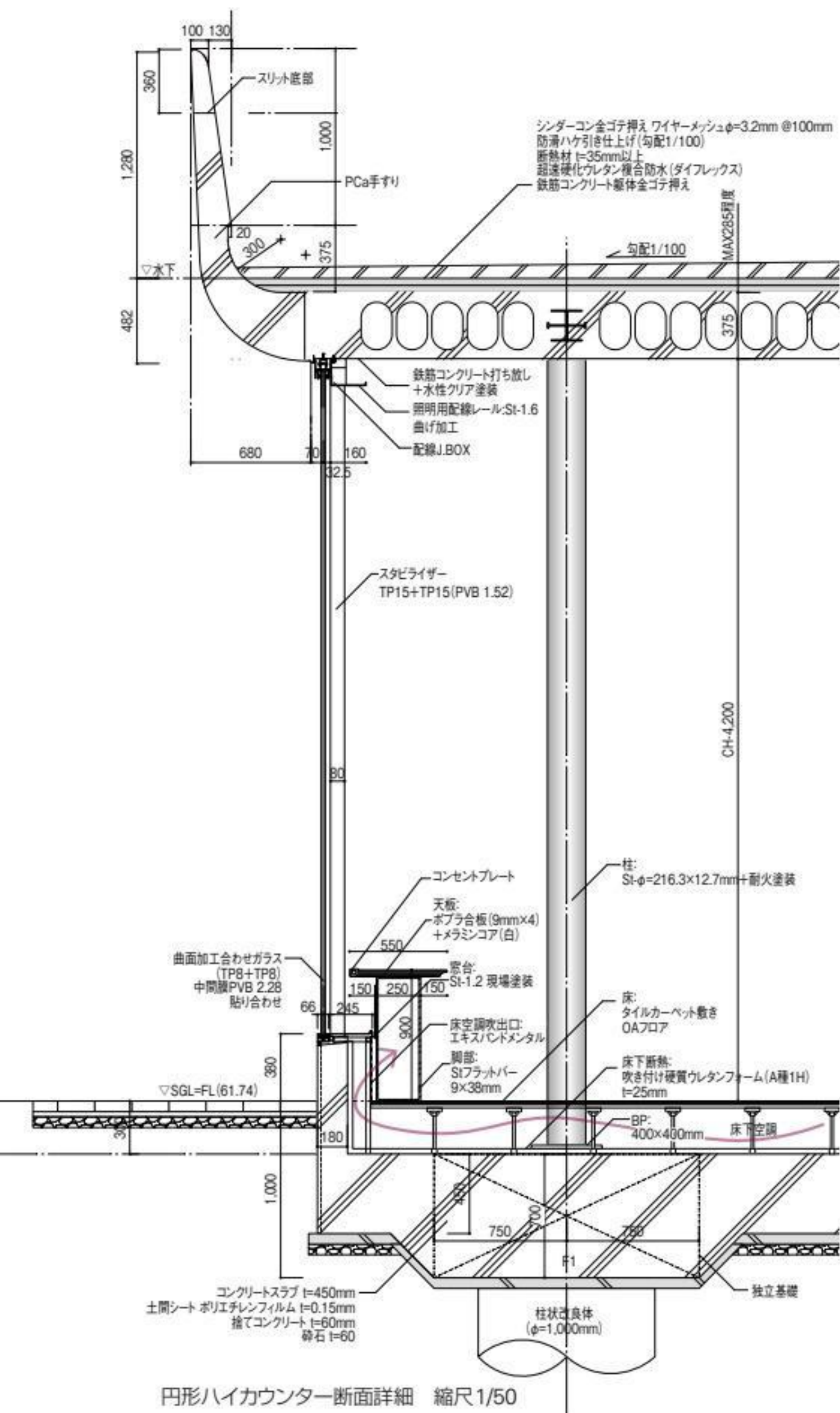
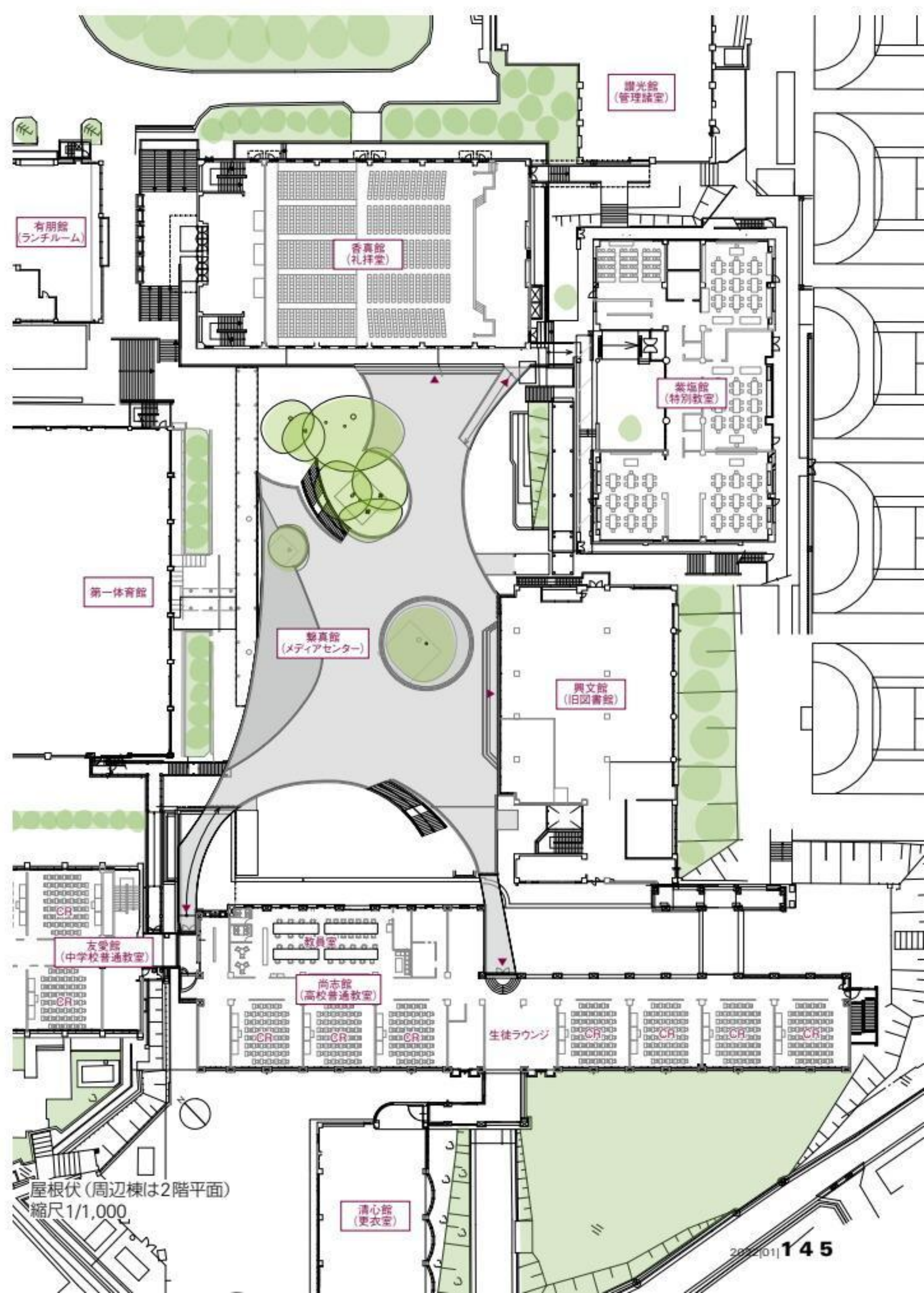
寝屋川市の丘陵地の一角に位置する同志社香里中学校・高等学校．16mもの高低差のある敷地で香里の森と呼ばれる．既存校舎は接地床レベルも階高もさまざまで，棟間の移動には実に多様なルートがあり，まるで山岳都市を散策しているようだ．

プロポーザルの課題に「キャンパス内で最もふさわしい建設場所」や「今後の建て替え計画」の提案も求められていた．静寂な「図書室」のイメージを脱却するICT教育の交流活発な「メディアセンター」の立地は，動線の中心である緑豊かな中庭が絶好の狙い目である．そこで私たちは，中庭に各棟を繋ぐ人工地盤をつくり，接地階にメディアセンターを提案した．校舎間の移動には屋上を利用してもよいし，スラブ下のメディアセンター内部を通り抜けてもよく，大きく張り出した軒下を利用してもよい．提案する建設場所は「中庭」，コンセプトは「繋ぐ」と「香里の森」にすぐに決まった．既存図書館（興文館）1階の閉架書庫はメディアセンターを補完する発表の場に一部改装し，2階の図書室は今後のキャンパス建て替え時に必要な「仮スペース」の受け皿にする提案をした．

まず，樹形のよい樹齢60年を超えるエノキ，ケヤキなど既存樹の位置測量を始める．さらに，「繋ぐ」ために既存校舎に法的に遡及すべき部分を洗い出す．幸いなことにほとんどの既存不適格はその都度改修していることが分かったが，その調査や安全性を確認する届出資料の作成に多くの時間とエネルギーを費やされた．それだけでなく，モグラ叩きのように次から次へとやってくるハードルの中を息つく暇もなく疾走し続け，着工間もなく襲ってきたコロナなんて心配している余裕もなかった．新たに建てた部分の延べ面積は877m²だが，繋がった他棟含めた合計は約22,000m²．多くの関係者に膨大な協力をいただき繋がった．幾度となく挫折しそうになった私を見守ってくれた校長が，完成した時に「本当に繋がったんやなあ」とつぶやいた言葉が耳に残る．教職員で構成された建設委員会が命名した館名は「繋真館」．皆が同じ方向を向いていたおかげで完成した．

樹木に欠き取られるように出来上がった建築は不思議と周囲に馴染み，だいぶ前から存在していたかのように見える．人工地盤を利用して2階同士を往来する生徒や教職員たちの動きはごく自然に流れている．この館が生徒たちの日常の中心にあり，仲間や先生や本や情報が香里の森に溢れ出てきている．

（八木佐千子／ NASCA+partners）

設計　八木佐千子／ NASCA＋partners
　構造　満田衛資構造計画研究所
　設備　阪田設備事務所
施工　竹中工務店大阪本店
敷地面積　79,910.95m²
建築面積　1,440.41m²
延床面積　877.48m²
（今回の増築を含む一棟扱いの合計延床面積　21,977.16m²）
階数　地上2階
構造　鉄骨造　一部，鉄筋コンクリート造
工期　2020年3月～2021年4月
撮影　新建築社写真部
（データシート214頁）

北側俯瞰。中川政七商店の創業の地に建つ店舗（1、2階）およびコワーキングスペース（3階）。屋根はいぶし瓦 桟瓦葺き。

鹿猿狐ビルヂング

設計　内藤廣建築設計事務所

施工　平井建設

所在地　奈良県奈良市

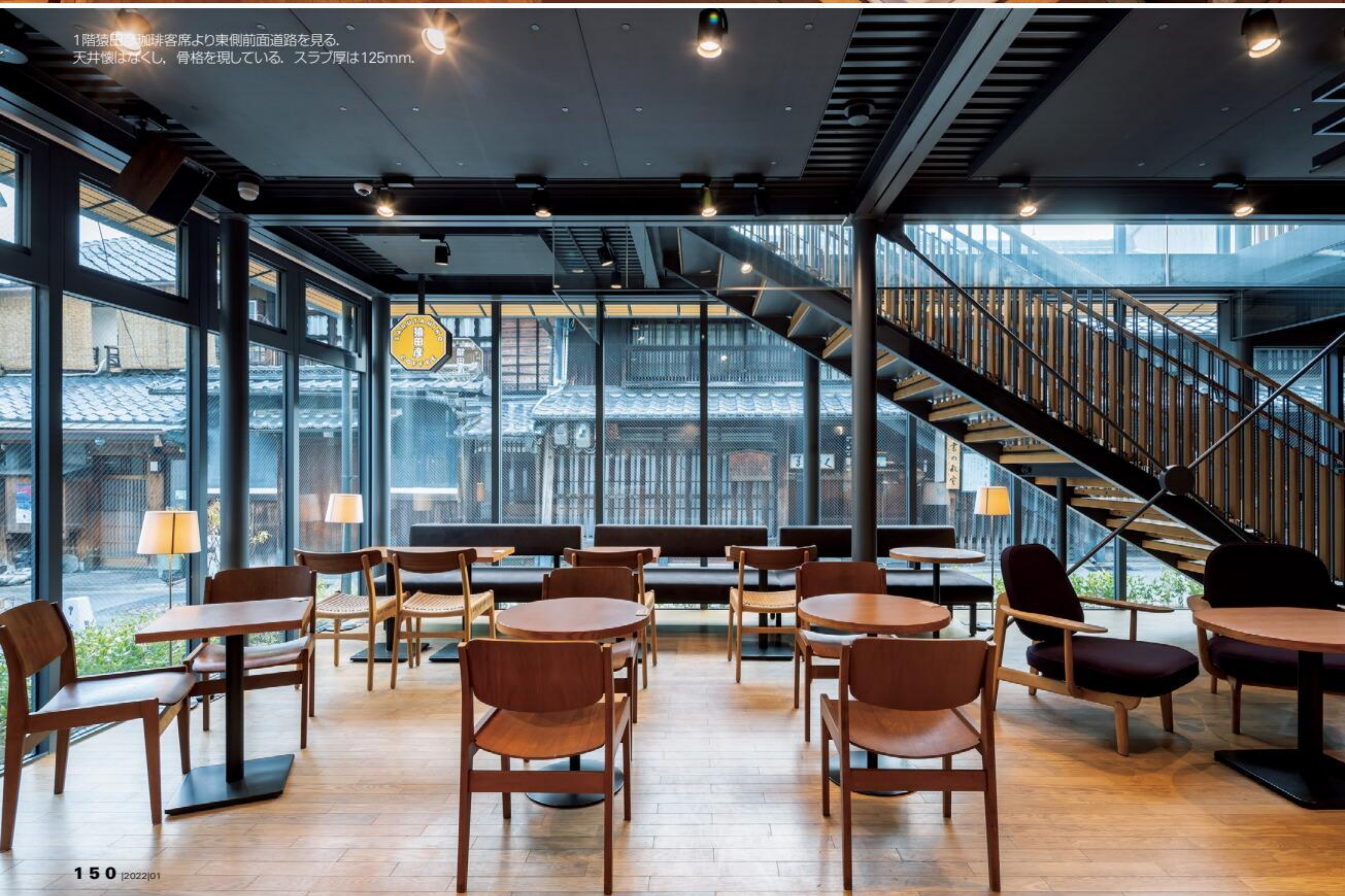
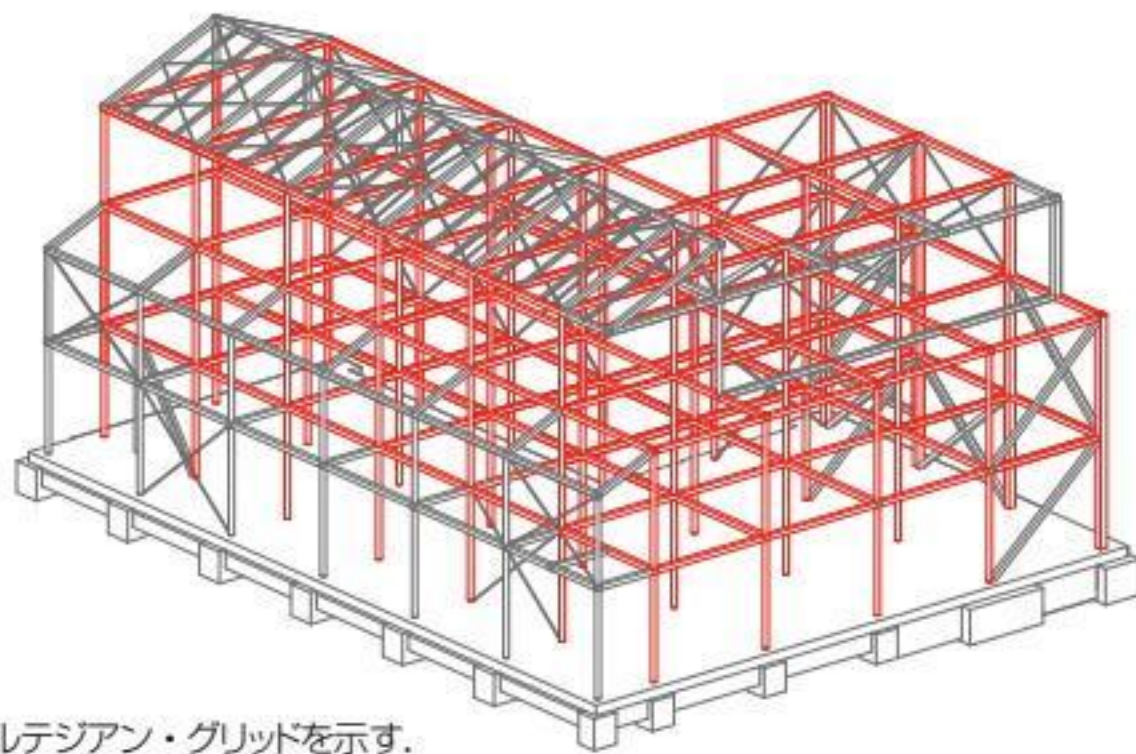
SHIKA SARU KITSUNE BUILDING
architects: NAITO ARCHITECT & ASSOCIATES

東側前面道路より見る．周囲に合わせて3階を後退させ，1階には庇を設けた．
1階庇は厚さ6mmのスチールプレートを溶融亜鉛メッキ＋リン酸処理したもの．

3階コワーキング（JIRIN）より東を見る．興福寺の五重塔や若草山の山並みが見える．建物が密集する地域に建ち，建設にあたり大きな部材が使えない中で，主なスパンを2間（3,600mm）グリッドの鉄骨造とし，柱梁の寸法を抑えた．

設計　建築　内藤廣建築設計事務所
構造　KAP
設備　森村設計
施工　平井建設
敷地面積　419.06m^2
建築面積　294.42m^2
延床面積　796.17m^2
階数　地上3階
構造　鉄骨造
工期　2019年10月～2021年3月
撮影　新建築社写真部
（データシート215頁）

2階中川政七商店．柱はφ=114.3mm，梁は溝形鋼を組み合わせ，梁せい150mmとした．
ブレースは可能な限りバックヤードの壁に配置．見えて来る部分はPC鋼棒を用いシンプルに納めた．

1階猿田彦珈琲客席より東側前面道路を見る．
天井懐はなくし，骨格を現している．スラブ厚は125mm．

アクソノメトリック
赤線は3,600mmのカルテジアン・グリッドを示す．

550
230
幕板：
St-PL t=4.5mm
溶融亜鉛メッキ+リン酸処理
庇：
St-PL t=6mm
溶融亜鉛メッキ+リン酸処理
▽2FL
▽2SL
庇下地：
St-PL t=9mm @450mm
溶融亜鉛メッキ+リン酸処理
▽1F梁天端
軒天：
吉野桧小幅板張り t=15mm w=45mm
木材保護塗料
目板：
St-FB t=9mm w=65mm
溶融亜鉛メッキ+リン酸処理
ガラス：
FL6+A6+PW6.8
柱：
St-○ φ=114.3mm t=6.6mm ウレタン塗装
床：
ナラフローリングWPC t=15mm w=75mm
セラミックスUV塗装
下地：
構造用合板 t=9mm
パーティクルボード t=20mm
梁：
St-2C 150×75×6.5×10mm ウレタン塗装
柱：
St-○ φ=139.8mm t=6.6mm ウレタン塗装
ブラインドボックス：
St-PL t=1.6mm 曲加工 ウレタン塗装
方立：
St-BT FB25×65mm+FB12×44 @900mm
ウレタン塗装

柱梁の接合部，庇の断面詳細
縮尺1/15

上：3階コワーキングスペースJIRIN．トラス梁とし，7,200mmスパンの一室空間とした．
下：1階すき焼きレストラン㐂つねより路地越しに中川政七商店の売場，階段を見る．

1,800
3,600
3,600
棟：
素丸瓦
のし瓦三段
▽棟梁天端=3FL+3,805
屋根：
いぶし瓦 桟瓦葺き
軒樋：
ガルバリウム鋼板 t=0.5mm
▽3F梁天端=3FL+2,435
軒天：
吉野ヒノキ小幅板張り t=15mm w=45mm
実加工 木材保護塗料塗布
窓台：
ナラ集成材 t=20mm OS拭き取り
床：
タイルカーペット t=12mm
JIRIN ワークスペース
天井：
吉野ヒノキ小幅板張り t=15mm w=45mm
実加工 不燃処理材
壁：
内装薄塗材
柱：
St-○ φ=89.1mm ウレタン塗装
外壁：
窯業系サイディング t=16mm 横張り @450mm
▽3FL±0
▽梁天端=2FL+2,350
アルミ排煙窓
天井：
GC巻きGW吸音板 t=25mm
天井：
吉野ヒノキ小幅板張り t=15mm w=45mm
不燃処理材 実加工
スチールカーテンウォール：
溶融亜鉛メッキ+リン酸処理
中川政七商店 売場2
壁：
内装薄塗材
柱：
St-○ φ=114.3mm ウレタン塗装
床：
ナラフローリングWPC t=15mm w=75mm
セラミックスUV塗装
▽2FL±0
屋根：
ガルバリウム鋼板 t=0.4mm
竪はぜ葺き @340mm
庇：
St-PL t=6mm
溶融亜鉛メッキ+リン酸処理
軒天：
吉野ヒノキ小幅板張り t=15mm w=45mm
実加工 木材保護塗料塗布
天井：
GC巻きGW吸音板 t=25mm
床：
カバフローリング t=15mm w=120mm
セラミックスUV塗装
㐂つね 客席2
天井：
吉野ヒノキ小幅板張り t=15mm w=45mm
不燃処理材 実加工
柱：
St-○ φ=139.8mm ウレタン塗装
建物際舗装：
錆御影砂利敷き t=50mm
見切り:St-FB 6×200mm 黒皮
舗装：
錆御影石 600mm角 t=30mm
ビシャン仕上げ

東西断面 縮尺1/100

目前の物事に夢をまぜるとしたら

内藤廣（建築家）

建築という価値の蘇生

京都の鳩居堂（本誌2107）の掲載の時に「ノスタルジーの行方」，東京の紀尾井清堂（同2110）の時に「建築を熱くするもの」というタイトルで文を書いた．どちらも建物の説明というよりは，建築に向き合う気持ちや思考を言葉にして晒してみた．人前に自分を晒すことはかなり勇気がいるが，それはそれで後戻りのできないところに立つわけで，踏ん切りが付くようなところもある．そこにはうまくいけば，同じような気持ちでいる誰かと繋がれるかもしれない，という淡い期待がある．

編集部に促されて書いてみて，自分なりの収穫もあった．これは感謝しなければならない．思ってもいなかったのだが，自分のやりたいこと，やるべきこと，それらが朧げながらにも見えてきた感じがある．少し大仰すぎるような気もするのだが，それは瀕死状態にある「建築という価値を蘇生させる」ということに尽きる．それなりの歳になってきたのだから，このくらいの言葉を吐かないと元気が出ない．今回の発表に際して，さらに続編を書けというので，この文を書いている．

「構築する意志」に働きかけるもの

先の文にも書いたが，すべては「機能や経済とは違う次元で，建築にはそれ自身にしか回収できない価値がある」，と仮定したところから始まる．多分これは間違っていない．そして，それに生命を与えるのは，個人の記憶の奥底にある「夢や希望や憧れ」なのではないか，と書いた．それらが「構築する意志」としての冷たい「建築」に働きかけ，生命を与え，熱くする，という筋立てだった．

この時，書かなかった言葉がある．思想家の鶴見俊輔のエッセイ（『思い出袋』岩波新書，2010年）の中に，唐突に，それも前後の脈絡なく出てきて驚いた一文，「目前の物事に夢をまぜたとき，目前の物事は，永遠の一部分になる．」は，近年遭遇したいちばん印象に残る言葉で，これを入れたかったのだが饒舌になるので据え置いた．和歌や俳句や詩は，まさにこの言葉そのものなので，鶴見はそれを言いたかったのかもしれない．言葉の意味の奥深いところまではまだ未消化だが，これを建物の設計そのものに読み替えることもできる．

「目前の物事」を「設計するための与件」と捉え，「夢をまぜる」というのを建物に「夢や希望や憧れ」を与えることと捉えることも可能だ．太古より人間は，ただの構築物に何らかのイメージを与えようとしてきた，と考えれば，これも「永遠の一部分」となる．「構築する意志」だけでは建築は生きたものにならない．そこに夢をまぜることで，永遠の時間の中ではわずかの間なのかもしれないけれど「生きること」を許される，と理解することもできる．

「なんとなく」を形にする

当主の十三代中川政七さんは不思議な人だ．何かを押し付けるでもなく，特別に何かを言うでもなく，そうかといって普通の会話をしている中でイメージしていることが「なんとなく」分かる．奈良の老舗の当主でありながら若い世代の企業人で，全国の小口のクラフトのネットワークをつくって販売するやり方を生み出して，新しいビジネスとして社会に衝撃を与えた．時代の小さな忘れ物のような集合体は，そのまま現代人が失ってはいけないものを表現する媒体になった．

ここにも言外の「なんとなく」がある．中川さんは，繋ぐこと，巻き込むこと，その気にさせることに長けた人なのだと思う．こちらの主体性を尊重してくれると同時に，こちらもその「なんとなく」を正確に感じ取って形にしていかねばならない．ここが難しいところだ．

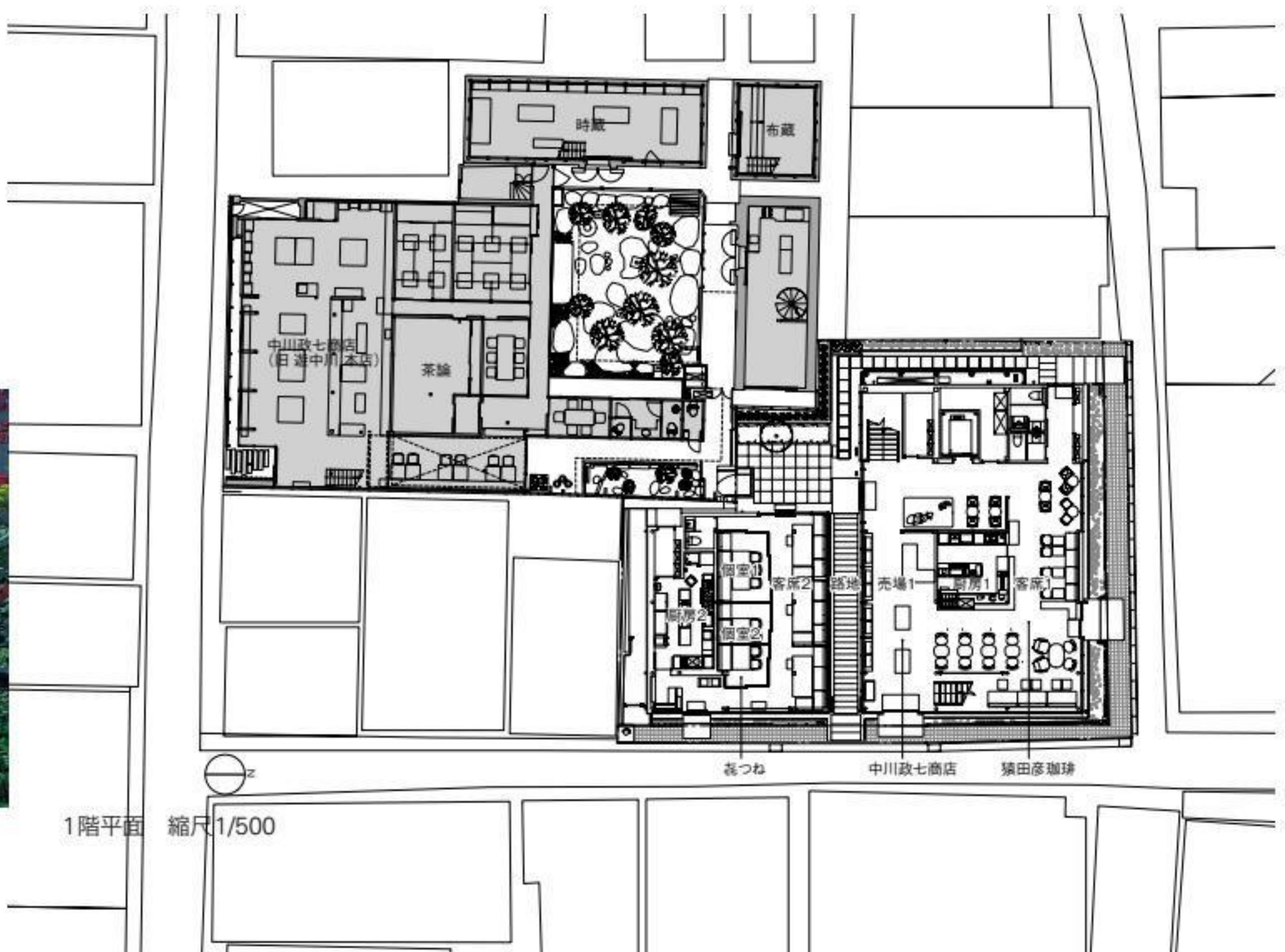
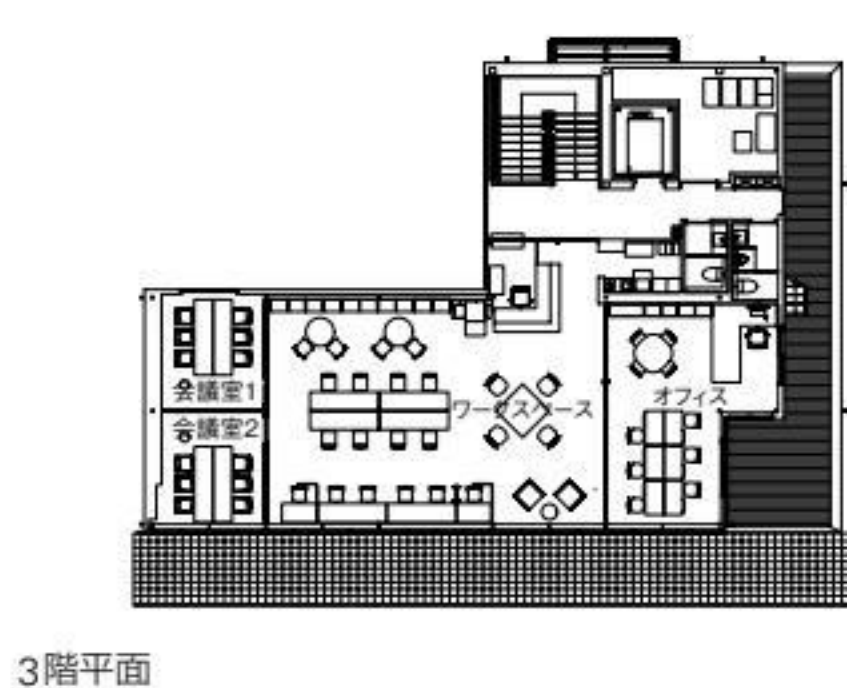
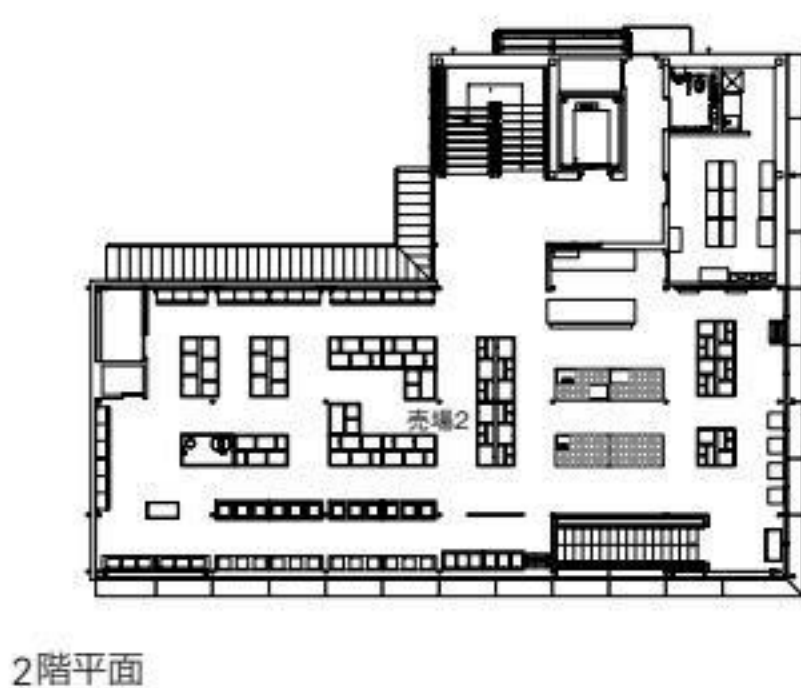
虎屋（室町，本誌0706，0809，1001，1211，1811）を入口に，鳩居堂（寛文），中川政七商店（享保）と300年

配置　縮尺1/4,000

2階平面

3階平面

路地奥の中庭より南側に建つ既存の店舗棟を見る．

1階平面　縮尺1/500

以上の歴史がある老舗の仕事をさせていただいた．そこには時代の荒波を乗り越えてきた不易流行の姿勢が，それぞれ違う形で存在していることを知った．共通しているのは，時代の大きな流れを「なんとなく」遥かに眺め，ゆったりと間を取り，鋭く矢を放ち，今という時代の的の真ん中を射抜く気迫がある．
これは後から考えたことだが，中川さんの「なんとなく」は，「目前の物事に夢をまぜる」ことだったのではないか．おそらくそれは，中川さんがクラフトの世界に持ち込もうとしたものとも繋がっているはずだ．柳宗悦の「民芸」は思想になってしまった．それに対して「デザイン」は社会的なメッセージになってしまった．クラフトはそのどちらでもない．人に何も強いない．手づくりの感触や視覚的な彩を通して，暮らしの中に入っていく．中川政七商店の「花ふきん」のように，ささやかな暮らしの風景に「夢をまぜる」，それも「なんとなく」だ．
この建物の設計もそれを受け止める努力から始まった．

座標軸をクラフト的につくる

敷地は奈良でも猿沢池近くの古い街並みの一画にある．外観は景観上これをディスターブするものであってはならないので，外側の壁面線や屋根は周囲に合わせてつくることにした．
この建物の用途は，終盤までなかなか決まらなかった．いろいろな展開を考える人だから，様子を見ながら答えを出すのではないかと思っていた．だから，私の方はフロアをつくることに専念した．内容が決まってきてから全体のフレームの中で消化していけばいい．だとすれば骨格を構成する構造体は抽象的な方がよい．そして，可能な限り抽象の度合いが高い方がよい．何を描いてもよい座標軸をつくるようなものだ．
内部を自由にしておきたかったので，伝統的な3.6mの寸法のグリッドプラン，木造に近い太さの鉄骨の細い柱と小さめの梁で構成した．最上階だけは集会もあるので屋根架構を使って2スパン飛ばして広く使えるようにした．
19世紀にできたヨーロッパのどの街にもあるような駅や市場の空間が好きだ．繊細な架構がおおらかな空間をつくっていて，その下でさまざまな人が行き交う，あの感じだ．200年前，スチールは貴重品だった．今と比べれば品質も悪い鋳鉄や鋳鋼などで，大きな部材では使えなかった．それだけに，細かな部材を丁寧に扱っていて，その結果，架構がクラフト的な繊細さを獲得している．この建物で目指したのもそれに近い．部材をひとつひとつ丁寧に扱うことでスケール感を生み出し，なおかつクラフト的な空気をつくろうとした．
単純な構成の建物だけに，ディテールには逃げがなく，また見せ場としてもジョイントの細部になる．施工者は今では珍しい昔気質の人で，見積書も工程表もないハラハラするような現場だったが，さすが仕上がりは上々だった．現場のドタバタはとうに過ぎ去って，建物は何事もなかったかのようにスッキリと建っている．これも「なんとなく」の力なのかもしれない．

千年の景色

この建物で，建築的な価値が際立っているかというと，そうでもない．商業施設はモノを売るという営みからは逃れられない．ここで建築的につくろうとしたのは構築的な背景だ．それを「地」と言ってもよい．そこにさまざまな文様が重ねられる．文様が際立てば，「地」は背景に退く．そのように仕込むことも，全体から見れば「構築する意志」ということになる．
この建物の3階は，新しい事業を興そうと志す人たちのための道場のような場になりつつある．広々と開かれた開口部のすぐ目の前に瓦の屋並みがあり，その向こうに猿沢池があり，左手には興福寺の鬱蒼とした杜木立が見え，国宝の五重塔が聳え，若草山のなだらかな斜面が見える．まさに千年の景色だ．この中には確かに「夢や希望や憧れ」が詰まっている．時の流れが折り重なった景色が与えてくれる空気感は，単純な言葉では言い表せない．中川さんの「なんとなく」の気配もそのあたりにありそうな気がしている．

前面道路より見る東外観．東側間口中央部の路地を抜けると，中庭を介して既存の店舗，ふたつの蔵と繋がる．

星野リゾート　界 ポロト

設計　中村拓志&NAP建築設計事務所

施工　前田建設工業

所在地　北海道白老郡白老町

HOSHINO RESORTS KAI POROTO
architects: HIROSHI NAKAMURA&NAP

アイヌ文化を映すポロト湖に佇む温泉宿泊施設

ポロト湖を擁する白老は，アイヌ民族の集落があった地域だ．対岸にはアイヌ民族博物館（本誌2009）の野外展示の集落（コタン）が広がり，樽前山が遠望できる．この景観を活かしながら，アイヌ文化を反映した温泉旅館の姿を求めた．

ポロト湖はわずか数km先の湧水（メム）が源流で，本敷地駐車場側にもメムがある．アイヌ民族は冬に凍ることのないメムを生活用水として大切にしてきた．そこでこの川が湖に注ぐ流域としてのランドスケープを整備．メムの流れに沿ったアプローチや，川を跨ぐ客室棟の河口側は親水エリアとして，カヌーの船着場や不凍の水面を眺める囲炉裏のサンクンラウンジを設けた．チセ（家）の囲炉裏で語り合うアイヌ民族の家族観を継承し，客室もソファ前に間接照明を仕込んだローテーブルを囲むプランとしている．

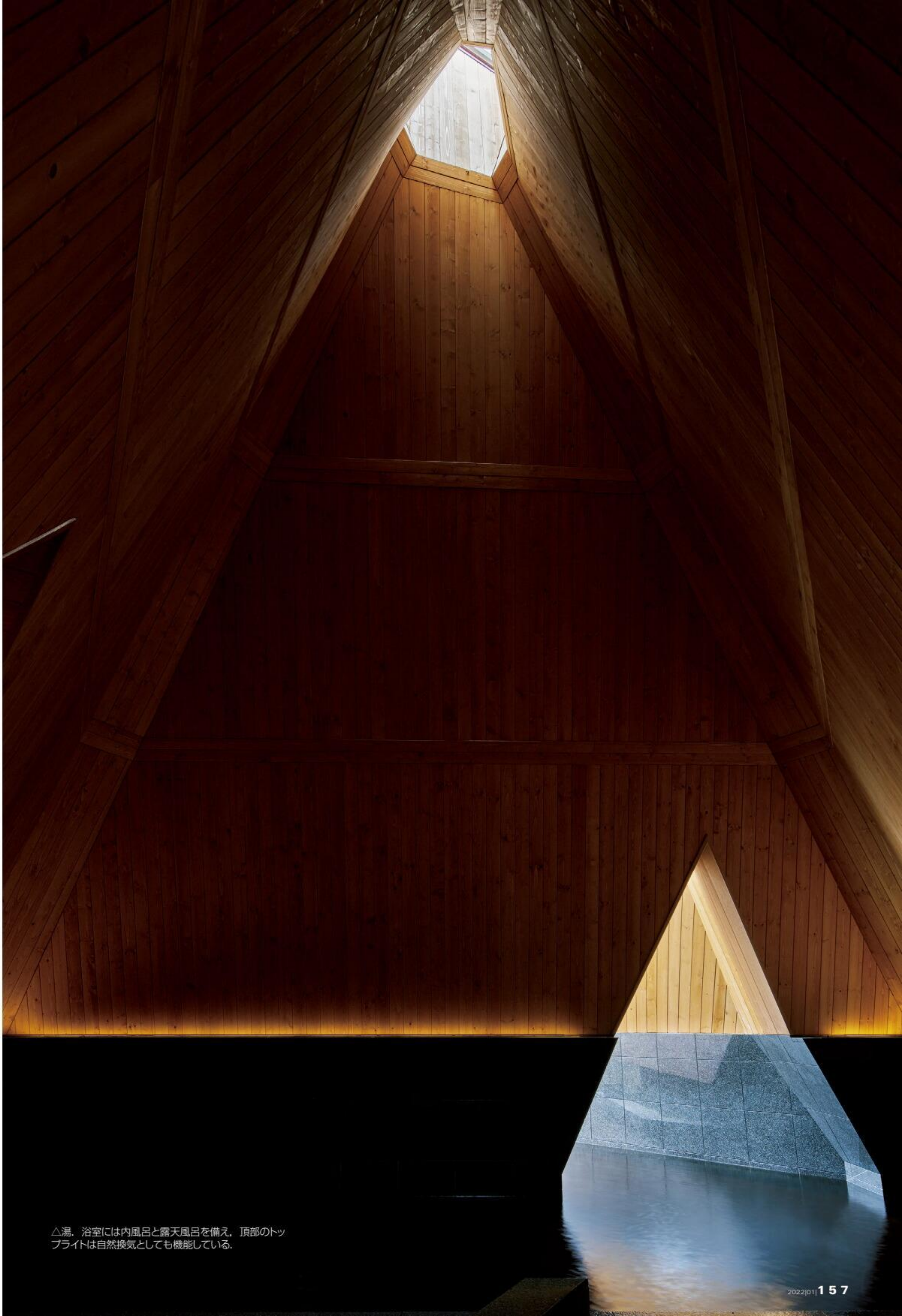
水際は護岸擁壁を設けずに自然な岸辺を有機的に形成し，湖畔には△湯と呼ぶ湯小屋を設けた．2階以上にある客室から見て湖の水平線を覆うことのない，借景の一部である．湯小屋は，立てかけ合った3本の丸太を側面で繋ぐ三脚構造とした．これはアイヌ民族が熊追いや鮭待ちの時に山中でビバークするための「ケトゥンニ」と呼ばれる最小限構造である．接合部より上の逆三角錐状の空間は，焚火の煙抜きやトップライトに使われる．この特性を利用することで，周囲の視線を避けるために窓の少ない温泉施設が，穏やかで均一な自然光のシャワーと上昇気流による湿暖気の自然換気を可能とする，エコロジカルな建築となった．

更地だった開発地は，白樺を中心として地域の植生に基づき植林した．白樺は荒廃した大地で真っ先に発芽して根付き，他の植物を保護して土地を豊かに変えるマザーツリーである．そこで庭だけでなく外装や館内にも白樺間伐材の林を設け，この開発地だけでなく，アイヌ文化を守り育てる存在としてのメッセージを込めた．

アイヌ民族達がかつて森や川と深い関係を持っていたことを想うリゾートである．

（中村拓志／NAP建築設計事務所）

南西側より，△湯を見る．北海道白老郡にある「界 ポロト」は，アイヌの集落であるポロトコタンから着想し，ポロト湖沿いにホテル棟と湯小屋が建つ．町の許可を得て土地を掘削し敷地内に湖を引き込むことで，湖に囲まれる温小屋を実現．三角錐の建物郡のボリュームは景観に配慮し，必要最小限の場所を囲むよう計画した．

湯小屋．△湯の湯上がり処．△湯はアイヌの建築を継承し，道産材の3本の丸太を三角組みした「ケトゥンニ」を基本構造とした「カシ」をモチーフとした．丸太はトドマツ．

△湯．浴室には内風呂と露天風呂を備え，頂部のトップライトは自然換気としても機能している．

ポロト湖から，△湯と客室棟を見る．客室棟ファサードに，白樺の高精細写真を基にしたオリジナルシートをアルミパイプに貼り付け，ランダムにならべることで白樺が林立するファサードをつくった．

配置　縮尺1/10,000

「チセ」から導かれた構造

湯上り処の空間を形づくる最高高さ約11mにも達する捩れた三角錐状の屋根構造は，カシ（野営小屋）の屋根に使われたケトゥンニ（三脚）構造をベースにしている．基本骨組は先行発注で調達した北海道産トドマツ丸太で構成しており，3本の隅木で支え合わせた三脚の中間を横繋材で突っ張らせて扇垂木を架け渡すことで面外方向の外力に抵抗させている．その外側の断熱材の厚みを利用して形成した構面に面内方向の力を負担させることで，架構全体の剛性・耐力をさらに向上させている．　（山田憲明＋石川敬一／山田憲明構造設計事務所）

湯処棟　△湯断面
縮尺1/60

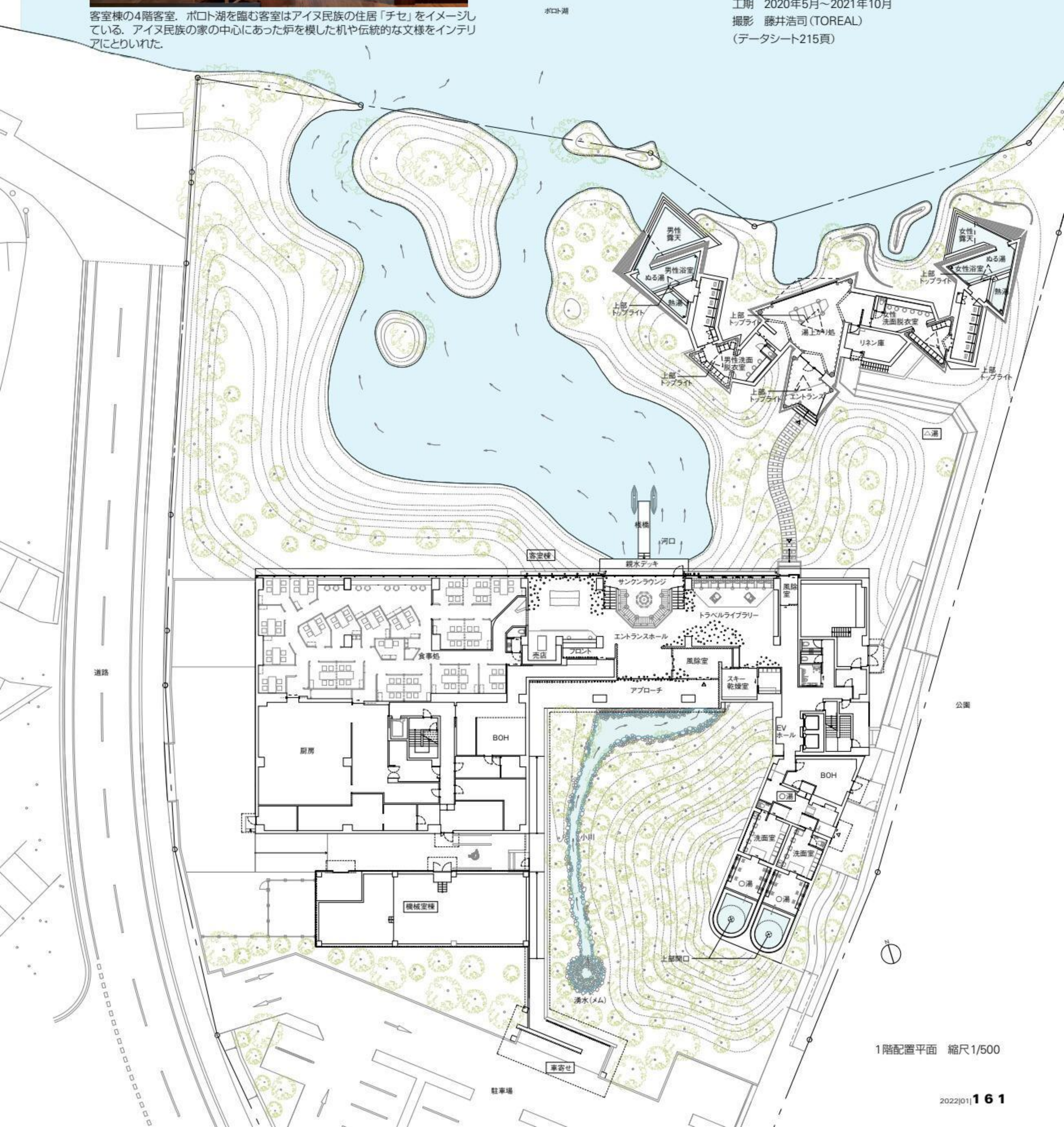
△湯．北西に湯上り処を見る．奥には「ケトゥンニ」をモチーフとしたフロアライトがある．

客室棟1階エントランス。室内に配置された白樺は集落の森を再現している。中央のコンクリート打放壁は，白樺丸太を型枠として打ち込み，コンクリートに白樺模様を転写させている。

客室棟1階ロビーから北を見る。アイヌ民族の人の家の中心にあった囲炉裏（アペオイ）をロビーに配置し，宿泊客の交流の場とする。

客室棟の4階客室．ポロト湖を臨む客室はアイヌ民族の住居「チセ」をイメージしている．アイヌ民族の家の中心にあった炉を模した机や伝統的な文様をインテリアにとりいれた．

設計　建築　中村拓志&NAP建築設計事務所
　　　構造　△湯：山田憲明構造設計事務所
　　　　　　客室棟：山田憲明構造設計事務所（基本設計）
　　　　　　　　　　前田建設工業（実施設計）
　　　設備　ハルス建築環境設計
施工　前田建設工業
敷地面積　9,339.04m²
建築面積　2,021.37m²（1,73201m²＋289.36m²）
延床面積　4,951.48m²（4,652.97m²＋298.51m²）
階数　客室棟：地上4階　温泉棟：地上1階
　　　その他：地上1階
構造　客室棟：鉄筋コンクリート造
　　　温泉棟：鉄筋コンクリート造＋木造
　　　その他：鉄骨造
工期　2020年5月～2021年10月
撮影　藤井浩司（TOREAL）
（データシート215頁）

1階配置平面　縮尺1/500

上越市雪中貯蔵施設 ユキノハコ

設計　海法圭建築設計事務所

施工　サトウ産業

所在地　新潟県上越市

SNOW STORAGE IN YASUZUKA

architects: KEI KAIHOH ARCHITECTS

北側外観．市の運営による施設が立ち並ぶ一角に建つ．棚田米の貯蔵を目的とした木造2階建ての雪室で，平面が約18m×20mの小規模な切妻屋根．スギ板縦張りの外壁は通風や日射を考慮しながらスギ板張りの粗密が4面それぞれで設定されている．板幅は90〜120mm．目透かしの幅も場所によって11.3〜31.6mmと操作している．左下は見学者動線のエントランス．

循環の重なり合いをかたちにする

新潟県上越市の安塚というまちにつくられた木造の雪室である．雪室とは雪の冷熱を利用した天然の冷蔵庫であり，今回は県内で収穫した米を主に貯蔵する．農業従事者の高齢化と後継者不足に加え，一般的に棚田の農家は平場の農家より生産性が低く低所得になりがちという課題に対して，棚田の米を雪室貯蔵することで付加価値をつけ，また雪室の一部をギャラリーにして多くの人に雪室の素晴らしさを伝えることで，棚田農家の所得向上に繋げたいというのが上越市の思いである．

貯雪室内は常に高湿度で，雪圧や雪の挙動で建物が損傷する可能性があるため，鉄筋コンクリート造が選択されるのが一般的であるが，今回は木造として，地域の林業と雪の持続的な関係を見直すことを目指した．木造で廉価な雪室を実現できれば，農業従事者が新築や改修を問わず，より気軽に雪室をつくることができ，除雪・克雪ではなく利雪の気運が高まり，雪エネルギーの利用促進に繋がる．

雪室は性能的に外部に閉じざるを得ない建物である．今回は周囲にぐるりと半屋外の回廊を巡らすことで，来訪者が敷地周辺の魅力を感じられるようにした．例えば冬に排雪場になる地域にとって大切な小黒川の音や鳥の声が聞こえるように外壁の一部を目透かし状にした．また地域住民にとって日常の風景を印象的に切り取る開口を配した．生産者が雪国で農業を営むことに誇りを持てる場所になることを目指した．回廊の外壁は貯雪室を囲む内側の断熱壁への日射を防ぎ，環境負荷を低減するダブルスキンになると同時に，冬期の雪囲いも兼ねる．また回廊の長柱を分割するように補助梁を設けて組柱にすることで，大断面集成材を使わずに，地場のスギの小径材を利用した在来工法で雪室に必要なスパンや天高を確保した．

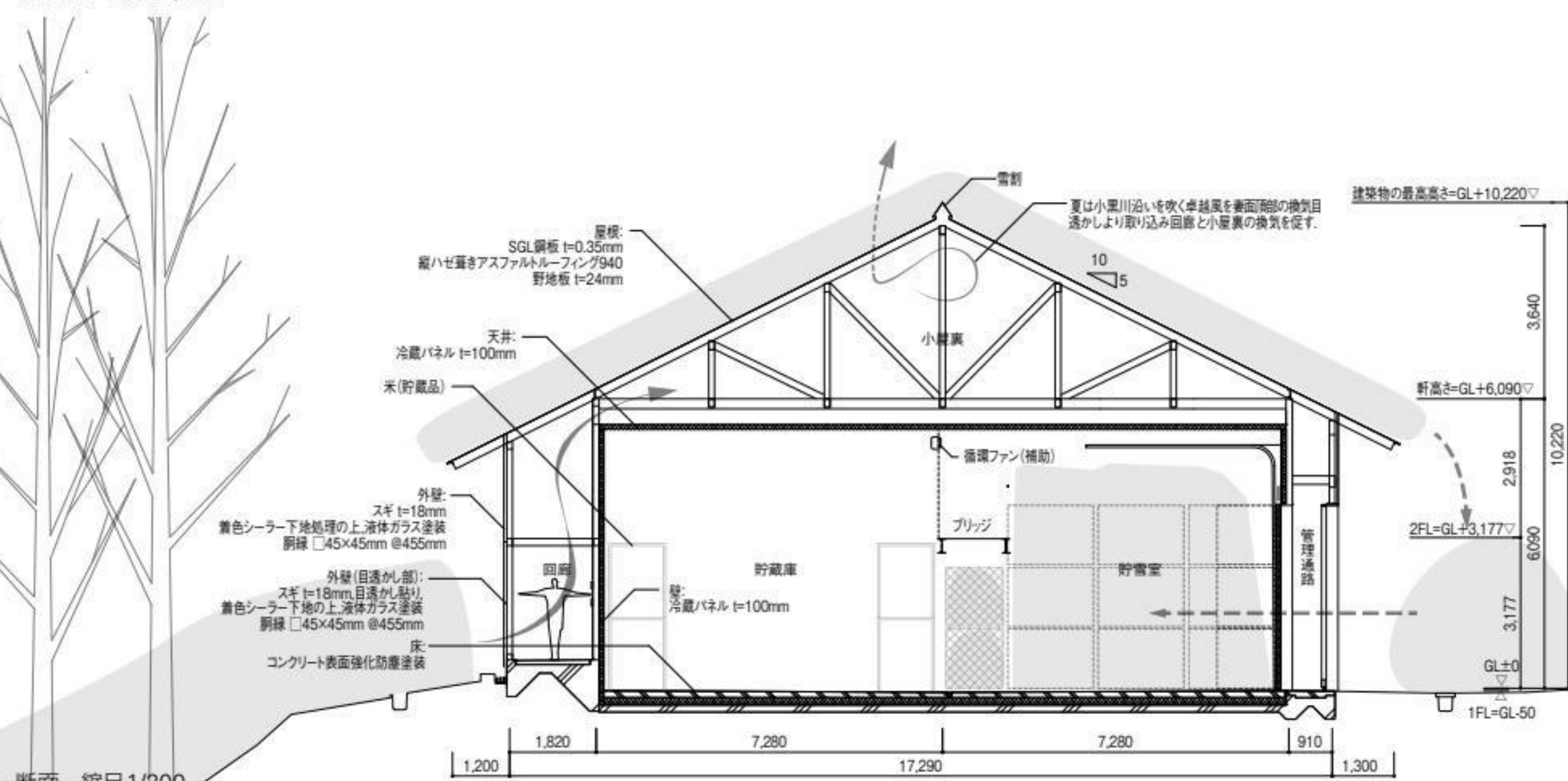
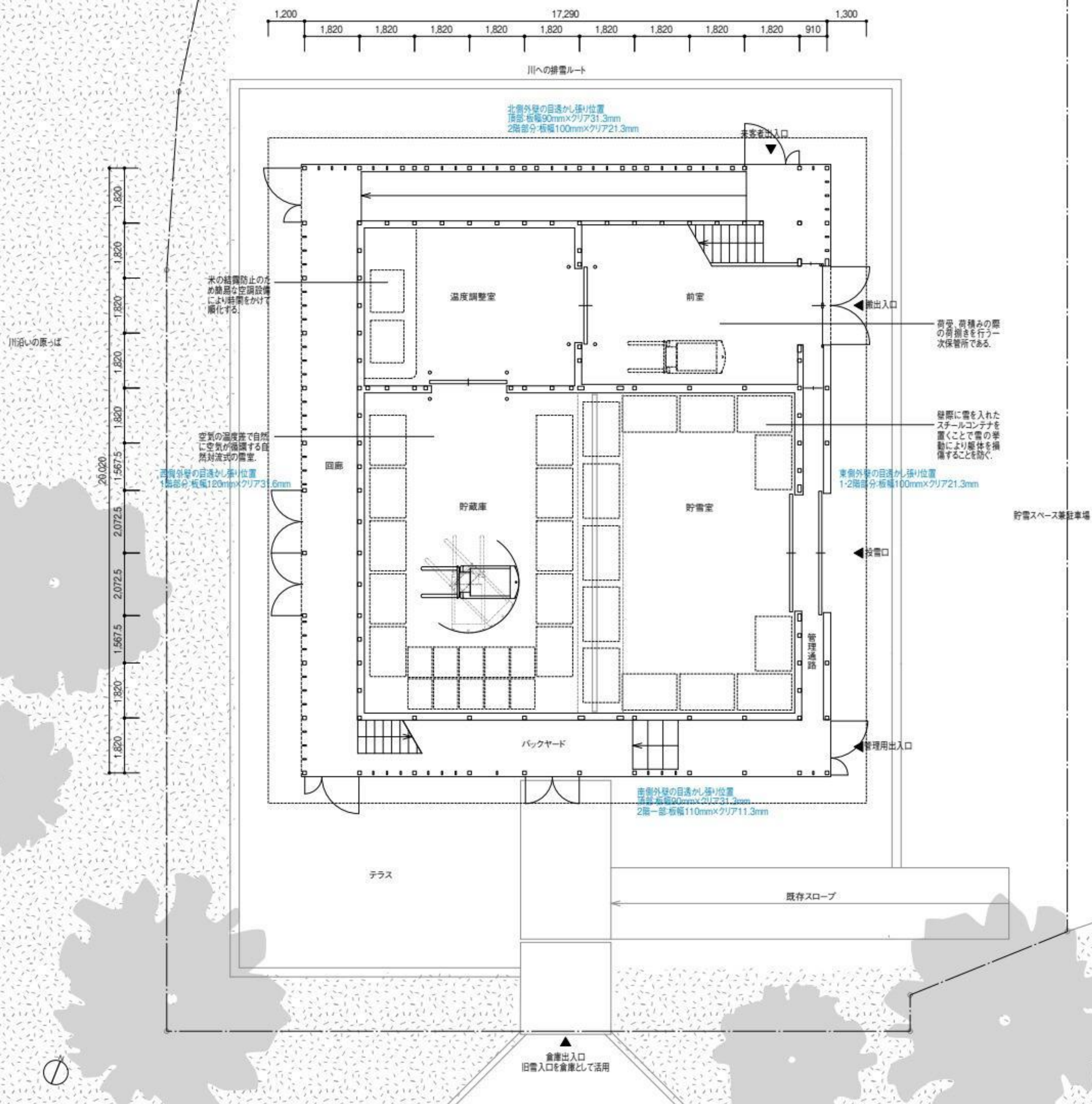
雪，人，米，木，風，熱など，さまざまな規模や特徴を持つ「循環」が重なる．その重なり合いの風景を，その循環の一部を補完したり，よりよい循環の接点を見つけたりすることで雪室という建物の形にしている．（海法圭）

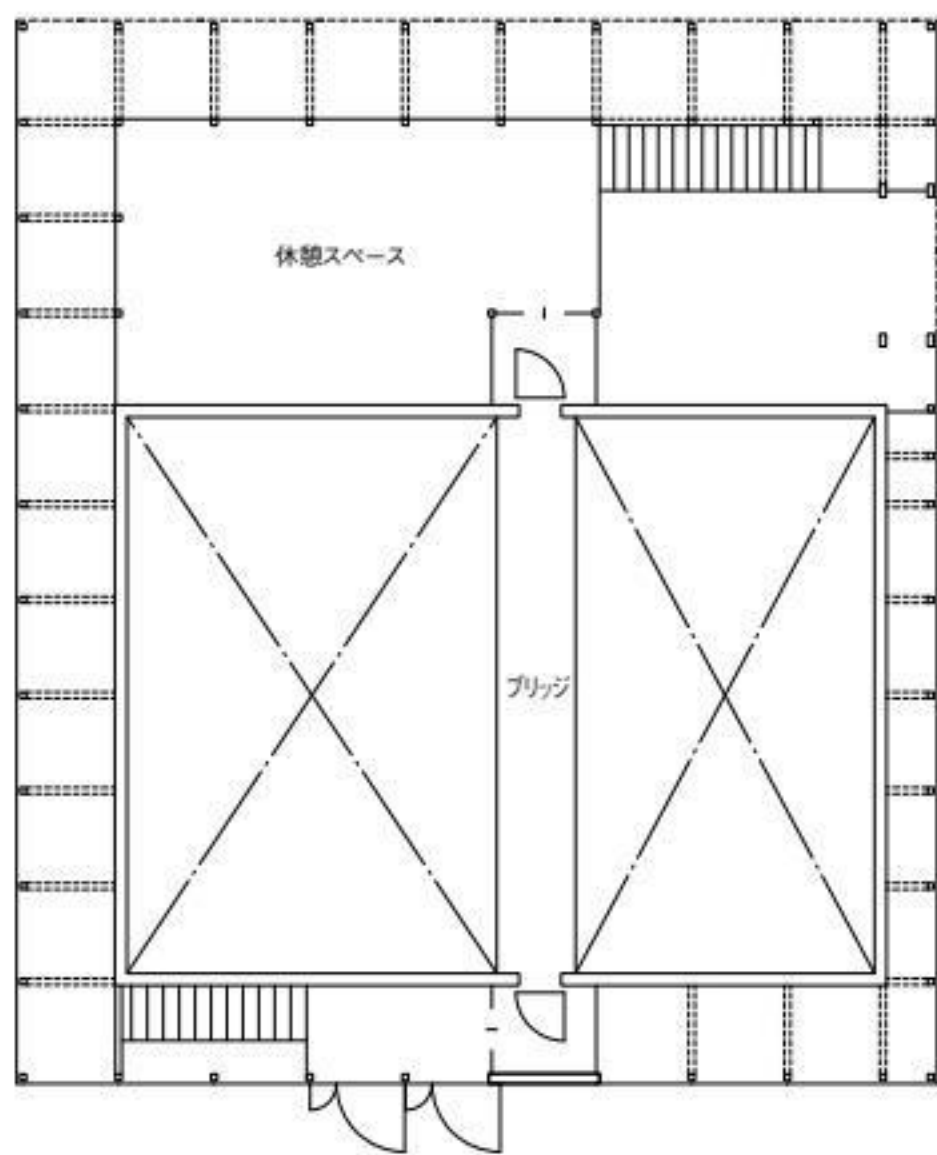
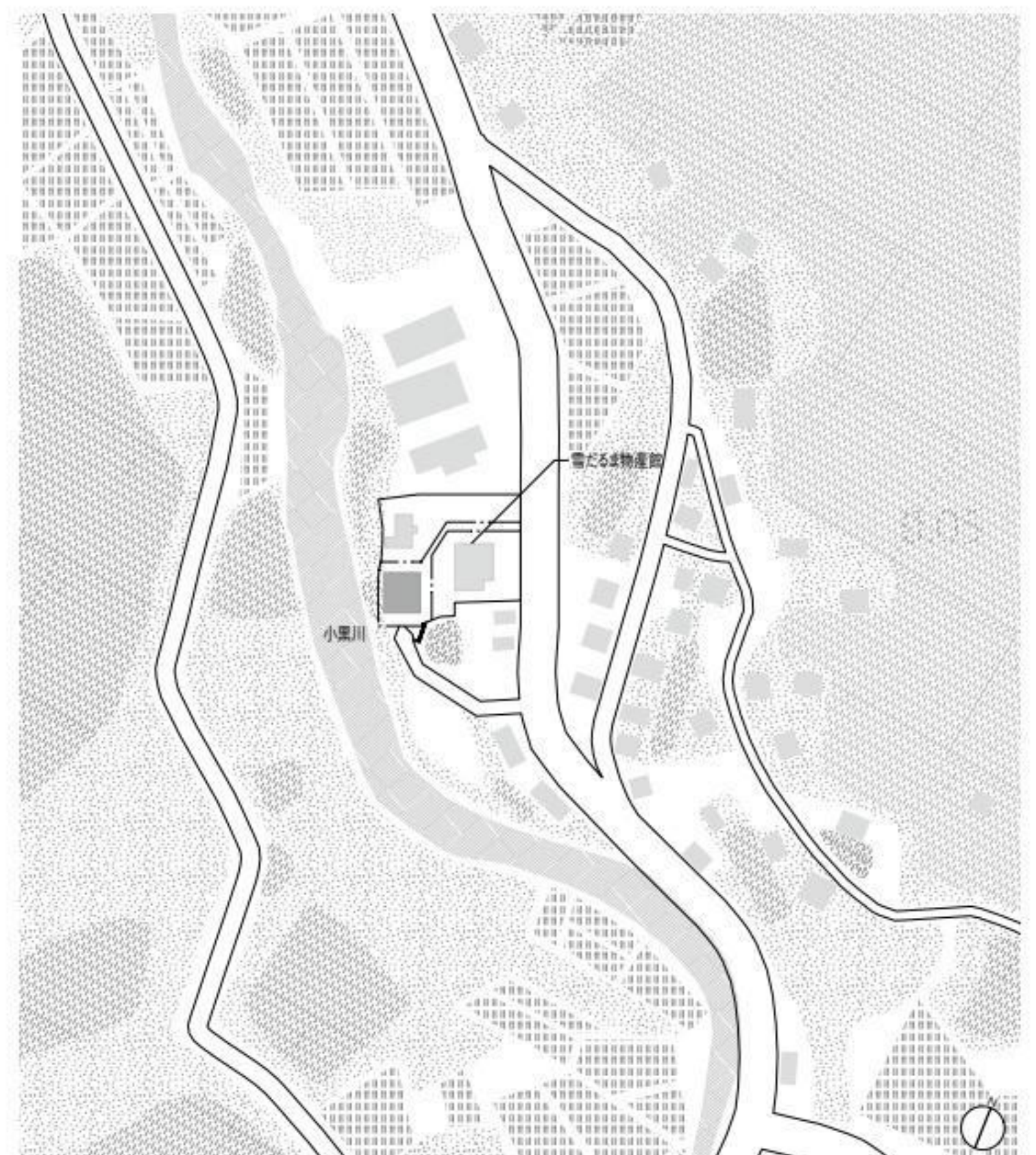
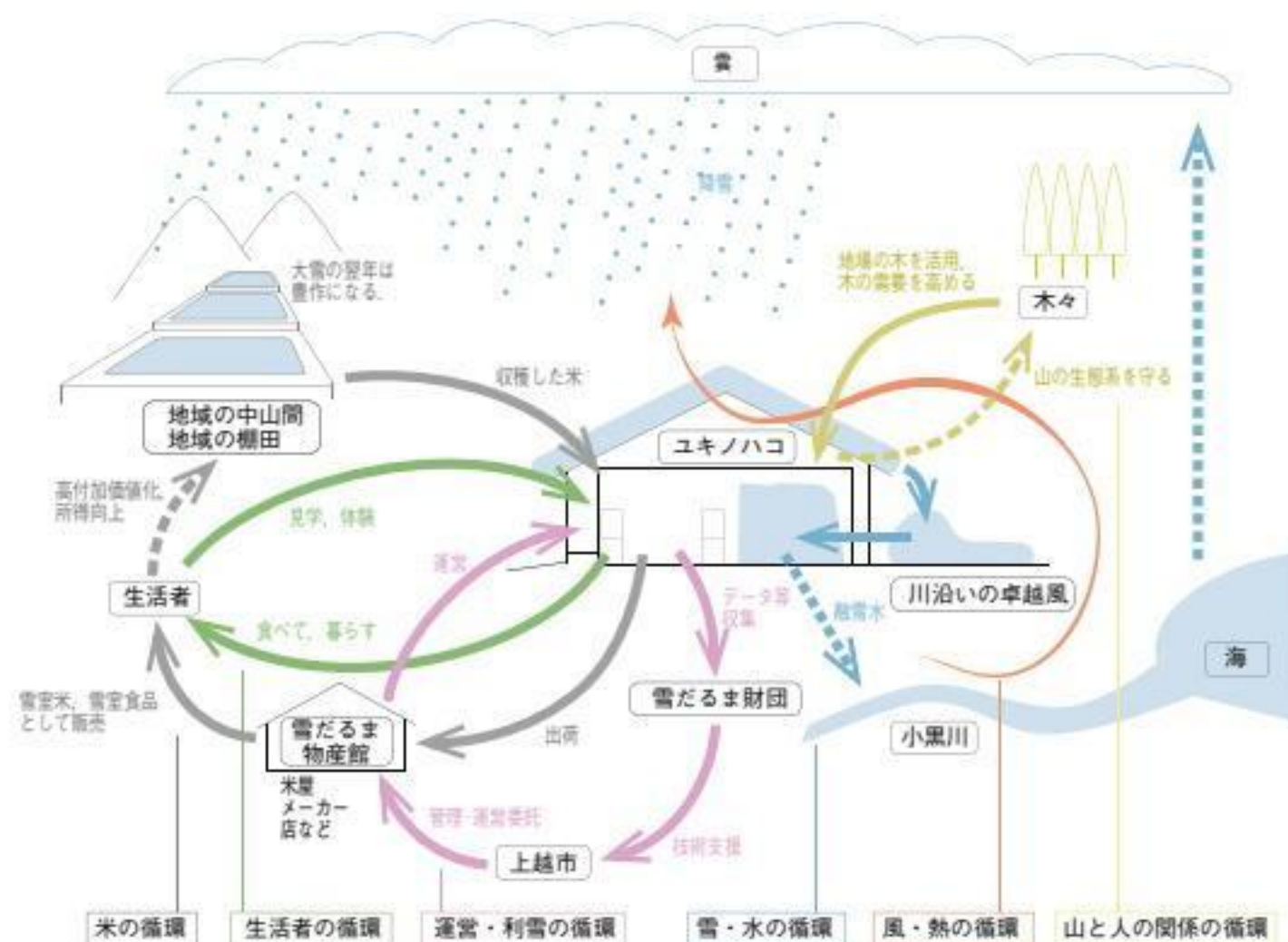
設計　建築　海法圭建築設計事務所
構造　平岩構造計画
設備　環境エンジニアリング
施工　サトウ産業
敷地面積　1,324.04m²
建築面積　356.15m²
延床面積　432.31m²
階数　地上2階
構造　木造　在来軸組工法
工期　2020年10月〜2021年3月
撮影　水津惣一郎
（データシート216頁）

2階南側回廊．四面を巡る回廊は外気に接しており，貯雪室・貯蔵庫を囲むように配置される．ダブルスキンとして内側の壁への日射を防ぎ，環境負荷を低減．各面の周辺環境の違いや内部機能を考慮して，四面それぞれで外壁の開口率やスギ板張りの粗密の設定を変えている．

2階休憩室．北側の壁は2階部分が開かれ室内にやわらかい光を採り入れる．回廊部分に補助梁を設けて組柱にすることで，大断面集成材をほぼ使わず地場の小径材を利用した在来工法で雪室に必要なスパンや天井高を確保している．

北側回廊．回廊は雁木空間としてギャラリーとしても機能する．

西側回廊から見る．西側は敷地横に流れる川の音や雪の気配を感じられるよう設定される．

北西側夕景．目透かし張りの壁面が内側からの光を通す．

貯蔵庫と貯雪室．ふたつの部屋に仕切りはなく，雪入れ時はまず雪を入れたスチールコンテナで間仕切りをしてから投雪する．境目上部に管理・見学のためのブリッジが架かる．

2階平面　縮尺1/300

配置　縮尺1/6,000

左上：東側の投雪口から，貯雪室へ雪入れする様子．貯雪量は約200t．1～2 月に雪入れする．
右上：ブリッジから見る．貯雪によって，貯蔵庫・貯雪室内を常に3～4℃程度に保つ．真夏日（最高温度時で37℃を記録）でも，1日を通して3.5℃程度を維持した．
左下：雪入れから10カ月程度経った貯雪室の様子（12月14日時点）．木造雪室特有の工夫として壁際・貯蔵との境界を雪を入れたスチールコンテナで囲うことで雪の挙動による躯体の損傷を防ぐ．
右下：貯蔵庫．この雪室では棚田米を中心に貯蔵している．

左下1点提供：雪だるま物産館　他3点提供：伊藤邦明

雪室を巡る循環ダイアグラム

早稲田大学国際文学館（村上春樹ライブラリー）

設計　隈研吾建築都市設計事務所

施工　熊谷組

所在地　東京都新宿区

THE WASEDA INTERNATIONAL HOUSE OF LITERATURE
（THE HARUKI MURAKAMI LIBRARY）
architects: KENGO KUMA AND ASSOCIATES

建築がつくるトンネル

「トンネルのような建築をつくたい」と，最初に春樹さんに説明した．「春樹さんの小説はトンネル構造なので」と付け加えた．世の中のすべての小説はトンネルであるとも言える．つらく，退屈な日常生活から，小説というトンネルに入って，ひと時だけ解放される．元気やヒントをもらって，また日常に戻る．

その仕組みに春樹さんは特別に敏感な作家であり，作品自体がしばしば明快なトンネル構造を採用している．小さな扉や，落とし孔から突然に時空を超えるトンネルにはまり，しばらくその中をさまよう．

建築もまたトンネルであると僕は考える．日常の都市に，建築という「トンネル＝孔」を開けてあげるのが，建築家の役割であると，考える．

大学から与えられた4号館は，まさに日常そのもののコンクリートのラーメン構造のハコで，春樹さんは申し訳なさそうだった．

しかし僕は内心「やった」と叫んだ．この「日常」に「トンネル＝孔」を開けることができれば，それはすごく「村上的」な行為になると，直感した．

村上的なものは，ゼロから何かをつくろうとはしない．ゼロからつくろうとすると，どうしても何らかのシステム（コンクリートラーメン構造）の助けを借りるので，必ず抑圧的な新しい日常をつくってしまう．アーティストがすべきことは，その「日常」に孔をあけることだと，春樹さんは考え，僕は限りなく共感する．

4号館では僕の共感を形にした．3枚のスラブを抜いて孔をあけ，本棚でできたトンネルを挿入した．このトンネルは，建物の外にまで飛び出し，ゆるく曲面を描くスケスケの木の庇となる．このトンネルが外まで飛び出してくるところが，僕と春樹さんの違い，建築家と小説家との違いである．春樹さんがつくトンネルの入口は，隠れていて，普通は気が付かない．しかし，建築の場合，入口が見えないと，誰もトンネルに入ってもらえない．僕はさりげなくトンネルを外まで飛び出させた．

設計をしながら，自分の中で，建築の定義、ファサードの定義が変化するのを感じた．建築とはすべて―新築でもリノベーションでも―日常の都市にトンネルを掘る行為である．そしてファサードは，トンネルの存在を，可能な限りさりげなく示すためのジェスチュアである，自分自身が「日常」に加担しないために，そんなかたちで建築とファサードを再定義した．

（隈研吾）

南側外観．小説家村上春樹氏が自身の作品や資料等を早稲田大学に寄贈，寄託したことを契機に4号館を改修し，国際文学館（村上春樹ライブラリー）とした．トンネルをイメージしたファサードは「アコヤ材」を使用．5階建ての建物の地下1階～2階までがライブラリーとなり上層階には研究室などが入る．

南側全景．木製の庇は西側入口から南面までを取り囲む．建物全体を白い印象とするため，窓には外部からフィルムが貼られている．地下1階は学生が主体となり運営するカフェ「橙子猫」．

南西を見る．右側は国際文学館．正面は村上春樹氏が在学時に頻繁に通っていた演劇博物館（1928年今井兼次設計）．

吹き抜けの階段本棚を見る．地下1階から2階まであったフロアを吹き抜けにし，アコヤ材のトンネルを配置．右側の本棚は国内外の作家や映画監督等が選書した書籍，左側には村上氏の著作とその関連書籍が配架されている．

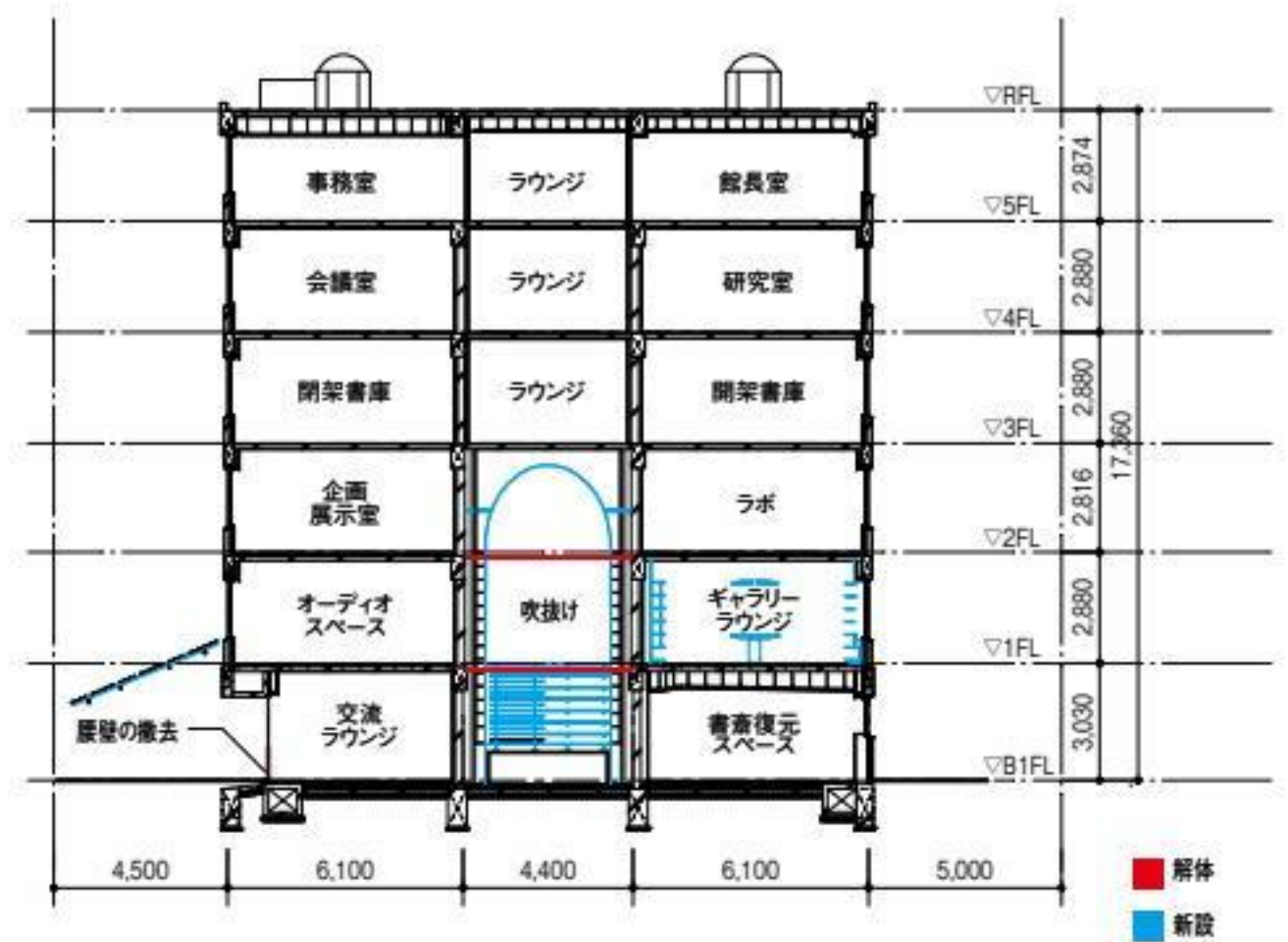
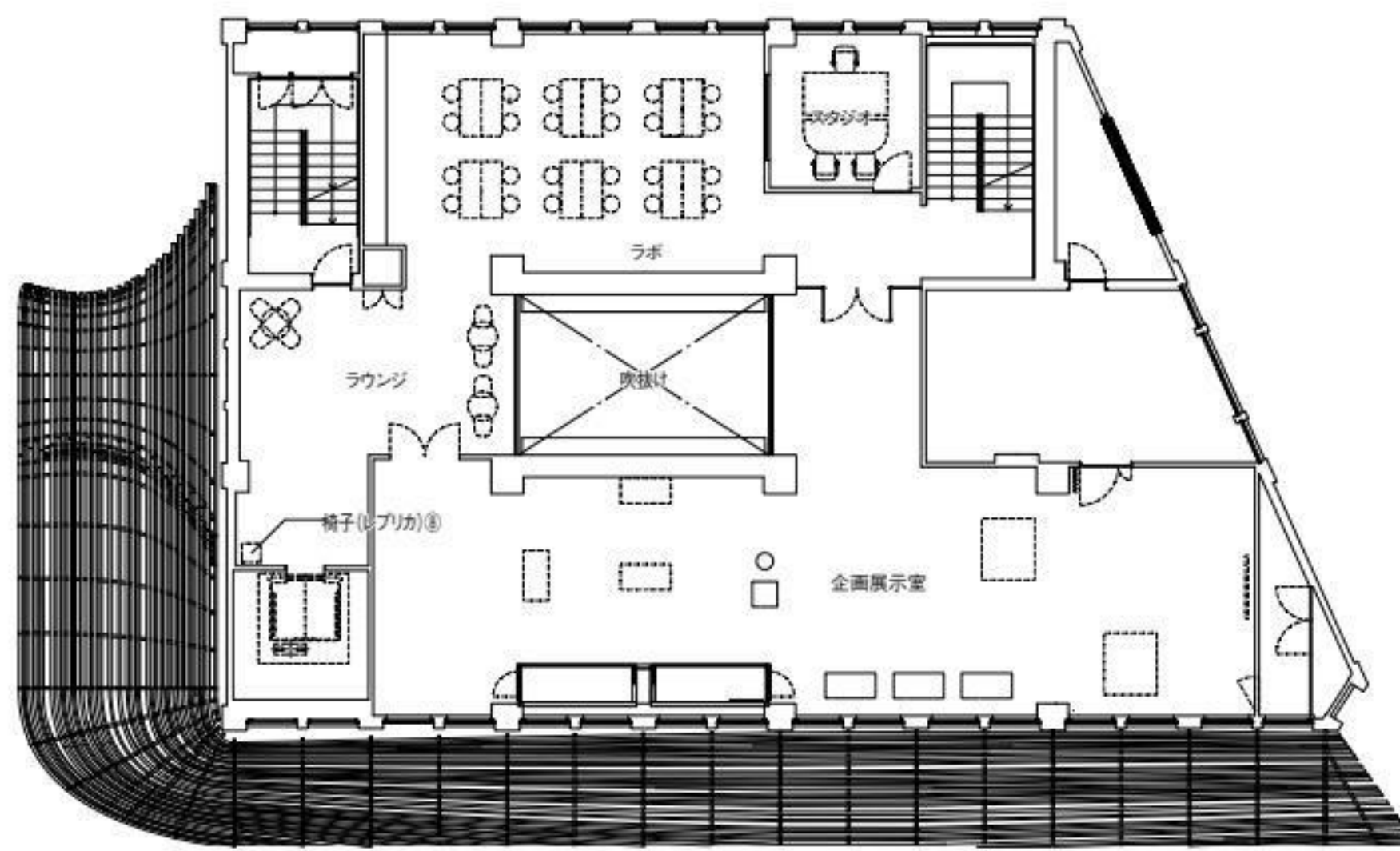
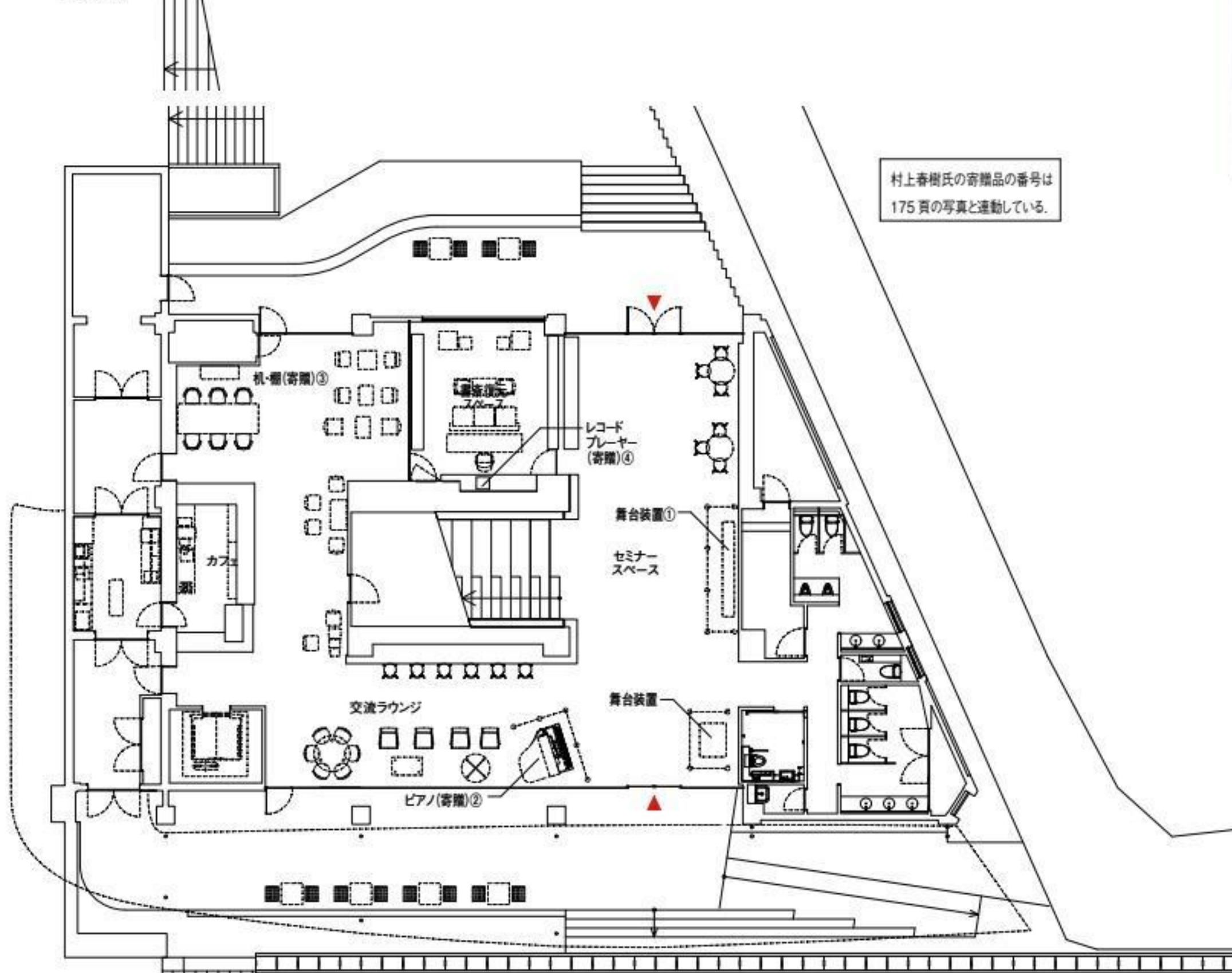
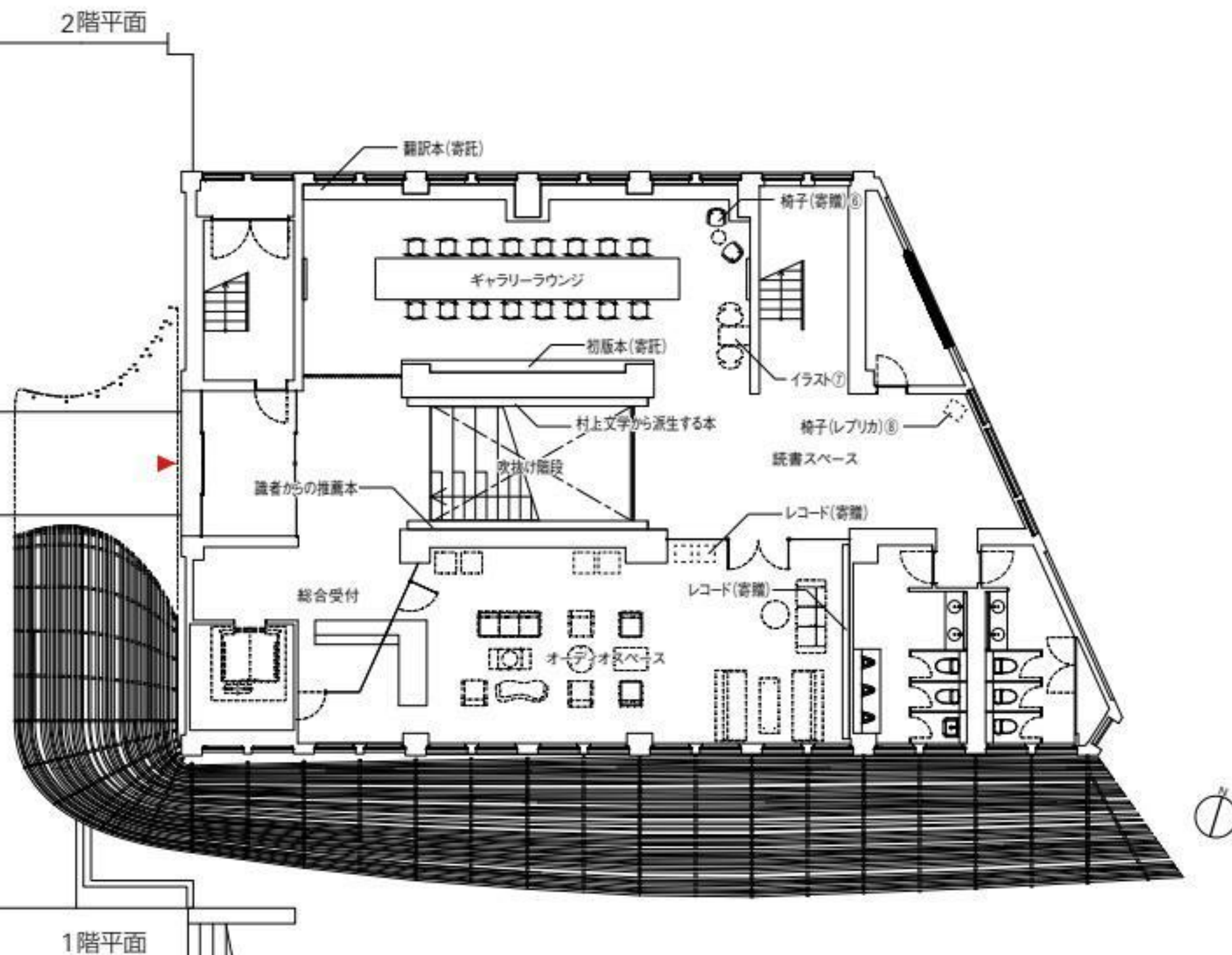
2階平面

短手断面　縮尺1/400

1階平面

村上春樹氏の寄贈品の番号は175頁の写真と連動している。

上：西面全景／下：2階，企画展示室

地下1階平面
縮尺1/300

設計　建築　隈研吾建築都市設計事務所
　　　構造　金箱構造設計事務所
　　　設備　環境エンジニアリング
施工　熊谷組
敷地面積　$1,162m^2$
建築面積　$459m^2$
延床面積　$2,111m^2$
階数　地下1階　地上5階
構造　鉄筋コンクリート
工期　2020年3月～2021年3月
撮影　新建築社写真部
（データシート216頁）

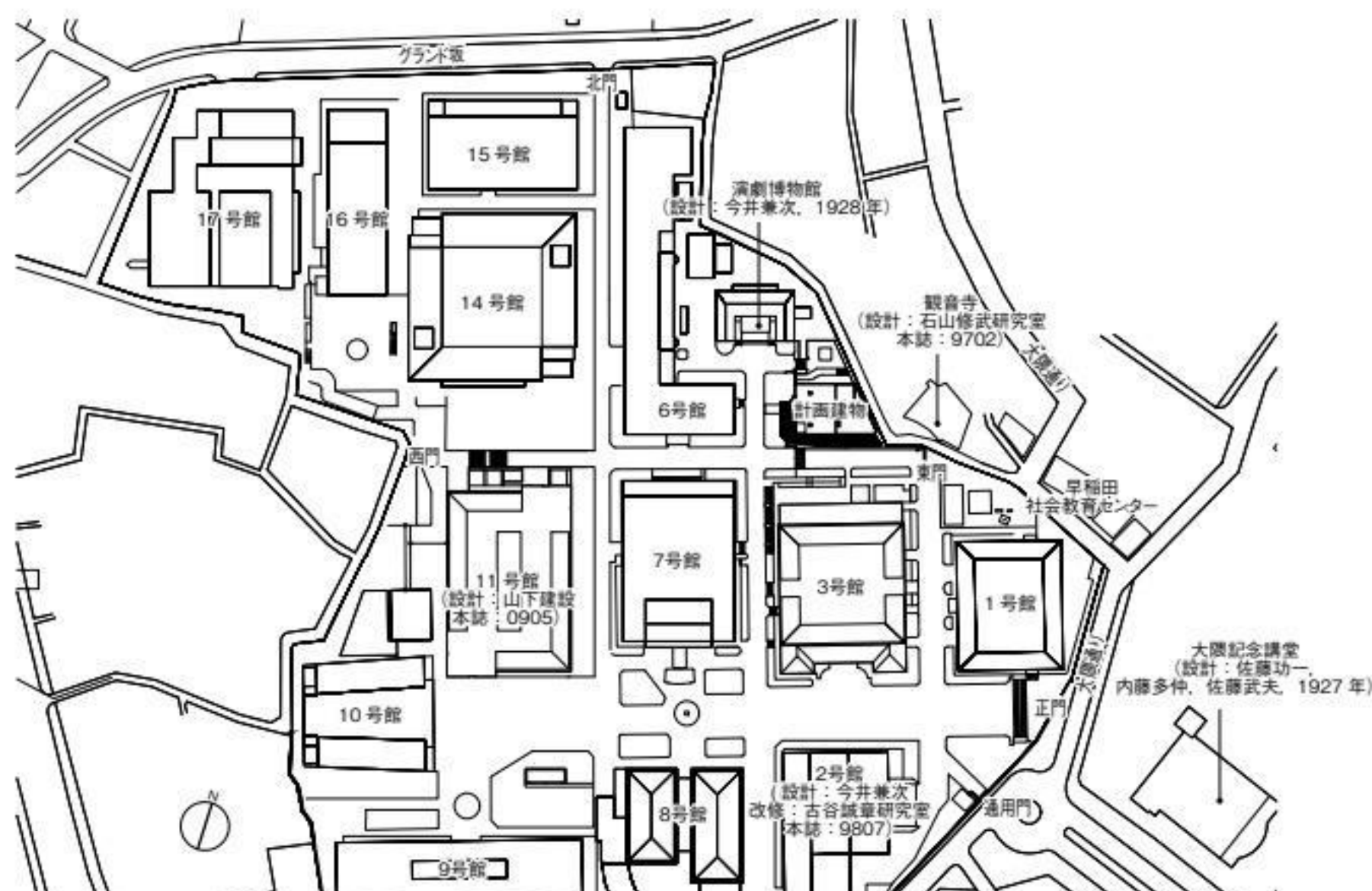
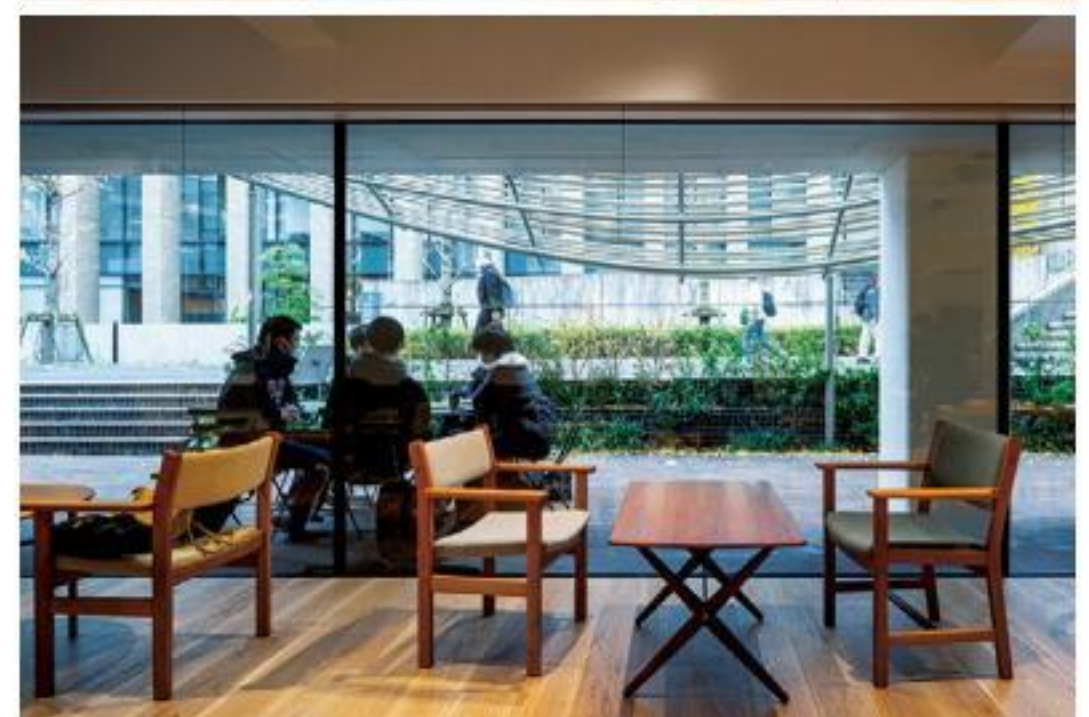
交流ラウンジ外部を見る．ファサードに使用されている「アコヤ」はマツに酢酸を用いてアセチル化させ，耐腐性能を高めたもの．曲線は手作業によって曲げられている．

2階から階段本棚を見る．左側は人が座って本が読めるスペースとなっており，イベント時の客席にもなる．本棚と階段はオーク．

トンネルと洞窟

村上春樹(小説家)

隈研吾さんと初めて出会ったのは，十年近く前のことで，場所はデンマークの小さな街だった．偶然が与えてくれた，たまたまの邂逅だったが，それ以来，ふたりで何度か顔を合わせて，いろんな話をする機会を得た．だから早稲田大学に僕の名前を一部冠したライブラリーを立ち上げることになった時(「早稲田大学国際文学館・通称村上春樹ライブラリー」)，その総合的なデザインを隈さんにお願いできればと思ったのは，僕としては当然のことだったのだが，ただそこには，依頼をためらわせるいくつかの要因があった．
最大の問題は，ライブラリーに使わせてもらうことになった大学の校舎(4号館)が，味も素っ気もない真四角な4階建てのコンクリートの建物だったということにあった．この校舎が建てられたのは，僕が早稲田大学に入学した頃だから，今からもう半世紀以上前のことになる．したがってかなり古びているし，(こう言ってはなんだけど)見かけはひと昔前の公団アパートみたいに無味乾燥だ．天井は低いし，配管が天井よりさらに低くむき出しになっている．世界中を飛び回って，独自の斬新な建築スタイルを展開している隈さんに，そんな何の変哲もない建物の改装といった，創造性に欠ける(としか思えない)仕事をお願いしてよろしいものだろうか?
でも思い切って恐る恐る切り出してみると，隈さんは建物の写真を見て，「いいですよ．やりましょう」とにこにこ，ふたつ返事で引き受けてくださった．というか，隈さんはそんな「面白みのない」建物をベースにして，そこに新しいスタイルを構築するという作業に，逆に少なからず興味を示されたようだった．それはあるいは，隈さんにとってはひとつの挑戦みたいなものであったのかもしれない．
そしてできあがった建物は，外装・内装共に，「あの建物がここまでそっくり形を変えられるものか」と仰天するくらい見事な「別もの」に生まれ変わっていた．その眺めは，まるで大学のキャンパスの中に，異次元の空間が新たに生じたかのようだった．それでいて，「ライブラリー」という名称にふさわしい，穏当で知的な雰囲気をしっかりと漂わせている．
僕が見るところ，隈さんの建築スタイルの特徴は，どれも中心となるポイントがはっきりしているところにある．この建築の中心テーマはこれだ，というコンセプトがなにより明確であり，そこにぴったり焦点があてられ，そのテーマ軸のまわりに細部が次々に，ある意味においては自然発生的に立ち上がっていく．だからそれらはしばしば生き物のように見える．ある建物は繁茂する植物のように見えるし，あるものは起き上がりかけた動物のようにも見える．隈さんの建築スタイルを見ていると，そうか，優れた建築というのは文字通り「生きているもの」なのだなと痛感させられることになる．
隈さんによれば，この「通称村上春樹ライブラリー」の中心コンセプトは「トンネル構造」だという．隈さんは僕の書く小説は「トンネル構造」で成り立っていると捉える．つまり，ひとつの世界からトンネルを通り抜けて，もうひとつの世界に達するのが——ある場合には行き来するのが——僕の物語の有する「構築性」なのだと．
そう言われてみれば，たしかにその通りかもしれない．なるほど，いかにも建築家らしい小説の読み方だなあと，あらためて感心させられた．僕自身は「トンネル」というよりは「洞窟」というイメージがあったのだが，基本的にはまあ同じようなことだ．謎めいた通路(パッセージ)を通して，そこをくぐり抜け，通過することによって，世界が変容を遂げる——それが僕の書く物語のひとつのテーマであることは間違いないだろう．
というわけで，「通称村上春樹ライブラリー」(最近「通称」という言葉がすっかり気に入ってしまった)の内部にはとても大きな，素敵なトンネルがある．隈研吾＝村上春樹，共作のトンネルだ．多くの人がそのトンネルをくぐって，新しい世界を見出してくれるといいなあと思っています．

グランド坂
北門
15号館
17号館
16号館
14号館
演劇博物館
(設計：今井兼次，1928年)
観音寺
(設計：石山修武研究室
本誌：9702)
6号館
計画建物
西門
東門
早稲田
社会教育センター
11号館
(設計：山下建設
本誌：0905)
7号館
3号館
1号館
大隈記念講堂
(設計：佐藤功一，
内藤多仲，佐藤武夫，1927年)
10号館
正門
2号館
(設計：今井兼次
改修：古谷誠章研究室
本誌：9807)
8号館
通用門
9号館

配置　縮尺1/4,000

上：1階ギャラリーラウンジ．／下：地下1階交流ラウンジから見る．

①舞台「海辺のカフカ」の舞台美術装置.

②村上氏が経営していたジャズ喫茶「ピーター・キャット」で使用されていたピアノ（寄贈）.

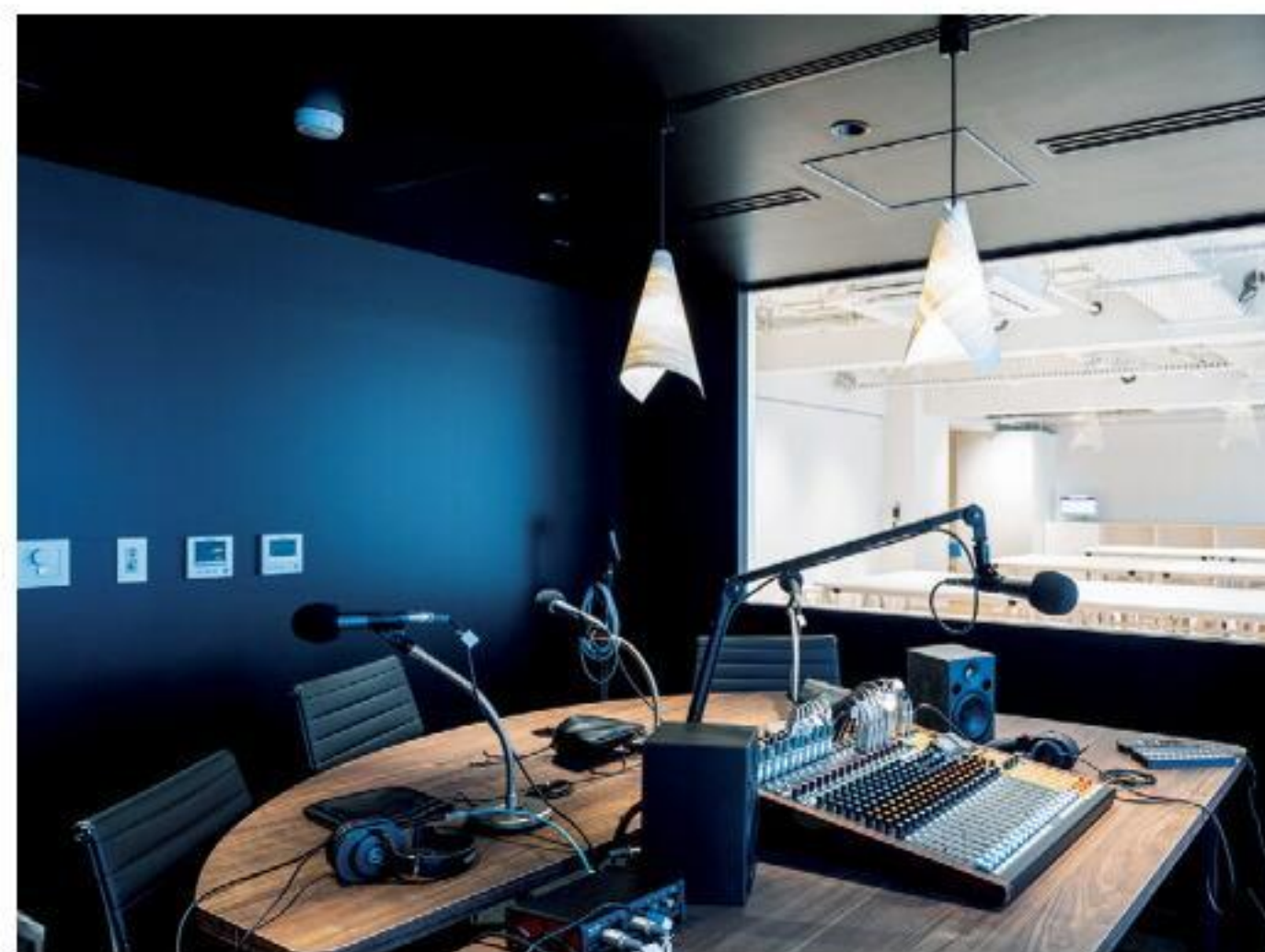
地下1階．村上氏の書斎復元スペース.

1階オーディオスペース．村上氏のオーディオ機器のアドバイザーである小野寺弘滋氏が選定とセッティングを行った.

③村上氏の自宅と事務所で使用されていた机・棚（寄贈）.

地下1階カフェ橙子猫．学生によって運営されている

レコード棚.
レコードは村上氏からの寄贈.

2階，ラボ／スタジオ．ラジオブース.

⑤寄贈レコード．「ピーター・キャット」のスタンプが押されている.

④村上氏から寄贈のレコードプレイヤー（DENON PC-3000）.

⑧「ピーター・キャット」で使用された椅子のレプリカ.

⑥「ピーター・キャット」で使用された椅子.

⑦『羊をめぐる冒険』に登場する．羊男のイラスト.

ゼノアック本館

設計　益子アトリエ・プラスニューオフィス
施工　八光建設
所在地　福島県郡山市
ZENOAQ HEADQUARTERS
architects: MASUKO ATERIER　＋NEW OFFICE

北側アプローチより見る．ゼノアック社の敷地内に建つ迎賓機能およびオフィス機能を持つ本館．ゼノアック社の敷地構内の建設場所を設計者も一緒に選定し，小丘となった敷地を選定．土地の造成や既存樹木の伐採は極力せずに，地形に沿って建つ配置や全体の構成が検討された．

北側車寄せより見る．周囲への景観が広がる北側に迎賓機能，採光が取れる南側にオフィス機能を設けた．エントランスホール・執務棟（正面奥）は壁式鉄筋コンクリート造で一部木造の屋根，応接・レセプション棟（左）は在来木造平屋，ポーチ・車庫棟（正面手前）は木造屋根を鉄骨柱で支える．

車寄せ東側より見る．ポーチは鉄骨柱と木造の庇で構成．垂木は90mm角のスギ材．

北側外壁近景．外壁上部は錆御影石（t=30mm）ビシャン仕上げ，
下部のルーバーは120mm角の白河石加工ブロック積み．

エントランスホール．天井高は6,020m．天井は木造で，6mの八溝スギを組み合わせて，9mスパンを飛ばしている．階段の手摺り壁面は60mm幅のタモ小幅板張り．

設計　建築　益子アトリエ・プラスニューオフィス
　　　構造　ホルツストラ
　　　設備　知久設備計画研究所
　　　ランドスケープ　GAヤマザキ
施工　八光建設
敷地面積　170,374.53m^2
建築面積　687.94m^2
延床面積　896.07m^2
階数　地上2階
構造　鉄筋コンクリート造　一部木造
工期　2021年1～8月
撮影　新建築社写真部
（データシート217頁）

迎賓機能を備えた本館

医薬品の開発，製造に携わるゼノアック社本館の計画である．

同社は戦後まもなく福島県郡山市で創業し，以来この地を基盤として活動を続け，今は動物用医薬品分野において広く世界的にシェアを持つ．今回，次代に向けての新たな体制整備と共に，その中核の施設として海外からの来訪客も迎える迎賓機能を備えた本館の計画となった．

環境を解き，風景に返す

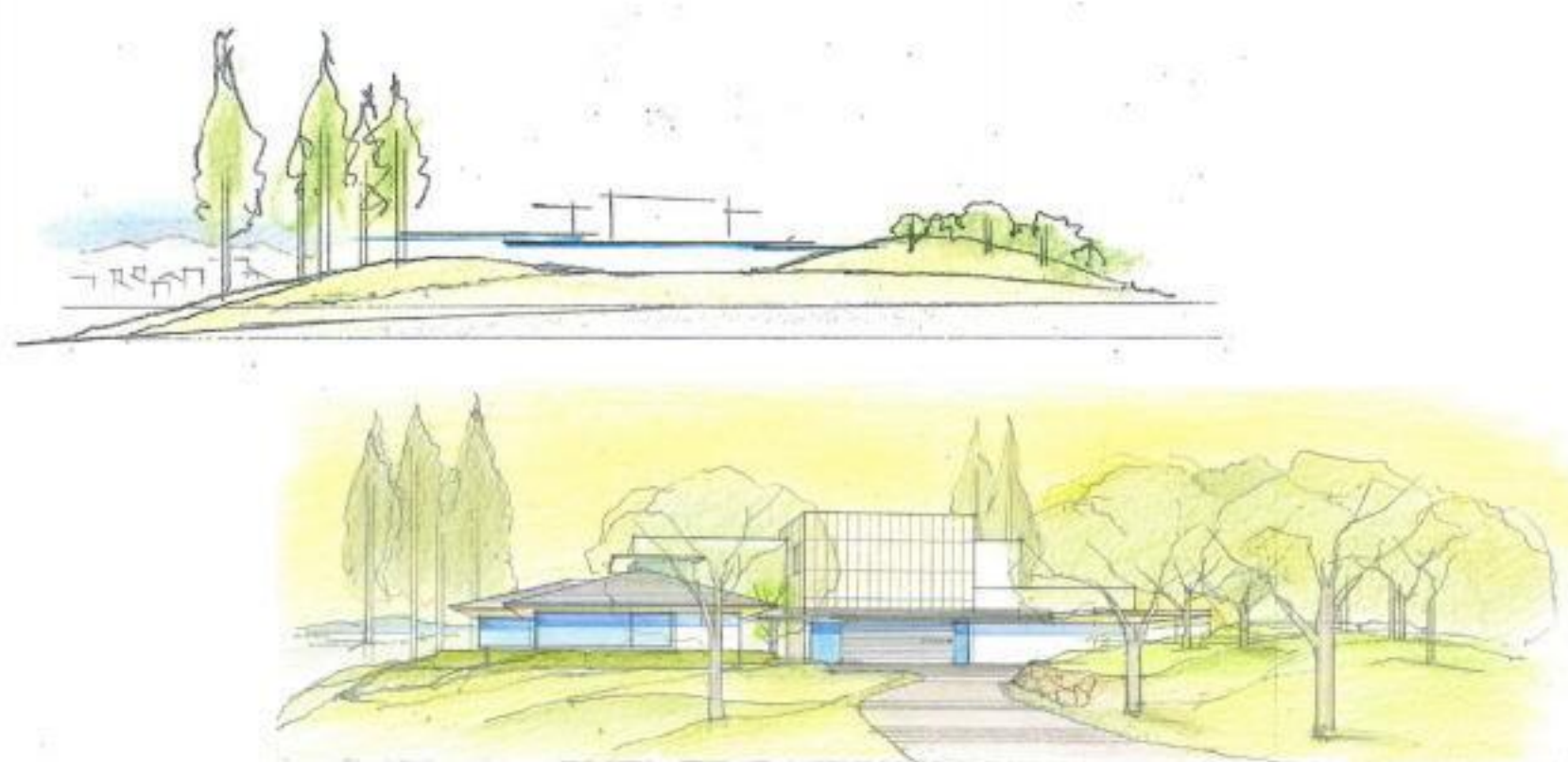
敷地は構内の一画にある小高い丘の場である．その場所は先代から長く大切にされ，工場棟群の占める環境にやわらかな印象を添える小丘だった．そのもとの風景を損なわず，建築のオリジナルな自律性と共に丘と一体の新たな風景をどう創造し得るか，それが設計上の要の課題となった．

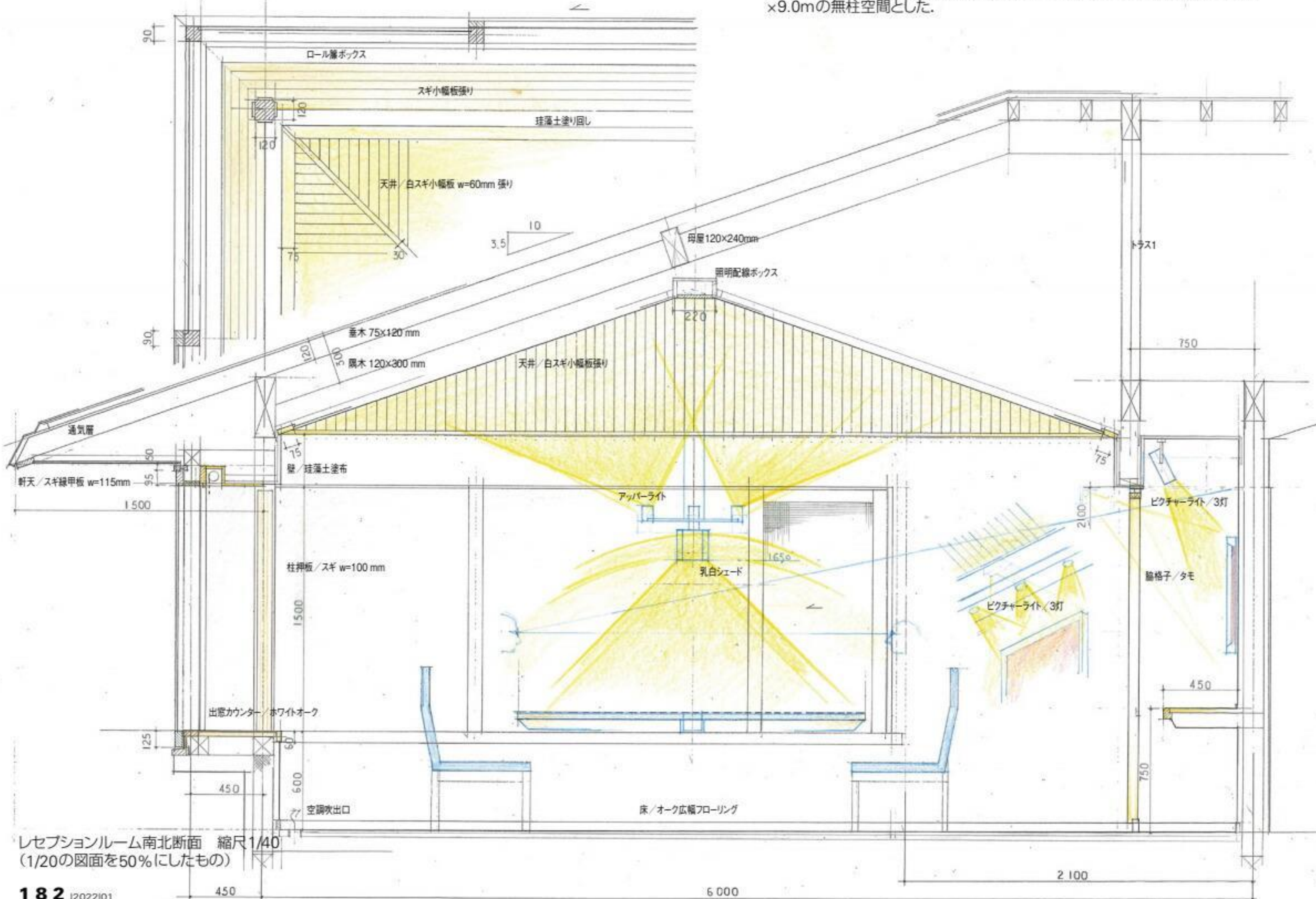
本館の構成は通常の業務活動部と来訪の客を迎える迎賓部よりなる．小丘の環境と地形を慎重に読み土地の造成や成長した樹木の除去は極力しない方針をもとにして，オフィス部を南の陽光を受ける樹林帯側に設定し，また迎賓の場を順光の市街風景や遠く阿武隈の山容を見晴らす北側に配置することにした．この丘地から遠望される景観への期待は，郡山のこの地を基盤として成長した社側からも強く望まれたものだった．それが遠方からの訪問客へのもてなしとなり，また社の来歴を語る素材にもなる．

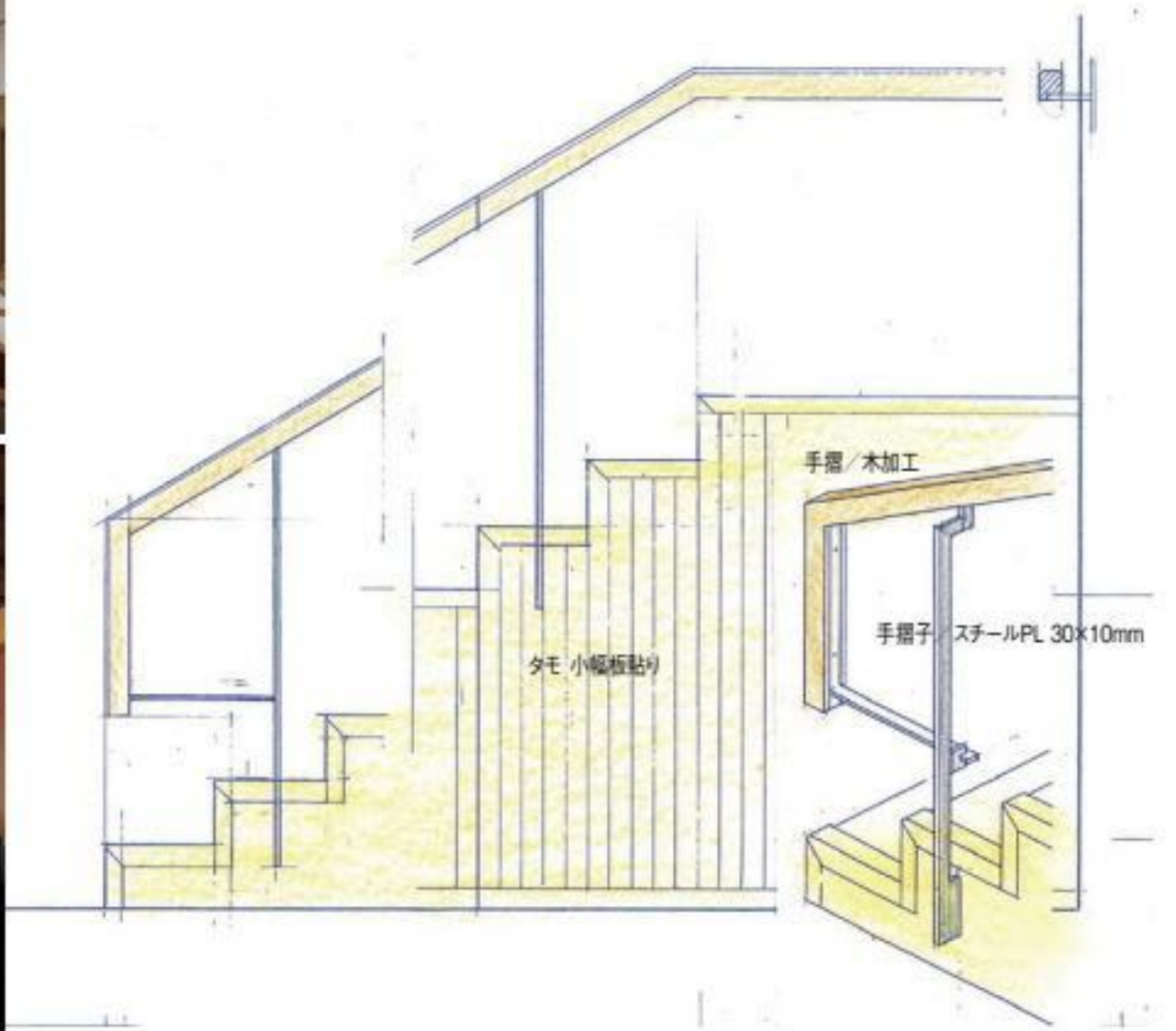
構成と設え，構造

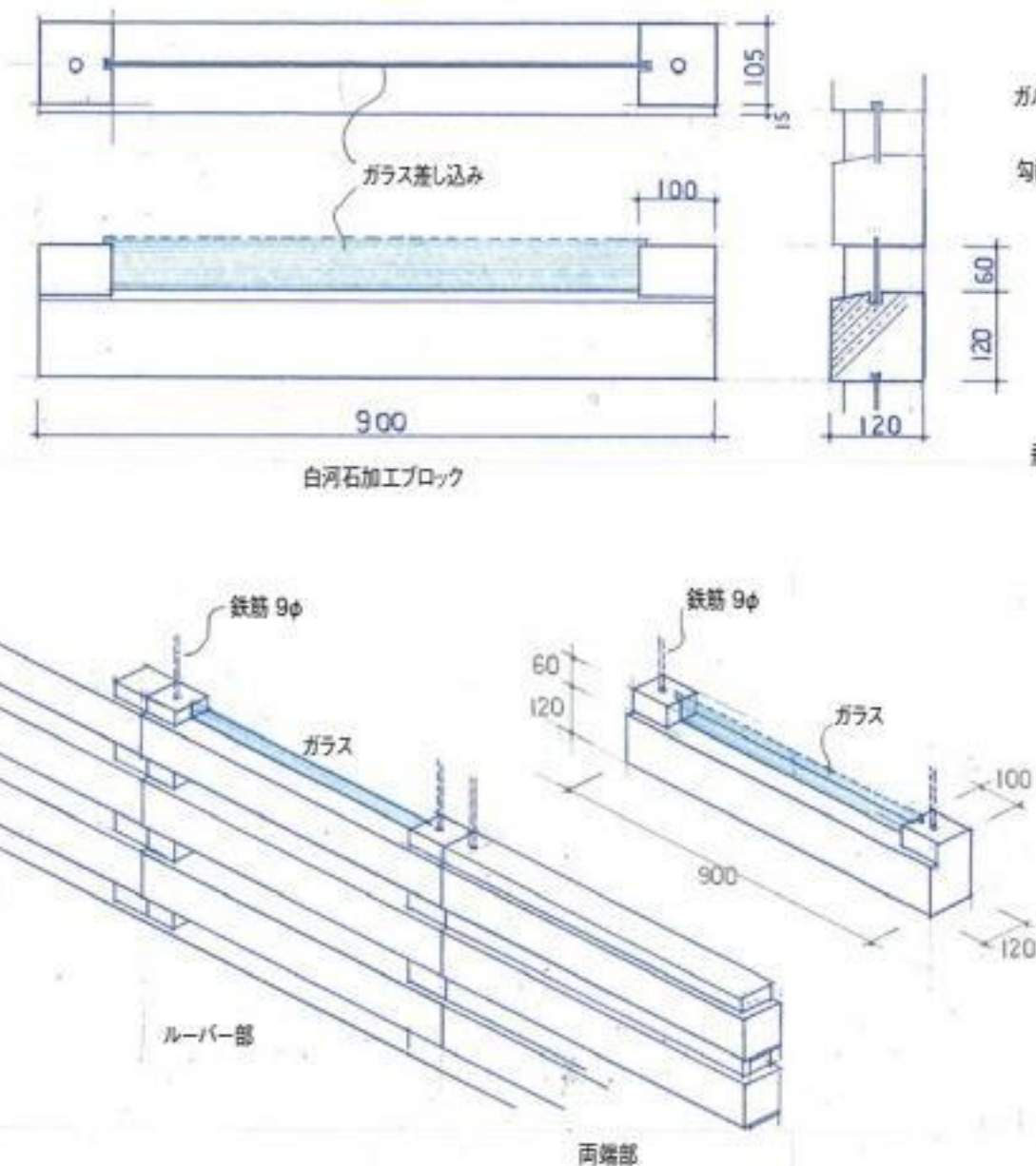
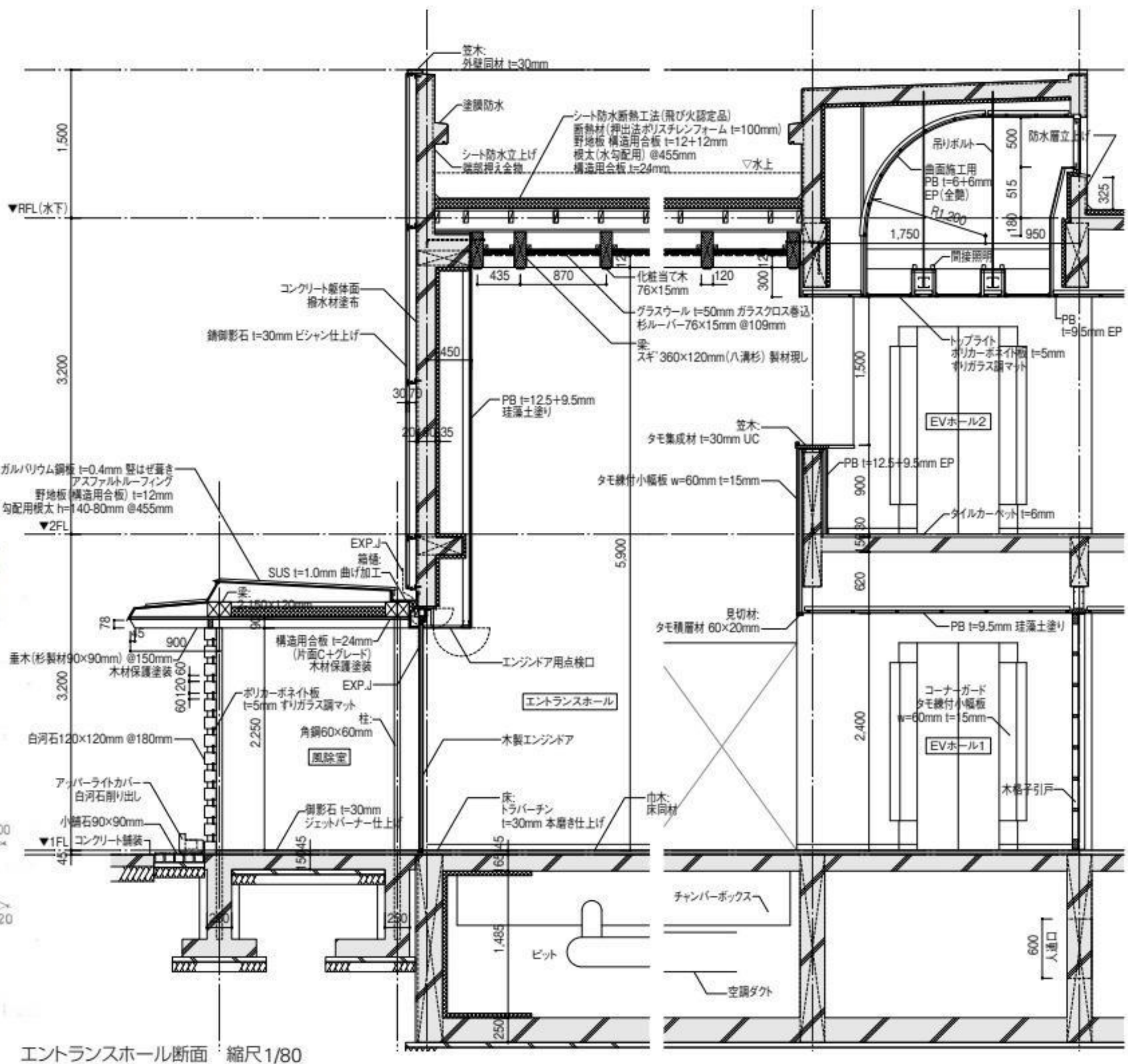
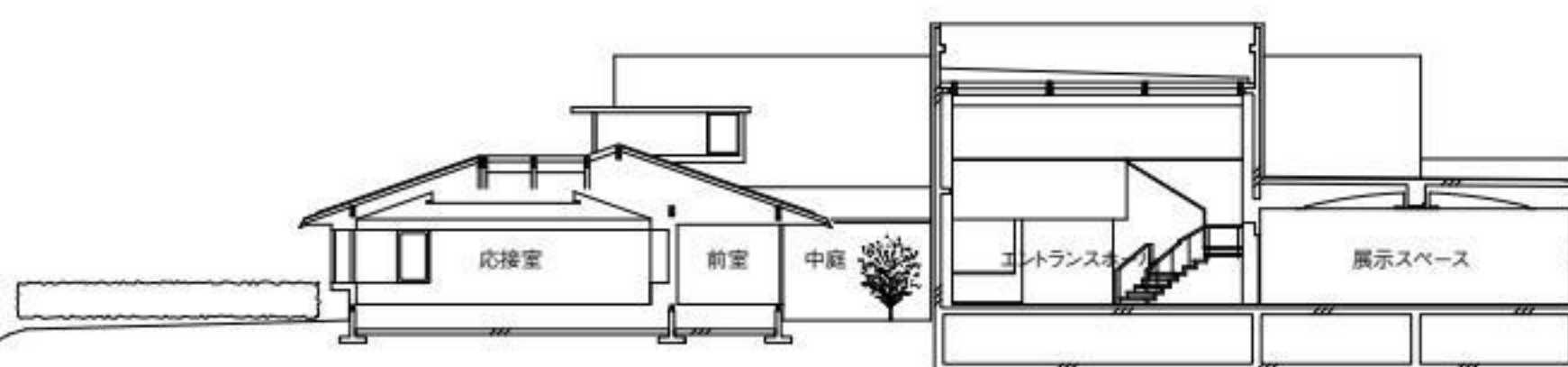
本館構成の約半分を占める迎賓スペースは，時にはパーティやセレモニーの場ともなるホールを中心として，社の歴史と製品を紹介する展示室と別棟の木造架構部に連なる応接・レセプション室からなる．この空間の一連の設えにおいては，取り立てて格別な素材の設定や吟味はしていない．全体に自然素材を基本とし，建築圧を抑え背景に徹することをデザイン上の基調にして，むしろ普通の良材が生きる中に一定の場の品格が生まれることを期待した．

構造は，鉄筋コンクリート造と木造の混構造としている．地耐力の判断から骨格の軽量化が求められ，杭敷設をしない直接基礎をベースとして北側の迎賓部を鉄筋コンクリート造の単層と木造組みとし，ホールの屋根を木梁による支点桁架構で組んでいる．またポーチ庇部を梁と垂木を逆組みした薄い一体の版構成として，起伏のある丘地の形状に建築を着地させる水平な庇一線が生む効果を期待した．

（益子義弘）

益子義弘氏による設計開始当初（上）および基本設計中（下）の建ち方の検討スケッチ．

レセプションルームより北東方向を見る．トラス梁および登り梁を用いて，6.0×9.0mの無柱空間とした．

レセプションルーム南北断面　縮尺1/40
（1/20の図面を50％にしたもの）

レセプションルーム北側開口．腰壁の高さ600mm，開口部高さ1,500mm．照明も益子アトリエによるデザインで，アクリル板和紙貼り加工の乳白シェードと天井面を照らすアッパーライトを組み合わせている．

左上：エントランスホールと応接室，レセプションルームを繋ぐ廊下より，ルーバー越しに中庭を見る．右上：展示スペース．左下：展示スペース側よりエントランスホールを見る．右下：応接室．応接室の架構もタイバー式のトラスを用いて，9.0×7.2mスパンとした．

益子氏によるエントランスホール階段立面・アイソメトリック 縮尺1/100（1/50の図面を50％にしたもの）

風除室のルーバー外壁スケッチ　縮尺1/40（1/20の図面を50％にしたもの）

エントランスホール断面　縮尺1/80

東西断面　縮尺1/400

レセプションルーム（右）および応接室（左）夕景.

構造種別の異なる3棟からなる迎賓の場

本計画は，壁式鉄筋コンクリート造で一部木造の屋根を架けたエントランスホール・執務棟と，在来木造平屋による応接・レセプション棟，木造屋根を鉄骨柱で支えるポーチ・車庫棟の構造種別の異なる3棟で構成している．

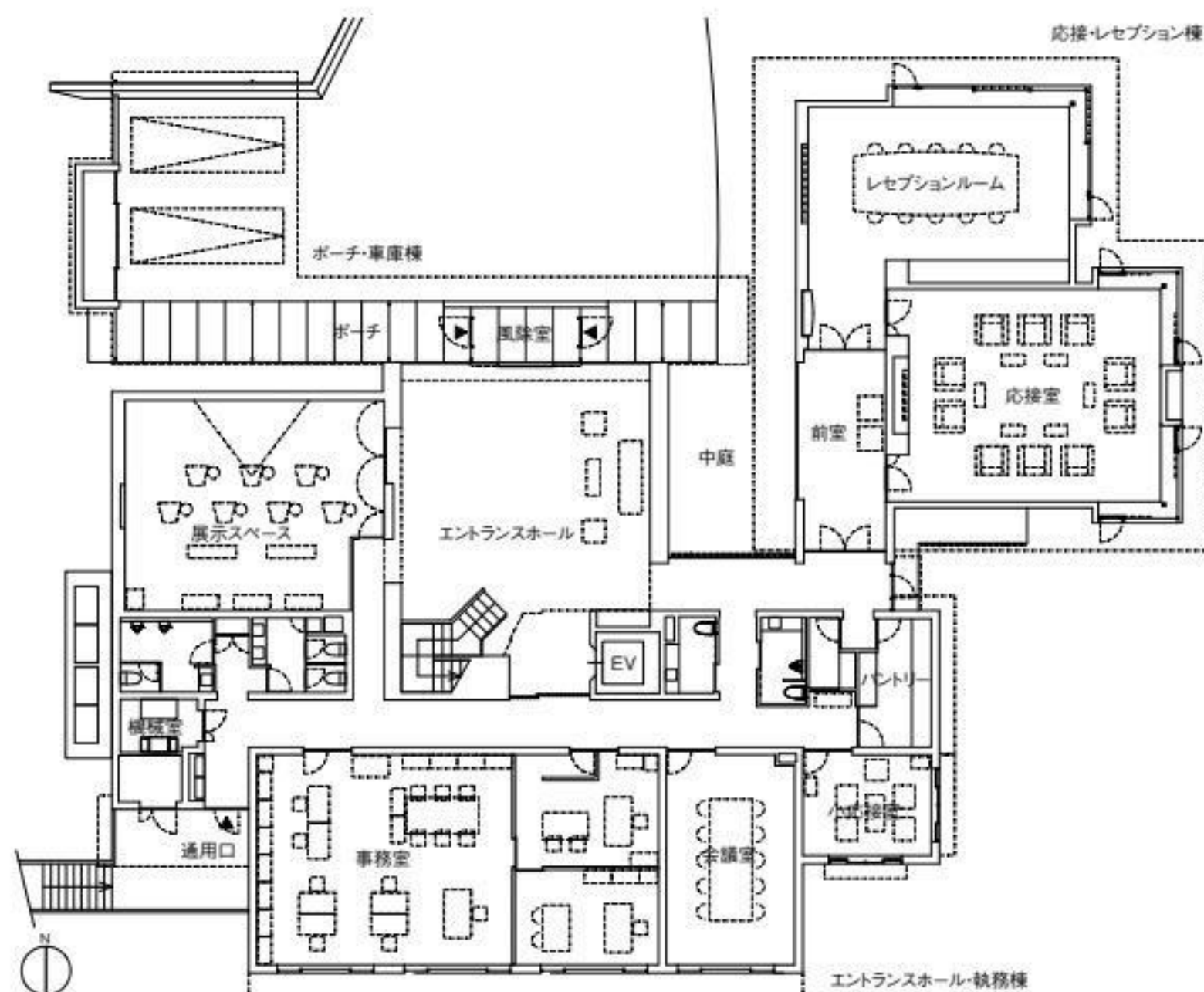
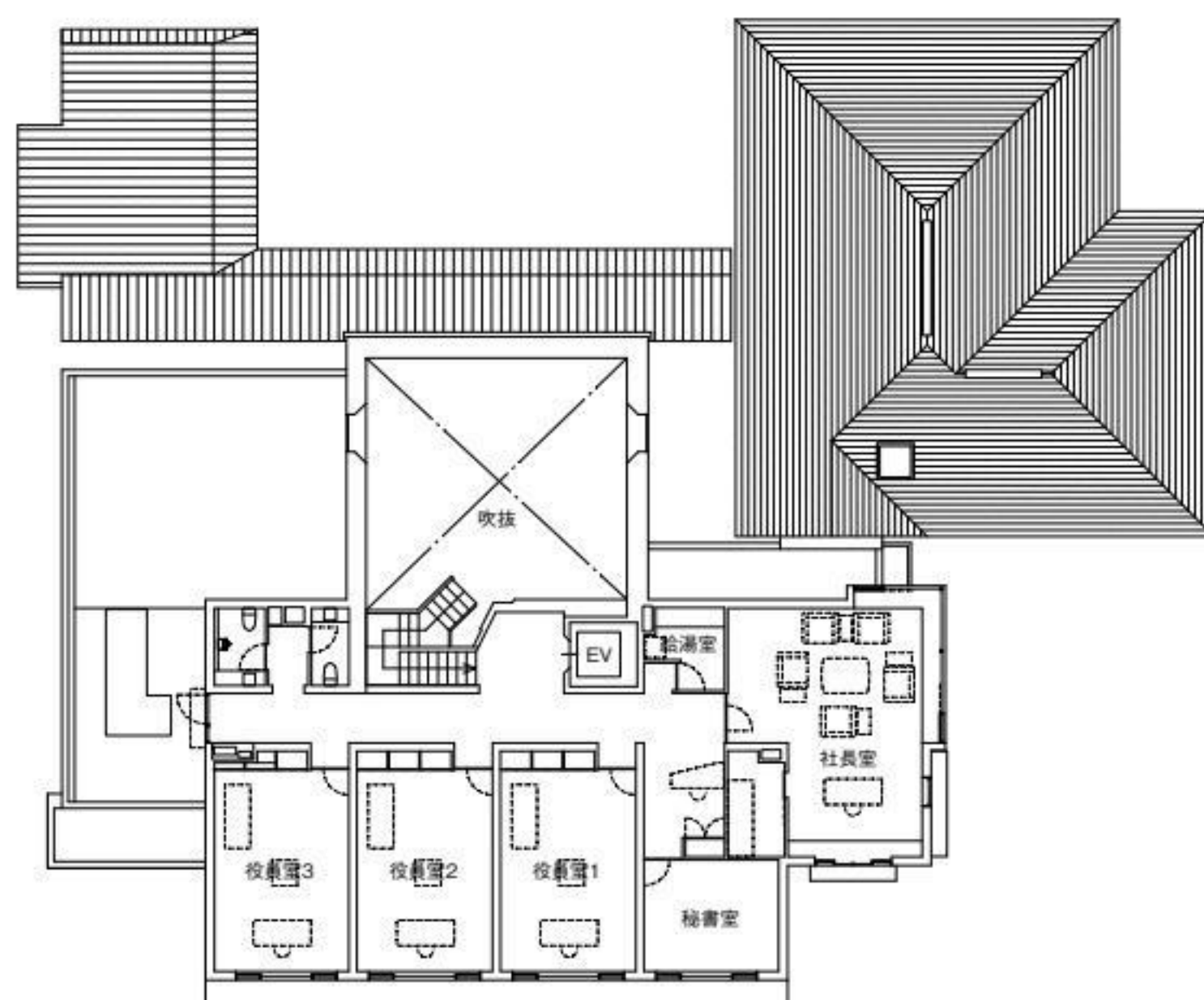
エントランスホールは鉄筋コンクリート造の壁を建ち上げた上に木造の屋根を架け，9mスパンを梁せい360mmの八溝スギの製材を用いて支点桁架構により構成した．天井面はスギルーバーの上にグラスウールを敷き込み，吸音効果を持たせている．木架構の天井面の先には，南に面したハイサイドライトから光を取り込む光天井がエントランスホールに奥行を与えている．梁の断面寸法を抑えた合理的な構造形式であると共に，地場の素材が織りなすリズミカルな架構は，人びとを迎え入れる空間としての格式と温かさを持ち合わせている．

ポーチの屋根は，垂木として90×90mmのスギ間伐材を150mmピッチで並べ，逆梁形式とした集成材の梁を，基礎に埋め込んだ60×60mmの鋼柱で支持している．線材が集積することで面として現れる版は，本計画の重要な要素である外観の水平ラインを構成している．

アプローチから来訪者を受け止める風除室正面の壁は，120×120mmの白河石を180mmピッチで積み上げ，間に半透明のポリカーボネート板を挟み込むことで，風除室に柔らかな外光を取り入れている．

益子氏の描く，繊細でありながら，あたたかく人びとを包み込む空間を実現するため，木架構を現す部分においては，構造材と仕上げ材の区別を極力排し，等価な空間構成要素として扱っている．随所に地場の素材を取り入れながら，その材として適した工法により構成した迎賓の場となった．

（近藤創順＋瀬戸健似）

配置　縮尺1/3,000

1階平面　縮尺1/400

2階平面

広島アンデルセン

設計　大成建設一級建築士事務所

施工　大成建設

所在地　広島県広島市中区

HIROSHIMA ANDERSEN

architects: TAISEI DESGN PLANNERS ARCHITECT & ENGINEERS

北側外観．ベーカリー・広島アンデルセンの旗艦店として使われてきた，鉄筋コンクリート造の被爆建物の建て替え．耐震性能不足による解体にあたり，状態のよい東側壁面を一部保存し，新規建物に再設置した．北側外壁は創建当時の2階部分の柱を含めて復元．アーケードの反対側敷地にパークを併設した．

5階LOBBY．照明は既存建物で使われていたものをメンテナンスし，再利用している．天井高さ2,625mm．

4階左はCopenhagen Room，コンクリートの十字柱を挟んで右はDenmark Room．張地を交換した椅子を再利用．イベントや結婚式の会場として使われる．広島アンデルセンのテーマであるデンマークの文化に関連するイベントも開催．

十字柱が誘起する，時間・空間・人間の交差

パンを通じて「食卓に幸せを運ぶ」，広島アンデルセン．創業の地，広島に構える旗艦店の建て替えである．
欧州の「旧いものを新しく活かす」考えに倣い，銀行として使われていた建物を活用して，1967（昭和42）年にベーカリー「広島アンデルセン」が誕生した．旧建物は，被爆，復旧，2度の増改築を経て使われ続けてきた被爆建物である．耐震性能不足に加え，コンクリートの劣化も酷く，建て替えに踏み切ることとなった．解体にあたっては，被爆した外壁の一部を保存し，新建物の東面外壁に再設置した．さらに増改築された際の外壁や，旧店舗で利用していた内装材や家具，照明なども含め，過去を継承する計画とした．
それを支える新しい構造体は偏平柱と偏平梁として，外部への開放性と設備の更新性に配慮．合理的構造と厨房機能の集約により，敷地の1/4程度をパークとして生み出した．パークを都市の吹き抜けに見立て2本の階段を設置し，複数の用途を立体的に接続している．柱と梁によるゲートは，部屋やゾーニング，買回りの動線をつくる．そして，それらが交差することで中央には十字柱が出現し，旧建物の持つ求心的空間を継承する．
旧店舗の要素とモダンデザインが融合する「時間の交差」．アーケードによる“都市”の賑わいから，店名の由来となるデンマークを感じるベーカリーマーケットを抜けた先で，広島芸北の“自然”に遭遇する「空間の交差」．鉄筋コンクリートの構造体が，回遊やコミュニケーションを促す「人の交差」．十字柱に象徴される「交差」でかたちづくられた建築である．

（中藤泰昭／大成建設）

HYGGE Park．飲食スペースやマーケット，屋外結婚式場としても使われる．広島県北広島町にある社内研修施設の農場から樹木と表土を移植．*

1階Bakery Market．扁平柱と扁平梁による門型フレームをグリッド状に配置し，十字柱としている．柱のスパンは7,000mm．梁下の高さは3,075mm．

南側全景．左は設備エリア．

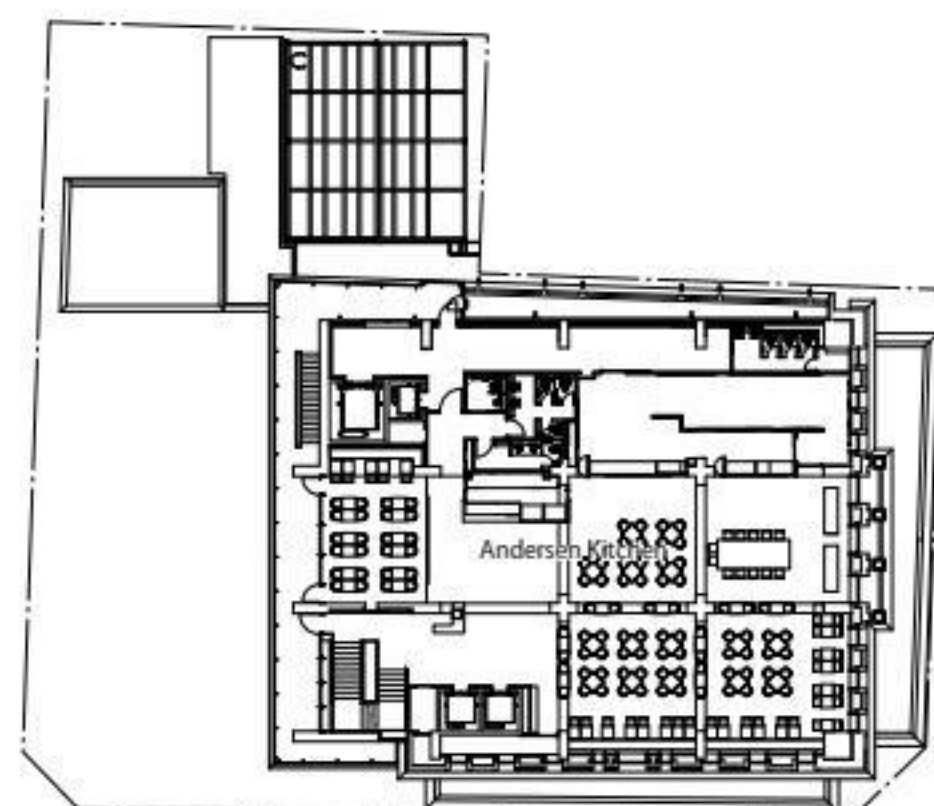
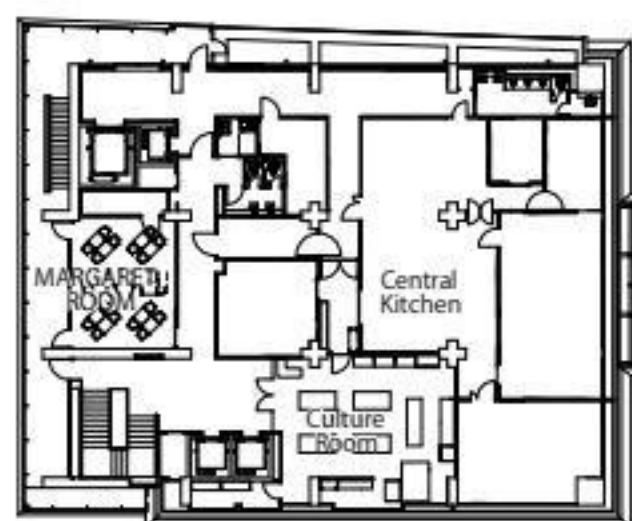
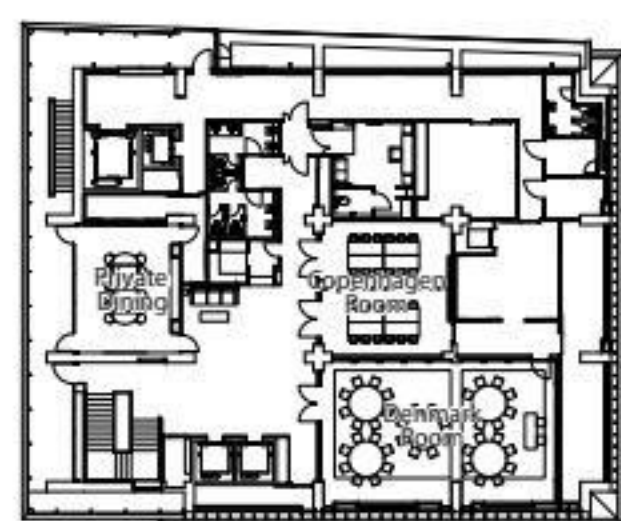
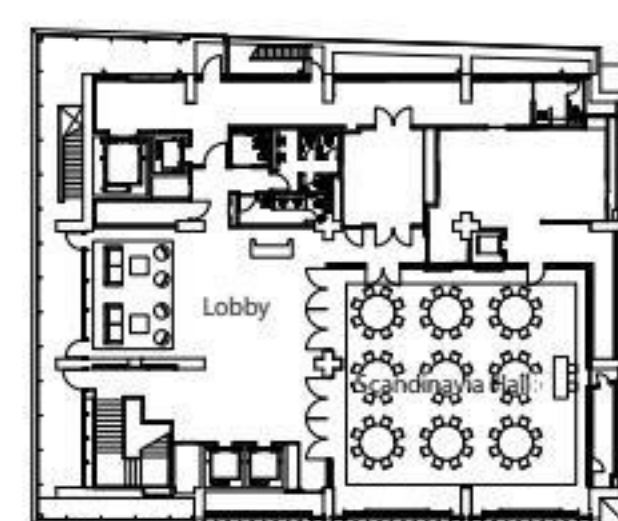
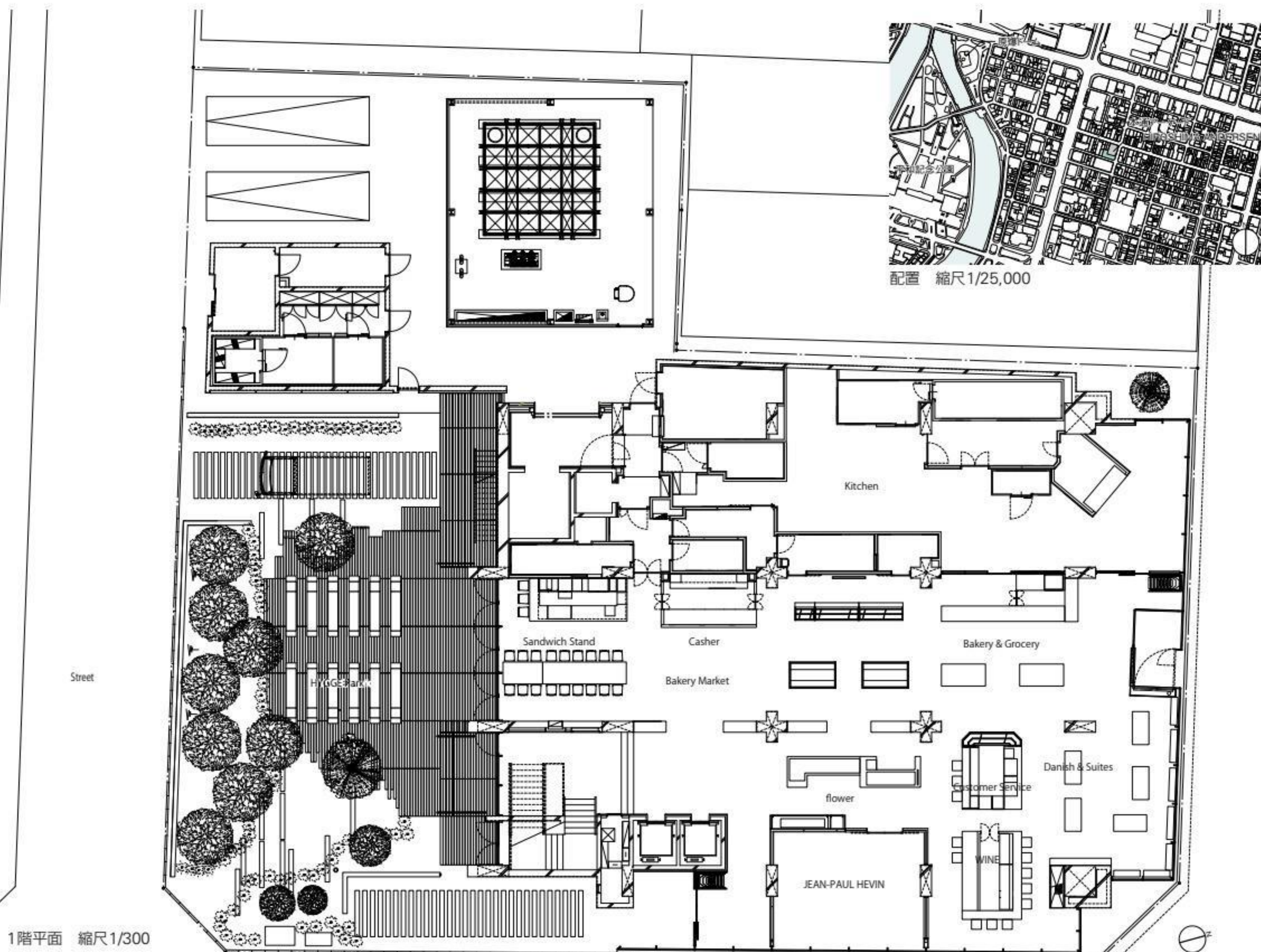
出典：建築世界社『工学博士長野宇平治作品集』，1928年　撮影：米国戦略爆撃調査団

1925年，三井銀行創建．長野宇平治による設計．

1945年，爆心地から360m地点で被爆．改修後銀行として使用．

1967年，広島アンデルセン開業時に改築．**

1978年，増築．**

設計監修　木村素直
設計　大成建設一級建築士事務所
施工　大成建設
敷地面積　1,528.73m²
建築面積　919.04m²
延床面積　3,424.78m²
階数　地上5階
構造　鉄筋コンクリート造
一部，鉄骨造
工期　2019年2月〜2020年7月
撮影　堀越圭晋／エスエス
*撮影　中村啓太郎・中村寛／建築写
**提供　アンデルセン・パン生活文化研究所
***提供　大成建設
（データシート217頁）

2階平面　縮尺1/800

3階平面

4階平面

5階平面

配置　縮尺1/25,000

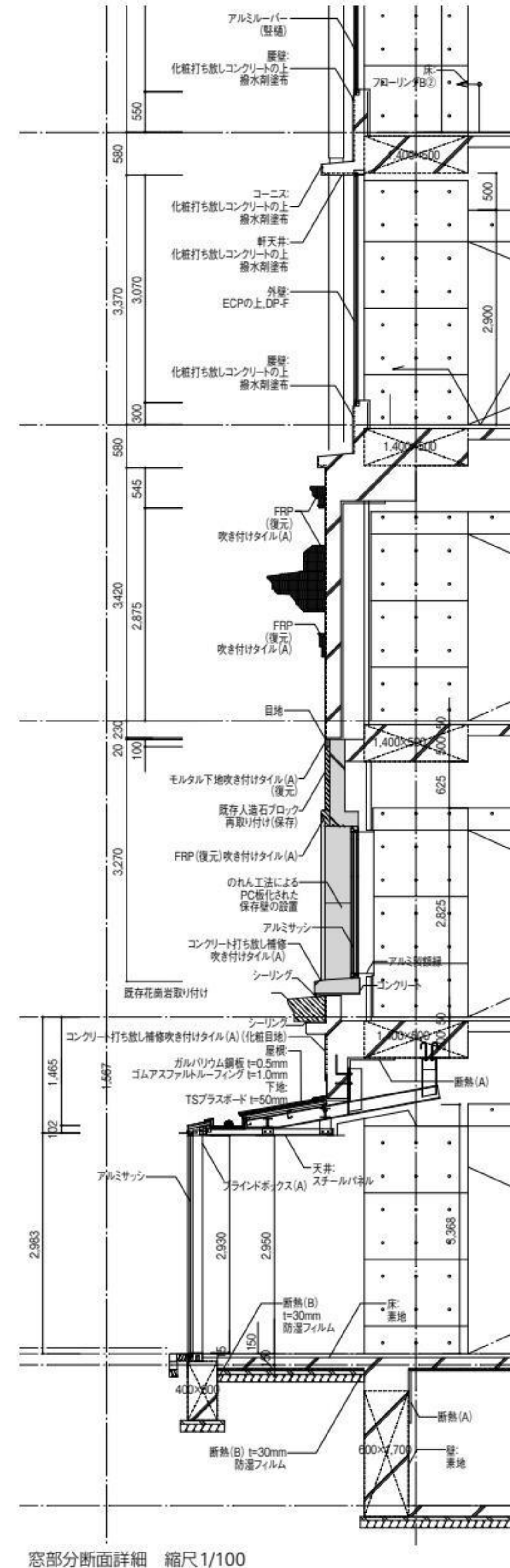
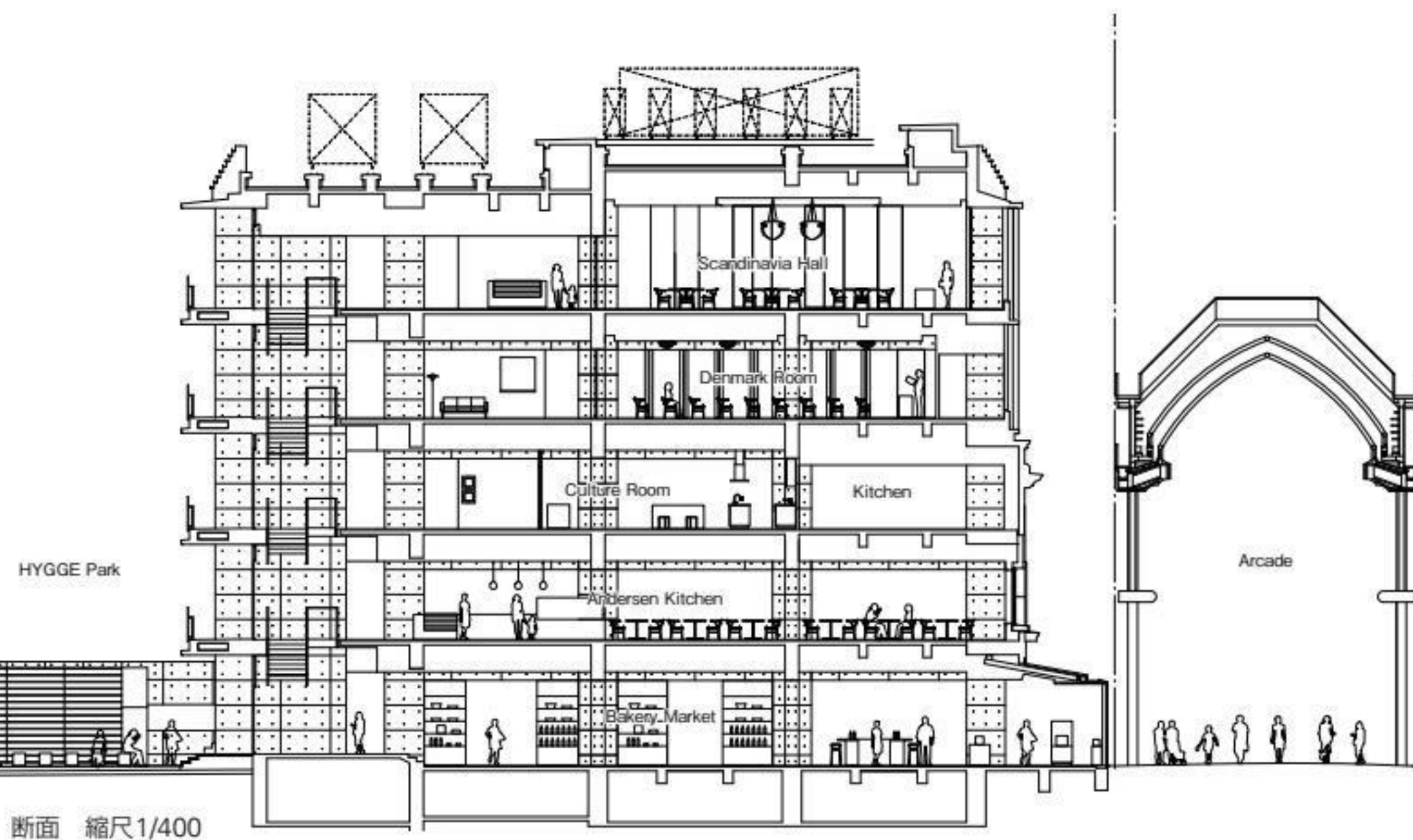
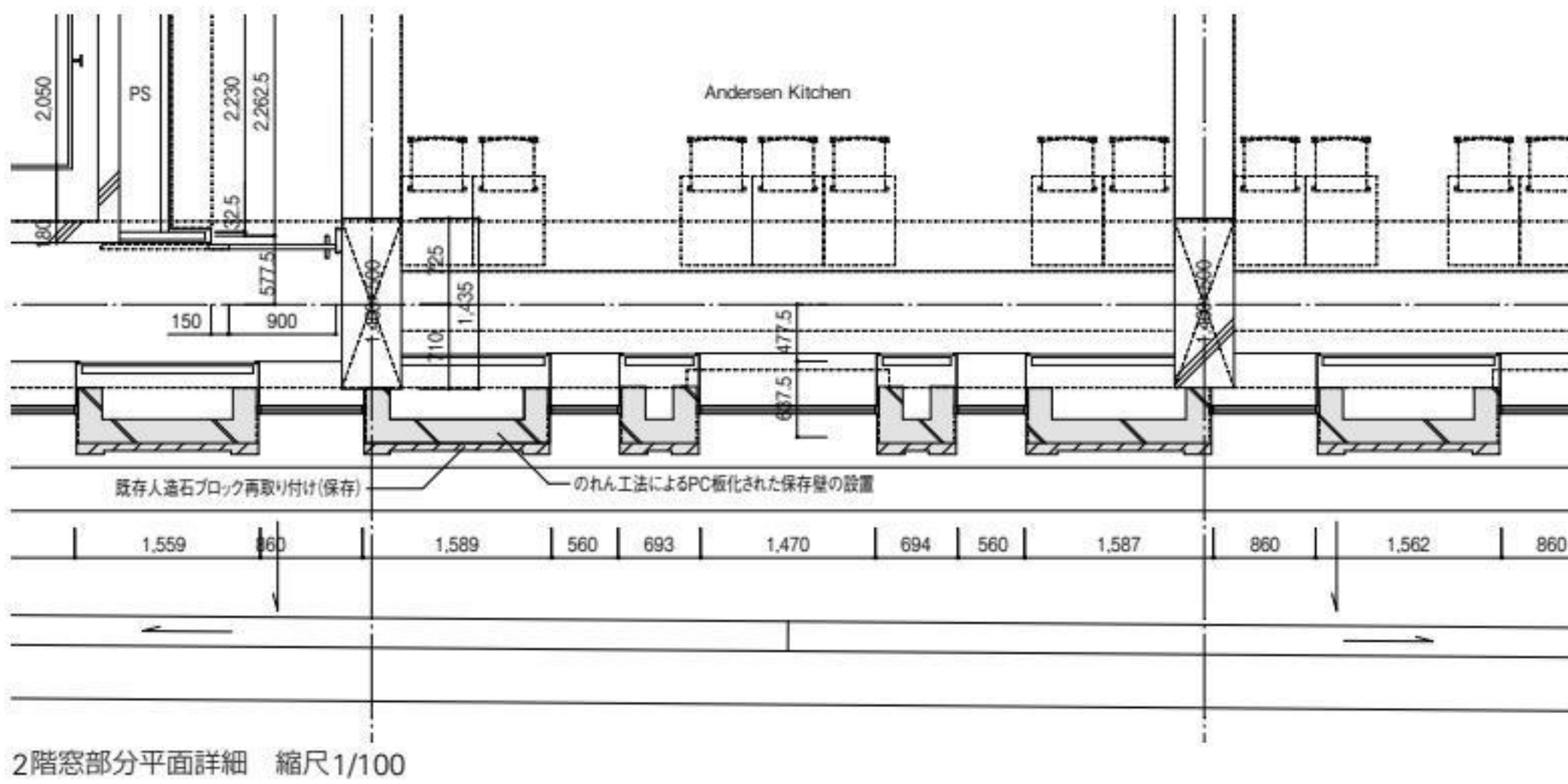
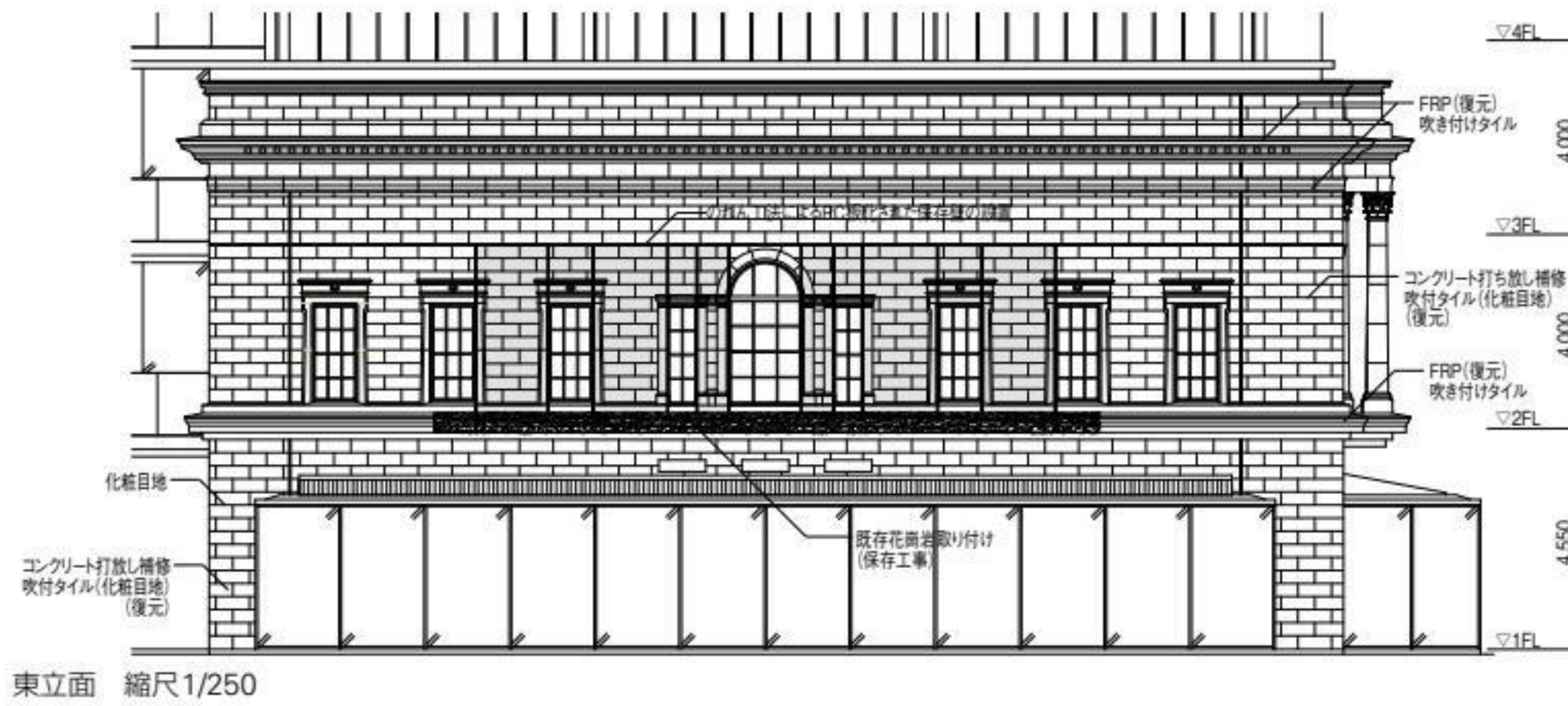
1階平面　縮尺1/300

左：東側壁面の既存の窓枠や装飾を含む形状を保つため，躯体ごと切り出しを行った. ***／中左：既存鉄筋コンクリート切断後．既存外壁の表面に保護コンクリートを打設し，人造石部分の表面から65mmを残して裏面の既存コンクリートを切断する. ***／中右：人造石部分の裏面をプレキャストコンクリート板化し，表面の保護コンクリートを分離させた後，新規躯体に設置. **
右：上部から突出させた鉄筋により壁を吊る「のれん工法」を用いた. ***

東立面　縮尺1/250

2階窓部分平面詳細　縮尺1/100

断面　縮尺1/400

窓部分断面詳細　縮尺1/100

那覇文化芸術劇場 なはーと

設計　香山・久米・根路銘設計共同体

施工　國場組・大米建設・金城キク建設・ニシダ工業共同企業体

所在地　沖縄県那覇市

NAHA CULTURAL ARTS THEATER NAHART
architects: KOHYAMA ATELIER · KUME SEKKEI · NEROME SEKKEI

北東側外観．小学校の跡地に建てられた文化芸術施設．外観の皮膜ルーバーは，那覇の伝統織物である「首里織」の編み方をコンクリートで表現している．

地域の伝統を，「かたち」にする

私たちは，いかなる場合においても，地域の伝統を，「かたち」にするという姿勢は，建築設計の基本であり，同時に喜びであると考えて，建築をつくり続けてきた．そしてこの度，那覇の中心地に，沖縄文化のセンターをつくることになって，改めて，その基本を強く自覚し，また，考え直すこととなった．沖縄の風土と人びと，そこから生まれる独自の文化にはじめて接し，魅了されたのは，今や半世紀も昔になる．私の初期の作品の多くは，沖縄の明るい太陽の下，輝く大地の上に生み出された．それはまだ，本土復帰前の，米軍統治の時代であったが，その厳しい時勢にもかかわらず，というよりも，厳しい時勢であったが故にこそ，沖縄の文化は，輝くような明るい，光を放っていた．その歌と踊りは，人に見せるためのものというよりは，沖縄の人びとの心と体から自然に流れ出るもので，太陽や海と同じく明るく輝くのは当然だ，と思われた．そして海と砂浜の輝き．水泳の好きな私は，常に水着と水眼鏡を携帯し，海岸を見れば，海に飛び込んだものだった．

そうした沖縄の光を建築の「かたち」の中に，うまく包み込むことができたのか，そしてその光の中で，地域の人びとが，さらなる輝きを放ってくれるのか，これからも見続けていきたいと思っている．

（香山壽夫／香山建築研究所）

沖縄の光と風と，人の営みが重なる「かたち」

那覇文化芸術劇場「なはーと」は，那覇市のみならず，沖縄地域全体を牽引する舞台芸術の拠点となると同時に，かつて小学校であったこの場所に地域の人びとが日常的に集い，歌や踊りを稽古し，時を過ごす豊かな居場所となることを目指した施設である．敷地は国際通りとゆいレールに挟まれた那覇市の中心市街地に位置し，周囲には住居や商業施設が混在し，沖縄・那覇独特の喧騒に溢れている．そこに，巨大な塊となって敷地いっぱいまで建つ劇場建築をどのように埋め込むか，そして同時に都市のランドマークとなり人びとを惹きつけ，初めての人もいつもの人も受け入れ，人びとの活動や賑わいと建築が一体となった那覇独自の空間をつくれるか．私たちは，建築を織物のような帯状の皮膜で柔らかく包み込むことを提案した．貴重な伝統織物の「首里織り（花倉織）」の構成を学び，強く優しい風情と糸の織り方を再現した．それは強烈な日差しと台風の飛来物から人びとの漂う空間を護り，建築内外の境界領域に有機的で自由な居場所と，人影と建築が重なり合った独特の情景をつくり出す．そして強烈な光と風を，人びとの溜まり佇む空間を優しく包むものに変える．そのような，地域の人びとが古くから熟知してきた沖縄の光と風の最も美しく心地よい活かし方を，私たちなりに学び，建築の「かたち」にすることを試みた．

（長谷川祥久／香山建築研究所）

ウナー（共有ロビー）．右の外壁に花ブロックを使用した1階小スタジオは，開口を開け放つとウナーや屋外と一体で使える．その上は3階大スタジオ，左上は2階練習場．吹き抜け高さ11,500mm．

まちなかに人びとの集う場をつくる

敷地は那覇市の中心街に位置することから，自然に人びとを引き込み，自由な回遊を促し，また集うことのできる場をつくることにより，賑わいと活力を地域にもたらすことを意識した．

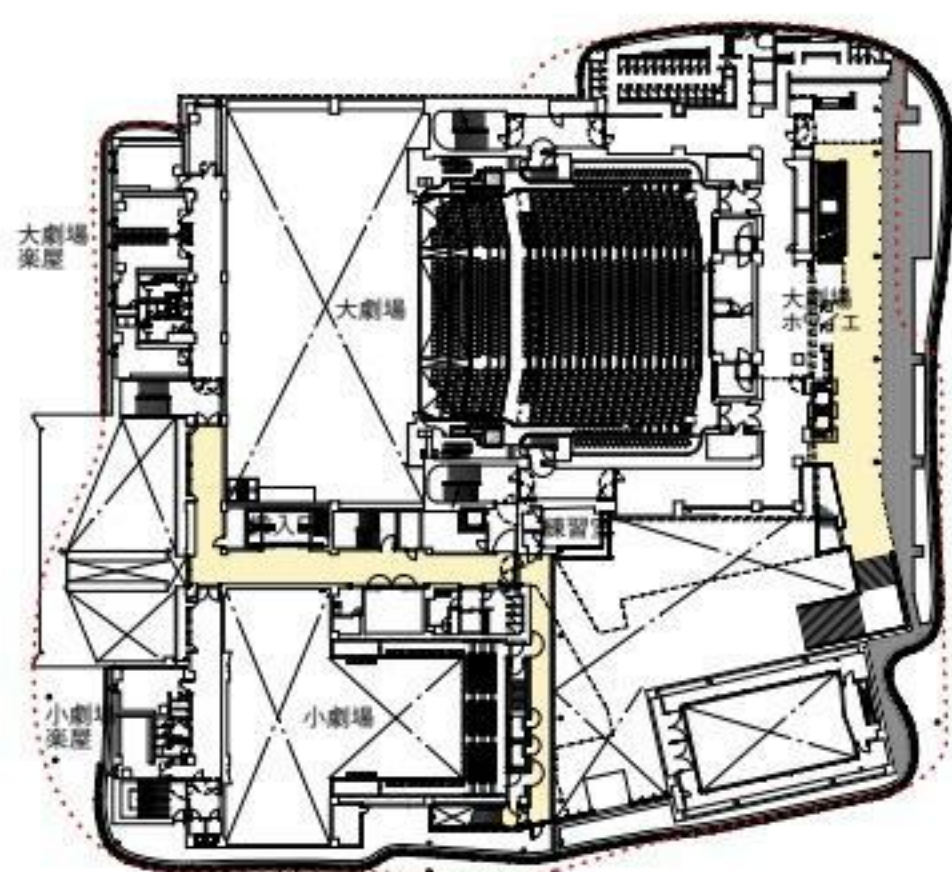
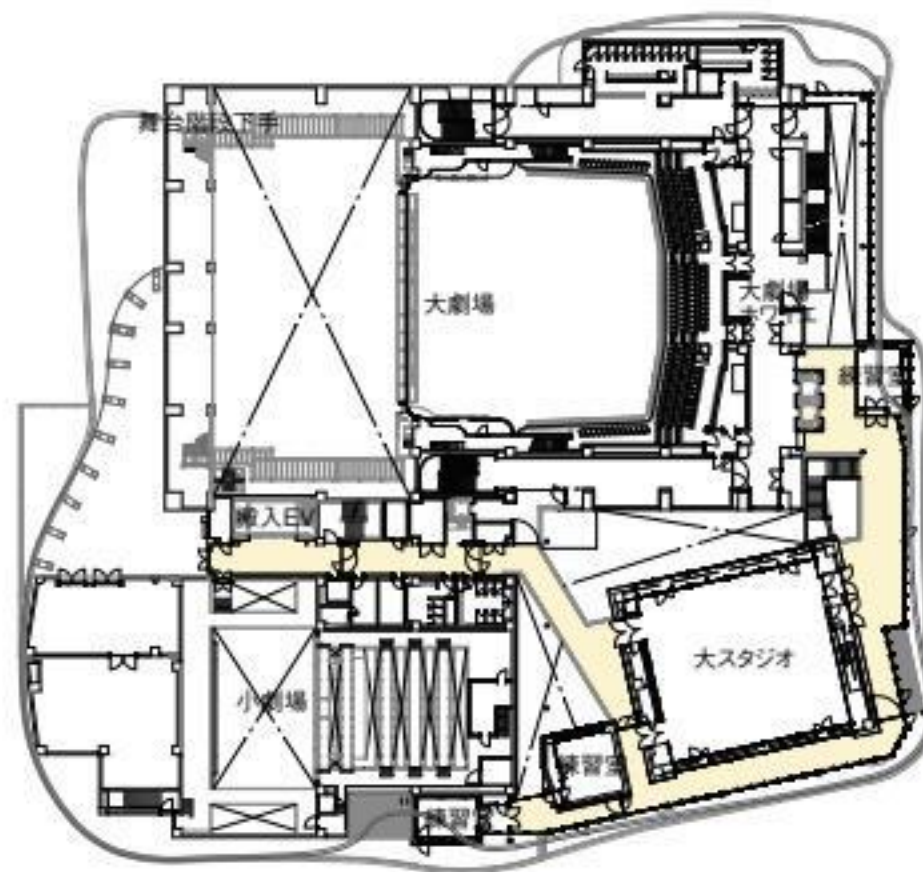
かつてさまざまな行事や儀式等が行われた首里城の中庭広場「うなー（御庭）」のように，さまざまなイベントを行うことができる居心地のよい共用ロビー「ウナー」を施設の中心に据えた．3層吹き抜けの「ウナー」には大小さまざまな練習室やホールのホワイエが顔を出し，施設の多様な活動の賑わいが立体的に感じられるように計画している．同時に，外周部のカーテンウォールや上部トップライトから光が降り注ぐ，内部でありながらも外部のように感じられる，まちがそのまま施設内に入り込んだような半屋外的空間とした．

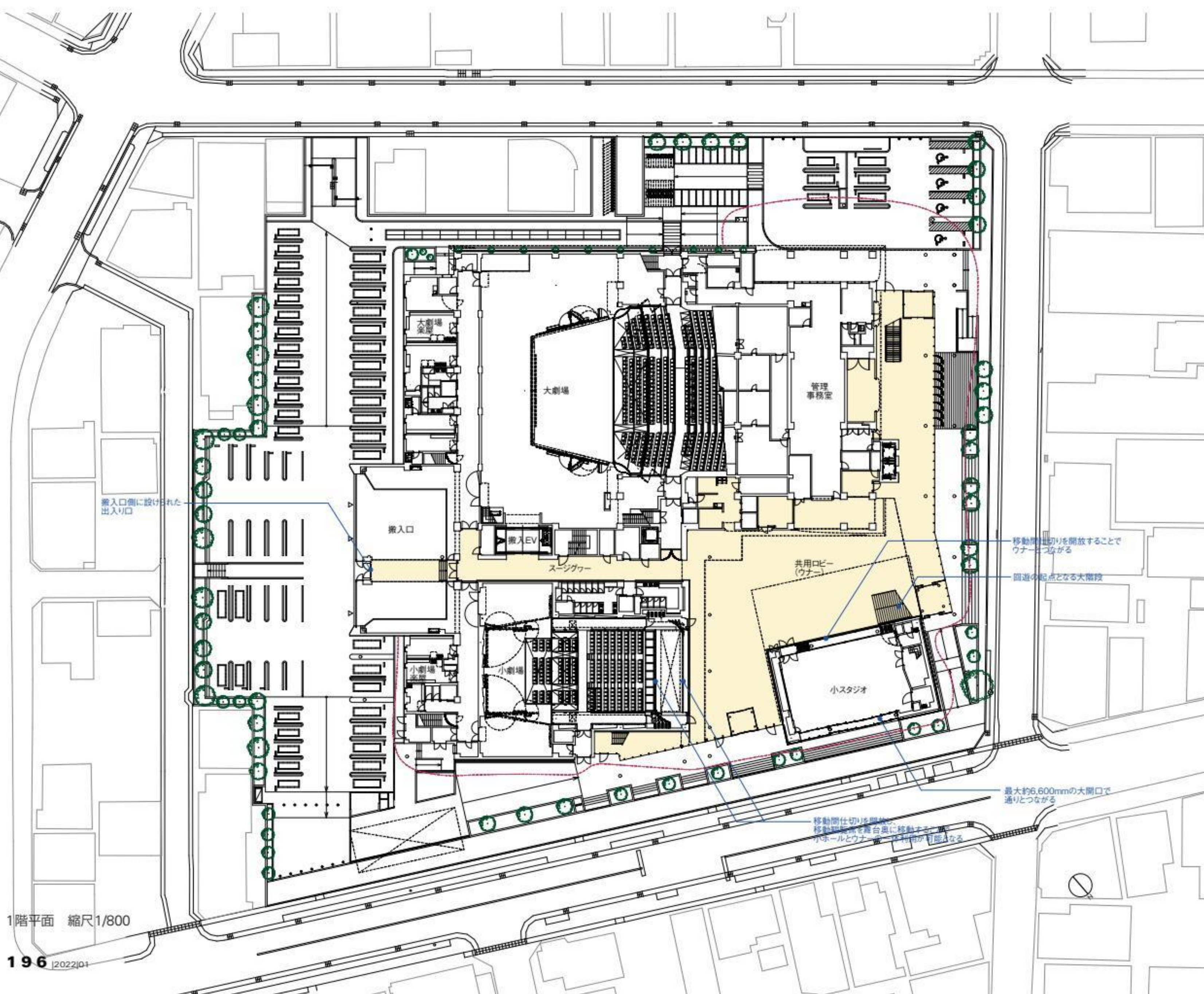
施設は4方向からアプローチできるよう，3方向の主要な出入口に加え，一般的には裏となる搬入口側にもスージグヮー（街路）として通路を設け，通り抜け可能な計画とした．ウナー中央に設けた小スタジオは内部と外部の両方に開放が可能な大開口を備え，ウナー側と連動できるイベントの場として，まちに開き賑わいを発信する公共劇場として，街中に溶け込む施設を目指した．

（兒玉謙一郎／久米設計）

「らしさ」とは

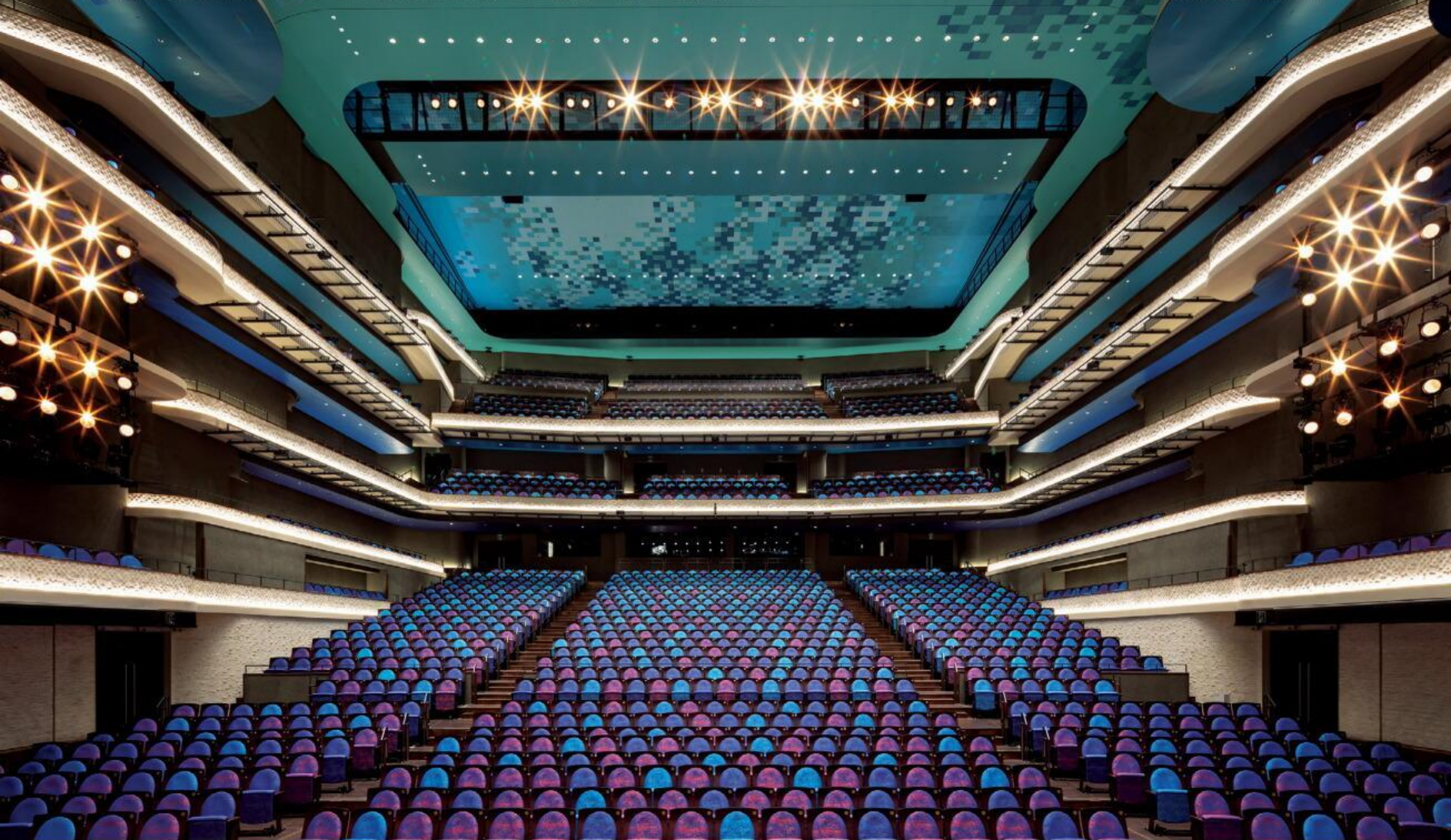
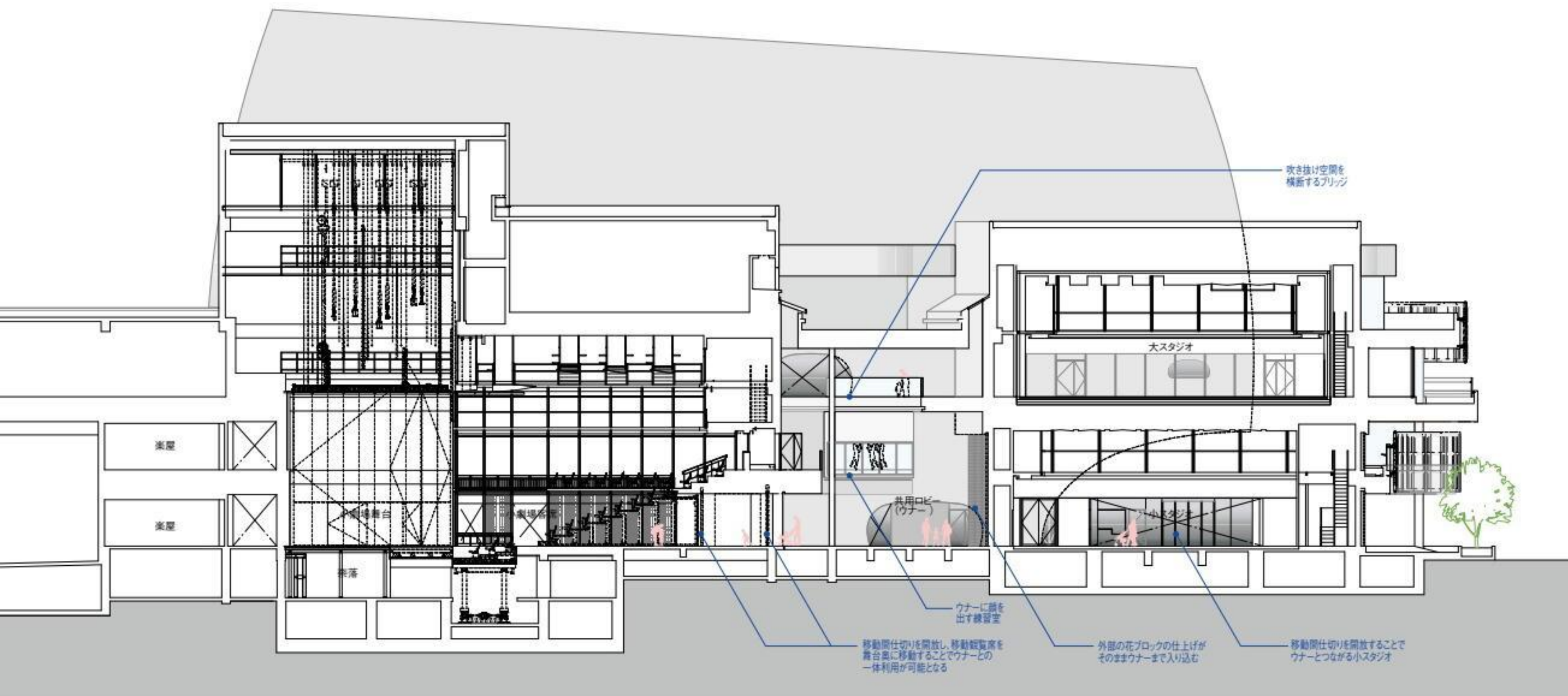
具体的な設計を進める上で，この施設にどうやって沖縄らしさ（那覇らしさ）を吹き込むことができるのかということを検討した．花ブロックや石灰岩，「首里織」など地元ならではの素材や意匠，「ウナー」「スージグヮー」「アマハジ」など沖縄の伝統的な建築の造りをモチーフにした空間構成などは目に見えて分かりやすい「らしさ」の表現のひとつとなっている．その中でも施設を取り巻き，大きくうねる外装（首里織皮膜）によって内外の中間領域として生み出された「アマハジ」（沖縄の風雨や直射日光を遮る深い軒下空間）は，内部へ人びとを誘い込むきっかけをつくると共に憩いの場ともなる．その「アマハジ」の下に生まれるそれぞれの空間は，沖縄の強い日差しが生み出す「光の強弱（明暗）」によって定義され，さまざまな表情を見せる．そこには目に見えるものだけの「らしさ」ではなく，この場所に降り注ぐ「光」をコントロールすることでつくり出される空間に漂う空気感そのものが，沖縄らしさ・那覇らしさとして表現されている．この場所に訪れ，集い，時を過ごすことでしか感じることのできない「らしさ」がそこにはある．

（根路銘剛次／根路銘設計）

2階平面　縮尺1/1,500

3階平面

配置　縮尺1/8,000

1階平面　縮尺1/800

設計　香山・久米・根路銘設計共同体
施工　國場組・大米建設・金城キク建設・
　　　ニシダ工業共同企業体
敷地面積　9,736.54m^2
建築面積　5,994.22m^2
延床面積　14,576.26m^2
階数　地下2階　地上6階
構造　鉄骨鉄筋コンクリート造
　　　一部，鉄筋コンクリート造，鉄骨造
工期　2018年10月～2021年5月
撮影　小川重雄（特記を除く）
（データシート218頁）

北側外観．外観の皮膜ルーバーは，那覇の伝統織物である「首里織」の編み方をコンクリートで表現している．内部化された広場「ウナー（共有ロビー）」，通路「スージグヮー」，軒下空間「アマハジ」など，沖縄・那覇独自の要素をモチーフにして空間を構成．

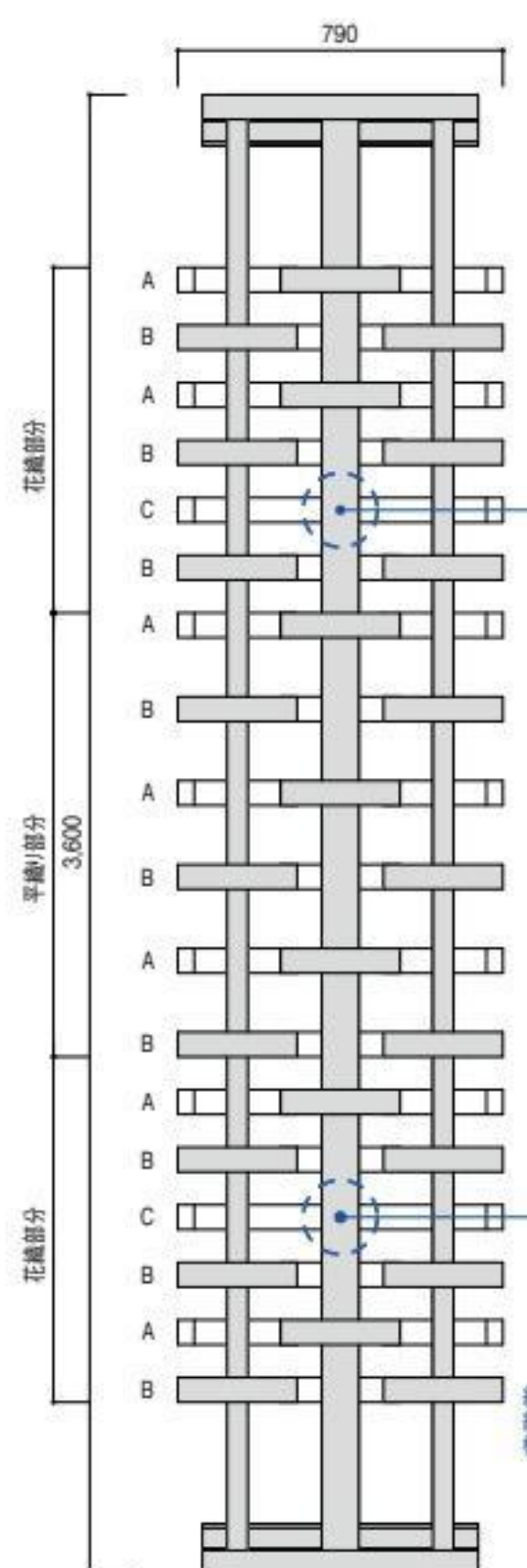
大劇場．約1,600席の多目的ホール．3層構造の客席は階が上がるにつれ，客席が内側に張り出す構造とし，勾配を緩く保ちつつ視距離も近くなるよう，安全性と見やすさの両立を目指した．サイドバルコニー席は高さを抑え，一部を2段構成とした4層とした（計6層）．モザイク状の青い天井は，海底から見上げた水面をイメージし，客席は，低層から上層にかけてサンゴの赤から水面の透明な青に近づくようにグラデーションとした．サイドバルコニー席は城（グスク）の壁面をイメージ．（望月麻衣／香山建築研究所）

最大300席の小劇場．幕仕様と反射板形式を選択でき，1階の移動観覧席を収納して平土間利用も可能になる．高さ約3m，幅11.5mの客席後方大開口を開放し，「ウナー」（共用ロビー）と一体利用できる．首里城の朱色と琉球の高貴な色とされていた黄色をモチーフに，壁仕上げと椅子の張地を計画．また，舞台から客席へ伸びた天井の形は，首里城正殿の唐玻豊（からはふう）が御庭に伸びる構成を参照した．（角沢聡子／香山建築研究所）

断面　縮尺1/400

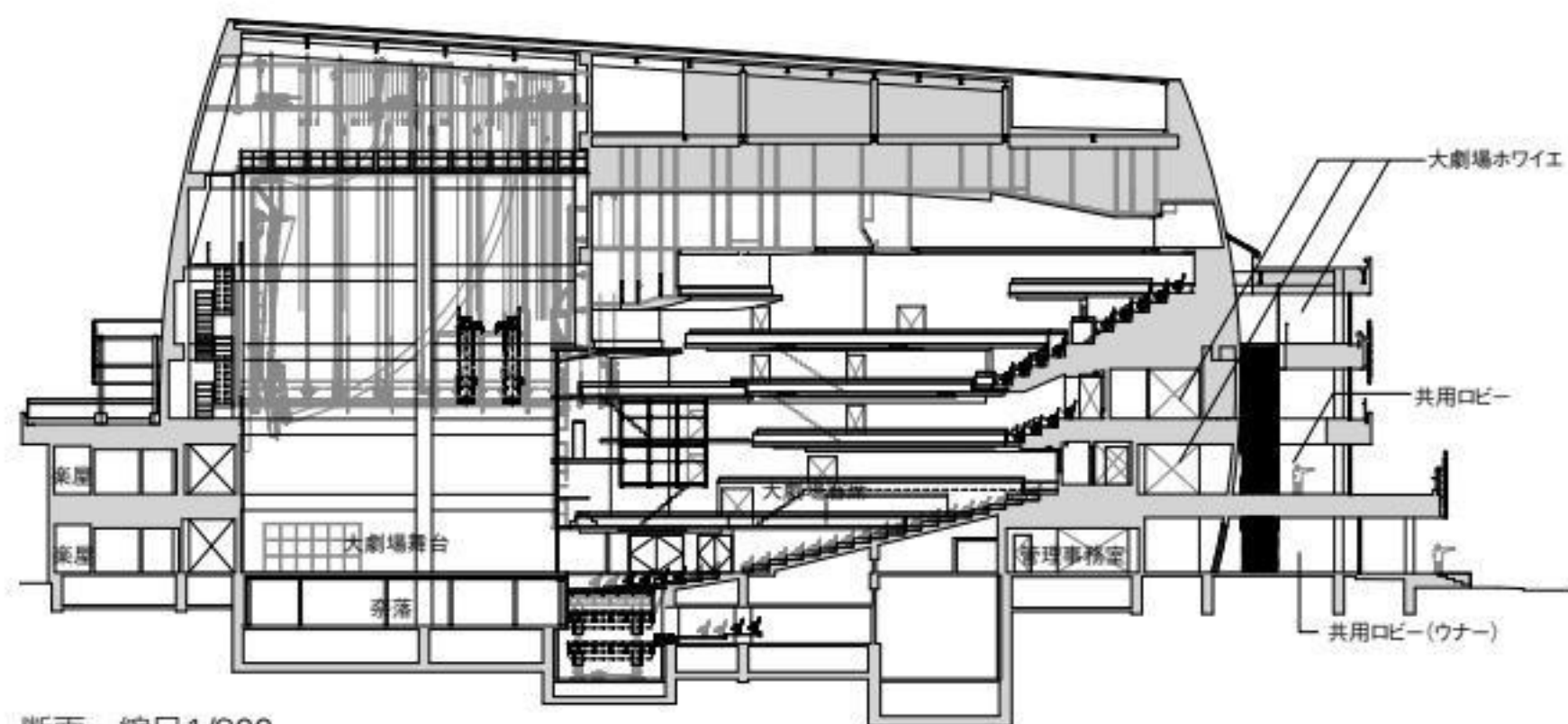
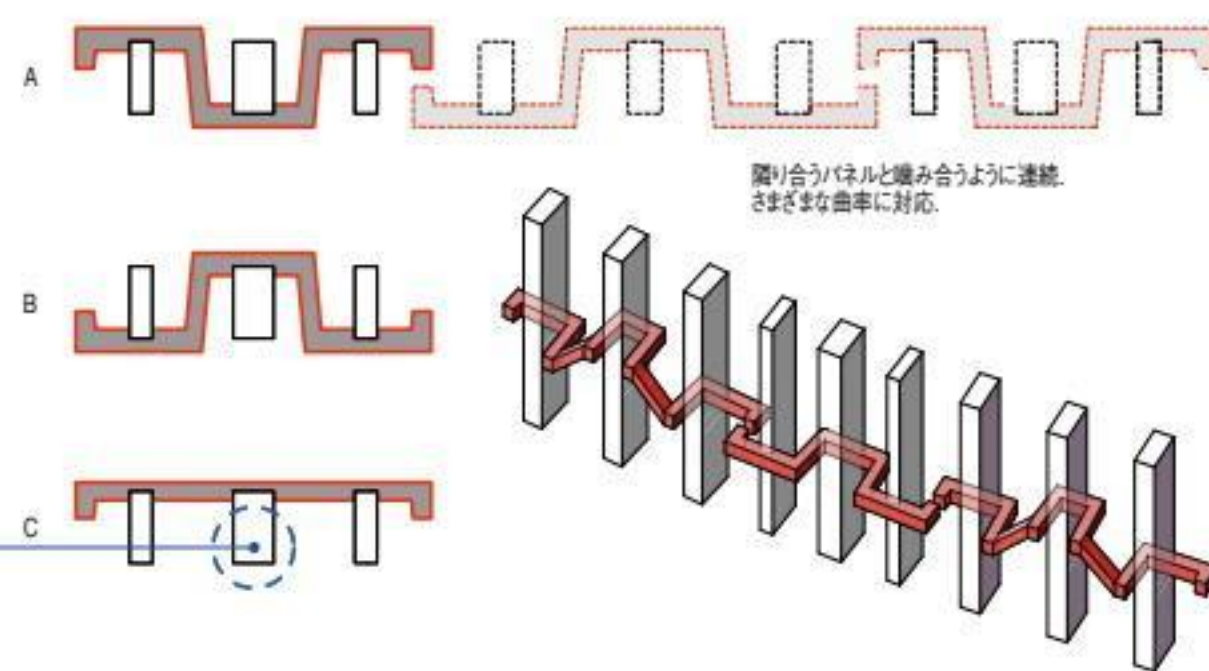
那覇の伝統的織物（花倉織）をイメージした首里織被膜ルーバー

首里織被膜ルーバーは花倉織（首里織の一種で，最も格式が高く王家の夏衣としてつくられた織物．花織と絽織，紗織を，市松または菱形模様となるように織られている．）の構成を面的に抽象化することなく，忠実に再現することを目指した．

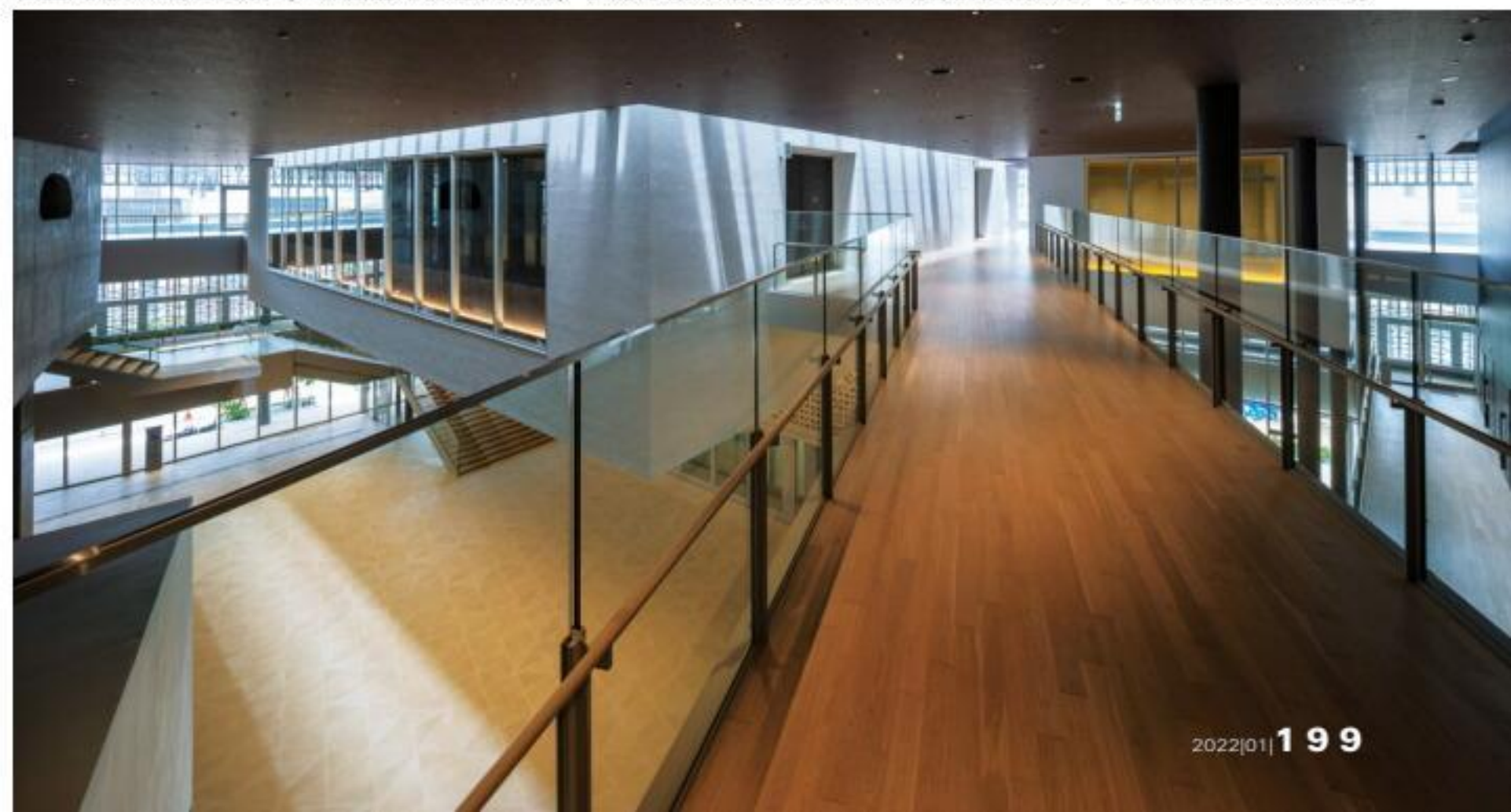
花織・平織を組み合わせたAパネルと，平織・紗織を組み合わせたBパネルを用意し（それぞれ幅広，幅狭の2種類，計4種類のパネルを基本とする），交互に並べることで市松模様をつくり，そのパネルがさまざまな曲率を描きながら連続することで軽やかな織物のような外観をつくり上げた．

HPC*でつくった各パネルは，最初に横材（経糸）をつくり，それを新たに型枠に並べ縦材（緯糸）を打ち直すというふたつの工程を経ることで複雑な形状を成立させている．実際の織物のように経糸と緯糸が存在し，硬い構造物でありながらも織物を織るようにつくられている．

*HPC　高強度繊維補強コンクリートに炭素繊維ケーブル・膨張剤などの緊張材を導入したプレキャストコンクリート．HPC沖縄による開発．　（望月麻衣／香山建築研究所）

断面　縮尺1/800

首里織皮膜ルーバー Aパネル（幅狭）詳細　縮尺1/35

首里織皮膜ルーバーの横材（経糸）を型枠にセットした状態．

提供：香山建築研究所

3階ブリッジ．ウナーの周りには，吹き抜けを横断するブリッジや階段を配置し，立体的かつ回遊性を持った変化に富む空間をつくるとともに，練習室の楽屋利用等，多様な使い方に対応できる動線計画とした．（岡本賢吾／久米設計）

メブクス豊洲

設計施工　清水建設

所在地　東京都江東区

MEBKS TOYOSU

architects: SHIMIZU CORPORATION

民間都市再生事業計画の認定を受け清水建設が単独開発を行い，オフィス棟とホテル棟を建設．12階建てのオフィス棟であるメブクス豊洲はテナントオフィスの他，高速バスや路線バスが発着可能な交通広場を整備．外周部のV字柱により十分な水平剛性を確保しながら，外装のくの字形状は，風を分散させ空気取込口に誘導する．

6階より北西を見る．アトリウムの吹き抜けは3Dモデルソフトを用いてスチールパネルを多面化し，光を反射させることで，トップライトからの自然光がエントランスまで届く．

まちのようなクリエイティブオフィス
—メブクス豊洲—

メブクス豊洲は，新たなまちに生まれ変わりつつある豊洲埠頭の中央に位置する．自然を感じる環境と繋げた，新たな働き方を模索する都内最大規模（1フロア約2,000坪，延床面積6,611.56 m²）のビッグプレートを持つ賃貸オフィスである．
社会の変化が激しい中で，環境への変化とニーズと共存し，調和していく建築とは何か．人の多様性・ビジネスや働き方の変化，周囲の風や海・眺望といった恵まれた自然環境，進化するIoT技術とどう対応していくのか．さまざまな変化に適応し続けるフレキシブルな建築であること，さまざまなパートナーシップが図れる空間を追求し，解放的で自由なキャンパスのような空間にしたいと考えた．
105×80mのフットプリントに，風車状にバルコニーと外階段を併設した計画は，レイアウトのフレキシビリティを高めるため，自由に選べるヘビーデューティーゾーンやパントリーを実現させ，R&Dやテストキッチン・スタジオ等の用途への対応も可能とした．
企業間のコラボレーションにとって最も大切にしたことは，光と視線である．自然光がやわらかく注ぐ氷河の裂け目である「クレバス」をイメージした吹き抜けでは，島状に分散させたコアの間から，各企業の創造的な活動が感じられる．シミュレーションにより隅々まで視線の届く配置とした．
人・物・エネルギーデータを収集，解析，運用するIoT技術は，ワーカーや建物をスマートにサポートする．このオフィスがオフィスワークの箱ではなく，リアルな場所でのコミュニケーションを育み，集う人の創造力があふれるまちとして持続していくことを願っている．（今井宏＋加登剛司／清水建設）

2階エントランス。網状の天井は煙だまりとなり、火災時の煙の上昇を防ぎ、建物に防火扉のないデザインとした。屏風状のガラスカーテンウォールはFEM解析を行い、安全性を確保している。

南側外観．ゆりかもめ「市場前」駅から直結でアクセスができる．右側が「メブクス豊洲」左側は2022年春にオープンするホテル「ラビスタ東京ベイ」．

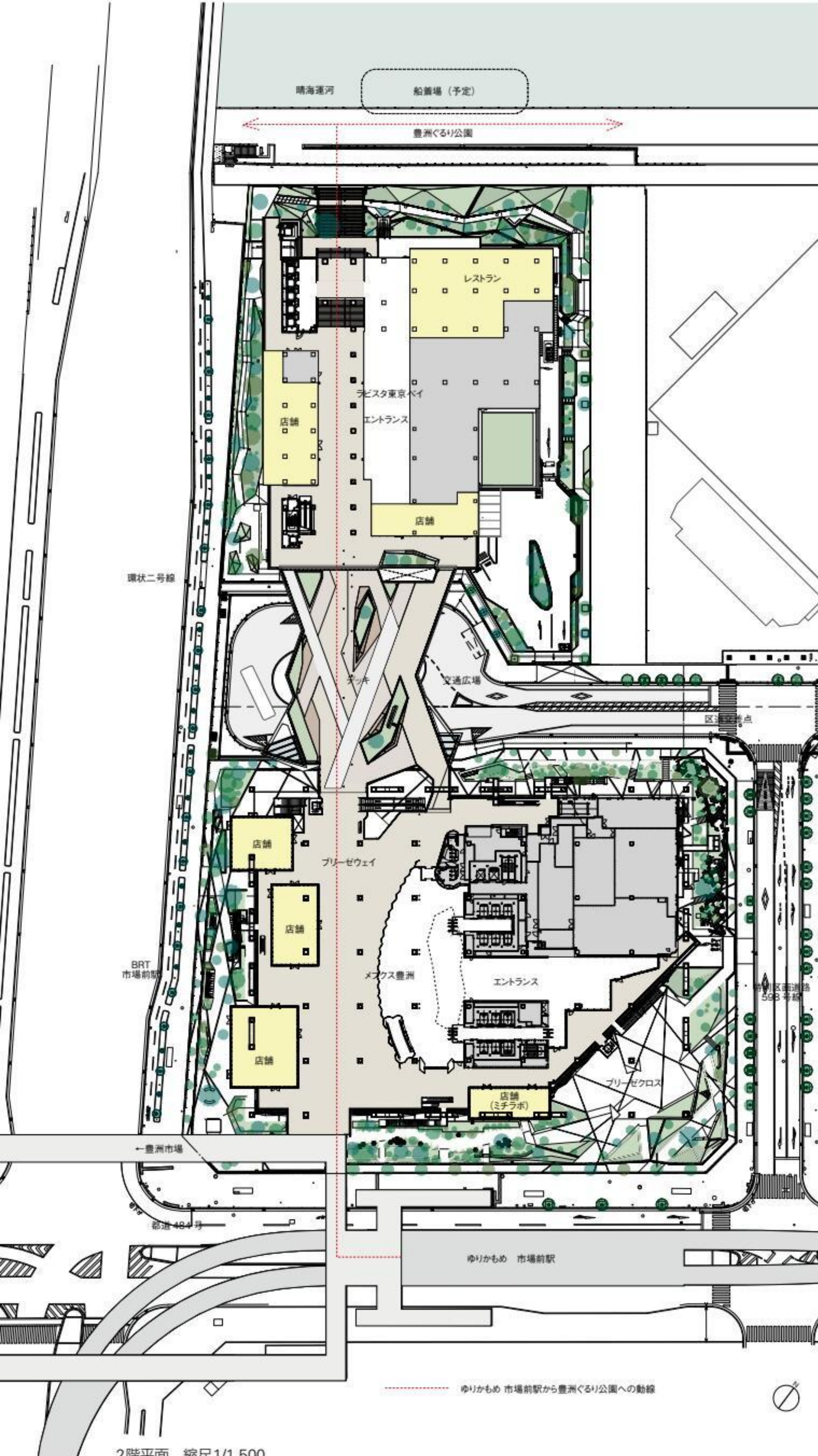
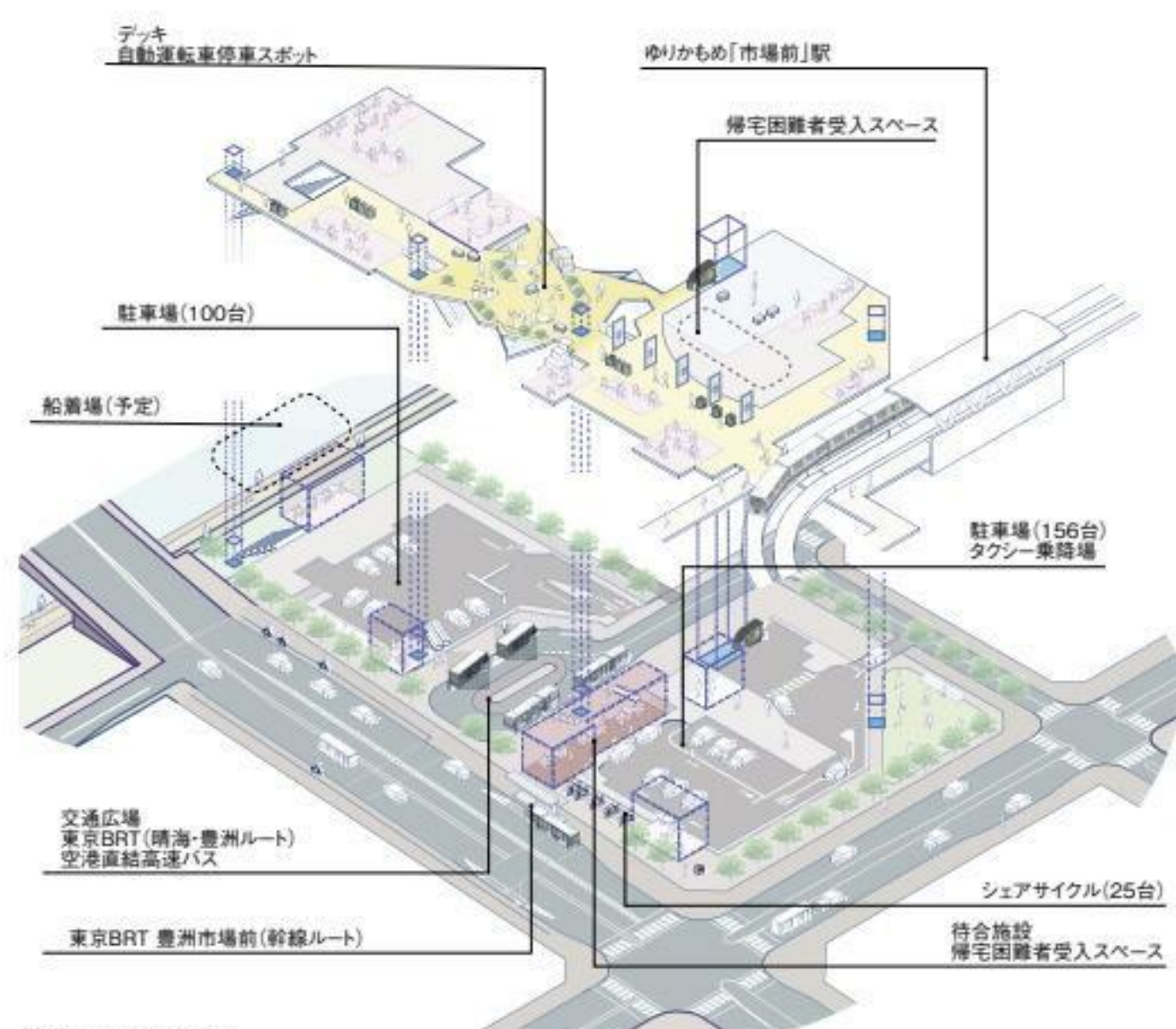
西側鳥瞰．敷地前面には環状2号線，奥には首都高速が通る．将来は都心へ向かう高速バス，BRTや船の運行も計画されている．*

配置縮尺　1/40,000

東京ベイエリアの新しい核

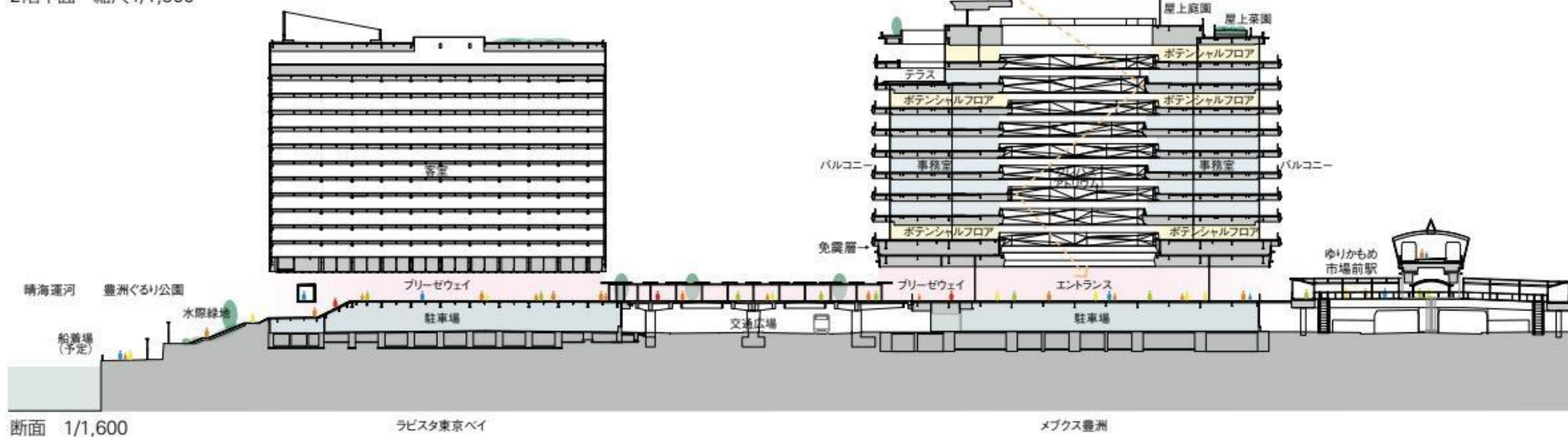
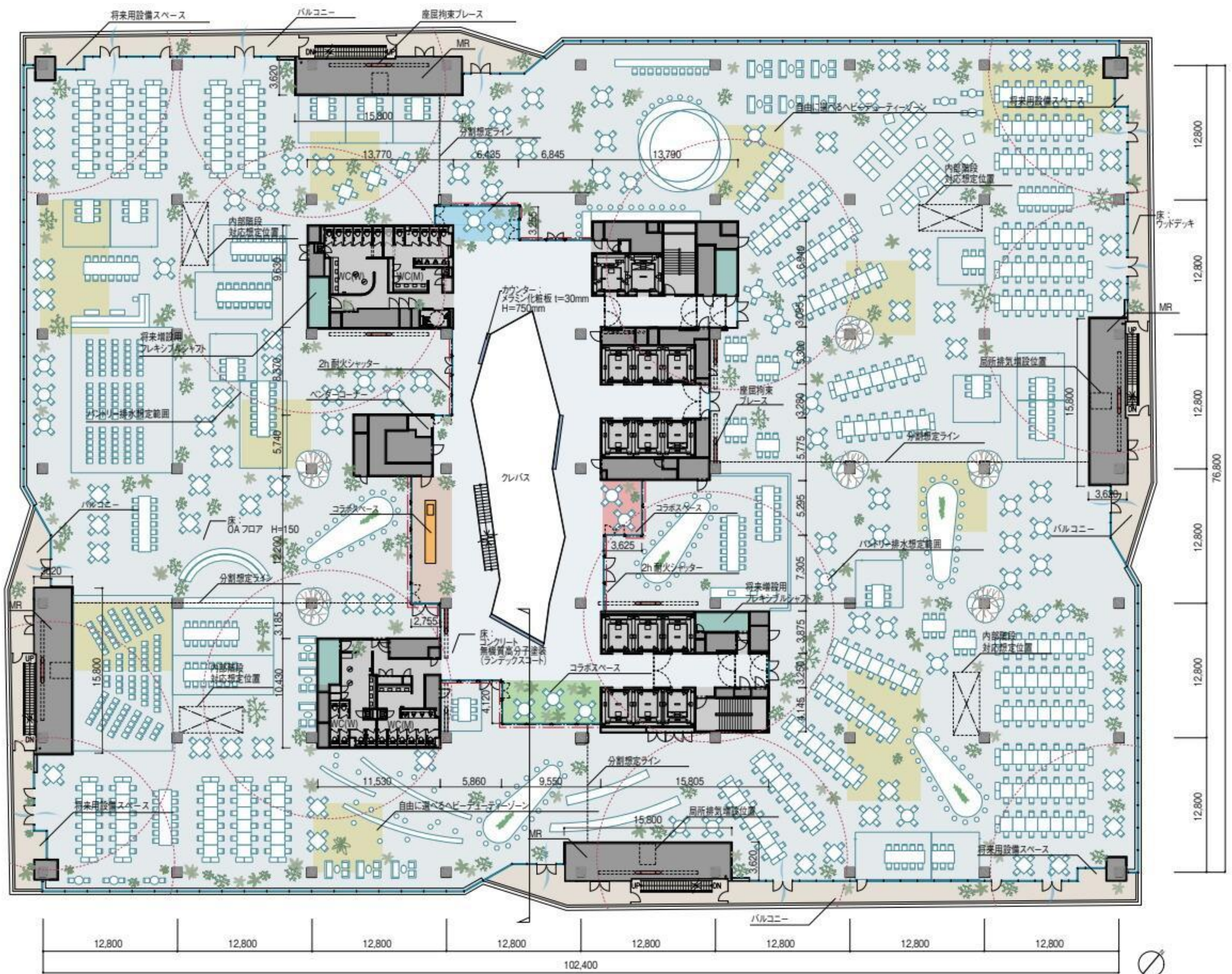
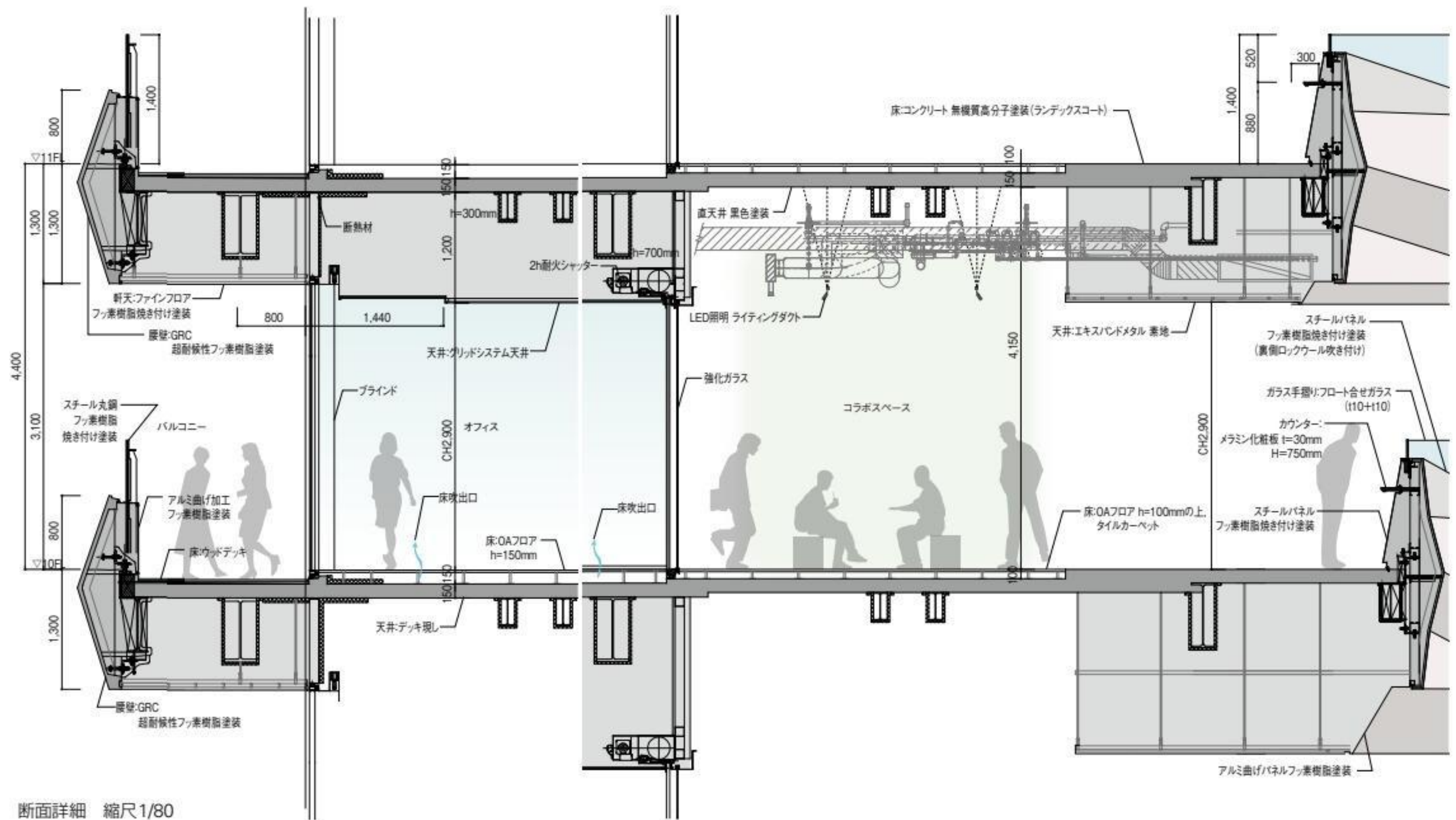
ウォーカブルなまちづくりへ─ミチノテラス豊洲─

水と緑の環境に調和し次世代都市実現に向けたまちづくりが加速する東京ベイエリア．都心と臨海副都心を結ぶ環状2号線と，新交通ゆりかもめが交差する「市場前」駅前に，新しい地域の核「ミチノテラス豊洲」がある．オフィス（メブクス豊洲）・ホテル（ラビスタ東京ベイ）・店舗に加えて，東京BRT・空港バスが乗入れ，駅，豊洲市場，水辺の豊洲ぐるり公園が，デッキおよびオープンスペースで繋がる交通結節点（豊洲MiCHiの駅）を形成，ウォーカブルなまちの顔，起点となる．15分内に都心や生活に必要な施設に徒歩や自転車でアクセスでき，多様な働き方，過ごし方，交流と賑わいの場を提供し，まちのコミュニティを育み，活力あるまちづくりを促進する．豊洲スマートシティ（国交省先行モデルプロジェクト）を牽引する拠点として，地域冷暖房施設やエネルギー融通，インクルーシブナビゲーションシステム，店舗・交通・防災情報を発信するデジタルサイネージをはじめ，まちの活動や暮らしの質を高めるデジタル技術・サービスを実装する．地域と共に，豊洲の個性，水辺や食文化の発信，多様な生活シーンが混ざり合い，新たな都市の暮らしが実現するミクストユースのまちづくりを目指す．　（國嶋匡＋丸山柚香／清水建設）

設計施工　清水建設
建築面積　10,534.63m²
延床面積　88,174.29m²
階数　地上12階　塔屋1階
構造　鉄骨造（柱CFT）　免震構造
工期　2019年4月〜2021年8月
撮影　新建築写真部　*エスエス（特記除く）
（データシート219頁）

メブクス豊洲と隣接するホテルを繋ぐデッキ．今後は地域に開放され，イベントなど開催が計画される．デッキ下はBRTの発着地となる交通広場．

2階平面　縮尺1/1,500

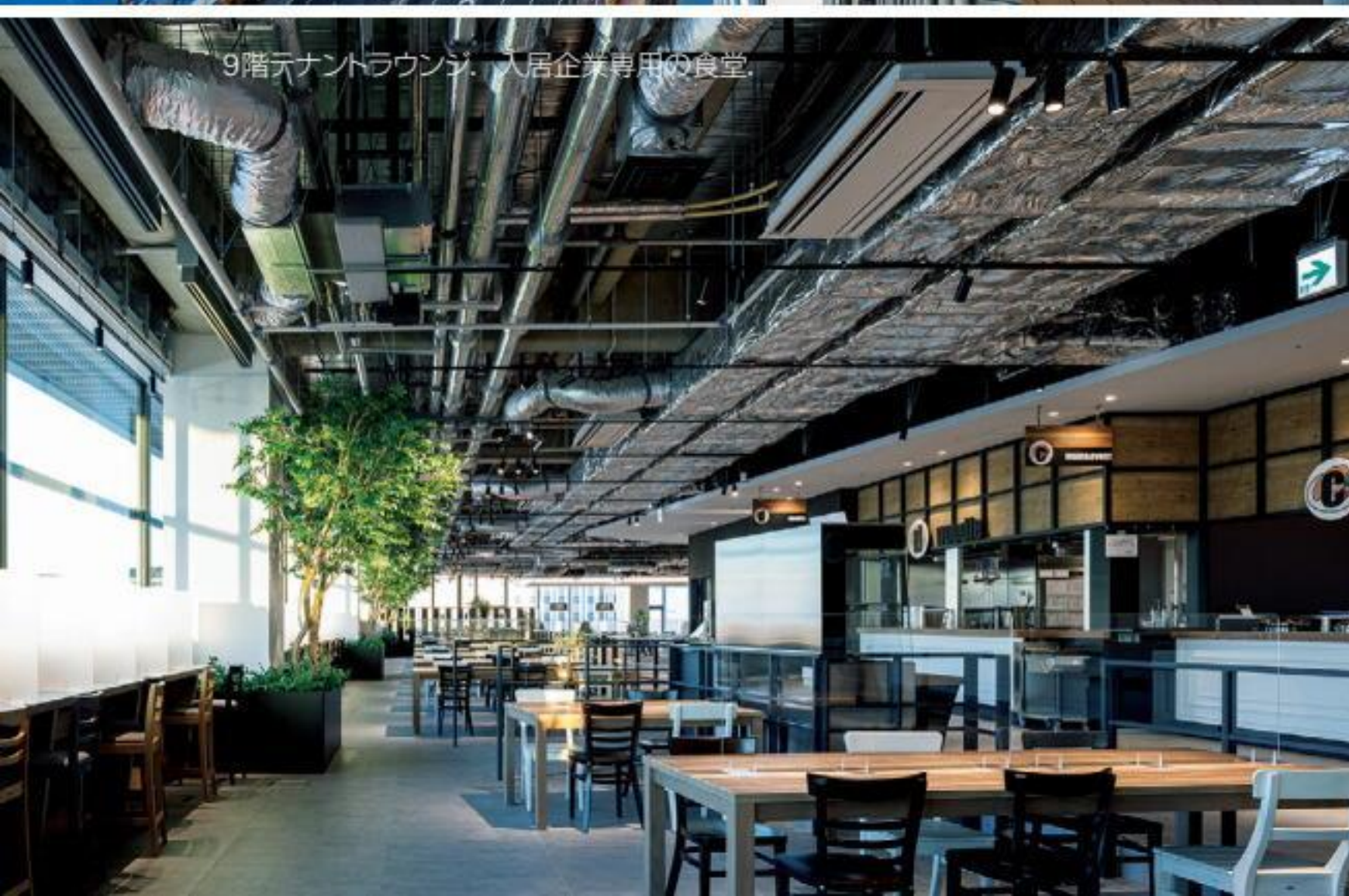
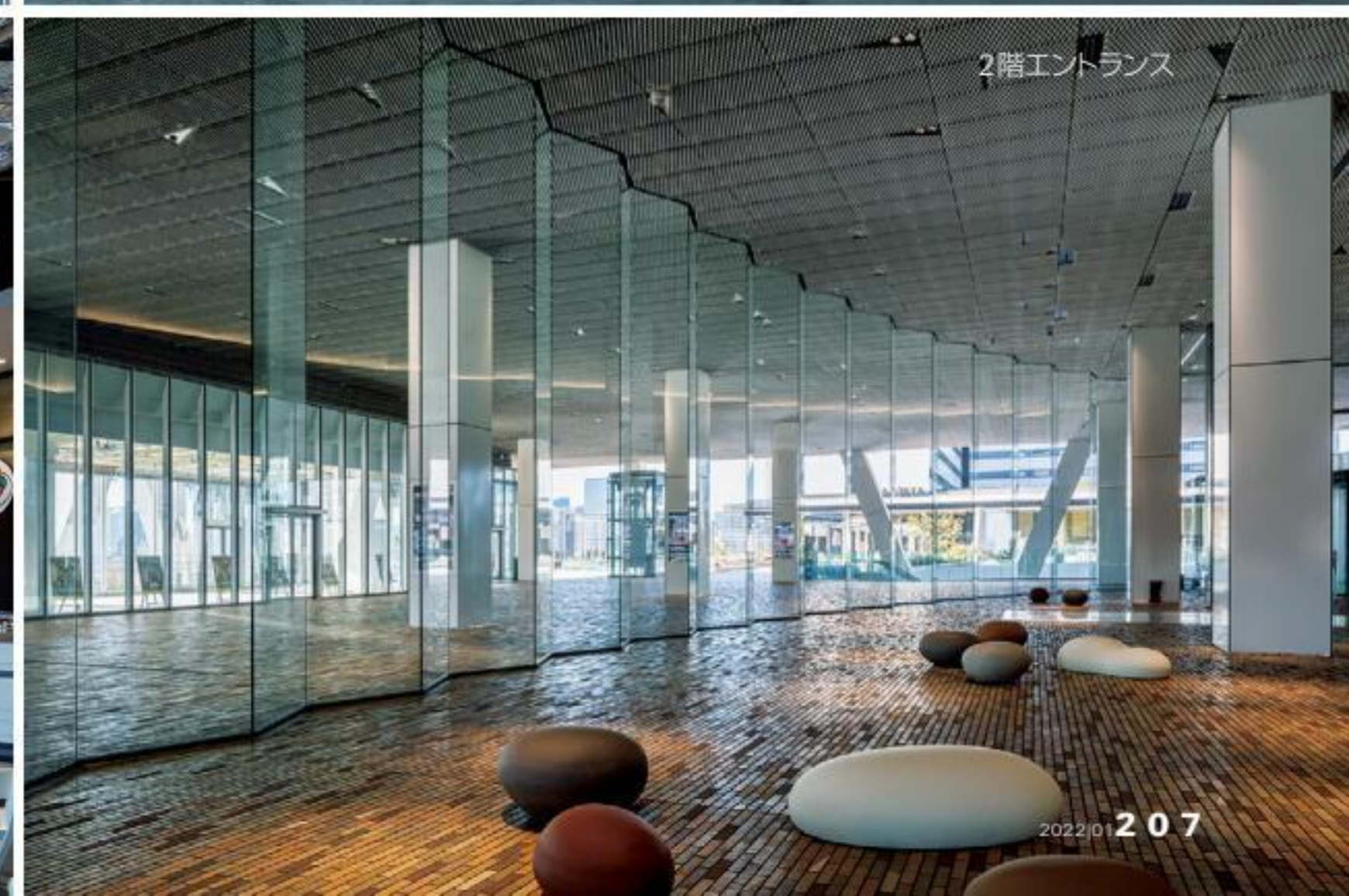
豊洲MiCHiの駅

憩い・交流，休憩，情報発信，災害時対応の機能を備えた“都市型道の駅”．自転車を含む多様なモビリティの交通拠点で，デッキ広場など歩行者のための施設を立体的に整備，移動型店舗サービスの導入など来街者の利便性向上と賑わい創出を図る．　（丸山柚香／清水建設）

断面　1/1,600

基準階平面　1/600　6,561.97m²
フロア面積は1,985坪，6,561.97m²（延床面積）柱スパンは12,800mm，インテリアは想定のもの．

断面詳細　縮尺1/80

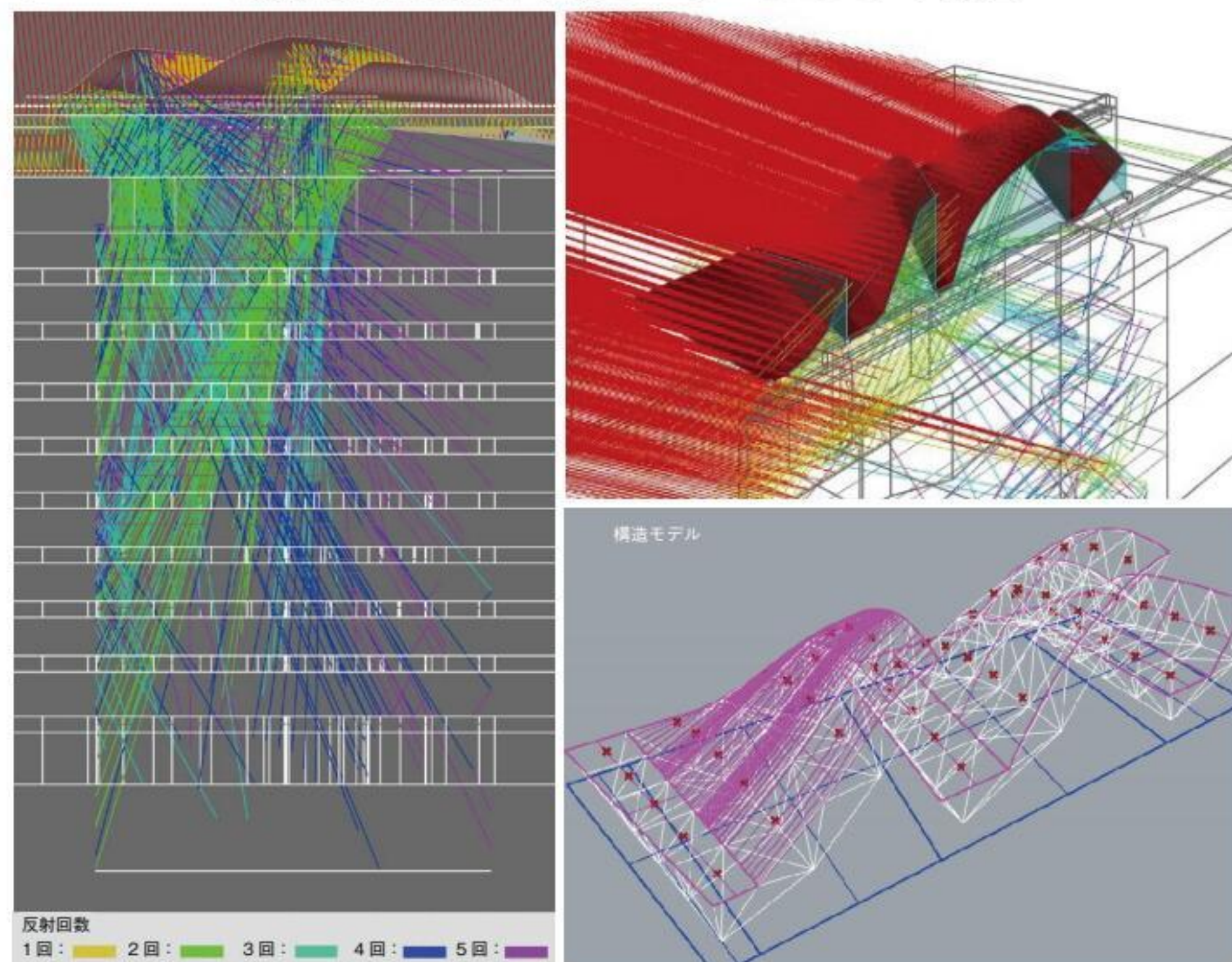
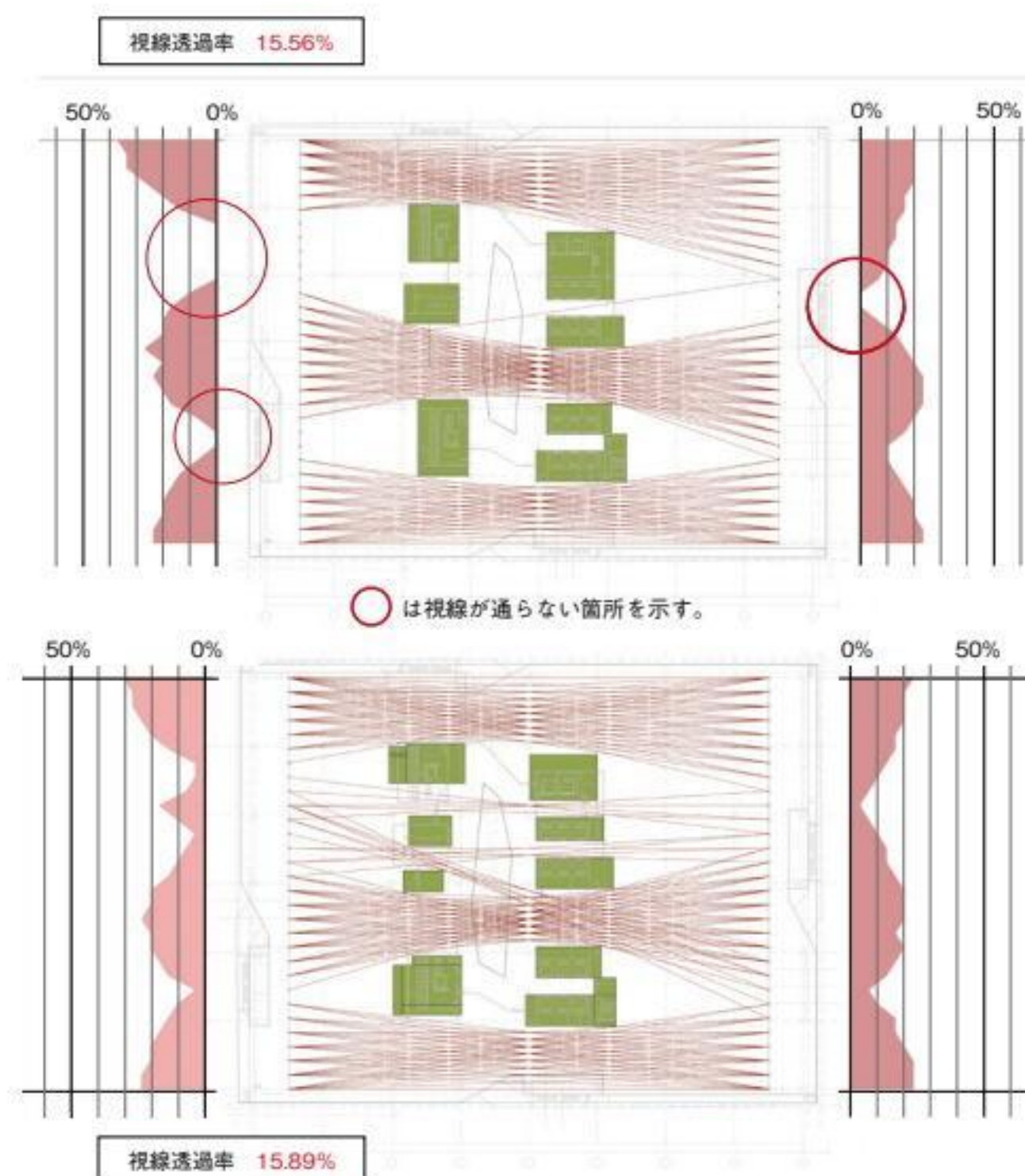
10階，基準階フロアのテナント部．柱スパン12,800mm，天井高は2,900mmのワークスペースは，広い開口部により自然採光を取り込む．天井面に分散設置されたファンコイルと湿度調整された外気の床吹き出しにより，室内温熱環境を調整．全てのテナント部には野外テラスとバルコニーを設置し，避難ルートも兼用する．

11階バルコニー．くの字の断面は日射遮蔽とビル風を軽減する

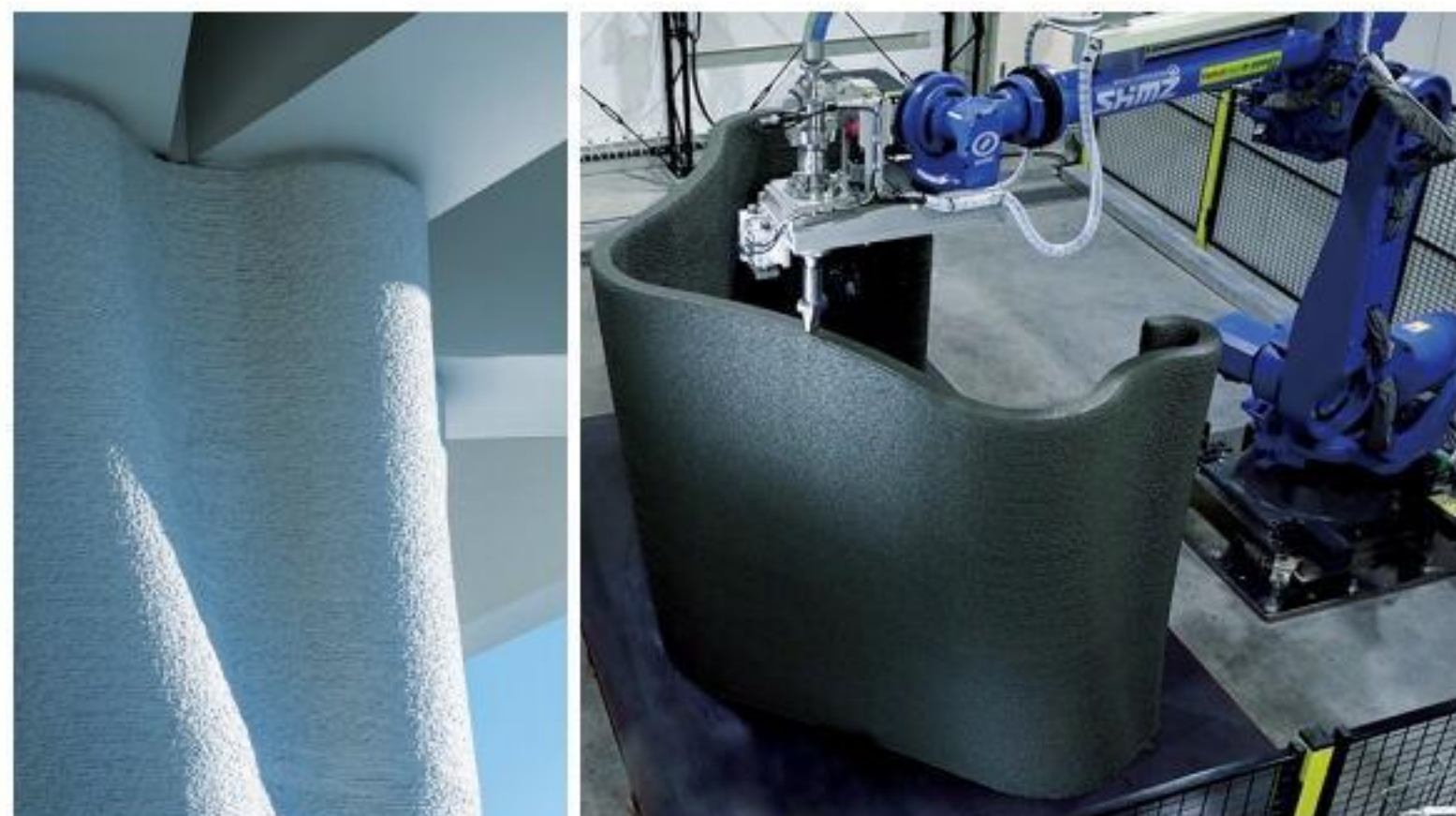
11階ハイポテンシャルフロア．梁下は3,800mm（一部6,000mm）床荷重1,000kg/m²対応のスケルトン天井のワークスペース．

9階テナントラウンジ．入居企業専用の食堂．

2階エントランス

3階より見る．外周部からオフセットした分散コアの配置によりテナント間の視線透過率を高める．コラボスペースをフロア内部ではなく各階の外部に設置することで，他企業との交流を促す．

10階より見る．清水建設が開発している「自律配送ロボット」．DX-Coreによりエレベータや自動ドアを連携させ，館内の荷物の配送を無人化する．

Shimz DDE＊を活用した吹き抜けパネルシュミレーションとコア配置

自然光を導くクレバスの実現
熱負荷の大きい直射光をカットして，間接光と反射光を取り込むトップライト形状と配置．屋根とトップライト形状は，年間を通じて間接光をとり入れることのできる角度と，光を反射させながら下部へと導くクレバス側面の多面体のパネル形状を光量のシミュレーションにより決定した．トップライトの形状は約40万通りの形状から，年間の平均照度が高い形状を導いた．
＊Shimz DDE…Shimz Digital Desgin Enhancement platformの略称．
コンピュテーショナルデザインのための清水建設独自のプラットフォーム．

視線が抜ける分散アイランドコア
ワークプレイスの端々迄視線が抜けるコア配置を，コンピューテーショナルデザインを活用し，検証している．オフィスのどこにいてもクレバスを介して視認性の高いコミュニケーションを誘発する空間を目指した．

ダイアゴナルプレストレスコンクリート構造と「LACTM」を用いた柱型枠

1階交通広場．3方向に交差するPC鋼線，鉄筋，ハンチの複雑な納まりをBIMにより可視化した．

ラクツムを用いた3Dプリンティング型枠
デッキを支える柱の型枠は3Dプリンターを活用．約W2m×H4.5mの有機的かつシームレスな柱型枠は設計BIMデータを活用し製作している．

「DX-Core」の導入

建物向けのOSであるDX-Coreは，ビルの各所にある建築設備やIoTデバイス等を接続し，各デバイスやアプリケーションを容易に連携できる．ロボットと建築設備の連携や顔認証と入退管理システムを連携させたゲートの解錠なども可能．

デジタルの活用
これまで独立していた多様なソフトの機能をひとつのプラットフォーム（Rhinoceros & Grasshopper）に統合・集約し，企画設計時からシミュレーション，プレゼンテーション，図面化までアルゴリズムを駆使したプログラミングによる新たなデザインアプローチを行った．更に構造や環境シミュレーションデータは施工や新たなファブリケーション技術への連携に利用し，デザインとエンジニアリングの高度な融合に活用している．
メブクス豊洲を含めた「ミチノテラス豊洲」では「DX-Core」と名付けたバージョンアップ可能な「建物OS」の導入を図り，空調，照明，カメラ（位置情報），ELVや搬送ロボットといったさまざまなIoT機器を一括管理する．運用により得られたエネルギー，人流，物流などの情報は，今後のリアルなまちづくりに展開するとともに，将来的には街区全体を管理できる「都市OS」と連動させ，スマートシティの基盤として進化させていく．　（垣中智博＋竹内萌／清水建設）

八戸市美術館(本文70頁)

●案内図は新建築Onlineへ
http://bit.ly/sk2201_map

所在地　青森県八戸市番町10-4
主要用途　美術館
建主　八戸市
工事担当／八戸市建設部建築住宅課
吉延詳朋　重文字洸介　鈴木悠真
木村響　山田大貴

設計

設計コンセプト　西澤徹夫　浅子佳英　森純平
建築　西澤徹夫建築事務所・タカバンスタジオ(現・PRINT AND BUILD)設計共同体
担当／西澤徹夫　浅子佳英　森純平
宮武壮太郎　小泉立
構造　オーノJAPAN
担当／大野博史　藤本智
海老澤考秀*(*元所員)
設備　森村設計
担当／吉田崇　川口智之　水谷貴俊
三野誠
監理　西澤徹夫建築事務所・タカバンスタジオ(現・PRINT AND BUILD)設計共同体
担当／西澤徹夫　浅子佳英
宮武壮太郎　小泉立
原井喜雄(石川設計)
橋本徳浩(橋本設計)
大瀧英知　大石佳奈(総合設計研究所)
家具　西澤徹夫建築事務所・タカバンスタジオ(現・PRINT AND BUILD)設計共同体
サイン　ラボラトリーズ
担当／加藤賢策　奥田奈保子
岸田紘之*
カーテン　安東陽子デザイン
担当／安東陽子　山口かすみ
照明アドバイザー　飯塚千恵里照明設計事務所
担当／飯塚千恵里
音響アドバイザー　森純平　土倉律子
防災　安宅防災設計
担当／鈴木貴良　白谷健太郎
積算　アーキ・ピーアンドシー
担当／上木貴博

施工

建築　鴻池組・田名部組・東復建設 特定建設工事共同企業体
担当／佐藤正　熊田健二　佐々木浩貴
若林克明
設備(電気)　ユアテック・溝口電気 特定建設工事共同企業体
担当／川戸良訓　上村洋一
設備(機械)　ダイダン・サカモト・葵 特定建設工事共体
担当／城健二　野村大貴　春日光浩
平野喜代勝
外構　穂積建設工業
担当／赤坂謙太

規模

敷地面積　6,732.14m²
建築面積　3,080.21m²
延床面積　4,844.95m²
1階　2,910.86m²／2階　1,451.56m²
3階　482.53m²
建蔽率　45.75%(許容：100%)
容積率　68.12%(許容：600%)
階数　地下3階

寸法

最高高　19,120mm
軒高　18,580mm
階高　西側諸室1階：5,100mm／西側諸室2階：4,800mm／西側諸室3階：4,200mm／東側諸室1階：6,900mm／東側諸室2階:6,600mm／東側諸室3階：4,800mm
天井高　ジャイアントルーム：17,630mm／ホワイトキューブ：5,000mm／ブラックキューブ・コレクションラボ・ワークショップルーム・事務室：3,500mm／ティールーム:7,800mm／スタジオ：9,670mm／ギャラリー1，2：3,700mm
主なスパン　45,000×18,000mm

敷地条件

地域地区　商業地域
道路幅員　西15m　南8.5m
駐車台数　障がい者用：2台　荷捌用：2台　公用車・来客用：4台　大型車両用：2台

構造

主体構造　鉄骨造
杭・基礎　杭基礎

設備

空調設備
空調方式　空調機　躯体蓄熱床輻射冷暖房　ファンコイルユニット　個別空調方式
熱源　空冷HPチラー　プレート熱交換器　電気式マルチエアコン
衛生設備
給水　直結増圧給水方式
給湯　電気温水器
排水　自然流下方式
電気設備
受電方式　高圧受電(架空引込)方式
設備容量　1,200kVA
予備電源　非常用ディーゼル発電機 200kVA
防災設備
消火　屋内消火栓　ハロン1301消火設備
排煙　階避難安全検証法
その他　非常用照明設備　誘導灯設備　非常放送設備　自動火災報知設備
昇降機　乗用エレベータ(11人乗り)×1台
荷物用エレベータ(積載3,500kg)×1台

工程

設計期間　2017年3月〜2019年1月
施工期間　本棟：2019年4月〜2020年12月
外構：2021年4月〜9月

工事費

建築　2,206,760,000円
空調衛生　688,558,000円
電気　400,318,000円
外構　234,520,000円
総工費　3,530,156,000円

外部仕上げ

屋根　超速硬化ウレタン塗膜防水(ダイフレックス)
外壁　押出成形セメント板(アイカテック建材：メースアートパネル)　カラーガルバリウム鋼板 底目地式特殊平滑葺き(EROOF：プロムナールーフT)
開口部　アルミ製ガラススクリーン(三協立山：ARM-S)
外構　インターロッキング(日本興業：ランドサーマスエコロアクア)

内部仕上げ

ジャイアントルーム
床　短繊維補強コンクリート+防塵塗装
壁　1階：合板 t=15mm+PB t=12.5mm×2
2階：グラスウールボード t=25mm+不燃クロス(I.S.T：イストフロン不燃壁塗装クロス)
天井　グラスウール天井板(マグ・イゾベール：イアルマグフォーン)　岩綿吸音板 t=9mm
ホワイトキューブ
床　オーク複合フローリング t=15mm(テーオーフローリング)
壁　合板 t=12mm×2+PB t=12.5mm EP
天井　グリッド天井 St L-50×50×4mm
ブラックキューブ
床　ループパイルタイルカーペット(東リ：GA-100)
壁　合板 t=15mm+PB t=12.5mm×2 EP 一部，グラスウールボード t=50mm+有孔フレキシブルボード t=6mm EP
天井　有孔折板ルーバー
コレクションラボ
床　ループパイルタイルカーペット(東リ：GA-100)
壁　合板 t=15mm+PB t=12.5mm×2 EP
天井　PB t=9.5mm EP
ギャラリー
床　モルタル金ゴテ+防塵塗装
壁　合板 t=15mm+PB t=12.5mm×2 EP
天井　有孔折板ルーバー
スタジオ
床　単板積層フローリング t=15mm(テーオーフローリング)
壁　ラワン合板 t=12mm+難燃ラワン合板 t=12mm EP
天井　直天井　ぶどう棚：St C-100×50×20×2.3mm
ワークショップルーム
床　チークパーケットフローリング t=15mm(テーオーフローリング)
壁　PB t=12.5mm×2 EP
天井　岩綿吸音板 t=9mm
アトリエ
床　ビニル床シート(東リ：フロアリューム)
壁　合板 t=12mm+PB t=12.5mm EP　ホワイトアッシュ竪見切+白色ふき取り塗装
天井　直天井
収蔵庫
床　鋼製二重床+不透湿処理合板 t=15mm+ブナフローリング t=15mm(クマヒラ)
壁　不透湿処理合板 t=12mm+無機質系中性調質パネル t=8mm(クマヒラ)
天井　不透湿処理合板 t=12mm+岩綿吸音板 t=9mm(クマヒラ)

利用案内

開館時間　10:00〜19:00
休館日　火曜日
入館料　無料　展覧会料金別途
問合せ　tel. 0178-45-8338

西澤徹夫(にしざわ・てつお)
1974年京都府生まれ／1998年東京藝術大学美術学部建築学科卒業／2000年同大学美術研究科建築専攻修士過程修了／2000〜05年青木淳建築計画事務所／2007年〜西澤徹夫建築事務所／現在，東京藝術大学，日本女子大学，東京理科大学非常勤講師

浅子佳英(あさこ・よしひで)
1972年兵庫県生まれ／2010年東浩紀と共にコンテクチュアズ(現・ゲンロン)設立，2012年退社／2007年タカバンスタジオ設立／2021年出版機能を追加し，PRINT AND BUILD創立

森純平(もり・じゅんぺい)
1985年マレーシア生まれ／2008年東京藝術大学美術学部建築学科卒業／2011年同大学大学院美術研究科建築専攻修士過程修了／2015年〜一般社団法人PAIR代表／2017年〜東京藝術大学美術学部建築科助教／2020年〜インテロバング代表／現在，PARADISE AIR ディレクター，たいけん美じゅつ場VIVA共同ディレクター

宮武壮太郎(みやたけ・そうたろう)
1991年香川県生まれ／2014年慶応義塾大学理工学部卒業／2017年同大学大学院理工学研究科修士課程修了／2015〜16年ゲールアーキテクツ／2017年〜西澤徹夫建築事務所／2021年〜東京大学生産技術研究所特任研究員

小泉立(こいずみ・りゅう)
1993年神奈川県生まれ／2017年東京藝術大学美術学部建築学科卒業／2017年〜PRINT AND BUILD(旧・タカバンスタジオ)

提供：西澤徹夫建築事務所・タカバンスタジオ設計共同体

建設中の外観．躯体には剛接合のブレース構造を採用し，鉄骨メンバーを小さく抑えつつ高い剛性を実現している．右手に移転前の旧青森銀行八戸支店．

ボッコーニ大学新キャンパス（本文88頁）

●案内図は新建築Onlineへ
http://bit.ly/sk2201_map

所在地 Via Roberto Sarfatti, 25, 20100 Milano, Italy
主要用途 大学
建主 Università Commerciale Luigi Bocconi

設計・監理
建築 SANAA
担当／妹島和世 西沢立衛 棚瀬純孝
Francesca Singer Nicolo Bertino
Lucy Styles Enrico Armellin
アーキテクトインレコード
Costa Zanibelli Associati
ローカルアーキテクト
Progetto CMR Engineering Integrated Services
都市計画 FOAFederico Oliva Associati
構造コンセプト
SAPS / Mutsuro Sasaki and Partners
構造 Studio di Ingegneria Pereira
技術協力 Politecnico di Milano
設備 Advanced Engineering
防災 Ing. Silvestre Mistretta
安全 Soluzioni

施工
建築 Grassi & Cresp＋Percassi
設備・空調・電気 Bouygues E & S
外構 Riva Giardini
ガラスおよびアルミカーテンウォール Gualin＋Shuco
中庭アルミ庇 Tensoforma
アルミエキスパンドメタル Metalltech

規模
敷地面積 35,700m^2
建築面積 教育棟：8,500m^2
レクリエーション棟：3,500m^2
延床面積 65,000m^2
建蔽率 33.6%
容積率 182%
階数 地下1階 地上4階 一部，5階

寸法
最高高 21,800mm
軒高 20,650mm
階高 マスター棟・エクゼクティブ棟1，2，3階：5,300mm／オフィス棟1階：5,300mm／オフィス棟2～5階：3,950mm
天井高 マスター棟・エクゼクティブ棟1，2，3階：4,450mm／オフィス棟1階：4,450mm／オフィス棟2～5階：3,200mm

敷地条件
道路幅員 東約8m 西約43m 南約39m 北約26m
駐車台数 87台（他，モーターバイク：7台）

構造
主体構造 鉄骨柱＋鉄筋コンクリート造
杭・基礎 直接基礎

設備
環境配慮技術
LEED Platinum認証
空調設備
空調方式 床輻射冷暖房＋AHU方式
熱源 地熱
衛生設備
給水 公共水道直結方式
給湯 局所給湯方式
排水 公共下水道直結方式
電気設備
受電方式 キュービクル高電圧受電方式
設備容量 2,000kW
予備電源 太陽光発電＋蓄電池（1,200kW）
防災設備
消火 連結送水栓設備
排煙 機械排煙
昇降機 （Meo＋Rec）×24台，（Dorms）×8台 小荷物専用昇降機×1台 車椅子昇降機×1台
特殊設備 太陽光発電設備

工程
設計期間 2013年7月～2016年3月
施工期間 マスター棟・エクゼクティブ棟・オフィス棟：2017年4月～2019年11月
すべて：2017年7月～2020年10月

外部仕上げ
屋根 シート防水断熱工法
外壁 アルミエキスパンドメタル 断熱ガラス・断熱アルミカーテンウォール
外構 植栽：プラタナス，エンジュ，マメナシ，マンサク，イチョウ，トネリコ，ロウバイ，セイヨウハズナオウ等 舗床：花崗岩ピンコロ敷き込み

内部仕上げ
エントランス
天井 コンクリート打ち放し 一部，吸音天井
壁 PB 塗装仕上げ
床 ライムストーン 磨き仕上げ
教室
天井 コンクリート打ち放し 一部，吸音天井
壁 PB t=12.5+12.5mm 塗装仕上げ
床 鋼製上げ床＋断熱パネル＋輻射冷暖房＋ファイバープレート＋ナチュラルオークフローリング

利用案内
問合せ Università Commerciale Luigi Bocconi
tel. +39-02-5836-3434

妹島和世（せじま・かずよ）
1956年茨城県生まれ／1981年日本女子大学大学院修了後，伊東豊雄建築設計事務所入所／1987年妹島和世建築設計事務所設立／1995年西沢立衛とSANAA設立／2015年～ミラノ工科大学教授／2016～19年ウィーン応用芸術大学教授／2017年～横浜国立大学大学院建築都市スクールY-GSA教授

西沢立衛（にしざわ・りゅうえ）
1966年東京都生まれ／1990年横浜国立大学大学院修士課程修了後，妹島和世建築設計事務所入所／1995年妹島和世と共にSANAA設立／1997年西沢立衛建築設計事務所設立／現在，横浜国立大学大学院建築都市スクールY-GSA教授

ラ・サマリテーヌ（本文102頁）

●案内図は新建築Onlineへ
http://bit.ly/sk2201_map

所在地 9 Rue de la Monnaie, 75001 Paris, France
主要用途 百貨店 オフィス 公団住宅 保育園 ホテル
建主 Grands Magasins de la Samaritaine LVHM Hotel Management（Cheval Blanc Paris） DFS（Department Store）

設計・監理
建築 SANAA
担当／妹島和世 西沢立衛 棚瀬純孝
設計期間担当／Loic Engelhard*
長谷川高之 降矢宣幸
Léa Hippolyte* Marc Dujon*
Bradley Fraser* 小野寺匠吾*
Arrate Arizaga Villalba*
Corinne Bokufa* Eloka Som*
監理期間担当／Lucy Styles
亀井由紀子* Margot Aurensan
（*元所員）
ローカルアーキテクト
SRA Architectes / Jean Rouit
Clémence Saubot
担当／Joëlle Agarande
Alexis Arthaud Tamara Bissat
Corentin Buzot Daniel Cano
Évelyne Feltin Véronique Garin
Hugues Girardin Sylvestre Gulacsy
Sophie Hosteing Étienne Jacquin
Anna Malcoëffe Jérôme Quiévreux
Baptiste Rouit David Vaughan
Charlotte Vadot Richard Voilquin
Miriam Walbaum
歴史建築家
Lagneau Archiectes / Jean-François Lagneau, Xavier Lagneau
担当／Patrice Girard
Jean-Jacques Brunie
住宅・保育施設
Francois Brugel Architectes Associés / François Brugel, Victor de Almeida
担当／Clothilde Dolz
Julie Hermanowicz
Camille Quilichini Gordon Wourms
ホテル・ホテルインテリア
Peter Marino and OAL
Masion Eduard Francois
百貨店インテリア
Yabu Pushelberg
Agence de Creation Malherbe Paris
Studio Cigne
構造 RFR GO＋
AEDIS Ingénierie
EGIS Batiments
ファサード RFR
設備 Barbanel
施工マネジメント EGIS Batiments
照明 8-18 Lumiere
音響 Acoustique & Conseil
環境 Le Sommer Environnement
地盤 Burgeap
積算 AE75
EGIS Batiments

施工
建築 Vinci Construction France
ファサード Frener＋Reifer
鉄骨 SMB-CCS
ガラス屋根 Viry
建築装飾修復 Socra
アイアンワーク修復 AOF
漆喰修復 Atelier Bouvier
ガラス床 Atelier Emmanuel Barrois

規模
敷地面積 9,850m^2
建築面積 9,800m^2
延床面積 65,120m^2
建蔽率 99.5%
容積率 662%
階数 地下3階 地上8階 塔屋1階

寸法
■リヴォリ棟
最高高 30,260mm
軒高 28,310mm
階高 地下3階：4,000mm／地下2階：3,360mm／地下1階：4,470mm／1階：4,710mm／2階：3,320mm／3～6階：3,250mm／8階：3,897mm
天井高 3～5階オフィス：2,595mm
主なスパン 5,400×11,460mm

敷地条件
道路幅員 東約10m 西約8m 南約27m 北約21m

構造
主体構造 鉄骨造 一部，鉄筋コンクリート造
杭・基礎 直接基礎

設備
環境配慮技術
公団住宅：Patrimoine Habitat & Environnement Effinergie認証
百貨店・ホテル・託児所・オフィス：高環境品質（HQE）およびLEEDゴールド認証
百貨店・ホテル・オフィス：BREEAMエクセレント評価
空調設備
空調方式 オフィス部分：天井輻射冷暖房
百貨店部分：エアハンドリングユニット ファンコイルユニット
熱源 地域暖房ネットワーク 地熱熱源
衛生設備
給水 公共水道直結方式
給湯 局所電気式給湯方式
排水 公共下水道直結方式
電気設備
受電方式 高電圧受電方式 20kV
設備容量 3,200kVA
契約電力 2,500kVA
予備電源 自家発電
防災設備
消火 連結送水栓設備
排煙 機械排煙
その他 スプリンクラー設備
昇降機 エレベータ×29台 エスカレータ×24台 トラベレーター×2台
特殊設備 新鮮空気熱交換システム 190,000m^3/h

工程
設計期間 2009年1月～2016年9月
施工期間 2015年6月～2021年6月

外部仕上げ
■リヴォリ棟
屋根 亜鉛鉄板葺き
外壁 曲げ合わせガラス ステンレス持ち出し金物（ガラススキン） シルクスクリーンプリントガラス 断熱ガラス＋耐火ガラス・スチールカーテンウォール
外構 中庭植栽：イチョウ，ウメ，サンザシ，オスマンサス等 舗床：花崗岩敷き込み
■ポンヌフ棟
屋根 亜鉛鉄板葺き 自動日射調整ガラス（ヴェリエール）

外壁　スチールサッシ・クリアガラス（改修）＋アルミ断熱サッシ・断熱ガラス　スチールパネル＋七宝パネル（修復）
外構　鋪床：花崗岩敷き込み

内部仕上げ

■リヴォリ棟

アンブレラ

床　コンクリート磨き出し
壁　スチールカーテンウォール　Low-E断熱ガラス8（A18）8＋8mm
天井　ガラス屋根：Low-E断熱ガラス8（A18）6＋6mm

■ポンヌフ棟

ドーム

床　モザイクタイル　テラゾー磨き床
壁　アルミパネル（腰壁部分）
天井　ガラス屋根：Low-E断熱ガラス6（A16）6＋6mm

ヴェリエール

床　ガラスブロック浮床　テラゾー磨き床
壁　修復テラコッタ　セラミックタイル　モザイクタイル
天井　ガラス屋根：自動日射調整断熱ガラス

利用案内

営業時間　10:00～20:00
定休日　なし
問合せ　tel. +33 1 88 88 60 00

撮影／Jared Chulski

ポンヌフ棟のヴェリエールを見上げる.

大阪中之島美術館（本文112頁）

●案内図は新建築Onlineへ
http://bit.ly/sk2201_map

所在地　大阪府大阪市北区中之島4-3-1
主要用途　美術館
建主　大阪市

設計

建築　**遠藤克彦建築研究所**
担当／遠藤克彦　外﨑晃洋　木村史聴　持永篤史　樋口永
大阪市都市整備局
設計協力　東畑建築事務所
担当／近藤一雄　中川千裕　杉山美納　立松裕規　土坂一平
構造　佐藤淳構造設計事務所
担当／佐藤淳　荒木美香*　本田幾久世　三原悠子*（*元所員）
構造協力　tmsd萬田隆構造設計事務所
担当／萬田隆　岡村昭信　小倉直幸*
設備　東畑建築事務所
担当／永田久子　藤田直丈　杉田雄希
コモド設備計画
担当／山下直久　上野詩織
ランドスケープ　スタジオテラ
担当／石井秀幸　野田亜木子　久保沙織*
外構（土木）　内外エンジニアリング 大阪支社
担当／梶間義弘
防災　明野設備研究所
担当／吉田俊之
積算　ACE積算
担当／秋元雄二　古宮正貴*　古宮淑裕*
サイン　direction Q
担当／大西隆介　椙元勇季
家具（パッサージュ）
藤森泰司アトリエ
担当／藤森泰司　石橋亜紀　小久保竜季　千脇花純
家具（展示室）　遠藤克彦建築研究所
担当／遠藤克彦　外﨑晃洋　水川裕介
監理　建築　遠藤克彦建築研究所
担当／遠藤克彦　外﨑晃洋　持永篤史　水川裕介　岸本祐衣
大阪市都市整備局
東畑建築事務所
担当／山本森二　久保喜久男　中川千裕　杉山美納
構造　佐藤淳構造設計事務所
担当／佐藤淳　荒木美香*　本田幾久世
tmsd萬田隆構造設計事務所
担当／萬田隆　西野祐介
設備　東畑建築事務所
担当／藤田直丈　舩本三喜大　澤田宗久　杉田雄希
ランドスケープ　スタジオテラ
担当／石井秀幸　野田亜木子　胡博文

施工

建築　錢高・大鉄・藤木特定建設工事共同企業体
担当／柳田茂　井上克三　井関将人　塚本孝治　田村直哉　藤原翔太　千布泰史　檜垣真由　吉原実南　清水俊喬
空調・衛生　菱和・西原特定建設工事共同企業体
担当／山崎充博　高岡俊之　米田誠秀　村﨑耕一
電気　浅海電気・三宝電機特定建設工事共同企業体
担当／中尾龍介　東秀憲　山崎賢　陽川武洋
昇降機　三菱電機ビルテクノサービス
日本エレベーター製造
担当／天羽淳哉
ガス　大阪ガス
担当／亀井陽介
家具（パッサージュ）　カンディハウス
担当／奥平光　佐藤芙季子　横山一雄　高橋忠利

規模

敷地面積　12,870.54m^2
建築面積　6,680.56m^2
延床面積　20,012.43m^2
ピット階　80.00m^2
1階　6,420.98m^2 ／2階　2,636.72m^2
3階　3,454.15m^2 ／4階　3,578.23m^2
5階　3,714.76m^2
塔屋階　127.59m^2
建蔽率　51.91%（許容：100%）
容積率　140.84%（許容：654.97%）
階数　地上5階

寸法

最高高　36,900mm
軒高　34,300mm
階高　1階：5,600mm ／2階：6,600mm ／3階：6,600mm ／4階：6,600mm ／5階：8,550mm
天井高　1階パッサージュ：3,400mm，10,000mm，23,200mm ／2階パッサージュ：4,400mm，17,600mm ／4階パッサージュ：4,400mm，12,100mm ／5階パッサージュ：5,500mm ／講堂：6,700mm ／4階展示室：4,000mm ／5階展示室：6,000mm

敷地条件

地域地区　商業地域　防火地域　特定都市再生緊急整備地域　駐車場整備地区　埋蔵文化財包蔵地
道路幅員　東14.55m　南6.00m　北26.38～28.56m
駐車台数　72台

構造

主体構造　鉄骨造　基礎免震
杭・基礎　場所打ち鋼管コンクリート杭

設備

環境配慮技術

河川水熱を利用した地域冷暖房システムの導入　熱源の多重化（地域冷暖房システム・電気・ガス＋水蓄熱槽）によるBCP対策およびBEMS等を活用した最適運転システムの構築　太陽光発電20kW　自然採光（パッサージュ）と5層吹抜空間のトップライト　二重壁構造の高断熱外壁による空調負荷低減及びエネルギーウォールとしての活用　雨水を利用した外構植栽への散水システムの導入　展示室を含めた全館LED照明の採用　層流ファンによる外気流入抑制および虫侵入防止，暖房下ろしによる上下温度差の解消　人認識画像センサーによる適正な外気取入量制御
CASBEE大阪みらいSランク　BEE＝3.2
平成30年度サステナブル建築物等先導事業（省CO_2先導型）第2回採択プロジェクト

空調設備

空調方式　空調機＋単一ダクト方式　電気式パッケージエアコン＋全熱交換器　中温・低温パッケージエアコン＋乾式デシカント除湿機等
熱源　地域冷暖房システム　冷却塔一体型ガス吸収式冷温水発生機（中圧ガス）　電気式空冷ヒートポンプチラー（高効率型）　温度成層型水蓄熱槽

衛生設備

給水　受水槽＋加圧給水方式
給湯　局所給湯方式（貯湯式電気温水器）
排水　建物内：汚水・雑排水合流方式　汚水貯留槽＋ポンプアップ方式　屋外：雨水・汚水合流方式　雨水抑制層・貯留槽＋ポンプアップ方式

電気設備

受電方式　高圧6.6kV　1回線受電
設備容量　3,300kVA
契約電力　1,290kW（竣工時）
予備電源　非常用発電機設備：500kVA

防災設備

消火　スプリンクラー設備（高感度型予作動式・放水型）　屋内消火栓設備　連結送水管設備　ハロゲン化物消火設備（ハロンガス）　移動式粉末消火設備
排煙　全館避難安全検証による緩和　機械排煙　自然排煙
昇降機　人荷用（兼非常用）エレベータ（1,150kg，17人乗り）×1台，人荷用兼非常用（1,700kg 26人乗り）×1台，（1,000kg 15人乗り）×1台，（1,600kg 24人乗り）×1台　荷用エレベータ（6,000kg w＝4,500mm×d=5,200mm×h=3,800mm）×1台
エスカレータ（600形 階高13,200mm）×2台，（600形 階高6,600mm）×1台

工程

設計期間　2017年3月～2018年12月
施工期間　2019年2月～2021年6月

工事費

総施設整備費　約156億円

外部仕上げ

屋根　屋根保護防水密着断熱工法
外壁　PC版 ウォータージェット加工 含浸シリカコーティング（高橋カーテンウォール工業，OSHIROX）　ECP（アイカテック建材）
開口部　ガラスカーテンウォール（AGCガラス建材，三和タジマ）　ステンレスサッシ（三和タジマ）　スチールサッシ（日鋼サッシュ製作所）　アルミサッシ（不二サッシ）
2階屋上　屋根保護防水密着断熱工法＋石浮床舗装（土新建材）
外構　天然石（花崗岩（中国産G332））　PC平板舗装（太陽エコブロックス）　植栽（西武造園）

内部仕上げ

パッサージュ

床　天然石（1～2階：花崗岩（中国産G332）4～5階：花崗岩（インド産インドブラック））
壁・天井　化粧ルーバー（オクジュー）

展示室

床　天然木ひき板複合フローリング（4階：国産ナラ　5階：ホワイトアッシュ）（北海道パーケット工業）
壁　EP塗装
天井　ロックウール化粧吸音板（吉野石膏）

ホール

床　天然木ひき板複合フローリング（ホワイトアッシュ）（北海道パーケット工業）
壁　アルミ切板パンチングパネル
天井　EP塗装

主な使用機器

建具金物　ユニオン
展示ケース　オカムラ
展示パネル　イトーキ

妹島和世（せじま・かずよ）
西沢立衛（にしざわ・りゅうえ）
○プロフィールは211頁参照.

棚瀬純孝（たなせ・よしたか）
1970年三重県生まれ／1993年京都工芸繊維大学工芸学部造形工学科卒業／1995年同大学大学院修士課程修了／1995年～妹島和世建築設計事務所，SANAA事務所／2003年～棚瀬純孝建築設計事務所代表／2013年～SANAA事務所パートナー／2019年～大阪芸術大学非常勤講師

免震金物　パラキャップ社
照明器具　YAMAGIWA　パナソニック 他
衛生器具　TOTO
利用案内
2022年2月2日開館予定
開館時間　10:00～17:00（入場は16:30まで）
休館日　月曜日（祝日の場合は翌平日）
入館料　展覧会により異なる
問合せ　tel.06-6479-0550

遠藤克彦（えんどう・かつひこ）
1970年神奈川県生まれ／1992年武蔵工業大学（現・東京都市大学）工学部建築学科卒業／1995年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了（同大学生産技術研究所原広司研究室在籍）後，同大学院博士課程進学／1997年遠藤建築研究所設立／2007年遠藤克彦建築研究所に組織改編／現在，茨城大学大学院准教授

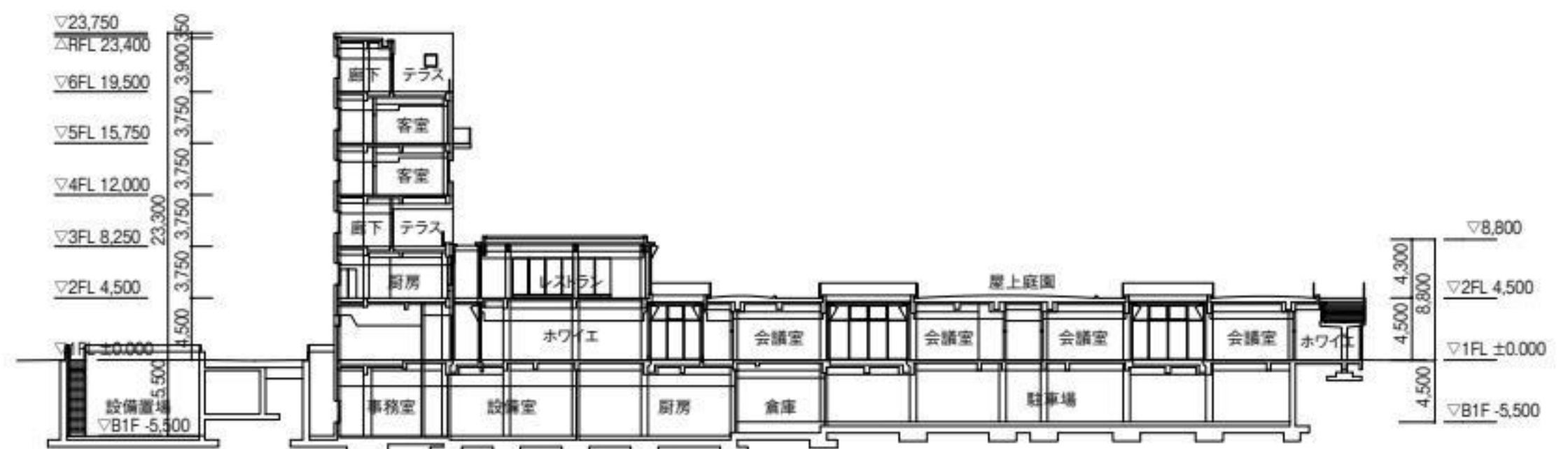
常州工学院国際学術交流センター（本文126頁）

●案内図は新建築Onlineへ
http://bit.ly/sk2201_map

所在地　中国江蘇省常州市新北区新橋鎮遼河路666号
主要用途　ホール　レストラン　宿泊施設
建主　常州工学院
設計
建築・室内設計
アトリエ・アンド・アイ 坂本一成研究室
担当／久野靖広　本橋良介*
小滝健司*　田沼大輔*　解文静（*元所員）
協力／郭屹民（東南大学）　葛明（東南大学）
華南理工大学建築設計研究院
建築担当／孫一民
陶亮　鄧芳　徐蛍（景觀）
構造担当／孫文波
王剣文　周偉星
設備担当／高飛　陳祖銘　韋桂湘
舒立帆*　舒立帆　胡文斌　呉晨晨
積算担当／周華忠
室内設計担当／姜文藝
潘健　呉宏澤　黃妃樹
構造　金箱構造設計事務所
担当／金箱温春　重田幸乃*
設備基本設計　イーエスアソシエイツ
担当／佐藤英治
監理　江蘇嘉越工程項目管理公司
規模
敷地面積　11,040m^2
建築面積　5,543m^2
延床面積　18,665m^2
地下1階　6,377m^2
1階　4,800m^2／2階　1,652m^2
3階　1,620m^2／4階　1,597m^2
5階　1,564m^2／6階　1,055m^2
階数　地下1階　地上6階
寸法
最高高　23,400mm
階高　1階：4,500mm，8,250mm／2階：3,750mm，4,300mm／3～4階：3,750mm／5階：3,000mm，3,750mm／6階：3,650mm，3,900mm
天井高　エントランスホール：3,250，6,700mm／ホワイエ：2,850mm／多目的ホール：6,700mm／レストラン：2,900mm／客室：2,400mm
主なスパン　エントランスホール：6,200×5,500mm／多目的ホール：21,000×6,500mm／客室棟：5,700×5,500mm，6,200×5,500mm／会議室：10,000×6,500mm
敷地条件
駐車台数　59台
構造
主体構造　鉄筋コンクリート造　一部，鉄骨造
杭・基礎　直接基礎
設備
空調設備
空調方式　単一ダクト方式　ファンコイルユニット方式　一部，パッケージ方式
熱源　地中熱ヒートポンプ　空冷ヒートポンプ
衛生設備
給水　直圧直結方式　増圧直結方式
給湯　ヒートポンプ給湯器による中央方式
電気設備
受電方式　地中引込　2回線10kV
設備容量　1,000kVA×2台
防災設備
消火　スプリンクラー　屋内消火栓　ガス消火　消火器
排煙　自然排煙
昇降機　乗用エレベータ（1,050kg）×3台，（1,275kg）×2台　人荷用エレベータ（1,600kg）×1台　荷物用エレベータ（630kg）×1台
工程
設計期間　2014年3月～2017年3月
施工期間　2017年4月～2019年12月（工事）
外部仕上げ
屋根　アスファルト防水の上，押えコンクリート
外壁　人工大理石 t=25mm（デュポン：コーリアン）
開口部　アルミカーテンウォール＋Low-E複層強化ガラス　アルミサッシ＋Low-E複層ガラス
屋上庭園　タイル　屋上緑化
テラス　ウッドデッキ
内部仕上げ
エントランスホール
床　灰色花崗岩 t=20mm バーナー仕上げ
壁　コンクリート打ち放し
天井　アルミ押し出し型材ルーバー H250×20mm t=1.5mm
ホワイエ
床　灰色花崗岩 t=20mm バーナー仕上げ
壁　磁器質タイル t=10mm
天井　繊維強化セメント板＋EP塗装
多目的ホール
床　木複合フローリング w=180mm t=15mm
壁　シナ練付合板 t=12mm
天井　アルミ押出し型材ルーバー H250×20mm t=1.5mm
ブックカフェ
床　コンクリート直均しの上，セメント系セルフレベリング材 t=1.5mm
壁　シナ練付合板 t=12mm
天井　アルミ押出し型材ルーバー H200×20mm t=1.5mm
客室
床　カーペット t=9mm　木複合フローリング t=15mm
壁・天井　ビニルクロス

坂本一成（さかもと・かずなり）
1943年東京都生まれ／1966年東京工業大学工学部建築学科卒業／1971年同大学大学院博士課程を経て，武蔵野美術大学造形学部建築学科専任講師／1977年同大学助教授／1983年東京工業大学助教授／1991年同大学教授／2009年同大学名誉教授／現在，アトリエ・アンド・アイ坂本一成研究室主宰

久野靖広（くの・やすひろ）
1972年茨城県生まれ／1996年東京工業大学工学部建築学科卒業／1997～98年スイス連邦工科大学（ETH Zürich）奨学生／1999年東京工業大学大学院修士課程修了／2005年同大学院博士課程単位取得退学，ハッチョウボリ・デザイン・オフィス共同設立／2005～09年同大学院補佐員，その後アトリエ・アンド・アイに加わる／2017年～茨城大学工学部都市システム工学科准教授／現在，アトリエ・アンド・アイパートナー，日本工業大学非常勤講師

フラットタイプの客室.

南北断面　縮尺1/800

●案内図は新建築Onlineへ
http://bit.ly/sk2201_map

所在地 大阪府寝屋川市三井南町15-1
主要用途 中学校 高等学校 図書室
建主 学校法人同志社 理事長／八田英二
同志社香里中学校・高等学校

設計
建築 **八木佐千子／ NASCA＋partners**
担当／八木佐千子 上垣内伸一
後藤直也 笹尾徹 忍足知彦
金城杏璃
構造 満田衛資構造計画研究所
担当／満田衛資 江畑和弘 岡田勇佑
（元所員）
設備 阪田設備事務所
担当／阪田浩一
環境設備計画アドバイザー
担当／高間三郎 渡辺忍 安藤哲哉
監理 八木佐千子／ NASCA＋partners
担当／八木佐千子 金城杏璃

施工
建築 竹中工務店 大阪本店
担当／中野達男 中川英樹 大崎博司
諫山開 諸岡俊祐 鶴田良一
松本徹也 田中伸和
機械 大阪城口研究所
担当／大西勝之
電気 アイ電気通信
担当／川邊恭右
ガラス工事 total
担当／前橋尚 花岡史洋 金野友詞
家具工事 celia
担当／小坂博信 山下泰成 集堂敬太
造園工事 小林造園
担当／今木智一
製作家具 celia
既製家具 オカムラ

規模
敷地面積 79,910.95m²
建築面積 1,440.41m²
延床面積 877.48m²
（今回の増築を含む1棟扱いの合計延床面積：21,977.16m²）
1階 840.46m² ／ 2階 37.02m²
基準階 840.46m²
建蔽率 17.3%（許容：60%）
容積率 35.7%（許容：200%）
階数 地上2階

寸法
最高高 7,560mm
軒高 7,160mm
階高 ライブラリー：4,600mm
天井高 ライブラリー：4,200mm

敷地条件
地域地区 第一種中高層住居専用地域 第一種住居地域 準防火地域
道路幅員 北9.270m

構造
主体構造 鉄骨造 一部，鉄筋コンクリート造
杭・基礎 地盤改良の上，耐圧盤

設備
空調設備
空調方式 空冷ヒートポンプマルチ方式（GHP）
熱源 ガス 電気
衛生設備
給水 ポンプ圧送方式（既設）
給湯 貯湯式（小型電温水器）
排水 直接放流 雨水・汚水分流式
電気設備
受電方式 高圧6.6kV（既設）
設備容量 50kVA（増設）
契約電力 既設
防災設備
消火 自動火災報知器（空気管） 消火器
排煙 自然排煙
その他 ICT設備（プロジェクター スクリーン 蔵書検索パソコン 貸出用ノートパソコン タブレット パソコン充電保管庫 デジタルサイネージ）

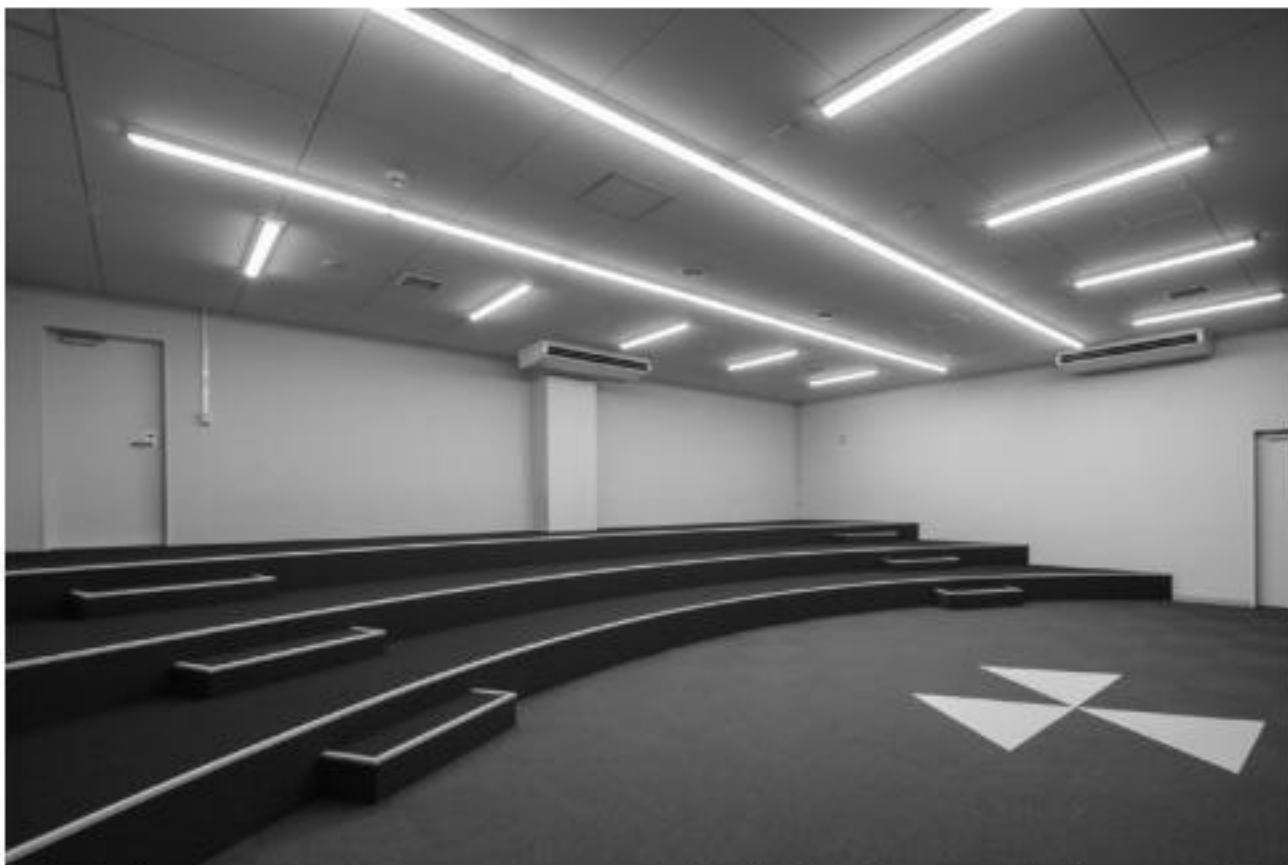
工程
設計期間 2018年9月～2020年2月
施工期間 2020年3月～2021年4月

外部仕上げ
屋根 歩行部分：鉄筋コンクリート＋超速硬化ウレタン防水（ダイフレックス：クイックスプレー）＋断熱材＋シンダーコン金ゴテ仕上げ（防滑のため刷毛引き仕上げ） 非歩行部分：鉄筋コンクリート＋断熱材＋超速硬化ウレタン防水（ダイフレックス：クイックスプレー） 風除室屋根：耐火野地板 t=18mm＋シート防水（アーキヤマデ：リベットルーフ）
外壁 St銅縁下地＋金属断熱サンドイッチパネル t=35mm（淀川製鋼所：ヨドファインパネルHyper）裏面ロックウール吹き付け t=20mm Stパネル t=1.6mm 曲げ加工（製作：トロイム）＋焼付塗装 裏面ロックウール吹き付けt=20mm スパンドレル型カラーガルバリウム鋼板 t=0.5mm（淀川製鋼所：ヨドスパン）
開口部 開閉窓・出入口：アルミサッシ（三協立山アルミ：ARM-S，MTG） ブレス(アルミ横軸回転自然換気窓) FIX窓（total） FIXガラス：強化合わせガラス 中間膜PVB 0.76貼り合わせ 上下枠：スチール曲げの上，現場塗装仕上げ マリオン：スチールFBの上，現場塗装仕上げ（関西ペイント：フェロドール） スチールハーフマリオン：スチール厚板切り出しの上，溶融亜鉛メッキ ガラススタビライザー：合わせガラス
外構 植栽：既存樹木 舗床：既存煉瓦敷き復旧 コンクリート舗装（歩道） 既存景石並べ替え

内部仕上げ
ライブラリー
床 OAフロア（OM機器）＋タイルカーペット（東リ：GA193，田島：TSP116）
壁 GB-R＋EP Stパネル t=1.6mm＋焼付塗装（トロイム）
天井 鉄筋コンクリート打ち放し＋水性アクリルシリコン樹脂クリア塗装（関西ペイント：アクアプリズム）
風除室
床 コンクリートの上，靴ふきマット敷き込み（ミズシマ：マット千鳥格子グレー）
壁 Stパネル t=1.6mm＋焼付塗装(トロイム製作)
天井 GB-R＋DR
WC
床 二重床＋長尺塩化ビニルシート
壁 鉄筋コンクリート打ち放し GB-R＋EP
天井 GB-R＋DR
インフォメーション
床 OAフロア＋タイルカーペット（東リ：GA193）
壁 鉄筋コンクリート打ち放し FGBの上，一部マグネット塗装（ターナー：マグネットペイント）＋内装用水性特殊多彩意匠仕上げ（日本ペイント：ニッペパーフェクトインテリアEMO フロー樹氷）
天井 GB-R＋DR

八木佐千子（やぎ・さちこ）
1963年東京都生まれ／1986年早稲田大学理工学部建築学科卒業／1988年同大学大学院修士課程修了／1988～93年團・青島建築設計事務所／1994年古谷誠章と共同でNASCA設立，同代表取締役／2015年～日本大学理工学部非常勤講師／2019年～静岡理工科大学非常勤講師

2点撮影／新建築社写真部

興文館（旧図書館）と繫真館（メディアセンター）を繋ぐ軒下空間.

興文館内に新設したコモンスペース．閉架書架室を改修した．発表者は校章位置に立ってプレゼンテーションする.

鹿猿狐ビルヂング（本文146頁）

●案内図は新建築Onlineへ
http://bit.ly/sk2201_map

所在地　奈良県奈良市元林院町22
主要用途　物品販売店　飲食店　事務所
建主　中川政七商店

設計

建築　内藤廣建築設計事務所
担当／内藤廣　蛭田和則　市村駿
山口昇　井上慧祐*（*元所員）
構造　KAP
担当／岡村仁　池谷聡史
設備　森村設計
担当／細川雅之　渡辺陸　松本尚樹
栗本隆史
サイン　高い山
担当／山野英之　桑原遼
ロゴ（瓫つね）　GDC
担当／水野学
ブックディレクション　BACH
担当／幅允孝
監理　内藤廣建築設計事務所
担当／内藤廣　蛭田和則　市村駿
山口昇

施工

建築　平井建設
担当／平井克　平井健嗣　横山訓弘
空調　鳳工業
担当／実松新　山田寿一（ミヨシテック）
衛生　富士工業
担当／伊藤寛厚
電気　ダイダン
担当／大谷信行
サイン　オガワ
担当／武廣哲史
植栽　古川三盛
家具・什器　バウハウス丸栄（1～3階）
担当／土器桃子
E&Y（3階）
担当／松澤剛

規模

敷地面積　419.06m²
建築面積　294.42m²
延床面積　796.17m²
1階　293.99m²／2階　287.61m²
3階　214.57m²
建蔽率　70.26%（許容：80%）
容積率　186.67%（許容：240%）
階数　地上3階

寸法

最高高　11,870mm
軒高　8,595mm
階高　1階：3,100mm　2階：3,200mm
天井高　客席1，2・売場1・個室1，2：2,805mm／売場2：3,015mm／執務室・会議室1，2，3：2,435～3,875mm
主なスパン　3,600×3,600mm

敷地条件

地域地区　商業地域　準防火地域
道路幅員　東4.0m　北4.0m

構造

主体構造　鉄骨造
杭・基礎　直接基礎

設備

空調設備
空調方式　個別空調方式
熱源　電気　ガス
衛生設備
給水　水道直結方式
給湯　個別給湯方式（電気，ガス）
排水　汚水・雑排水合流方式
電気設備
受電方式　低圧受電方式
防災設備
消火　消火器
排煙　自然排煙
その他　非常用照明設備　誘導灯設備　自動火災報知設備
昇降機　乗用エレベータ（9人乗り）×1台

工程

設計期間　2019年1月～9月
施工期間　2019年10月～2021年3月

外部仕上げ

屋根　いぶし瓦
外壁　窯業系サイディング
開口部　スチールカーテンウォール
外構　植栽：オカメザサ　タマリュウ　ツバキ
舗床：錆御影石　鉄筋コンクリート小叩き

内部仕上げ

客席1・売場1，2
床　ナラフローリング t=15mm WPC セラミックスUV塗装
壁　PBの上，内装薄塗材
天井　キーストンプレート t=1.2mm 現し　ガラスクロス巻きグラスウール吸音板 t=25mm
客席2・個室1，2
床　カバフローリング t=15mm セラミックスUV塗装
壁　PBの上，内装薄塗材
天井　キーストンプレート t=1.2mm 現し　ガラスクロス巻きグラスウール吸音板 t=25mm
執務室・会議室1，2，3
床　タイルカーペット（堀田カーペット）
壁　PBの上，内装薄塗材
天井　吉野ヒノキ小幅板張り t=15mm　不燃処理材

内藤廣（ないとう・ひろし）
1950年神奈川県生まれ／1974年早稲田大学理工学部建築学科卒業／1976年同大学大学院（吉阪隆正研究室）修士課程修了／1976～78年フェルナンド・イゲーラス建築設計事務所／1979～81年菊竹清訓建築設計事務所／1981年内藤廣建築設計事務所設立／2001～02年東京大学大学院工学系研究科社会基盤学助教授／2003～11年同大学大学院教授／2011年同大学名誉教授

星野リゾート　界 ポロト（本文154頁）

●案内図は新建築Onlineへ
http://bit.ly/sk2201_map

所在地　北海道白老郡白老町若草町1-1018-94
主要用途　旅館
建主　白老ホテルマネジメント

設計・監理

建築　中村拓志&NAP建築設計事務所
担当／中村拓志　石橋泰介　青戸貞治
志藤拓巳　谷口幸平（元所員）
構造　山田憲明構造設計事務所（△湯・客室棟基本設計）
担当／山田憲明　石川敬一
前田建設工業（客室棟実施設計）
担当／冨永修夫　浦英二
設備　ハルス建築環境設計
担当／大城立　嘉陽恵美子
ランドスケープ　育建築研究所
担当／木田裕子
照明計画　大光電気
担当／安東克幸　小林菜摘
家具　ASPLUND　担当／佐藤達也
Time & Style　担当／出口順平
天童木工　担当／鈴木雄登
インターオフィス　担当／跡部元
ニングル　担当／吉田秀造　吉田森人

施工

建築　前田建設工業 北海道支店
担当／吉田喜史　高橋裕茂　三輪恭平
西村陵　加山瑠佑　竜口智春
野口槙智
施工協力　砂子組
担当／高田健司　古川政哉
空調・衛生・電気
前田建設工業 北海道支店
担当／小野寺幸人
北海電気工事
担当／牧野力也　三田村拓斗
位頭俊郎　端航大

規模

敷地面積　9,339.04m²
建築面積　2,021.37m²
延床面積　4,951.48m²
客室棟1階　1,605.70m²／2階　1,185.77m²
基準階　930.75m²／△湯　298.51m²
建蔽率　21.65%（許容：60%）
容積率　52.40%（許容：200%）
階数　客室棟：地上4階／△湯：地上1階

寸法

最高高　客室棟：15,850mm／△湯：10,863mm
軒高　客室棟：15,1950mm／△湯：3,147mm
階高　客室棟1階：4,000mm／客室棟基準階：3,400mm
天井高　客室棟エントランス：3,000mm／客室棟客室：2,330mm，2,600mm／△湯湯上がり処：9,460mm／△湯浴室：8,726mm
主なスパン　客室棟：9,200×6,000mm

敷地条件

地域地区　第二種住居地域
道路幅員　西10.5m　南10.5m
駐車台数　42台

構造

主体構造　客室棟：鉄筋コンクリート造　一部，鉄骨造　△湯：鉄筋コンクリート造＋木造
杭・基礎　杭基礎（鋼管杭）

設備

環境配慮技術
EMS（エネルギーマネジメントシステム）LE
空調設備
空調方式　個別空調方式
熱源　空冷ヒートポンプエアコン
衛生設備
給水　加圧給水ポンプ＋受水槽方式
給湯　セントラル給湯方式
排水　汚水・雑排水：公共下水道へ放流
電気設備
受電方式　6,600V高圧受電方式
変圧器容量　1φ300kVA×1　3φ500kVA×1
予備電源　非常用ディーゼル発電機：43kVA
防災設備
消火　屋内消火栓設備　消火器
排煙　自然排煙
その他　非常照明　誘導灯　自動火災報知設備　非常放送　避難梯子
昇降機　：乗用エレベータ（11人乗り，ゲスト用）×2台，（9人乗り，スタッフ用）×1台
特殊設備　温泉設備　水景設備　ロードヒーティング設備

工程

設計期間　2018年4月～2020年4月
施工期間　2020年5月～2021年10月

外部仕上げ

■客室棟
屋根　改質アスファルト防水（断熱工法）
外壁　防水型外装薄塗材E　カラマツ耳付き製材 t=12mm 雁行重ね張り 木材保護塗料（キャピタルペイント）　シラカバアルミパイプルーバー（住友3M：特注柄）
開口部　鋼製建具短冊ガラス工法 現場塗装樹脂アルミ複合断熱サッシ（LIXIL）
床　豆砂利洗い出し（冠昀企業股份有限公司）
■△湯
屋根　銅板 一文字葺き
外壁　銅板 一文字葺き モルタル塗り
開口部　鋼製建具　木製建具　アルミサッシ

内部仕上げ

■客室棟
エントランスホール
床　フローリング t=14mm（望造）　豆砂利洗い出し（冠昀企業股份有限公司）
壁　打ち放しコンクリート仕上げ（シラカバ丸太型枠，スギ板型枠）装飾仕上げ塗材（エスケー化研）　羽目板 t=12mm OSUC（キャピタルペイント）
天井　PB t=9.5＋9.5mmの上，EP
■△湯
エントランス・湯上がり処・脱衣室
床　フローリング張り t=19mm OSUC
壁・天井　カラマツ羽目板 t=12mm
木架構　トドマツ丸太材
洗面所
床　フローリング張り t=19mm OSUC
壁・天井　PB t=12.5＋9.5mmの上，ジョリパット
浴室
床　山西黒JB
壁　御影石
天井　カラマツ羽目板 t=12mm OS塗り

主な使用機器

照明　大光電機　DNライティング

中村拓志（なかむら・ひろし）
1974年東京都生まれ／1999年明治大学大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程修了／1999年～2002年隈研吾建築都市設計事務所勤務／2002年NAP建築設計事務所設立

上越市雪中貯蔵施設 ユキノハコ（本文162頁）

●案内図は新建築Onlineへ
http://bit.ly/sk2201_map

所在地 新潟県上越市安塚区樽田140
主要用途 保冷倉庫
建主 上越市

設計
建築・監理 **海法圭建築設計事務所**
担当／海法圭 中村隆志*（*元所員）
構造 平岩構造計画
担当／平岩良之 國江悠介
設備 環境エンジニアリング
担当／南井克夫 平井孝典
増川智聡*
アートディレクション・ロゴ 井上さなえ
雪冷房システム技術支援・監修
公益財団法人雪だるま財団
担当／伊藤親臣* 高橋雄一郎
展示物写真提供 御巫朋子 印藤正人

施工
建築 サトウ産業 担当／浅倉勉
空調・衛生・機械 島津工業
担当／佐藤真
電気 上越技研 担当／金子良平

規模
敷地面積 1,324.04m²
建築面積 356.15m²
延床面積 432.31m²
1階 346.14m² ／ 2階 86.17m²
建蔽率 26.89%（許容：制限なし）
容積率 32.65%（許容：制限なし）
階数 地上2階

寸法
最高高 10,220mm
軒高 6,090mm
階高 1階：3,200mm
天井高 貯蔵室：5,500mm ／温度調整室：2,800mm
主なスパン 1,820×1,820mm

敷地条件
地域地区 都市計画区域外 景観づくり重点区域 多雪地区（3.5m）
道路幅員 東8.5m
駐車台数 18台

構造
主体構造 木造（在来軸組工法，木造トラス）
杭・基礎 ベタ基礎

設備
空調設備
空調方式 自然対流方式 冷暖房方式 ルームエアコン（温度調整室のみ）
熱源 電気
衛生設備
給水 水道直結方式
排水 自然勾配排水方式
電気設備
受電方式 低圧電灯 動力架空引込
設備容量 電灯：1φ3W 100/200V 4.0kVA
動力：3φ3W 200V 5.7kw
契約電力 電灯：4.0kVA 動力：5.7kw
防災設備
消火 消火器
排煙 自然排煙

工程
設計期間 2020年7月～2021年3月
施工期間 2020年10月～2021年3月

工事費
建築 93,013,800円
空調 1,188,000円
衛生 985,600円
電気 3,509,000円
総工費 98,696,400円
（総工費の約1/3が躯体，約1/3が断熱パネル）

外部仕上げ
屋根 高耐候性ガルバリウム鋼板 t=0.35mm 竪ハゼ葺き（日鉄鋼板SGL）
雪割り 屋根同材（日鉄鋼板SGL）
外壁 一般部：スギ板縦板張り t=18mm 着色シーラー下地処理の上，液体ガラス塗装（液体ガラス塗装工業：クリスタルウッド） 目透かし部：スギ板 t=18mm 目透かし張り 着色シーラー下地処理の上，液体ガラス塗装（液体ガラス塗装工業：クリスタルウッド）
開口部 スギ板縦板張り t=18mm 着色シーラー下地処理の上，液体ガラス塗装（液体ガラス塗装工業：クリスタルウッド）
外構 土間コンクリート t=150mm

内部仕上げ
エントランス
床 コンクリート金ゴテ押え
壁 構造用合板 t=12mm OSCL
天井 吹き抜け
貯雪室／貯蔵庫
床 コンクリート表面強化防塵塗装
壁・天井 フラットパネル t=100mm（ソーゴ）
踊り場
床 ビニル床タイル t=3.0mm（東リ：フェイソールプルス）
壁 構造用合板 t=12mm OSCL
天井 吹き抜け
見学ブリッジ
床 縞鋼板 t=6mm 溶融亜鉛メッキ
壁（貯蔵庫側のみ） エキスパンドメタルXS32 溶融亜鉛メッキ
天井 フラットパネル t=100mm（ソーゴ）

利用案内
利用料金 1パレットにつき月額2,750円（米袋30kg×35袋）
1カゴ台車につき月額1,650円（野菜コンテナ10個 約200g）

■施設見学
開館時間 土曜日，日曜日，祝日
11:00～／13:00～ 1日2回（約10分）
問合せ 農村振興課 tel. 025-520-5752
雪だるま物産館 tel. 025-595-1010

海法圭（かいほう・けい）
1982年宮城県生まれ／2005年東京大学工学部建築学科卒業／2007年同大学大学院修士課程修了／2007～09年西沢大良建築設計事務所／2010年海法圭建築設計事務所設立／現在，芝浦工業大学，東京理科大学，法政大学非常勤講師

早稲田大学国際文学館（村上春樹ライブラリー）
（本文168頁）

●案内図は新建築Onlineへ
http://bit.ly/sk2201_map

所在地 東京都新宿区西早稲田1-6
主要用途 大学
建主 学校法人早稲田大学

設計・監理
建築 **隈研吾建築都市設計事務所**
担当／隈研吾 渡邉啓太 渡部悠
構造 金箱構造設計事務所
担当／金箱温春 野田賢 小幡周平
設備 環境エンジニアリング
担当／高山浩 平井孝典 大野渉
外構 プレイスメディア
担当／吉田新 冨士榮宏将
展示 丹青社
担当／加藤剛 堀伸平 奈良渉太郎
村岡瑞希

施工
建築 熊谷組
担当／丹野賢一 奥村大介
空調・衛生 斎久工業
担当／楠美剛史 鈴木克侑
電気 関電工
担当／石井誠治
展示 丹青社
担当／奈良渉太郎 村岡瑞希

規模
敷地面積 1,162m²
建築面積 459m²
延床面積 2,111m²
地下1階 411m²
1階 379m² ／ 2階 357m²
3階 376m² ／ 4階 377m²
5階 221m²
階数 地下1階 地上5階

寸法
最高高 18,787mm
軒高 17,330mm
階高 カフェ：3,030mm
天井高 カフェ室：直天
主なスパン 6,100×6,500mm

構造
主体構造 鉄筋コンクリート造
杭・基礎 ベタ基礎

設備
空調設備
空調方式 空冷ヒートポンプパッケージ方式
熱源 空気
衛生設備
給水 増圧方式
給湯 局所給湯方式
排水 雨水汚水合流方式
電気設備
受電方式 低圧受電方式
昇降機 乗用エレベータ（13人乗り）×1台（東芝エレベーター）

工程
設計期間 2019年4月～2020年2月
施工期間 2020年3月～2021年3月

工事費
建築 891,279,400円
機械 129,666,000円
電気 150,920,000円
総工費 1,171,865,400円

外部仕上げ
屋根 既存まま
外壁 既存の外壁の上，リシン吹き付け（エスケー化研：ソフトリシン）
開口部 アルミサッシ（不二サッシ）
外構 煉瓦ブロック（岡本煉瓦：KBS-ST1）
高耐久性木材（池上産業：アコヤ）

内部仕上げ
カフェ・ギャラリー等
床 オークフローリング（中部フローリング）
壁 PB t=12.5＋9.5mmmの上，塗装
天井 モルタル補修の上，塗装
オーディオスペース
床 捨て合板 t=12mmの上，タイルカーペット（川島織物セルコン：インターフェイス）
壁 PB t=12.5＋9.5mmの上，塗装
天井 モルタル補修の上，塗装
会議室
床 OAフロア t=30mmの上，タイルカーペット（東リ：GA-100）
壁 PB t=12.5+9.5mmの上，塗装
天井 モルタル補修

利用案内
開館時間 10:00～17:00
休館日 不定期
入館料 無料

提供：隈研吾建築都市設計事務所
改修前の4号館．

隈研吾（くま・けんご）
1954年神奈川県生まれ／1979年東京大学大学院建築学専攻修了／1985～86年コロンビア大学客員研究員を経て，1990年隈研吾建築都市設計事務所設立／2001～09年慶應義塾大学教授／2009～20年東京大学教授／現在，東京大学特別教授・名誉教授，早稲田大学特命教授

ゼノアック本館 (本文176頁)

●案内図は新建築Onlineへ
http://bit.ly/sk2201_map

所在地 福島県郡山市安積町笹川字平ノ上1-1
主要用途 事務所
建主 日本全薬工業
総合監修 ラボット・プランナー 担当／宗像剛

設計・監理
建築 **益子アトリエ**
担当／益子義弘 宗像秀展
プラスニューオフィス
担当／瀬戸健似 近藤創順
構造 ホルツストラ
担当／稲山正弘 岩田聖司
設備 知久設備計画研究所
担当／知久昭夫 椋尾誠一
長谷川雅俊 國吉健太
ランドスケープ GAヤマザキ
担当／山﨑誠子 洪淑婷 針谷未花

施工
建築 八光建設
担当／園部好洋 草野正寿
岩渕絢一 YE NAUNG
設備 ユアテック
空調・衛生担当／似田貝和紀
相澤富実哉
電気担当／藤原恵太
家具 ラボットプランナー 担当／高橋邦明

規模
敷地面積 170,374.53m²
建築面積 687.94m²
延床面積 896.07m²
1階 645.72m² ／ 2階 250.35m²
建蔽率 12.76%（許容：60%）
容積率 17.97%（許容：200%）（建蔽率・容積率共に既存建物を含む）
階数 地上2階

寸法
最高高 8,092mm
軒高 6,542mm
階高 3,200mm
天井高 エントランスホール：6,020mm ／応接室：2,400 ～ 2,700mm ／レセプション室：2,400 ～ 3,290mm ／事務室：2,500mm

敷地条件
地域地区 準工業地域
道路幅員 東22m 北6m

構造
主体構造 鉄筋コンクリート造 一部，木造
杭・基礎 直接基礎

設備
空調設備
空調方式 空冷ヒートポンプエアコン
熱源 電気
衛生設備
給水 水道直結方式
給湯 電気温水器方式
排水 浄化槽方式
電気設備
受電方式 6.6kV 3φ3W 引込方式
設備容量 1φ 75kVA 3φ 75kVA
契約電力 構内主変電設備からの高圧分岐供給
防災設備
消火 消火器
排煙 自然排煙
その他 非常警報設備 誘導灯設備 非常照明設備
昇降機 乗用エレベータ（11人乗り）×1台

工程
設計期間 2019年11月～2020年10月
施工期間 2021年1月～8月

外部仕上げ
屋根 断熱シート防水 ガルバリウム鋼板 平葺き
外壁 錆御影石 t=30mm ビシャン仕上げ
炻器質タイル t=10mm（国代耐火工業所：極細ボーダーⅡ） 漆喰 白河石
軒裏 垂木（スギ製材90×90mm）現し スギ板 t=12mm
開口部 アルミサッシ スチールサッシ 木製サッシ
外構 コンクリート舗装

内部仕上げ
エントランスホール
床 トラバーチン t=15mm 本磨き仕上げ
壁 PB t=12.5＋9.5mm 珪藻土
天井 梁（スギ製材）現し スギ板 t=15mm＋グラスウール（ガラスクロス巻込）
応接室
床 カーペット t=8.5mm
壁・天井 ホワイトオーク練付合板 t=5.5mm
レセプション室
床 オークフローリング t=15mm
壁 PB t=12.5＋9.5mm 珪藻土
天井 スギ板 t=12mm
展示室
床 カーペット t=9.5mm
壁 PB t=12.5＋9.5mm EP 一部，プロジェクタースクリーン塗装
天井 PB t=9.5mm EP
社長室
床 タイルカーペット t=10mm
壁 PB t=12.5＋9.5mm EP
天井 PB t=9.5mm EP 一部，ホワイトオーク練付合板 t=5.5mm
事務室
床 OAフロア＋タイルカーペット t=6mm
壁 PB t=12.5＋9.5mm EP
天井 PB t=9.5mm EP

主な使用機器
衛生機器 TOTO
照明器具 DAIKO 遠藤照明 パナソニック 三菱電機
建具金物 堀商店 美和ロック
特注照明器具・特注家具 製作／ラボットプランナー

益子義弘（ますこ・よしひろ）
1940年東京都生まれ／1964年東京藝術大学美術学部建築学科卒業／1966年同大学大学院修士課程修了後，吉村研究室助手／1973年MIDI綜合設計研究所／1976年M&N設計室主宰／1984年東京藝術大学助教授／1989～2007年同大学教授／現在，同大学名誉教授，益子アトリエ主宰

瀬戸健似（せと・けんじ）
1975年新潟県生まれ／1998年日本大学生産工学部建築工学科卒業／2000年同大学大学院生産工学研究科博士前期課程修了／2008年～プラスニューオフィス／2010年～法政大学非常勤講師／2015年～日本大学非常勤講師

近藤創順（こんどう・そうじゅん）
1975年新潟県生まれ／1998年日本大学理工学部建築学科卒業／2000年同大学大学院理工学研究科修士課程修了／2000～02年佐藤光彦建築設計事務所／2010年～プラスニューオフィス

広島アンデルセン (本文186頁)

●案内図は新建築Onlineへ
http://bit.ly/sk2201_map

所在地 広島県広島市中区本通7-1
主要用途 物販店舗 飲食店 集会場
建主 アンデルセン・パン生活文化研究所

設計・監理
設計監修／木村素直
大成建設一級建築士事務所
建築担当／中藤泰昭 傳法一成
構造担当／藤村太史郎 井之上太堀愛里香
機械設備担当／高木淳 斧田浩一
嵐城太郎 芳岡里美
電気設備担当／内田元 藤間一憲
インテリア・FFE担当／徳野博子
外壁保存担当／杉江夏呼 中谷扶美子

施工
大成建設
建築担当／中本博幸 圓道健太
山口俊之
空調・衛生・電気担当／石本卓也

規模
敷地面積 1,528.73m²
建築面積 919.04m²
延床面積 3,424.78m²
1階 780.18m² ／ 2階 659.80m²
3階 659.80m² ／ 4階 636.35m²
5階 636.35m²
建蔽率 60.12%（許容：90%）
容積率 216.45%（許容：600%）
階数 地上5階

寸法
最高高 25,100mm
軒高 20,570mm
階高 1階ベーカリーマーケット：4,550mm ／ 2階アンデルセンキッチン・3階カルチャールーム：4,000mm ／ 4階デンマークルーム：3,950mm ／ 5階スカンジナビアホール：4,150mm
天井高 1階ベーカリーマーケット：3,375mm ／ 2階レストランキッチン・3階カルチャールーム：2,825mm ／ 4階デンマークルーム：2,700mm ／ 5階スカンジナビアホール：4,000mm
主なスパン 7,000×7,000mm

敷地条件
地域地区 商業地域 防火地域
道路幅員 東10m 南6m 北11m
駐車台数 2台

構造
主体構造 鉄筋コンクリート造 一部，鉄骨造
杭・基礎 現場打ちコンクリート杭

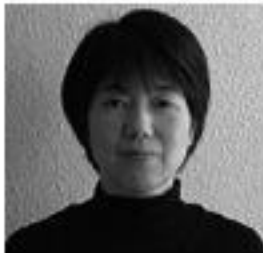
設備
空調設備
空調方式 空冷ヒートポンプマルチエアコン
熱源 電気
衛生設備
給水 市水 加圧給水方式
給湯 セントラル給湯：ガス，瞬間湯沸器
局所給湯：電気 貯湯式湯沸器
排水 合流式方式
電気設備
受電方式 地中1回線受電
設備容量 三相3線6kVA
契約電力 820kW
予備電源 屋外キュービクル型発電機
防災設備
消火 スプリンクラー設備
排煙 機械排煙
昇降機 乗用エレベータ（11人乗り）×2台，6人乗り）×1台 人荷用兼非常用エレベータ（26人乗り）×1台
特殊設備 小荷物専用昇降機設備

工程
設計期間 2017年11月～2019年1月
施工期間 2019年2月～2020年7月

外部仕上げ
屋根 コンクリートの上，アスファルト防水（東西アスファルト：JPX-935） コンクリートの上，ウレタン塗膜防水（ダイフレックス：ZHM-200） ガルバリウム鋼板 t=0.5mm（三晃金属工業：立馳 SX-40）
外壁 化粧打ち放しコンクリートの上，吸水防止剤塗布（大日技研工業：ランデックスコート） 保存・復元部：コンクリート打ち放し補修の上，吹き付けタイル（ハマキャスト：ニュージュエル）
開口部 アルミサッシ電解着色（不二サッシ） スチールサッシフッ素樹脂塗装（不二サッシ）
外構 ウッドデッキ（セランガンバツ） 砕石敷き＋簡易固化用接着剤 景観半たわみ性舗装 枕木

内部仕上げ
1階ベーカリーマーケット
床 セラミックタイル（名古屋モザイク工業：ソレラス）
壁 化粧打ち放しコンクリートの上，吸水防止剤塗布（大日技研工業：ランデックスコート） 炻器質タイル（国代耐火工業所：スライスボーダー ヨーグルー） 吹き付けタイル（フッコー：マヂックコート）
天井 PBの上，EP-2
2階アンデルセンキッチン
床 オークフローリング t=15mm（矢島木材乾燥：アトランティスフローリング）
壁 化粧打ち放しコンクリートの上，吸水防止剤塗布（大日技研工業：ランデックスコート） PBの上，EP-2
天井 PBの上，EP-2
5階スカンジナビアルーム
床 カーペット（クオリティ：highline910）
オークフローリング t=15mm（矢島木材：アトランティスフローリング）
壁 化粧打ち放しコンクリートの上，吸水防止剤塗布（大日技研工業：ランデックスコート） PBの上，EP-2 壁紙（トミタ：インブルーム） 木製ルーバー 既存タイシルク＋フロートガラス 化粧塩化ビニルシート（ベルビアン）
天井 PBの上，EP-2

利用案内
営業時間 10:00～19:30（1階ベーカリーマーケット）
店休日 毎月第3水曜日
問合せ tel. 082-247-2403

中藤泰昭（なかふじ・やすあき）
1970年東京都生まれ／1993年早稲田大学理工学部建築学科卒業／1995年同大学大学院修了後，大成建設入社／現在，同社設計本部建築設計第一部設計室長

徳野博子（とくのひろこ）
1973年山口県生まれ／1997年東京都市大学工学部建築学科卒業後，大成建設入社／現在，同社設計本部インテリアデザイン室プロジェクトデザイナー

那覇文化芸術劇場 なはーと(本文192頁)

●案内図は新建築Onlineへ
http://bit.ly/sk2201_map

所在地 沖縄県那覇市久茂地3-26-27
主要用途 劇場
建主 那覇市
設計・監理
香山建築研究所
建築・監理担当/香山壽夫 佐伯和俊
長谷川祥久 椎橋武史* 鈴木隆史
角沢聡子 望月麻衣(*元所員)
久米設計
建築・監理担当/兒玉謙一郎
岡本賢吾
構造担当/奥野親正 神谷佳祐
品田真優*
監理担当/村松康則 佐藤竜也
木下隆輝
機械設備担当/伊藤学 酒井義幸
電気設備担当/下田健也 韓文彬
積算担当/山之口知江
根路銘設計
建築・監理担当/根路銘剛次
神山陽介 大城広志 古謝文浩*
積算担当/根路銘剛次
劇場コンサルタント 空間創造研究所
担当/草加叔也 米森健二 田原奈穂子
建築音響コンサルタント 永田音響設計
担当/小野朗 箱崎文子
照明 LightingM
担当/森秀人 江越充* 永野純次
防災設計 明野設備研究所
担当/岸本文一 ファンスァンフン
施工
建築 國場組・大米建設・金城キク建設・ニシダ工業共同企業体
担当/金城勝也 砂川政浩 嘉陽田健
新垣義之 大城勝男 糸数修
松浦誠二 比嘉豊 又吉康樹 森村昇
宮城泰成 与那嶺健吾 仲宗根薫
西平充
空調 オカノ・太閤建設・沖縄計装共同企業体
担当/知念晃 末吉芳久 川満正人
新田博一 東田圭司 平智子
比嘉晋作 喜屋武卓磨 内間祥仁
衛生 東洋設備・東邦・久建工業共同企業体
担当/嘉手納良樹 高村英隆
外間朝也
電気 金城電気工事・八起電設・カイ総合設備共同企業体
担当/山口史郎 玉城辰 仲本翔哉
金城貞正 玉城盛賢 嘉数悠貴
伊良波佑太 安慶田章人 竹谷修一
大濱秀信
昇降機 沖縄特電
担当/長嶺裕
舞台機構 森平舞台機構・國和設備工業・比嘉工業共同企業体
担当/大川内一美 照屋恵 島袋仁
西本正美 阿部みゆき 高橋風葉
小野美月 飯沼順二*
舞台音響 ヤマハサウンドシステム・沖縄パナソニック特機・興洋電子共同企業体
担当/長田大悟 美土路啓太
山田明光 城間常良 岩渕聖子
飯野英樹
舞台照明 松村電機製作所沖縄営業所・南西電設・新共電気工業共同企業体
担当/城倉信次 宮里洸平 松永芳文
中津川啓 山口綾太
規模
敷地面積 9,736.54m²
建築面積 5,994.22m²
延床面積 14,576.26m²
地下2階 781.60m²/地下1階 391.00m²
1階 4,868.30m²/2階 3,052.65m²
3階 2,597.32m²/4階 1,901.45m²
5階 671.42m²/6階 312.52m²
建蔽率 61.56%(許容:100%)
容積率 144.97%(許容:400%)
階数 地下2階 地上6階
寸法
最高高 31,630mm
軒高 31,070mm
階高 1階:4,400mm/2階:4,250mm/3階:4,230mm/4階:4,450mm
天井高 共通ロビー(ウナー):11,500mm
敷地条件
地域地区 商業地域 防火地域
道路幅員 東4m 西7m 南9m 北18m(道路拡張工事中)
駐車台数 71台(車椅子駐車場,大型搬入車両3台含む)
構造
主体構造 鉄骨鉄筋コンクリート造 一部,鉄筋コンクリート造,鉄骨造
杭・基礎 直接基礎(一部,円形ラップルコンクリートの上,直接基礎)
設備
環境配慮技術
人感センサー感知型空調吹出による省エネ空調 LED照明 再生水利用による水資源の有効利用
空調設備
空調方式 劇場部:全熱交換機付空調機による単一ダクト方式 大練習室:デシカント空調機による潜顕分離空調方式 楽屋等:ビル用マルチエアコンによる天井カセット型空調方式
熱源 中央熱源系:排熱回収型吸収式冷温水機 空冷HPチラー マイクロコジェネ 個別熱源系:ビル用マルチエアコン
衛生設備
給水 受水槽+加圧給水ポンプによる加圧給水方式(上水・雑用水)
給湯 局所給湯方式
排水 雨水系・汚水系 屋内・屋外共分流方式
電気設備
受電方式 6.6kV 1回線受電方式
設備容量 3,500kVA
契約電力 1,000kVA
予備電源 ディーゼル非常用発電機:500kVA×1台
防災設備
消火 一般湿式スプリンクラー設備 放水型スプリンクラー設備 開閉型スプリンクラー設備 屋内消火栓設備 連結送水管 ハロンガス消火設備
排煙 機械排煙・自然排煙
その他 非常照明 誘導灯 雷保護 非常放送 自動火災報知設備
昇降機 乗用エレベータ(15人乗り)×3台
人荷用エレベータ(120人乗り,積載7850kg)×1台
特殊設備 舞台機構設備 舞台音響設備 舞台照明設備
工程
設計期間 2016年5月〜2018年3月
施工期間 2018年10月〜2021年6月
工事費
建築 7,862,474,800円
空調 1,111,224,380円
衛生 672,497,000円
電気 1,003,933,640円
昇降機 112,989,600円
舞台機構 922,399,500円
舞台音響 501,746,900円
舞台照明 477,293,300円
総工費 12,664,559,120円
外部仕上げ
屋根 フッ素樹脂塗装鋼板 t=0.4mm(東海カラー:スーパーフロンGL) ゴムアスシート t=1.0mm 耐火野地板 t=25mm 陸屋根部:コンクリートコテ仕上げ+屋根保護防水密着工法(A-1)+保護コンクリート t=80mm コンクリートコテ仕上げ+ウレタン塗膜防水(X-2)
外壁 鉄筋コンクリート化粧打ち放し+水性シリケート塗装(スマイルテック:タフマックス,イリオジン) 鉄筋コンクリート化粧打ち放し+撥水剤塗布(菊水化学工業:シランコート L) アルミ積層複合板(アルポリックパネル/fr) t=4.0mm 花ブロック(山内コンクリートブロック)+塗装
特注ルーバー 特注HPCパネル(技建)
開口部 アルミカーテンウォール(LIXIL,三協立山)
外構 琉球石灰岩 t=30mm 花ブロック(山内コンクリートブロック)+塗装 透水性アスファルトカラー舗装 トップコート
内部仕上げ
ウナー(共用ロビー)
床 磁器質タイル t=10mm 600mm角(セラミカ・クレオパトラ・ジャパン:NIRO) ナラ複合フローリング t=15mm
壁 鉄筋コンクリート化粧打ち放し+水性シリケート塗装(スマイルテック:タフマックス,イリオジン) GB t=12.5+12.5mm+左官(フッコー:ガラッシア,デュッセル,鏡面HR,マヂックコートインテリア) 鉄筋コンクリート補修+左官(フッコー:ガラッシア,デュッセル,鏡面HR,マヂックコートインテリア) GB t=12.5+12.5mm+EP 鉄筋コンクリート補修+EP 花ブロック(山内コンクリートブロック)+塗装
天井 GB t=12.5mm+ロックウール化粧吸音版 t=12mm+EP(工場塗装) GB t=12.5+12.5mm+EP GB t=12.5+12.5mm+左官(フッコー:デュッセル,マヂックコートインテリア)
大劇場(客席)
床 ナラ複合フローリング t=15mm
壁 FGボード t=8+8+8mm+左官(フッコー:マヂックコートインテリア) 鉄筋コンクリート補修+左官(フッコー:マヂックコートインテリア) FGB t=5+5mmの上,吸音左官(ビベル:BASWA) 石灰岩(KYタイル:コーラルストーン) 木練付(ウォールナット)
天井 GB t=15+15+15mm+EP 鉄筋コンクリート補修+EP 珪酸カルシウム板+EP
大劇場(舞台)
床 ヒノキ集成材フローリング t=30mm
壁 プロセニアム・音響反射板:FGB t=8+6+6mm+左官(フッコー:マヂックコートインテリア) FGB t=8+6+6mm+EP
大劇場ホワイエ
床 特注アキスミンスターカーペット(シンコール)
壁 GB t=12.5+12.5mm+左官(フッコー:ガラッシア,鏡面HR,マヂックコートインテリア) 鉄筋コンクリート補修+左官(フッコー:ガラッシア,鏡面HR,マヂックコートインテリア) GB t=12.5+12.5mm+EP 鉄筋コンクリート補修+EP
天井 BG t=12.5mm+ロックウール化粧吸音版 t=12mm+EP
小劇場(客席)
床 ナラ複合フローリング t=15mm
壁 FGB t=8+8+8mm+左官(フッコー:ベースコートIN) 鉄筋コンクリート補修+左官(フッコー:ベースコートIN) 木練付(ローズ) 花ブロック(山内コンクリートブロック)+塗装 GB t=15+15mm+EP 鉄筋コンクリート補修+EP 杉木リブ
天井 GB t=15+15+15mm+EP 鉄筋コンクリート補修+EP スギ木リブ
袖パネル 木格子(タモ)
小劇場(舞台)
床 ヒノキ集成材フローリング t=30mm
壁 プロセニアム・音響反射板:FGB t=8+8+6mm+左官(フッコー:ベースコートIN) FGB t=8+6+6mm+EP+スギ木リブ
大スタジオ(浮き構造)
床 ヒノキ集成材フローリング t=30mm
壁 木練付(ウォルナット)
天井 GB t=12.5+12.5mm+ロックウール化粧吸音版+EP GB t=12.5mm+ロックウール化粧吸音版+EP
小スタジオ
床 ヒノキ集成材フローリング t=30mm
壁 木練付(ハードメープル)
天井 GB t=12.5+12.5mm+EP GB t=12.5mm+EP
練習室(一部浮き構造)
床 タイルカーペット ナラ複合フローリング t=15mm
壁 GB t=12.5+12.5mm+EP 有孔FGB t=8mm+EP
天井 GB t=12.5mm+ロックウール化粧吸音版 t=12mm+EP
楽屋・楽屋廊下
床 塩化ビニルシート(サンゲツ:メガリット)
壁 鉄筋コンクリート化粧打ち放し 撥水剤塗布(菊水科学工業:シランコート L)
天井 GBt=12.5mm+ロックウール化粧吸音版 t=12mm+EP
特記事項
大劇場 1,602席 1階客席:995席(車椅子6席含)/2階席:188席(車椅子2席含)/3階席:419席
小劇場 最大300席 1階席:224席(車椅子2席含)/2階席:76席/平土間利用:最大収容人数400人
※レイアウトにより客席は変動
利用案内
開館時間 9:00〜22:00
休館日 第1,3月曜日 年末年始
問合せ tel. 098-861-7810

メブクス豊洲（本文200頁）

香山壽夫（こうやま・ひさお）
1937年東京都生まれ／1960年東京大学工学部建築学科卒業／1965年ペンシルヴェニア大学美術学部大学院修了（M.Arch）／1968年九州芸術工科大学助教授／1971年東京大学工学部助教授／1973年香山アトリエ（現・香山建築研究所）設立／1982年ペンシルヴェニア大学客員教授／1986～97年東京大学工学部教授／1997～2002年明治大学理工学部教授／2002～07年放送大学教授／2008～12年聖学院大学特任教授

長谷川祥久（はせがわ・さちお）
1962年群馬県生まれ／1989年東京理科大学工学部建築学科卒業後，香山壽夫＋環境造形研究所入所（現・香山建築研究所）／2010年DIN設立／現在，香山建築研究所代表取締役所長

兒玉謙一郎（こだま・けんいちろう）
1968年兵庫県生まれ／1990年早稲田大学理工学部建築学科卒業後，久米設計入社／現在，同社建築設計部副部長

根路銘剛次（ねろめ・たかつぐ）
1976年沖縄県生まれ／1999年明治大学理工学部建築学科卒業後，香山壽夫建築研究所（現・香山建築研究所）入社／2008年根路銘設計入社／現在，同社代表取締役社長

望月麻衣（もちづき・まい）
1982年東京都生まれ／2011年東京藝術大学大学院美術研究科建築専攻修了後，香山壽夫建築研究所入所（現・香山建築研究所）

角沢聡子（すみさわ・さとこ）
1983年神奈川県生まれ／2010年日本大学大学院芸術学研究科造形芸術専攻博士前期過程修了後，香山壽夫建築研究所入所（現・香山建築研究所）

岡本賢吾（おかもと・けんご）
1981年奈良県生まれ／2007年京都大学大学院工学研究科建築学専攻修了後，久米設計入社／現在，同社建築設計部上席主査

●案内図は新建築Onlineへ
http://bit.ly/sk2201_map

所在地　東京都江東区豊洲6-4-34
主要用途　事務所　店舗　交通ターミナル
建主　清水建設

設計・監理
清水建設
統括／竹内雅彦
建築担当／今井宏　加登剛司
垣中智博　竹内萌　谷津健志
小林稜治
構造担当／久保山寛之　佐々木聡
池尻佳朗　梨本優也
機械設備担当／髙橋満博　堀哲也
大多和真
電気設備担当／菅裕之　加藤勇樹
都市計画担当／國嶋匡　丸山柚香
宮原夢未　土田冴恵子
ランドスケープ
FIELD FOUR DESIGN OFFICE＋TREEFORTE
担当／石川洋一郎
植栽設計・アートワーク
FIELD FOUR DESIGN OFFICE
担当／渡辺高史　大山奈津美　周予齊
9階テナントラウンジ内装監修
清水建設
船場
担当／馬場井康之　成富法仁
宇田葉月
照明デザイン
フェノメノン ライティング デザイン オフィス
担当／永津努
総合サイン基本計画
エモーショナル・スペース・デザイン
担当／渡辺太郎　佐野裕次
コンピューテショナルデザインテクニカルアドバイザー　重村珠穂

施工
建築　清水建設 東京支店
担当／安中健太郎　田畑研　森村隆二
前迫祐也　原哲也　北田勝久
水野尋夫　廣瀬佑樹　堀内慎一郎
坂本健一郎　大島祥平　菅原理
空調・衛生　ダイダン
担当／島崎喜彦　木村真治
電気　きんでん
担当／今村隆之　橋本智雄
9階内装　船場
担当／鈴木克也

規模
敷地面積　15,672.81m²
建築面積　10,534.63m²
延床面積　88,174.29m²
1階　8021.88m²／2階　6,959.72m²
基準階　8,125.49m²
建蔽率　67.22%（連担制度により65.39%）（許容：79.72%）
容積率　488.70%（連担制度により475.37%）（許容：480%）
階数　地上12階　塔屋1階

寸法
最高高　74,335mm
軒高　64,595mm
階高　事務室一般フロア：4,400mm／ポテンシャルフロア：4,900mm／エントランス：9,350mm
天井高　事務室一般フロア：2,900mm／ポテンシャルフロア：3,500mm／エントランス：6,960mm
主なスパン　12,800×12,800mm

敷地条件
地域地区　市街化区域地域　工業地域　防火地域　豊洲地区 地区計画
道路幅員　東20m　西50m　南40m
駐車台数　156台

構造
■本体
主体構造　鉄骨造（柱CFT）　中間層免震構造および制振構造
杭・基礎　杭基礎
■デッキ部分
主体構造　鉄筋コンクリート造（一部，プレストレストコンクリート造）
杭・基礎　杭基礎

設備
環境配慮技術
日射遮蔽　自然採光　雨水利用　潜熱顕熱分離空調　太陽光発電
CASBEE（新築）：Sランク　BELS：★5
ZEB Ready
空調設備
空調方式　潜熱処理空調機＋ファンコイルユニット方式
熱源　地域冷暖房（冷水，中温冷水，温水）
衛生設備
給水　上水：受水槽＋加圧給水方式　雑用水：受水槽＋加圧給水方式　雨水再利用
給湯　局所電気式
排水　屋内：合流（汚水，雑排水）　屋外：分流（排水，雨水）
電気設備
受電方式　22kV 特別高圧 2回線受電（本線・予備線）
設備容量　22kV特高TR　5,000kVA×2台
契約電力　2,300kW（最大：4,667KW）
予備電源　非常用発電機2,000kVA　CGS
防災設備
消火　スプリンクラー　放水型スプリンクラー　泡消火　不活性ガス消火　移動粉末消火設備
排煙　事務室：排煙（全館避難安全検証）　その他：機械排煙
その他　非常照明誘導灯設備　自動火災報知設備　非常放送設備　緊急救助用スペース灯火設備　非常用コンセント設備　避雷設備　防災センター
昇降機　乗用エレベータ（30人乗り）×10台，（13人乗り）×1台，（15人乗り）×1台　非常用エレベータ（30人乗り）×2台　人荷用兼非常用エレベータ（40人乗り）×1台，（26人乗り）×1台　カーリフト（自動車用，1・2階）×1台
特殊設備　航空障害灯設備　太陽光発電設備　建物OS（DX-Core）

工程
設計期間　2015年4月～2019年3月（都市計画設計期間含む）
施工期間　2019年4月～2021年8月

外部仕上げ
■オフィス棟
屋根　改質アスファルト防水（イーテック：ハルeコート）　外断熱密着工法　押えコンクリート　シート防水外断熱工法（田島ルーフィング：VIT-U820V）　アトリウム上部屋根：R-T拘束構法（ステンレスシーム溶接工法）（三晃金属）他
外壁　3～11階スパンドレル：GRCパネル 超低汚染型フッ素樹脂塗装（ニチアスセムクリート）　免震層：PC板（エスシー，プレコン）　1・2階低層部，3～11階機械室，12階：ALC フッ素樹脂塗装（一部，平滑）（住友金属鉱山シポレックス，クリオン）　1・2階低層部：押出成形セメント板 フッ素樹脂塗装（ノザワアスロック，一部アスロックグリーンウォール）
屋外階段（横森製作所）　手摺り：スチールFB SUSメッシュ塩害仕様（雅）　スチール竪子手摺り（ナカ工業）
外壁・バルコニー軒天　高耐食性めっき鋼板 フッ素樹脂焼付塗装
交通広場デッキ　コンクリート打ち放し フッ素樹脂塗装　柱：ラクツム3Dプリンティング型枠 フッ素樹脂塗装
開口部　3～11階：アルミユニットサッシ（昭和リーフ）　1・2階店舗部，12階：アルミサッシ（不二サッシ）　2階エントランスホール：SSGリブレス構法（旭ビルウォール）　各階：ステンレスサッシ（ナブコシステム）
外構　インターロッキングブロック　コンクリート平板ブロック舗装（東京トクヤマコンクリート）
■交通広場
車道　半たわみ性アスファルト舗装
歩道　インターロッキングブロック（東京トクヤマコンクリート）
デッキ　道路：半たわみ舗装セメントミルク舗装（江東区仕様）　防護手摺り　歩道部分：煉瓦ブロック（江東区仕様）

内部仕上げ
■オフィス棟
2階エントランスホール，ラウンジ，貫通通路
床　炻器質タイル（ダイワセラミックス）　コンクリート研ぎ出し
壁　炻器質タイル（ダイワセラミックス乾式工法）　アルミカットパネル フッ素樹脂焼付塗装　アルミカットパネルVB フッ素樹脂焼付塗装（雅）
天井　特注エキスパンドメタル（キンキテック）
1階エントランスホール
床　花崗岩
壁　炻器質タイル（ダイワセラミックス 乾式工法）　アルミ曲げパネル フッ素樹脂焼付塗装
天井　アルミカットパネル・アルミルーバー型材 フッ素樹脂焼付塗装
12階アトリウム
床　タイルカーペット（一部，OAフロア）
壁　GB-R t=12.5mm EP-2塗装
天井　アルミカットパネル フッ素樹脂焼付塗装　一部，GB-R t=12.5mm EP-2塗装
3～11階アトリウム（通路部）
床　コンクリート無機質高分子塗装（大日技研工業：ランデックスコート）
壁　GB-R t=12.5mm EP-2塗装仕上げ　一部，化粧塩化ビニルシート　吹抜部：スチール曲げパネル t=1.6mm アクリル焼付塗装（裏側：ロックウール吹き付け）（角藤）
天井　特注アルミエキスパンドメタル　Mバー天井素地　一部，アルミ曲げパネル アクリル樹脂塗装
3～11階アトリウム（コラボスペース）
床　OAフロア H=150mm（OM機器ウッドコア）タイルカーペット（東リ）
壁　GB-R t=12.5mm EP-2塗装　一部，ホワイトボードシート
天井　デッキプレート現し（内部黒色塗装）
4～8，10階事務室（一般フロア）
床　コンクリート金ゴテ仕上げ　OAフロア H=15mm（OM機器ウッドコア）
壁　GB-R t=12.5mm EP-2塗装
天井　640mm角 システムグリッド天井
3・9階事務室（ポテンシャルフロア），11階事務室（ハイポテンシャルフロア）

床　コンクリート金ゴテ仕上げ
壁　GB-R素地
天井　デッキプレート現し

3〜11階トイレ
床　長尺塩化ビニルシート
壁　ビニルクロス　一部，化粧塩化ビニルシート貼り　装飾塗材
天井　GB-R t=12.5mm EP-2塗装　一部，化粧塩化ビニルシート

1，2階店舗
床　コンクリート金ゴテ仕上げ
壁　アルミサッシ フッ素樹脂焼付塗装(不二サッシ)　柱部：アルミカットパネル　化粧塩化ビニルシート貼り
天井　デッキプレート現し

提供／清水建設

ミチノテラス豊洲鳥瞰パース.

今井宏(いまい・ひろし)
1972年栃木県生まれ／1994年北海道大学工学部建築工学科卒業／1996年同大学大学院工学研究科建築工学専攻修了後，清水建設入社／現在，同社九州支店設計部部長

加登剛司(かと・つよし)
1970年大阪府生まれ／1994年京都工芸繊維大学工芸学部造形工学科卒業後，清水建設入社／現在，同社設計本部プロジェクト設計部グループ長

垣中智博(かきなか・ともひろ)
1991年大阪府生まれ／2013年工学院大学工学部建築学科卒業／2015年同大学大学院修士課程修了後，清水建設入社／現在，同社設計本部プロポーザル・ソリューション推進室プロジェクト計画部

國嶋匡(くにしま・ただし)
1963年兵庫県生まれ／1987年京都大学工学部建築学科卒業／1989年同大学大学院工学科研究科修了後，清水建設入社／現在，同社設計本部プロポーザル・ソリューション推進室開発計画部部長

PROFILE

山崎泰寛(やまさき・やすひろ)
1975年島根県生まれ／1998年横浜国立大学教育学部卒業／2005年京都大学大学院教育学研究科修士課程修了／2007〜12年建築ジャーナル編集部／2013年京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科博士後期課程修了，博士（学術）／2014〜16年京都工芸繊維大学KYOTO Design Lab／現在，滋賀県立大学准教授，京都市立芸術大学非常勤講師

石田潤一郎(いしだ・じゅんいちろう)
1952年鹿児島県生まれ／1976年京都大学工学部建築学科卒業／1981年同大学大学院博士後期課程修了／1981〜95年同大学助手／1995〜2001年滋賀県立大学助教授／2001〜18年京都工芸繊維大学教授／2018〜21年武庫川女子大学客員教授／現在，同大学教授

倉方俊輔(くらかた・しゅんすけ)
1971年東京都生まれ／1994年早稲田大学理工学部建築学科卒業／1996年同大学大学院理工学研究科建設工学専攻修士課程修了／1999年同大学大学院理工学研究科建設工学専攻博士課程満期退学／現在，大阪市立大学大学院工学研究科都市系専攻准教授

村上春樹(むらかみ・はるき)
1949年京都府生まれ／1975年早稲田大学第一文学部卒業／1979年『風の歌を聴け』で群像新人文学賞を受賞しデビュー／短編小説，エッセイ集，紀行文，翻訳書など多数執筆

家成俊勝(いえなり・としかつ)
1974年兵庫県生まれ／1998年関西大学法学部法律学科卒業／2000年大阪工業技術専門学校卒業／2004年〜ドットアーキテクツ共同主宰／現在，京都芸術大学教授

山極壽一(やまぎわ・じゅいち)
1952年東京都生まれ／1975年京都大学理学部卒業／1980年同大学院理学研究科博士後期課程単位取得退学，理学博士／ルワンダ共和国カリソケ研究センター客員研究員，日本モンキーセンター研究員，京都大学霊長類研究所助手，京都大学大学院理学研究科助教授，同教授，同研究科長・理学部長を経て，2020年まで第26代京都大学総長／人類進化論専攻．屋久島で野生ニホンザル，アフリカ各地で野生ゴリラの社会生態学的研究に従事／日本霊長類学会会長，国際霊長類学会会長，日本学術会議会長，総合科学技術・イノベーション会議議員を歴任／現在，総合地球環境学研究所所長，環境省中央環境審議会委員を務める

橋爪紳也(はしづめ・しんや)
1960年大阪府生まれ／1984年京都大学工学部建築学科卒業／1986年同大学大学院工学研究科修士課程修了／1990年大阪大学大学院工学研究科博士課程修了／1990年京都精華大学人文学部専任講師／1995年同大学人文学部助教授／1999年大阪市立大学文学部助教授／2006年同大学都市研究プラザ教授，同大学文学研究科教授／2008年大阪府立大学産学官連携機構特別教授／現在，同大学研究推進機構特別教授／2008年〜大阪府立大学観光産業戦略研究所所長，工学博士（環境工学）

山田紗子(やまだ・すずこ)
1984年東京都生まれ／2007年慶應義塾大学環境情報学部卒業／2007〜11年藤本壮介建築設計事務所勤務／2013年東京藝術大学大学院美術研究科建築専攻修了／2013年〜山田紗子建築設計事務所代表／現在，京都大学非常勤講師他

案内図がwebに移行しました．

新建築のDATA SHEETの案内図はウェブページでご覧頂けるようになりました．新建築Onlineの各作品ページからはその場所へ直接リンクしています．専用案内図アドレスhttp://bit.ly/sk2201_map（1月号）からもご覧頂け，その月に掲載された作品の場所を一覧できます．

ルドヴィカ＆ロベルト・パロンバがデザイン ZUCCHETTI社の水栓に新色ラインナップ

セラトレーディング（株）は，ミラノを拠点とする建築家のルドヴィカ＆ロベルト・パロンバによるデザインのZUCCHETTI社の水栓に新色を追加ラインナップ．円筒をベースに水栓の普遍的なかたちを具現化した「PAN」にはエンボスドマットブラックとブラッシュドニッケルの2色が，ソフトさとシャープさを絶妙なバランスで取り入れた「JINGLE」にはさらにエンボスドマットホワイトを加えた計3色が追加．

セラトレーディング（株）
tel:03-3796-6151
https://www.cera.co.jp

「PAN」（エンボスドマットブラック）価格：97,500円（税抜）．

「JINGLE」（エンボスドマットホワイト）価格：73,500円（税抜）．

木の温もりが実感できる新素材を活用 大型テーブル「silta」発売

（株）イトーキは，木の温もりが実感できる新素材を活用した大型テーブル「silta（シルタ）」を発売．同社新開発の繊細に貼り合わされた3mm厚の天然木素材を用いた「厚突単板」は，無垢材に近い風合いや木の温かみが十分感じられる厚さと，加工しやすさを両立し，天然素材のテーブル天板が実現．また，東北地方の森林産地や木材市場等との独自のネットワークにより，高品質な木材の安定供給と地域貢献を行なっている．

（株）イトーキ
tel:03-6910-3910
https://www.itoki.jp/

製品イメージ．ロングスパンで中間脚やビームを必要としない（6m幅まで）構造を開発．スチール製の脚は「橋」をモチーフとしている．

箔工芸作家と照明デザイナーがコラボ 伝統技術を昇華した照明「月繭」

文化・アート・趣味領域に特化したサービスを提供するミューゼオ（株）は，箔工芸作家の裕人礫翔（ひろと らくしょう）氏と照明デザイナーの遠藤道明氏がコラボレーションした照明「月繭（つきまゆ）」を発売．ろうそくや行灯の時代の光をイメージし，シェードは裕人礫翔氏がひとつひとつ手作業で仕上げた．シェードの表面は月面のような凹凸を，裏面には流線型の模様を描いている．

ミューゼオ（株）
pr@muuseo.jp
https://muuseo.com

24金の金箔を貼った「月繭 金」（左，価格：650,000円）と，プラチナ箔を貼った「月繭 白金」（右，価格：750,000円，共に税込・送料別）．受注生産で，納期はオーダーより3カ月前後．（製品サイト：https://factory.muuseo.com/pages/tsukimayu）

MONTURAと隈研吾氏によるデザイン 「刺子ジャケット2021」発表

エアモンテ（株）が販売展開するイタリアのアウトドアブランドMONTURAは隈研吾氏と協働しデザインした「刺子ジャケット2021」を限定受注販売．東北の伝統技術である刺子を参考にデザインされ，MONTURAの技術とサスティナビリティの視点で選定された素材を使用．日本でのジャケット販売による収益は同氏が東日本大震災復興に携わる宮城県南三陸町を拠点に活動するNPO法人「Women' s Eye WE」へ寄付される．

MONTURA
https://montura.jp/sashikojacket/index.html#page_top（特設サイト）

ヨーロッパと日本それぞれで83着限定で受注販売（現在は完売）．ヨーロッパでの販売の収益はモンゴル・ウランバートルのGER for Lifeへ寄付される．価格：110,000円（税込）．

クリーニング可能な椅子張り用レザー Cortina Leathers社より「Allora」発売

(株)リソース・インターナショナルは，アメリカの本革メーカーであるCortina Leathers社よりクリーニング可能な椅子張り用レザー「Allora」を発売．防汚技術「クリプトン加工」を本革に施し，革本来の風合いや手触りを損なうことなく，防汚性・撥水性・抗菌性を実現．拭き掃除が可能になり，ウイルス対策として有効な消毒剤の使用も可能．

製品イメージ．革が放つ光沢と色の美しさにこだわりぬいたコレクションで，深みのある13色展開．

(株)リソース・インターナショナル
tel:03-5689-0725
http://www.resource-inter.com/

3Dプリンターによるバイオマスプラスチック素材のオフィス家具デザイン「Up-Ring」発表

(株)オカムラは，慶應義塾大学SFC研究所ソーシャル・ファブリケーション・ラボと共同で3Dプリンティング技術，バイオマスの単一材料等の技術利点を最大限に生かすデザインの研究開発を行っている．「Up-Ring(アップリング)」の材料となるバイオポリエチレンは，生育の過程でCO_2を吸収(固定)するサトウキビからつくられ，温暖化防止等に貢献する．

製品イメージ．

(株)オカムラ
0120-81-9060
https://www.okamura.co.jp

淡く輝くアルミ材が風景を映し出す「Alumiére」に「外部仕様」を追加

菊川工業(株)は，光輝アルミ合金材に光沢やテクスチャを加えた「Alumiére(アルミエール)」に「外部仕様」をラインナップ．従来ステンレス等で表現していた金属の光沢感を約3分の1の重さのアルミで実現したシリーズで，ブライトシルバー+複合被膜とハイブライトシルバー+複合被膜の光沢感の異なる2種類を追加．

製品イメージ(ハイブライトシルバー+複合被膜)．

菊川工業(株)
tel:047-492-0144
https://www.kikukawa.com

安全で効率的に波形スレート屋根を改修できる金属屋根「エコウェーブ」発売

(株)カナメは，波形スレート屋根の改修屋根材「エコウェーブ」を発売．既存屋根に新しい金属屋根を重ね葺きするカバー改修工法でありながら，既存屋根に穴をあけない「無塵金具工法」を採用することで，アスベスト繊維を飛散させず安全に工事ができる．「嵌合固定工法」と「ビス止め固定工法」を取り入れ，効率的に強力に屋根を固定する．

製品イメージ．従来は屋根強度が足らず太陽電池が設置できなかった波形スレート屋根の建物にも新たに太陽電池の搭載が可能．

(株)カナメ
tel:028-660-3831
http://www.caname.net

ビル向けアルミ防火内窓の大臣認定防火設備「LAYLUS（ウインドウ仕様）」発売

YKK AP（株）は，単窓，連窓の開口において室内側で防火性能を確保する，大臣認定防火設備（個別認定）のビル向けアルミ防火内窓「LAYLUS（ウインドウ仕様）」を発売．網のない耐熱強化ガラスを採用し，防火設備が必要とされる外窓の室内側に設置することで，防火窓でありながら窓辺のクリアな眺望性と透明感のある建物の外観意匠を実現できる．

施工イメージ．最大製作可能サイズ（単窓）はW1,800×H3,000mm．

YKK AP（株）
0120-72-4134
https://www.ykkap.co.jp

寒い時期のヒートショック対策に壁掛け型の遠赤外線暖房機「ウォールヒート」

（株）コロナの「ウォールヒート」は，脱衣所や洗面所等の狭いスペースに設置可能な壁掛け型の遠赤外線暖房機．新聞紙1面の約2分の1（幅525×高さ204×奥行178mm）とコンパクトな本体サイズで，遠赤外線カーボンヒーターを採用し，スイッチオンと同時に素早く運転し，輻射熱と温風で身体を温める．人感センサーを用いた自動運転も可能．

「CHK-C126A」価格：74,800円（税込，設置工事費別）．

（株）コロナ
tel:0256-32-2111
https://www.corona.co.jp/

ドイツの照明ブランドIngo Maurer社の新製品「24 Karat Blau Flat」発売

モダン輸入照明を扱うスタジオノイ（株）は，ドイツの照明ブランドIngo Maurer社の新製品「24 Karat Blau Flat」を発売．「24 Karat」シリーズに新たに加わった薄型のWall Lamp仕様で，複数のシェードを自由な位置で組み合わせることができる．薄い金箔をアクリルパネルで挟んだシェードは，透過する光源を柔らかな青色に見せる．

価格：50,600円（税込）．
追加シェード価格：29,700円／枚（税込）．

スタジオノイ（株）
tel:03-5843-0260
https://www.studio-noi.com

大阪府・南船場に関西エリア初の直営店「Time & Style Osaka」オープン

（株）プレステージジャパンは，関西エリアでは初となる直営店舗「Time & Style Osaka」をオープン．店舗は大阪府・南船場の問屋街に位置し，1963年竣工の大阪写真会館の1階フロアを改装．本店舗を関西エリアの拠点とし，日本各地の伝統を継承した新作家具を揃え，住宅から飲食店やホテル等の商業空間にまで至る豊かなインテリアを提案する．

「The horizon of the floating layer」．
「Time & Style Osaka」の住所は大阪市中央区南船場2-7-14 大阪写真会館1階，営業時間は11～19時（水曜定休）．

Time & Style
tel:06-4708-3441
www.timeandstyle.com

丈夫な骨組み構造と折板屋根 公共向け通路屋根「ビームスシェルター」発売

三協立山（株） 三協アルミ社は，公共向け通路シェルター「ビームスシェルター」を発売．丈夫な骨組み構造と折板屋根で柱間隔5,000mmを実現．折板の谷間に600mm間隔で垂木を配置し，梁のない天井空間をつくり出す．建築基準法に基づく耐風圧強度に適合し，強風地域や積雪地域にも設置可能．サンシルバー，アーバングレー，ブラックの3色展開．

スタンダードタイプ施工イメージ．サンシルバー（本体）とシルバー（折板屋根）を使用．天井材付きのプレミアムタイプも選択可能．

三協立山（株） 三協アルミ社
0120-53-7899
https://alumi.st-grp.co.jp

開放感のあるガラスフェンスが製作できる自立ガラスフェンス用金物「Prime」販売

スガツネ工業（株）は，自立ガラスフェンス用金物バラストレイド「Prime（プライム）」を販売．ガラスフェンス1mあたりわずか30分で施工でき，ガラスの角度調整機構を搭載したセッティングブロックにより，仕上がりや作業時間を標準化．継ぎ目に支柱を必要としない仕様で，外の眺めや景観を損なわない開放感のあるガラスフェンスが製作可能．

施工イメージ．

スガツネ工業（株）
tel:03-3864-1122
https://www.sugatsune.co.jp/

空間シミュレーションシステム「TOLI Ai Simulator Image Fit」公開

東リ（株）は，インターネット環境下で空間シミュレーションができる「TOLI Ai Simulator Image Fit」を公開．任意の空間に同社内装材をAi合成して，簡単に施工イメージを作成することができるシミュレーションシステムで，あらかじめ用意されている空間画像だけでなく，スマートフォン等で撮影した空間にも対応．

システムのイメージ．

東リ（株）
tel:06-6494-6605
https://www.toli.co.jp/imagefit/

粘着剤付化粧フィルムの見本帳「2021-2023 リアテック vol.11」発刊

（株）サンゲツは，粘着剤付化粧フィルム「2021-2023 リアテック vol.11」を発刊．不燃仕上げを求められる壁面や金属下地，柱やドアにも使用できるフィルムで，新たに低価格帯の木目シリーズ「BASIC WOOD（ベーシックウッド）」を加えた他，豊富なデザインや機能性を拡充し，幅広いシーンで使用できる全863点をラインナップ．

"自然から学んだかたち"をコンセプトにデザインした「自然の輪郭」（Mizuoto）施工イメージ．

（株）サンゲツ
tel:052-564-3314
https://www.sangetsu.co.jp

新建築1月号 広告目次

広告掲載企業

求人広告掲載企業

新建築社ホームページ　https://japan-architect.co.jp

定期購読のご案内

新建築社では、毎号読者の皆様へ直接お届けする、便利な年間定期購読のお申し込みを受け付けております。日本全国どこでも、送料無料にてお届けします。

定期購読料

誌名	発売日	冊数・条件	料金
新建築	毎月1日発売	12冊（1年間）消費税込 送料無料	29,040円
新建築 住宅特集	毎月19日発売	12冊（1年間）消費税込 送料無料	29,040円

■お申し込み方法

〈インターネットでのご注文〉
新建築ショップからお申し込みができます。
詳細については、
下記ホームページをご覧ください。
https://japan-architect.co.jp

〈FAXでのご注文〉
ホームページからダウンロードした申込書（PDF）で受け付けております。
ご記入の上、弊社年間定期購読係までお送りください。
詳細はホームページをご覧いただくか、年間定期購読係にお問い合わせください。

＊送料は無料です。
＊特別定価の際の差額分は弊社で負担いたします。
＊臨時増刊、別冊は年間定期購読には含みません。

〈書店でのご注文〉
最寄りの書店にてお申し込みください。
＊お申し込み方法は書店によって異なります。書店に直接お尋ねください。
＊定期購読の取り扱いを行っていない書店もありますのでご注意ください。

■お願い

□お申し込みの際は、ご希望の購読開始の月号を明記してください。
□複数年でのお申し込みは受け付けておりません。購読のご継続については、弊社より別途ご案内いたします。
□お届け日は、地域によって書店での発売日より遅れることがあります。あらかじめご了承ください。

■個人情報利用目的について

年間定期購読のお申し込みに際し弊社が取得したお客様の個人情報は、定期購読に関する必要な業務（発送、継続のご案内等）の他、新刊や各種イベント（建築セミナー、展示会等）のご案内、また、お客様個人を識別できない統計資料の作成等に使用する場合があります。なお、弊社が取得したお客様の個人情報は、弊社の内部資料として厳重に保存、管理し、第三者に提供することはありません。

●お問い合わせ
〒 100-6017
東京都千代田区霞が関三丁目2番5号　霞が関ビルディング17階
株式会社 新建築社
年間定期購読係（平日 9:30〜17:30）
TEL：03-6205-4380　FAX：03-6205-4386

月評

家成俊勝

今月号から月評を担当することになった．掲載されている建築は，それぞれに完成度が高く設計者や施工者，その他のさまざまな関係者の力量には頭が下がる．同時に建築はその時々の社会を目に見える形にしていることがよく分かる．月評を書けば自分たちが到達できてないことを棚に上げて書くこともあるため，自分たちの首を絞めることになるのだがそれを引き受けた上で，設計者の努力のうちに建築を成立させ，編集者の熱意によって誌面ができていることに尊敬の念を持っていることを前提に，折角の機会なのでいろいろと事務所のメンバーと一緒に考えたことを書きたいと思う．

そんなに遅くない夜の路上でスケボーに興じているとすぐに警察がやってくる．ふたりがかりでスケボーをやめるよう青年に詰め寄り，そのあとは閑散とした景色に変わる．グループでダンスの練習をしていた女性も，大した音量ではないものの音楽を流していたため同じ目に遭っていた．大阪のビジネス街での話．すぐ近くに住んでいる人はいないはず．夜で人通りもまばら，誰かから通報があったのか．ほどなくして，「スケートボード禁止」というデカデカとした文字が塀に貼られ，昼も夜も通行人が通り過ぎるだけの風景となる．路上を使った小さな行動は，目線が揃うがゆえいろいろな人の目に入りやすいのだろう．また，実証実験ということで，寒空の下，簡易なパラソルと椅子がまばらに設置される．コーヒーすら売られていない．持ち帰り専用のコロッケのフードトラックが1台．芋が喉に詰まると思う．最初から失敗しないと分かっている実験と言えない実験が行われる一方で，個人や団体のインフォーマルなちょっとした活動は制限される．それでよいのだろうか．

天神ビジネスセンター，容積率の規制緩和によって都市の中にひと際大きいビルが建っている．建物ボリュームを一部削ることで路上をビルに引き込んでいる．足元に見事な配慮があるわけだが，市場原理によって知らぬ間に上空に建ち上がり，風景を激変させるこの大きさには誰も何も言わないのだろうか．大阪と福岡では場所が違うが，開かれた路上での厳しくなる一方の制限に対して，目線より遥か上の特定の人の使用のみ許可される場所は緩和されている．**Island and office 八丈島**は，都市部でオフィスを拡張するのとは違うやり方で離島に働く場所をつくることで創造力を引き出すことを目的にしている．たしかによいアイデアは思いつくかもしれない．しかし働く場所は違っても働く内容は変わりそうにない．そして都会の只中にいて自然は遠くに望むものであるが，この場所は自然の只中にいて自然を近くに望むものでしかない．都市とは違った方法で自然と関係を結ぶ方法がありそうだ．

木陰雲は同じボキャブラリーでいききりながら，既存庭を読み解く作業と，その庭に呼応する形を導く膨大な作業量があると思われるが，それがあからさまに見えないところがよい．どう焼いたのかとても興味が湧く．焼いた後にどんな形状になるかはある程度分かっても，細かくは予測できないと思われる．底にあるルールがしっかりしていれば，予測外の仕上がりも許容できる．庭の植物を完全にはコントロールできないように，この屋根も完全にコントロールできない．その相性のよさが何かこの庭が建築によって拡張されたように見えるのかもしれない．

NAOTO FUKASAWA ATELIERは一転して隅から隅まで完璧に“デザイン”されている．基壇の石垣の上に縦長内開き窓が規則正しく並ぶ美しいプロポーション．内外のあらゆるディテールに抜かりがなさそうだ．ずっと写真を見ていると少ししんどくなってきた．隙がなさすぎて居場所が見つからない．まるで大手ハウスメーカーがつくるハイエンド向けの商品住宅のように見えなくもない．深澤直人さんという偉大なプロダクトデザイナーの建築はやはりどこか最高の質を持つ商品という雰囲気がまとわりつくのだと思う．この完成されたプロダクトはなんかイジりにくいし，こう使ったろ，とかああ使ったろとか考えにくい．DVDプレイヤーはDVDプレイヤーでしかなく，枕には使えない感じと似ている．先日，元dot architectsのメンバーが引っ越した家に遊びに行った．1階と2階は工事中で仕事場，3階では小さな子どもがちゃぶ台で納豆を食べ散らかし，着ているトレーナーや床の畳に納豆が落ちていて，その向こうではオモチャが，散らかってる．畳の間をふたつブチ抜きで使っているだけなんだけど，それぞれの領域がバラバラのようでもあり，一体的でもありその同時に存在する混沌を面白いと思った．もうひとつ思い出されるのはドナルド・ジャッドのニューヨーク・ソーホーの住宅兼仕事場兼ギャラリー．ただのデカい箱．目の前に1枚の写真がある．ジャッドが住居として使っている場所で，床には井桁に組まれた木の平板の上に置かれたマットレス，その平板の端に積まれた本，床に置かれたコップとボトル，テレビ，レッドアンドブルーチェア，その他何か分からないものたち．多くのものが床にただ置かれていて，その置かれたものがジャッドの生活を見せてくれる．何がこの質の差を生むのか．あんなミニマルなバチバチの作品をつくるジャッドと，ものをバラバラとレイアウトしたジャッド，ふたりのジャッドがいるのがよい．「こんな風に使いたい」とユーザーを能動的にさせる建築とはどんなものなのかを考えさせられた．建築家の「キラーコンテンツ」とはなんぞやと思いつつ，もはや誰もが憧れる1点に収束するバニシングポイントなどというものは存在しないことは多くの人が分かっている．

奈良井宿 古民家群活用プロジェクト．資源の循環という話はよいことばかりのように聞こえるが，注意深く見る必要がある．まずこのプロジェクトに地域の地べたで暮らしてる人の顔が見えてこない．行政と企業がタッグを組み，関わっているプロジェクトメンバーも名前が知られた地域外の人が先導している．竹中工務店が取り組んでいる森林グランドサイクルは，都市部の建物を木造化・木質化することで森林，林業，地域の活性化を目標にしているが，コモンである自然を私有化，商品化していくことに繋がらないだろうか．そもそも循環系の中にあった暮らしを産業が分断してきた．そしてまた気候変動に対して取り組まねばいけない大企業が地域に再介入していく．そうでもしないと立ちゆかない状況も同時にあると思うので，このプロジェクトの今後を見守りたい．ここで長く暮らしてきた人や商いを行ってきた人は，この動きをどう考えているのか気になるところである．このプロジェクトと合わせて考えたいのが**高浜町6次産業施設UMIKARA**．こちらは地元の方々とワークショップや小さな実践を重ねて丁寧に活動を行ってきたように見える．しかし，でき上がった建築がミニミニ港湾開発のようで暮らしと海を分断しているように見えてしまう．風への配慮か．あるいは実際に見るともう少しよいボリューム感なのか．海と人間の関係は，物流拠点となる港湾開発によって変容させられてきた．人の海への想像力が減衰してきた原因のひとつがそこにある．民家を繋ぐ路地から海への視線の抜けを確保しなかった理由や建物のボリューム検討について聞いてみたい．そして白くて眩しそう．

山極壽一

今月から月評を担当することになりました．私は建築とは縁もゆかりもなく，人間以外の霊長類，特にゴリラのフィールド研究をやってきました．ゴリラの側から人間を眺めると人間の不思議な特徴が分かります．そこで，建築を人類の進化という観点から見てみようと思います．

人類はサルや類人猿という霊長類の一種で，祖先は6,500万年前に夜の樹上で暮らすネズミほどのちっぽけな動物でした．その頃，樹上は鳥とコウモリが支配していました．サルの祖先は彼らのように飛ぶ道を選ばず，枝にしがみついて体を大きくし，昼の世界に進出して，フルーツや葉，虫に手を伸ばし，鳥の食卓に参加するようになったのです．その祖先の特徴を現代の人間もまだ色濃く残しており，立体視や色彩視，把握能力のある手指など，3次元空間で自在に動く能力を保持しています．空を飛ぶことに憧れるのも，都会のジャングルで高層ビルの最上階から見下ろす景色を楽しむのも，樹上生活の名残なのです．

さて，では家という建築物はいつ，いかなる背景で人類の進化史に登場したのでしょうか．夜行性の原始的なサルは木の洞に巣をつくり，そこで子どもを産んで育てます．昼行性になると群れをつくって広く歩き回る必要が生じて，巣をつくらずに毎晩寝場所を変えて枝の上で眠るようになりました．体を大きくしたゴリラやチンパンジーのような類人猿は，体を支えるベッドを樹上や地上につくって，休むようになりました．毎晩違う場所にベッドをつくるのは移動生活のためと，寄生虫の発生を避けるためでもあります．

700万年前にチンパンジーとの共通祖先から分かれた人類の祖先も，農耕・牧畜が始まる1万2,000年前までは狩猟採集を主とした移動生活を送っていました．現代の狩猟採集民も移動するためになるべく所有物を持たず，自然の材料で簡素な構造をした家をつくります．類人猿のベッドと違うのは，地上につくられ，屋根と壁があることです．類人猿のベッドも森の中につくられるので樹冠が屋根替わりになるし，ゴリラは地上にベッドをつくることもあるので，大きな違いは壁があることでしょう．人間の集団は複数の家族が集まるので，家族同士，あるいはお互いの人間同士のプライバシーを守ることに主眼が置かれていると私は考えています．

特に，性の秘め事を人間は隠す必要がありました．人間以外の霊長類は食べる時に分散し，セックスをする時には集合します．ところが，人間は逆で，食べる時に集まり，セックスはカップル同士で離れ合い，あるいは障壁を設けて隠します．これは，複数の男女が共に暮らし，発情兆候が表れない人間の社会では，性の交渉を不可視化しなければ乱交状態になりかねないからです．家族と共同体という二重構造を保つために，壁をつくって性の営みを隠すことが必要になったというわけです．

その目的に最も合致した構造が円錐型の家です．周囲に円状に灌木を立てて，その先を中央で結び，葉っぱを載せて表面を覆う．雨風をしのげるし，外からも見えない．これがアフリカの熱帯雨林に住むピグミー系狩猟採集民の住居です．つくるのに1時間もかからない．熱帯雨林の中は風雨が弱まるので，これで十分なのです．四方を壁で囲い，その上に屋根を載せるのは，熱帯雨林の外で強度を増す必要に応じてつくられた構造だと思います．

実は，現代の都市もこの原初的な家の構造を組み合わせてつくられていると私は思っています．箱形の部屋を組み合わせ，屋根を載せる．そこかしこに円形の壁や階段を配置して，視覚を多様に方向付ける．それは立体的に人びとが混在するのを助け，樹上で進化した霊長類の生息空間を見事に模倣しています．

前置きが長くなりましたが，そういった視点から『新建築』の特集を眺めると，まるで人類の進化の歴史を辿るようで感慨深いものがあります．まず**天神ビジネスセンタービル**は箱の中身を隠さず，それを細胞のように組み立てました．外観は鏡のように太陽光を反射させ，周囲を映し出して自己主張しています．都会のジャングルの中に光り輝く塔の役割を果たしていて，公共のシンボルにふさわしい．一方，**木陰雲**はジャングルの天蓋そのものを再現しました．薄暗いジャングルの中では木の幹が黒く見え，樹冠の明るさが際立ちます．どっしりとした構造物にからまる多様な植物が，静寂と躍動を与えてくれる．不思議な空間です．霊長類としての人間は，この光が多彩に射し込む空間に思わず心を揺さぶられるのではないでしょうか．また，**Island and office八丈島**は，本物のジャングルの中に建てられた樹上の家です．周囲の木々と調和しながら，樹冠にやってくる鳥や虫との対話を楽しめる，まさに霊長類の感性を再現してくれるつくりになっています．

笛吹みんなの広場は，人間の住居の常識を破り，壁をつくらずに柱と屋根だけの構造物です．これは神殿を模倣したからでしょう．神がいるところはお互いの存在や行為を隠せないから，壁をつくる必要はないのです．神のいるケの世界は海なので，それを広場に見立て，市街地で営まれる生活から人びとが解放されて，非日常的なイベントや自然に出合うことを目指しています．**道の駅しょうなんてんと**も似た発想からつくられています．公共の場は壁を設けず，できるだけ見通しのよい空間であるべきで，屋根が大きいのはまるでカトリックの教会のような印象を与えます．

システアナ美術館の「第四室」は霊長類の常識を破る水との調和を目指しています．水はこの地球の生命圏の安定を図る大切な要素であり，太陽との間で生物に不可欠な環境をつくり出しています．上下を水の層で囲んだこの部屋はその不思議を体験させてくれるでしょう．

提供：三分一博志建築設計事務所

また，日本の伝統的な木造建築を利用した**奈良井宿 古民家群活用プロジェクト**，**草津温泉 地蔵地区周辺再整備**，**湯河原惣湯 Books and Retreat**は，霊長類が親しんできた木との優しい触れ合いを通して自然や文化に対する人間の心の中に眠る根源的な情緒を抱かせてくれる試みです．森林資源の利活用を通じて二酸化炭素の排出を抑える効果もあり，これからの時代にふさわしい取り組みだと思います．最後に，**NAOTO FUKASAWA ATELIER**の周囲の環境との共感を重視した建築は素晴らしい．近年の日本の建築は住む人の利便性ばかり考えて，周囲との調和が取れていません．これからは自然も含め，建築は周りの環境との双方向の対話が目指されるべきでしょう．

月評

橋爪紳也

今年の「月評」を担当することになった．

これまで建築評論や建築批評に関する仕事の依頼は，基本的にお断りしてきた．齢61歳になって，新建築社からの依頼を受けようと思ったのは，時代の転換期にあって，建築に関する雑誌媒体の役割を改めて考える契機となればと思ったからだ．

私は建築を，ライフスタイルや生活文化などを広く伝播する「媒体」として捉え，商業建築やディスプレイを対象とする産業史や技術史の研究を継続してきた．言うまでもなく『新建築』などの建築の専門誌は，媒体である建築を紹介するメタレベルの媒体である．リアルとフィジカルの融合が喧伝されている中，雑誌に掲載される「評論」「批評」の役割がどれほどあるのだろうか．月評を執筆する作業を通じて，よくよく考えてみたいと思う．

『新建築』は大学院生の頃，むさぼるように読んだ記憶がある．とは言っても，私が真剣に読んだのは，毎月，刊行される最新号ではない．大学の図書館にこもって，戦前から戦後のバックナンバーに目を通し，わが国の建築界が近代化する歩みを追体験した．建築史家を志す上で，必須の修業であった．

最近は大阪の戦後を再確認するべく，戦後復興期から高度経済成長期にかけての各号を古書店で買って，読み直している．たとえば大阪の戦災復興計画の方向性に関する座談記事を紹介する昭和21（1946）年2月号などは，しばしば参照する文献になっている．

昭和20年代のバックナンバーなどは，ページ数も少なく，またページをめくるたびに破けてしまうほどに紙質が劣悪である．ただ焦土から立ち直ろうとする先人の意志と強いメッセージを，各記事の行間に読むことができる．大阪の復興計画では，近世以降，干拓や埋め立てによってかたちづくった大阪湾岸の土地を掘り返して，かつての海面に戻し，その土砂で地盤沈下した市街地の嵩上げが行われた．その初期計画など，意欲的なアイデアが誌面で紹介されている．

「大阪の建築と建築家」を特集した昭和38（1963）年2月号も，常に書斎に置く1冊である．村松貞次郎先生の「建築家の大阪」など，実に面白い読み物が掲載されている．日本におけるフリーアーキテクトの発祥の地であり，プロフェッショナルな建築家がいち早く育った土地として大阪を評価する．センスのよさをいう「すい（粋）」，地味だが上品で趣がある「こうと」など，上方独自の伝統的な美意識を軸として大阪の建築界の固有性を論じるくだりなど，外から見た大阪文化論として読むことができる．

当然のことだが，竣工したばかりの優れた建築を紹介する最新号の記事も，10年，20年，30年と経過すると，歴史家の分析対象となる．いかなる建物もいかなる記事も，将来の建築史家によって，その時代とは異なる文脈で読み取られることになる．私が担当する2022年の月評も，おのずとそういう扱いになるわけだ．

大正末年，すなわち1925年8月の創刊になる『新建築』は，3年後には1世紀の節目を迎える．また昭和46年，すなわち1971年から始まった「月評」は既に，半世紀を経過して継続している企画である．これまでに同種の試みがあるのかどうか把握していないが，過去，半世紀の「月評」をすべて読み込んで視点や論点の動向を分析，独自の「建築評論史」をいずれ展開してみたいという思いもある．

前置きが長くなった．2021年12月号を読んだ感想を書いておきたい．本号は，特定の案件に焦点をあてた特集がなく，多様な作品群が掲載される1冊であった．それぞれに優れた作品だが，プロジェクトの概要や各作品のコンセプトを紹介する文章を読んでも，際立って新しい建築観を提示するものではない．

唯一，面白く読んだのが，髙橋一平氏の**論考：経験の建築**である．髙橋氏は，タイトルにある「経験の建築」という考え方と「外部からつくる」という手法を，自作**笛吹みんなの広場**に即して説明する．

笛吹みんなの広場では，海のない山梨に余白としての「海」，すなわち「街なかの砂浜（海）」「都市のなかの余白」「有のなかの無」を置き，「一度の知覚変化を及ぼすだけのオブジェ（美術的意味）ではなく，繰り返しの経験に耐え得るオブジェクト（物質的環境）になること」を目指すものとしている．

髙橋氏の文章にあって，私の心を揺さぶったのが，冒頭近くにある「現代社会は卑屈だ」という言葉である．「卑屈」とは，気力がなく品性が卑劣であり，行為が下劣であることを言う．さらには，必要以上に自分を卑しめて相手に屈服したり，妥協したり，へつらったりする態度をも意味する．「外部からつくる」という方法論の説明文の前提として，さりげなく書かれているが，目にしたことのない強い表現である．

髙橋氏は建築も，社会の「卑屈さ」に取り込まれると考えているようだ．近代以降の建築では，「外部から隔絶された清潔で快適な内部」の充実が企図された．同時に設計や計画の各局面にあっても，環境性能評価に合意形成など，「最大公約数的な指標や形式ばかりが暴走している」という認識を示す．結果として「私たちひとりひとりの思考も機械のように一辺倒で，内へ閉じていく」と感じると強調する．

このような閉塞状況を打破する手段として，「建築を外部からつくる」という方法論を提唱する．内に入り込んでしまっては，卑屈な社会に巻き込まれてしまう．そこで「通りすがりの旅人のような第三者」の立場から，「外側から回り込み，外部に建築を現す」ことが求められる．「建築の力」で外から覚醒させることで，内へ向いた私たちの意識を解き放つことが可能だと言う．

さらに髙橋氏は，「現代の神殿」，さらには「人間と自然や社会との間を取り持つ第三者」としての建築という概念を示す．「神殿」とのメタファーから建築の本質を見出そうとする視点は，『神殿か獄舎か』（相模書房，1972年）での問題提起が想起されるがゆえに新しさはない．ただ建築を「媒介」とみなしてきた評者としては，普遍的かつ興味深い論点である．もっともここでは，いかなる「神」を想定しているのかは明示されず，また「神殿」の空間造形や環境演出のあり方についても踏み込んだ論の展開はない．髙橋氏独自の「神殿論」を，いずれ深くうかがう機会があればと思う．

髙橋氏が指摘する「卑屈」という内向きの心性は，新型コロナ禍によって，新たな生活様式を強制されている私たちの心と響き合う．偶然か必然か分からないが，12月号にも，**小豆島アートプロジェクト，木陰雲，Global Bowl，Island office八丈島，システアナ美術館「第四室」，草津温泉 地蔵地区周辺再整備**など，建築の内と外を意識したプロジェクトが多くある．「新しい生活様式」のもとにあって，外部空間を豊かにすることで私たち内向きの心を解き放すことができるのか．内部と外部との関係性に関する問題提起は，普遍的かつ同時代的である．

特記なき場合，226～229頁の撮影：新建築社写真部

山田紗子

1月号より月評を担当する．自分でもどのようなものになるか想像できないが，設計者のテキストで語られていることだけでなく，写真や図面から，誤読すら楽しんで深読みしていきたいと思う．
12月号は，形を強く提案しながら，利用者の参加を自由に促したり，新たな風景をつくりだすようなプロジェクトが印象的だった．さまざまな事象を統合し背景的にふるまう建築が評価される傾向にある現代において，評価が難しいと思われがちでもある「形」．しかし，そもそも建築において形を提案しないことは不可能である．弱い形であっても，慣習に則っていても，やはり形を持ってしまう．さらに言えば都市だって，森だって，どんな背景的な存在も形の集まりである．連なる粒子のひとつひとつ，たとえば街の中のガードレールや自動販売機，森の中の根っこやキノコ，それらには唯一無二の個性的な形がある．形の集積で私たちが環境と呼ぶようなものができている．だから，形は大事である．そして形を模索することをやめてはいけないし，そこから生まれる新たな建築の開拓はやはり可能性に満ちていて，議論し続けるべきだと思う．
天神ビジネスセンターはとてつもない明るさと影を同時に抱える建物だ．大きなファサードが映し出す今まさに開発が進行している都市の風景を，小さなピースに分割し，そこには普通は語られるに足らぬような極小世界をトリミングしている．「ピクセル」に映る向かいの建物の窓やバルコニー，道路上の指示標識や通行止めの看板，通行する人びとや車の残像．これらひとつひとつをとても肯定的に，意思のある個として，映し出している．それと同時に，内側に凸凹状にセットバックしているガラス面は影になり，室内の照明がその暗さを強調する．洞窟の中に入っていくように，大きな生き物に飲み込まれるように，明るい交差点から暗い建物内へと吸い込まれそうだ．転じて夕暮れには，フラットに並ぶガラス面には都市の闇が，凸凹の面には室内の明るさが映し出される．都市の明るさと暗さが一体となり，同時に小さな世界たち（トリミングされた）が大きな世界（ファサード全体）とフラットに並ぶ．建築が天神地区のリアリティと躍動感を肯定し，都市全体を増幅しているように感じられた．
Global Bowlは五輪の期間と並行して設置されることが想定されていた期間限定のパビリオンである．私自身，夏の暑い日に訪れることができた．国連大学前の公開空地と青山通りがつくる大きなヴォイドにはっきりとしたアウトラインを保ちながらも，それらの風景を歪めにかかっていることに驚くと共に感嘆した．集成材の模様がうねるように捻じ曲げられて，圧倒的な物量感を持って置かれているということも要因のひとつだろう．コロナ禍で人通りの少ない時間帯，「人びとを絡ませる孔」には，人間というよりむしろ風景が絡め取られているように見えた．そしてそれは，見慣れた青山のビル群を，一気にまったく違う世界のものに変えてしまうぐらい，不思議な切り取り方である．Global Bowlは座ろうとすると，つるりと滑り，一気にあおむけ姿勢になってしまったり，頭をごつんとぶつけてしまう．そういうところはまったく都会的でないというか，自分の身体能力を試されているというか，ストリートファニチャー的おもてなしがまったくない．通常はたくさんの「想定」で雁字搦めになる公共空間にはない自由さがあり，これからの公共の形としての可能性を感じた．
阪急神戸三宮駅前広場も同じように小さなスケールのパビリオン的な建築である．一見ドライに，自律的に，まるでアクセサリーをつくるように，楕円形の円盤やリングを自由に連ねて造形されている．実際は駅前広場の動線に配慮され，広場の居場所として，利用のあり方を非常に丁寧に想像され，行動を引き出すようにスケールや素材の設計がなされていることが断面図やキャプションから分かる．作者テキスト「個が能動的に環境へ関与することで，個の表現が溢れ，それらが他者との関係性をつくり，社会や都市へ続いていく」という理想に強く共感した．その上で，気軽に座れるような場所などがすぐには見つからないような，もっとドライな，公共空間のあり方を考えたくなる．利用者が物（形）に対峙し，関わる方法を捉え，自らを発見するような，物も人も本当に自由な建築を想像している．
笛吹みんなの広場はGlobal Bowlや阪急神戸三宮駅前広場に比べると，かなり大きい形を提案し広大な空地に，明るい影をつくっている．広場に立つ姿は，そのように環境的であると同時に，鉄骨柱の存在感を含めとてもランドマーク的だ．そして白い柱群は切り絵を見ているような2Dなのか3Dなのか分からなくなる不思議な魅力を持っている．外としての海というイメージも深層心理的でとても面白いと思う反面，写真や図面だけでは実感が得にくく，まずは現地へ訪れてみたい．
環境的な形のあり方として，**木陰雲**は都市の庭に黒を持ち込む興味深いプロジェクトである．黒にも明るい黒と暗い黒がある．現地に訪れた時にとても明るい黒だと感じた．そして既存の樹木を避けるように穴が開けられているはずなのに，樹木が黒い構造体を貫通して伸びているように見えた．ワタリウム美術館の展示で見たドローイング（現在もパビリオントウキョウのホームページで見ることができる）では，真っ黒な生き物のような何者かが森に流れ込んで絡みついたような，つまりとても動的なもの，意思を持つ形であり，その姿は圧倒的な迫力があった．しかし実際の印象は，柱梁と板材がはっきり分かれて見えることや，開口が多いせいか，背景的な物として存在していて，焼杉は古びた構造物を模しただけのようにも見えた．構想と実現の形に少し開きがあるのかもしれない．
ヴェネチア・ビエンナーレ ロシア館の改修と**上原屋-BYAKU Narai-**は，リノベーションプロジェクトであり，双方改修のあり方を金継ぎにたとえている．どちらも古いものと新しいものをフラットに扱って，さまざまなマテリアルを投入しながら丁寧に全体をつくっている．

撮影：Marco Cappelletti

とても共感できると同時に，金継ぎ的改修はもっと可能性があるのでは，とも感じる．金継ぎの器が持つひび割れのいびつさと，それを最高に鮮やかな黄金という色で強調するということ，醜と美が拮抗している有様，そしてそれが全体性をまったく別の次元に持っていくということ．そのような建築や改修のあり方をもっと考えてみたい．

新型コロナウイルスの影を引きずりつつ，新年を迎えました．この間，リアルとバーチャルの境目なく，さまざまな関係性の模索が行われてきたように思います．それと同様に，敷地境界や時間を超えて，関係性から考えられる建築に，新しい可能性が見えてきたように思います．今月紹介させていただいた八戸市美術館（70頁）では，学ぶこと，つくること，使うことが同時に進行するような建築で，いろんな関係の取り方がフラットで，これまでの建築とは違う成り立ちを表しているように思いました．一方，ボッコーニ大学新キャンパス（88頁）とラ・サマリテーヌ（102頁）ではまちそのものが建築になる様子が見られます．
今年で新建築創刊97年，あと3年で100年を迎えます．創刊当時の様子を連載「関西モダニズム─住宅・建築・都市─」（54頁）で石田潤一郎さんと倉方俊輔さんに紐解いていただきます．100年前と現在，さらにこれからのこと，まちや生活する人たち，多くのことの関係をつくるのが建築の役割のひとつだと思います．いろんなことが同時に起きている現代だからこそ，そこには新しい可能性があるのだと思います．その萌芽を見逃さないようにしていきたいと思います．（ss）

建築論壇（64頁）では，八戸市美術館の設計チームの3人がひとつの文章を書くにあたりどのような形があるかと，西澤さん，浅子さん，森さん，担当スタッフのみなさんも一緒に考えた結果，学ぶこと／つくること／使うことという3つのキーワードが上がってきました．またそれらは完結したものではなく，連続的なもの．そこでふたつのキーワードごとにそれぞれ分担してご執筆いただきました．でき上がった文章は，学ぶこと／つくること／使うことが継続的に起こり，運営スタッフや市民，また来訪者も含めてさらに拡張していくようなものとなりました．それは，この建築のあり方自体も表現しているようで，とても面白く思います．さまざまな建築のリサーチを参考にした空間のあり方や動線，什器の配置，素材の使い方など，ある種過剰なまでの細部の集積によってさまざまな活動を受け止めるような場所の質をつくること（平面詳細図をぜひ読み解いてみてください），使い手がそれらを感じ取り新たな遊び方が発明されていくこと．それは美術館にとどまらない，新しい建築のあり方を示しているのだと思います．（n）

先日，久しぶりにオンラインでないイベントに参加しました．明治神宮外苑の公道に設営された特設コースで，さまざまなレーシングマシンがデモランを行うもので，約4,000人の観客が集まったそうです．大勢の観客には，消毒と検温が徹底され，会場は（排気音以外）とても静かでした．何事も体験には敵わないなと，楽しかったです．イベントが終わった頃，隣の新国立競技場は天皇杯で賑わっていました．そちらも声出し応援は禁止だったようで，鳴り物と拍手の音だけが外まで響いていました．新型コロナウイルスの影響を受けてずいぶん経ちましたが，最近は対策を行った上で，少しずつ社会が動き始めたように感じています．今年も，私たちの生活を考えさせられる出来事がたくさんあると思います．その時私たちはどう振る舞うべきなのか，しっかりと考えていきたいと思います．（ls）

「なぜ，そこに建てるのか?」今回，大阪中之島美術館（112頁）では複数の専門家にご寄稿いただきましたが，なかでも構造家・佐藤淳さんが伝える地震時や液状化リスクなどの敷地のシビアさに度肝を抜かれ，思わず口に出たのがこの言葉でした．原稿では，中之島という敷地特性をエンジニアリングで解きながら建築の構成を支えるさまが書かれていますが，その他にも発掘調査を経ているといった敷地の個性的な側面も，これから同館の魅力を高めていく要素になるのだろうと感じます．
なぜ，そこに建てるのか? 当初は敷地に対して感じた言葉でしたが，考えていくと，そこに建つことで生まれる意味や物語は，規模を問わず，どんな住宅や建物でも存在します．私たちは編集を通じて竣工前後の建築を拝見することが多く，そこが立脚点になりがちです．しかしこの問いを持つと，プロジェクトのスタート時から追体験するような感覚になり，敷地のみならず周辺地域，関係する人びとの物語や狙いがまた違って見えてくるような気がしています．今年はしばらく，そこから生まれる視点を大事にして過ごしてしてみようと思います．（fuu）

作品・批評募集

［作品］
作品は，建物をはじめとして，まちづくりの計画から古建築の改修まで，「建築」にかかわるすべてを対象とします．氏名・年齢・所属・連絡先を明記の上，下記の資料をe-mailでお送りください（ファイルサイズは3MBまで）．

●写真
建物の外観・内観・ディテールなど，建物の概要が分かるスナップ写真をお送りください．
●図面
配置・平面・立面・断面，および主要ディテール等，建物が理解できる内容のものをお送りください．
●建築データ
建物の所在地・主要用途・竣工年・規模・構造・主要外装仕上げ・主要内装仕上げなど．
●設計主旨
建物についての簡単な説明，敷地条件，建主からの要望，その他与えられた諸条件などを含め，建築的にどのような解決策を考え，それを実現したかについてお書きください．

投稿作品の掲載については，掲載を決定した場合のみ，こちらからご連絡します．採否のお問合せには応じかねます．
また，お送りいただきました応募資料はご返却いたしませんのでご了承ください．

［宛先］新建築社 『新建築』編集部
tel. 03-6205-4381 fax. 03-6205-4387
e-mail shinkenchiku@japan-architect.co.jp

Recommend

Competition・Symposium
コンテスト・設計競技・講演会

現在募集中のコンペ

第57回セントラル硝子国際建築設計競技
課題 都市と農村を繋ぐ建築
主催 セントラル硝子株式会社
審査員 隈研吾 亀井忠夫 青木淳 賀持剛一 塚本由晴 石上純也
応募締切 8月26日（金）
日本国内からの送付は当日消印有効．
持込み，バイク便は不可．
http://www.cgco.co.jp/kyougi/
詳細は本誌20-21頁参照．